

---

# 魔法を超えた科学

安藤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法を超えた科学

### 【Nコード】

N1991U

### 【作者名】

安藤

### 【あらすじ】

テンプレな展開でネギまの世界へ転生。

これは、魔法使いに対して科学の力で戦う主人公のモノガタリ。

注意 この物語は「最強」「チート」「ご都合主義」等の要素が入っております。

苦手な方は戻るボタンを押す事をお勧めします

## プロローグ

雪の降る夜。俺は事故にあった。

なんて事は無い、良くテレビで見る様な、普遍的にある普通の事件。当人からすれば堪ったものじゃないが、それでも事故が無くなる訳じゃない。

痛みに呻く間もなく、ただ普通に死んだ。実際、事故にあったからといって当時の事をハッキリと覚えていられる方も大概おかしいと思う。

どこにでもいる、唯の一被害者だ。

そんな俺が、何故こんな真っ白い部屋にいるのか、そろそろ説明が欲しい所。

「あ、漸く戻ってきた。じゃあ早速……ゴッメーン 間違って殺しちゃった」

目の前ではっちゃけてるこの女は誰だろうか。凄く殴りたいが、流石に我慢だ。

「反応薄いね。まあ良いけどさ。……で、端的に言うとなあなたは死にました。私が漫画なんかの世界へ飛ばしてあげますあんだーすたん？」

はいはい、あんだーすたん、あんだーすたん。

しかし、事故にあった筈だが、傷一つ無いんだよな……どうなってるんだ？

「だから神様である私のミスで殺しちゃったんだってば。お詫びに漫画とかの世界に転生させてあげるから許してよ」

はいはい、後で相手してやるからちょっと待って。

辺りを見ても、どこまでも続く白の床。地平線まで続いているんだが。

「信じて無いね……うん。面倒だから勝手にやらせて貰うけどさ、能力は何がいい？」

ん、じゃあ　　で。

「あ、其処はキツチリ反応するんだ。うん、大丈夫大丈夫」

頷きつつ、女の人は携帯を取り出して何やら話している。

「じゃ、どこの世界かは君の頭の中から勝手に検索しといたから。着いたら分かると思うよ」

え？

「それでは一名様ご案内ーい」

床に穴が開き、其処から俺は落ちた。

どうなってるのか意味が分からず、言葉を発する事も出来ぬまま

に。

だが実際には浮遊感はない。

無いなら無いでいいんだけどね。俺Mじゃねーし。

そして三年が経った。

まさかのキンクリだよ。

いや、今まで記憶が無かったただけなんだけども。三歳になった時点で全部思い出して使えるようになった訳だけでも。

とりあえずはチート能力の確認と行こうか。

貰ったのは『とある魔術の禁書目録』の原石含む全ての能力（副作用無し）と一方通行より高い演算能力。あと学園都市の技術全般の知識。

それと学園都市のあらゆる武器兵器その他学園都市の産物の入った『ゲイトオブヒロン王の財宝』

どうにも頭は既に改造されているらしく、能力は普通に使えた。

同時使用も可能らしいが、今はまだ必要無い。

取りあえず『オフエンスアーマー窒素装甲』を常時展開させ、脳を演算に慣れさせることにする。

原石の能力、例えば『イマジンブレイカー幻想殺し』はon、off可能なので、今はoff状態に。っていうかコレ原石の部類に当てはめていいのか？

吸血殺しとか吸血鬼殺す為にしか使えねえんだが。居るのか、吸血鬼。

『王の財宝』を確認した限り、ガトリンググレルガンとかが入ってた。滅茶苦茶物騒だよ。

そして学園都市の技術。

これは頭の中で思い描けば技術が詳細に浮かび上がってくる。

ネットのように頭に浮かびあがり、どんな種類のモノでも学園都市の技術が分かる。詳細に分かるし、説明書つき。カタログかよ。

設計図も浮かび上がってるし、準備が出来れば大抵作れそうだ。

まあ『王の財宝』の中に全部入ってるから態々作る必要もないの

だけれど。

取りあえずの確認はすんだ。一方通行の能力が問題無く使えれば大抵の世界で生き残れるだろう。

そして、今気付いたんだが、俺は既に原作に介入しているようだ。

「潤也？」「ご飯よ」

「はい。行こう、千雨」

「うん」

よし、大抵の人はコレで分かってくれただろう。

名前は長谷川潤也。

妹の名前は長谷川千雨。

ビックリながらも、ちうちゃんの双子の兄として転生したらしい。

まあ、それはいい。取りあえずはゆっくりと原作までの時間を過ごさせて貰おう。

俺が入る事で、この世界はどんな変化が起きるのか、楽しみだね。  
全く

## プロローグ（後書き）

はじめまして、安藤と言います

この物語は他の方の小説を読んでいて、自分も書きたいと思ったものです

処女作で、稚拙ですが、どうぞこれからもよろしくお願いします

9/22書き直しました。



## 第一話「流石に騒がし過ぎるだろう」「b y 潤也

どうも、何で名字が安藤じゃ無いんだ。と突っ込み忘れた長谷川潤也です。

安藤って名字で潤也なら1 / 10 11とかの能力もついでに付けてくれると思ったのに……

とまあ戯言はさておき。

三年が経った。

連続で済まないが、キンクリと言うモノだよ、気にしないでくれ。

それはともかく、小学校入学となった訳だが……

目の前の校門を見て少し現実逃避。

『麻帆良学園初等部』

千雨の兄になったと気付いた時もそうだったが、ここはネギまの世界だったのかと再認識。

年代から見て原作が始まるのは俺が十四、五歳の時。丁度いいだろう。ってというか双子の時点で原作で3・Aと同じ年と決定しているけど。

そして今は入学式。

正直かつたるくてしょうがない。

小学生と言う年代を考えれば当然なんだろうが……

あつちではお嬢様風な高笑いする女の子、こつちでは寝ぼけた子がリボンを振り回したりしてる。

未来の3 - A候補が集まってるな。おかげで相当な騒ぎだ。

入学式は幾つもの学校が合同で行う大々的なもので数千人が参加するらしい。

そんな人数の生徒と保護者が入れる施設がある時点で凄いんだがな……ローカル放送だが、中継もされてるらしい。

初等部だからか、流石に寮暮らしは無いらしい。っていうか無理だろう。

主に麻帆良学園に住んでいる家族や近隣都市の住民の子供が主で麻帆良大橋を渡って近隣から通う事になる。

しかし、本当に騒がしい。近くに居る大勢の教師らしき人達は見せかけか。使えよ、人員。

「「はあ……………」」

溜息をつくくと、隣でも同じように千雨が溜息をつく。

「騒がしいね。みんな楽しみなんだろうけど、流石に騒がし過ぎるだろう」

「うん、私もそう思う。みんなもう少し静かに出来ないのかな」

周りから見れば恐らく俺達の方が異常なのだろうが、そんな事はどうでもいい。

幾らなんでも騒がし過ぎるだろう。

そんな事を思っているうちに入学式が始まった。

そう言えば、誰にも見つからない様に能力の確認などをやった。

流石一方通行を超える演算能力。いくつかの能力を同時に使っても大丈夫だった。

俺としては副作用なしにして貰ってはいたが、演算能力の低さで暴走しないかがネックだったんだ。

それも杞憂に終わり、取りあえずは平穩に楽しく過ごさせて貰いたいね。

生き残ればいい、態々戦闘しようとは思わないね。

そう言えば、滝壺の『AEM能力追跡<sup>ストーリーカー</sup>』の能力で全ての能力をレベル5まで引き上げる事に成功した。

ハッキリ言うと、俺はこの為だけに三年を掛けたと言ってもいい。

何故なら、『パーソナルリアリティ自分だけの現実』さえ確立できていれば能力の書き換えが可能だからだ。

一方通行を超える演算能力と学園都市の最先端技術を使い、やつとの思いでレベル5まで上がったんだ。いえーい。

つまり、学園都市の薬品やら何やらが手に入る俺、そして『能力追跡』の使える俺が居れば『超能力者』の量産が可能だ。

やつふー、魔法使い殲滅してやろうか、アーウェルンクス達涙目にしてやろうか。

真面目な話、一方通行の能力者が五人も居れば魔法世界も制圧出来ると思う。

魔法が使えるのか試してみたいが、禁書の魔術と同じ症状が出て死ぬとかマジ勘弁。

ロシアンルーレットはしたとしても終わるといって理不尽さだからな。

いや、結局は確率の問題なのけども。怪我とか出来るだけしたく無いじゃん？

気についても同上だ。使ったら血反吐吐くとか勘弁しろよ。実験でもしないとハッキリしないからなー。

でも、流石に人体実験は気が引ける。人道的に。

いつか使ってみたい。魔法は無理だと思っけど。気なら……

「では、これにて麻帆良学園小等部、麻帆良学園東小学校、麻帆良学園西小学校、麻帆良学園南小学校、麻帆良学園北小学校の入学式………を閉会する……ふう、各自解散」

考え事をしている間に入学式が終わってしまった。

これだけの数が詰め込まれてるからかあっちこっちで芋煮状態の惨状が起きてる。これじゃ頭抱える以外に無いわな。

流石にこれだけの人数が居たら各自解散以外じゃどうしようもないしなあ……

迷子なんて当たり前に出るだろう。

というかこのカオスの状態を二人で抜け出せと。そう言う事か？

俺は構わんが、すでに迷子になった子達が騒いでいる。

あの辺は先生達が相手するんだろうな。毎年の事なんだからもう少し頭使えよ。

「「こつなる前に手を打つとかしろよ（打てばいいのに）……」」

またもや千雨と重なった。双子のシンクロ率たけーな、オイ。

音を反射してもいいけど、それだと何も聞こえなくなるから面倒だ。寝るときとかは使えるけど、朝気をつけないと音が聞こえなくて寝過ぎす事とかザラだからな。

しかし騒がしい、祭りでもやんのか？ と問いたくなるぐらいのテンションだ。

今からアレとずっと関わっていくのか……鬱だ。

ハイテンションな連中から離れ、一息つく。

「ふう……」

またも同じように息をつく千雨と俺。

「どうにかしてここから抜け出したいよなあ」

「でも、こんなに人が多くちゃ出れないよ？」

「そうだよね、俺も人が多いのは苦手だし」

対人恐怖症とは違うけど、基本人見知りをする方だ。

元の性格からコレなのだ。どうしようもないって訳じゃないけど、性格一つ変えるのも時間がかかるし、放っておいても大丈夫だろう。

そんな事を思っている間も、人が次々と流れて行く。

親は子を探して、子は親を探して。

どっちも動き回るから入れ違いになる。

子供はそこで待つなんて出来ないだろうし、親は速く子の所に行  
ってあげたいと思うからだろう。

その点、俺と千雨は冷静に親を待っている……と言つより騒ぎに  
近づかない様になっている訳だが。

これはコレで異常だよな。小学生に上がったばかりの子供がこ  
まで冷静になれるものなのか？

俺の小学生の頃は……言わなくても分かると思うが、前世だ……  
暴れまくって親もほとほと困ってらしいがな。

高学年になるにつれ、人付き合いを見直して行き、最終的に人付  
き合いが苦手になったと。

……駄目人間じゃね？ 俺。

そんな事を思い出すと「俺、あの時何故あなつた……」と、激  
しく自己嫌悪に陥るので思考をストップ。

ダル気に周りを見渡していると、父さん達が手を振っているのが  
見えた。

「千雨、父さん達が居たよ。行こーぜ」

「うん。分かった」

そのままてくてくと歩いて父さん達と合流。

合流して直ぐに帰った。

そして、小学校が始まった。

やはり麻帆良でも双子は珍しいのか、周りの子は興味津津だった。

残念ながら千雨とはクラスが離れてしまったが、隣なので問題なし。

ちなみに俺、原作キャラは大体覚えているけど、原作の方はあまり記憶に無い。

大筋と大きめのイベントだけは覚えているが、小さいイベント等は全く記憶に無い。

キャラは半魔族だとか純魔族だとか半鳥族だとか未来人とかいろいろ居たって言うのははっきり覚えてんだけどな。印象が、っていうかインパクトが強過ぎて。

まあ、その辺は大丈夫だろうと高をくくり、レッツ原作介入だ。

どうなるかは俺にもわからんが。



さて、入学して数週間が経った。

そろそろ学校に慣れてきて、友達が出来て楽しくなったりする頃だと思う。

だが、忘れちゃいけないのは俺が転生者で、実年齢は既に三十近いという事だ。

当たり前だが話を通じるわけが無い。

そうになると、必然的に委員長ポジションにでもつく羽目になりそうだったので、バカっぽく演出して面倒を避ける。

気になるのは最近千雨が急速に元気を無くしている気がするのだ。

親しき仲にも礼儀ありと言うだろう。だから『メンタルアウト心理掌握』は使つて無い。

なんかあったのかな。気になるね。すごく。とても。ベリー。

ちなみにクラスに原作キャラはいない……ハズ。

影が薄いので覚えてはいない。と言うより覚えきれない。

影が濃い連中、例えば某巫女スナイパーは戦場だったと思うし、それ以外でも超は未来人だからこの時点ではない筈だし、クーとか言うのは中国だったと思う。

中学になってから引越してくる奴も多かった筈だからな。

今いる場所を特定できるのは……確か、幽霊と吸血鬼が居た筈だ。吸血鬼の従者のロボ子は知らん。

幽霊は多分見えない。前世から靈感は皆無なんだ。

「うわぁぁん」「こっちだこっちーっ」「痛いよぉ」「おしっこいきたい……」「……………」

その声でハッキリと現実に戻された。

うん、現実逃避してたんだよ。

麻帆良は広いし、いろんな所があるから、遠足ついでにいろんな場所を回ってみよう。と言う事になり、近くの小学校同士で遊びに来ている。

こうなると、委員長ポジに付かなかつたのは良案だと思う。

先生でも手を焼く連中を何故俺が相手にせねばならん。

手綱位取れよ。教師だろ。

地理把握の為に来て迷子になるとか言語道断だろ。前人未到……ではないか。別に関係無いよな。

「この学園はこんなのはっかりか、あの世界樹といい、ありえねえだろ……」

遠くに見える異常にでかい樹を見ながら、思わずそんな事を呟く。すると、それに反応した近くの子（一応同級生）が何やら言ってきた。

「何だよ。あの嘘つきのおにーさんだつて言うから会いに来たのに、やっぱり嘘つきのおにーさんは嘘つきか」

笑いながらそういう子どもを見ながら、考える。

嘘つきのおにーさん？

え？ 俺嘘ついたりした？ て言うかあの子俺話したことも無いんだけど？

「あ、いたいた！ やーい、嘘つき。またなんか言ってるのか？」

そう言っている子を見る。

その先には、千雨が居た。

千雨は悲しそうに顔を歪め、今にも泣きそうな顔であの子たちを見ていた。

近くの子供たちは幼いから、精神がまだ幼いからそんな事が言える。それは子供特有の無邪気さ。

唯ただ、面白がって言う子ども達。

千雨は精神が少し大人だから、普通に傷ついた。そう、普通に傷ついていた。

普段から勝気な妹が、折れそうになっている。

それを見て、一瞬で、沸点を突破した。

「……オイ、テメエらに構ってる暇はねエンだよ。消えろ」

思考が一方通行寄りになる。

どうしても、同じ能力で同じ演算パターンを使う以上は性格が似てしまう。

だから、気にいらないと消そうとしてしまう。どうしても、力任せにそいつらを視界から消したくなる。

漏れた殺気におびえて慌てて逃げる子供を横目に、千雨に近づく。

ゆっくり抱きしめて、語りかける。

「大丈夫だ、大丈夫だよ。俺は、ずっと千雨の味方で、ずっと千雨の傍に居るよ。だから、怯えなくていい、おかしいのはこの町だ。千雨じゃ無い。絶対に千雨の頭がどうにかなってるんじゃない」

『メンタルアウト心理掌握』で千雨の精神を落ち着かせながらそう言う。

こういつとき、精神系の能力は重宝するよ。

学園都市において、超能力者（レベル5）の順位は能力研究の応

用が生み出す利益で決まる。

『メンタルアウト心理掌握』はスポーツにおいても、トラウマを克服させたり、スランプに陥った選手の調子を戻す事が出来る。

心理的に弱っている時、こういう能力を使ってでも精神状態を戻すのは有りだろう。

少し、考える。

こういった世界では、俺のようなイレギュラーの認識で、世界が変わる事はあるのだろうか。

例えば、俺のイメージの所為で性格が多少なり変わっている事はありえるのではないだろうか。

二次創作何かを読んでいて、千雨に対しての一種のイメージが根付いていた。

千雨がリアリスト現実主義者なのは、小さい頃心に傷を負った所為ではないだろうか、と。

家族関係でも無く、貧富の事でも無く、友人関係。

その所為で、何かしらの不遇を味わい、原作のあの性格になったのではないだろうか、と。

声を殺して泣く妹にはきつと味方は無く、下手をすれば父さんや母さんすらも彼女の『常識』を否定した……麻帆良の認識阻害結界、

その力によって。

決めた。

これからは、千雨に害なす者は神だろうと悪魔だろうと地獄の底に叩きつけてやる。

俺の能力があれば可能だろう。相手が魔族や吸血鬼だろうと、創造主だろうと、能力が効くなら俺に敵は無い。

無理なら無理で別の方法を考える。その為の科学の力だ。

絶対に、千雨から笑顔を奪わせる事はしない。

例え何があっても、俺は千雨の味方であり続ける。

敵には容赦しない。

笑顔を守る為なら、手段は選ばない。

そう、

手段は、選ばない。

第一話「流石に騒がし過ぎるだろう」「b y 潤也（後書き）」

アンチの予感。というかアンチで行くつもりですが。

早速で悪いのですが、アンケートを取ります

ヒロインって誰がいいですかね？

ハーレムでもおっけーですし、誰か一人がいいというのならそれでもいいですけど

よろしく願います

あと、出来れば感想を頂けるとありがたいです



## 第二話「活字中毒なんだよ」by潤也

俺が千雨を守ると決めてから早数週間。

ガキ大将になった。

千雨にゴチャゴチャ言う奴は片っ端から脅しつけていった結果がコレだよ。

いじめようとしたら即座に武力介入してたしな。

ちなみに、千雨の担任の奴は俺の沸点を超えさせた。おかげで数カ月の間入院する事になったらしい。

流石に先生にまで武力介入はしない。武力介入はな。

いじめを放置するような先公は天の裁きでも喰らったんじゃないか？

ここまで来ると、沸点の低さが問題だが、気にしない様にしてしよう。妹の為だ、うん。気にしない。

千雨も大分元気になったから良しとする。

クラスが違うが、出来る限り一緒に行動を共にした。

兄妹なのだから別におかしな事では無い。

最近千雨も不自然を見逃すようになってきたしな。意図的に。

態々昔の事を言い出すような小さい奴は俺が叩き潰す。

攻撃対象が俺に移った所で、『心理掌握』メンタルアウツでそう言う奴以外を味方につけ、そいつを孤立させたりして楽しんでる。

どっちかと言えば、俺の方がいじめっ子と言ってもよさそうな気がしてきた。

閑話休題。

さて、俺は今図書館島に向かっている。

理由は千雨が本を見たいという事と、俺も本を見たかったから。

いろいろ読む事が大事だ。

「図書館島か、初めてだな」

「うん。でも、図書館島しか無いっていうのも不便だよな」

ちなみに言葉づかいは既に原作と同じになっている。

こっちの方が違和感ないからいいけど。

「まあ、そうだな。でも蔵書量は物凄いらしいぞ。地上部は安全らしいから大丈夫だろう」

「……『地上部』は？ 地下はどうなんだ？」

「地下六階から下は命の危険もあるらしい」

千雨が「ありえねえ……」と呟きながら頭を抱えた。まあ当然の反応だよねえ。

図書館島は島一つの地下と地上部で構成されているから相当な数の本がある。

地下があるのはともかく、命の危険があるなら作るなっていう話で。必要があるなら一般とは別に作れよ。

そう言えば、ここの地下には誰かた筈だ。カ、ク……

クーネルだかカーネルだかが居たと思う（超うる覚え）。

原作まであと八、九年位だし、この時点にいるのかは分からないけどな。

そして、図書館島に到着。

で、でけえ……

ビックリする位にでかくて広い。

そして、一番驚いたのが……

「……………」

千雨もアレを見てフリーズしている。

「あれ、北端大絶壁っていうらしい」

パンフレットを片手に目の前の滝を見る。

「……………」

未だに千雨のフリーズが治らない。どうしようか。

取りあえず最初は見て回ろうという事になり、パンフレットを貰って歩き回っていた訳だが、本棚を利用した滝を見た途端に千雨がフリーズ。

俺もフリーズしかけたよ。初見だったら確実にフリーズしてたね。

漫画で見た事あって助かった。というか漫画よりずっと迫力がある。

つーかこんなもん地上部の、それも目立つ場所に作んなよ。本に湿気は大敵だろーが。

数分後、漸くフリーズが解けた千雨と目的の本を探している。

千雨は未だに納得がいつていないらしく、しきりに「ありえねえありえねえ」と呟いている。

その気持ちは分からんでも無いよ。実際普通の人が見たら絶対に疑問を持つだろう。

やっぱり麻帆良結界の所為なのかなあ。良くは知らないけど。

「千雨はどんな本を探したいんだ？」

「パソコン関係の本。この間いろいろ遊んでたら興味が出たんだよ」

「ふん、パソコンか……」

その割には何冊もの本の中に装飾とか服関係の本も混じってるけどな。

何だったか、確か『ちうのホームページ』だったと思う。

千雨が中学になったら開設するホームページの名前だ。

これは必見だろう。来たからにはこれを見なくちゃいかなだろう。

「潤也はパソコンとかに興味無いのか？」

「うーむ、興味が無いってわけでもないけど、別段あるってわけで

もない」

ちなみに千雨、俺の事は名前で呼ぶ。

昔は「お兄ちゃん」って言ってくれたのになあ。

双子だから誕生日とかあんな関係無いからな。

どうでもいい事だけど。千雨ってそう言うキャラじゃないしな。

「ふーん、そうなのか」

そう言うと、千雨は雑誌コーナーへ向かって行った。

PC関連は移り変わりが激しいからな。本より雑誌の方がいいんだろう。

俺はパソコンは学園都市製の奴なら出せるが、別段使う機会はない。

いつか千雨にプレゼントしてやろう。頬が引きつってそうだけだな、いろんな意味で。

適当に本をあさくり、いくつか引っ張り出して持っていく、千雨の前の席に座る。

千雨は既に何冊も持って来ていて、雑誌が山のように積み上げられている。

間に所々挟まっているのは服の装飾関係の本。コスプレでもするつもりだようだ。

本格的にホームページ作る為に勉強してみたみたいだし、期待できそうだな。

「潤也は何を読んでいるんだ？」

「MIT主席卒業生の論文」

「……ああ、そう」

千雨の顔がすごく引きつっている。ここ来てから引きつるのが増えたな。

「潤也はああいうのを読んで自分はすごいと見せたいだけなんだ。うん、きつとそうだ」

なにやら千雨がブツブツ言っているが、よく聞こえないのでスル

か。  
ちなみにこの本、工業関係で適当に引つ張り出して来たんだが、俺も何故こんな本があったのかスゲー疑問に思うわ。読む奴いるのか。

まあいいけど。暇だし、暇つぶしにはなるだろう。

ちなみに日本語に翻訳してある。

……読み終わった。

小学生の生活舐めてた。学校終わってからずっとここに入り浸ってるんだが、学校の終わる時間が速いから外はまだ全然明るい。帰る気にならねえ。

いや、帰って何するって話だけでも。ゲーム？ パソコン？

まあそんな戯言はさておき、他の本を探す。

千雨は大量の本を山のように積んでるから動かず読みふけってる。

俺もいくつか持ってきとくべきだったか。

次は何がいいかな。と探していると、誰かとぶつかった。

「きゃっ……」

「おっと……」

ちなみにこういう場合に備えて反射は有害物質のみに設定してる。例えば紫外線やたばこの煙etc……。

普段は怪我しない様に『オフエンスアーマー窒素装甲』だけを展開してる訳だ。

まあそんな事はさておき。倒れた子に手を差し出す。

「大丈夫？ ごめんね、ちゃんと前見て無かったから……怪我とか



して無い？」

「うん、大丈夫やえ。ウチもちゃんと前見てへんかったし、ごめんな」

……？

この喋り方と既視感。なんか知ってるような……

「そう？　なら良かった。今度からは俺も気をつけるよ」

「あ、名前教えてくれへん？　ウチ、まだこつち来たばかりで友達少ないんよ。出来れば友達になつてくれると嬉しいんやけど」

「へえ、そうなんだ。俺は長谷川潤也。君は？　ちなみに何処から来たの？」

「ウチは近衛木乃香や。京都から来たんや。よろしくな」

ああ、なるほど、近衛木乃香か。

おっとりした喋り方といい、道理で既視感がある筈だよ。

「よろしくね、木乃香ちゃん」

「よろしゅうな、潤也君」

がっちり握手して一緒に本を探す事になった。

木乃香ちゃんは占い関係の本を探しているらしい。

だが、生粋の科学者である俺から見れば占いなど信用するに値しない……と、言う訳でもなく、結構興味があったりする。

占い自体を馬鹿にする気はないが、前世からこついうもんは信用しない派だ。

それでも、信用しないけど興味はあるのだ。いい結果が出れば信用するが、悪い結果が出れば信用しない。

絶対に当たるってわけでもないしな。占いなんてそんなモンだろ。

未来人がいて、未来でこうなると教えたとしても、絶対に同じ未来にたどり着くとは限らない様にな。

そついう意味で考えると、超はこの時代に『来た事自体』が未来を変える一つのカギになったのかもしれないなあ。

原作終わる前に死んだから最後どうなったか知らんけども。

『超展開キタコレ』と言いたくなる展開が続いてたからな。

例えば、アレの居場所……

……

今、この下に居る訳だよな。

こつこ『<sup>アイスブレード</sup>地殻切断』で引き裂いたら引きずり出せないかなあ。

倒しても多分無駄なんだろうけど。

無駄な事はしない主義だ。多分、ネキ・スプリングフィールドこの世界の主人公が何とかしてくれるだろ。

魔法世界に行く手段も無いし、行く気も無い。念のためにゲートの確保でも出来れば別なんだろうが。

フェイトなんて相手にする気も無いな。メンドクサイ。

閑話休題

話が異常にそれたな。

木乃香ちゃんは最終的にちょっと厚めの本を探し出し、俺は俺でまた別の本を見つけていた。

折角だから千雨と会わせておこう。

そう思って千雨の所へ案内する。

「おい、千雨」

俺が呼ぶと、顔をこちらに向けて返事してきた。

「なにー？」

「友達になった近衛木乃香ちゃん。同じ年だから、学校は違っけど仲良くしたいってさ」

「ふーん、私は長谷川千雨。よろしく」

「よろしゅうな」

手雨と木乃香ちゃんは握手をして席に座る。

俺は二人の前の席に座ってまた本を読みだす。

「今度は何持ってきたんだ？」

「ハリー・ポッター」

「……………潤也ってさ、小学生とは思えないよな」

兄に向って何言ってるんだ。自覚はある。

「活字中毒なんだよ」

「小学生でそれはどうかと思うが……………」

まあ分からんでも無い。小学生で活字中毒ってありえないよな。

結局夕方まで読みふけり、木乃香ちゃんは先に帰り、かなり粘って本を読みまくり、暗くなって帰ったから親にこっぴど怒られました。



第二話「活字中毒なんだよ」by潤也（後書き）

木乃香ってこの時期既に麻帆良に来ていた……ハズ

記憶があいまいです。もしかしたら書き直すかもしれません

取りあえずしばらくは日常が続きます

アンケート、感想はいつでもお待ちしております

### 第三話「現実逃避してないで速くやれよ」by千雨

夏休み。

それは小学生の長期休暇である。ちなみに四度目だ。

宿題は早めにやれと言う先生達の言葉を完全に無視し、最終的に八月三十一日まで宿題を残すのがお約束だ。

某SOS団の団長はコレがやりたいが為に夏休みを十万回以上やりなおした位だぞ。

「潤也はコツチな」

……残すのが……お約束……

「現実逃避してないで速くやれよ」

「俺の扱い酷くないか？」

毎年同じ事を言っただけやりにしててから千雨も慣れたもんだ。

そんなわけで、唯今家で宿題と戦闘中です。

「何で宿題ってあるんだろっつな」

「勉強する為だろう」

「それにしても多過ぎないか？」

「小学生だから少ない方だろ」

「……………」

論破されました。

千雨の言ってる事は正論な訳で、また余計な事をゴチャゴチャ言  
うと呆れた目で見られるので真面目に取り組む。

バリバリ理系な千雨は理科と算数。

全般的に行ける俺は国語と社会。

ぶっちゃけ数学とかのほう得意と言えば得意なんだけどね。

でもまあ小学生の内容は簡単だし、集中すれば数時間で終わるよ  
うなものだったのだが。

やっぱり質より量が多い。

漢字の反復練習のプリントが十数枚とかありえねえ、こつこつのは  
反復が大事だからしょうがないのだろうけど。

こんなものクツソ暑い部屋でやる訳も無く。クーラーをつけて涼  
みながら勉強中。ちなみに反射は解いている。



俺は熱量のベクトルも変換できるから別に暑く無いんだけどね。  
千雨が汗だくなんだよ。

そんな中で汗一つかかずに「暑い」と一度も言わなかったらおかしいとしか言いようが無いだろ。

「感覚ある？」って聞かれそうなのがするわ。

問題集を片付け、感想文を片付け、後は植物の観察日記が残った。

「何するんだ？ なるべく簡単なのがいいんだが」

「ソーだなー」

扇風機の前を陣取って風を受けながら答える。

「すーずーしい。「我々は宇宙人だー」とか良くやったよね。あ、やって無い？」

「後五分」

「マジか。もうそんな経ったの？」

ちなみに交代は時間制。一人十分。

しかし、観察日記か。前世ではアサガオの観察やったな。

「つか観察日記に簡単も難しいもあるのか？ 毎日日記付けるだけだろう。」

面倒ではあるけども。最早作業の域だよな、こういつのつて。

「なるべく早く育つ奴がいいけど、何がある？ そっちが早く終わるから楽だろ」

なるほど、そりゃそつだ。

でもやっぱり思い浮かばないので、普通でいいじゃないか。と思う。

「アサガオで良くね？ 他を探して無駄に時間潰すのも馬鹿らしいからな」

他の案としてはオジギソウとか……

『オジギソウ』といえば、『メンバー』の博士が使ってた奴を思い出すよな。結局垣根に殺されたけど。

「まあ無難だよな。それでいいよ。後十分経った、交代だ」

横から押され、扇風機の前から退く。

ダラーっと寝そべりながら扇風機で涼む千雨に話しかける。

「で、どっちがアサガオの種買いに行くの？」

「……潤也、行ってくれ、お前の犠牲は忘れないから……」

「……千雨……い、いやいやいや、それは無いだろう。何勝手に人を犠牲にしてんだよ」

「チツ……いいじゃんか、この暑い中アサガオの種買いに行くくらい。その間あたしは扇風機とクーラーを満喫してるから」

「オーイ、俺にはばかり被害来てるぞー」

その後五分位駄弁り、最終的にじゃんけんで負けた俺が行く事になった。

外暑そーだなー。よし、熱は反射しよう。

燦々とつぎつたらしい程に太陽が照っている。今日は真夏日で気温は三十度を超えているらしいね。

反射解いたら暑さで死にそーだなー、と考えながら近くの商店街を指す。

近くの公園ではこの暑さに負けず汗だくで遊んでいる子供を見つけた。元気だねえ。

そんな事を思いながらトコトコ歩き、商店街へついた。

「お使いかい、えらいねえ」と言われながら雑貨屋でアサガオの種

を買い、ついでにコンビニでジュースを買って帰路につく。

暑さで空気が揺らめく中、公園を通る。

すると、公園から何やら怒号のようなものが聞こえてきた。

喧嘩か？　　と思つて公園の方を見ると、誰かが取っ組み合いで喧嘩していた。

みた感じ俺と同じ年くらいの子と男子だ。

周りの奴らは止めようとしているが喧嘩が激しくて介入できない、と言つたところだろうか。

どうせ放つておけば直ぐに終わるだろ、と思つて通り過ぎようとする。

「あ、潤也君！」

「あん？」

誰かに名前を呼ばれ、振り向く。

声の主は公園の方に居た。木乃香だ。

「ああ、木乃香か、どうした？」

「あんな、アスナが男の子と喧嘩してるんよ。止めてくれへん？」

アスナ、明日菜か。この時期にはもう麻帆良マホウに来てたんだな。

「ちなみにどうしてこんなことに？」

「えっと、ウチらが遊んでたらあの子たちが『ここは俺達の遊び場だ』ていい始めたんだよ」

よし、長谷川潤也、武力介入を開始する。

馬鹿かよ、そんな理由で喧嘩とか。

そんな事を思いながら二人に拳骨を落とし、喧嘩を仲裁。

「何だよ！ お前！」

「何すんのよ！」

二人が俺の方を向いて睨みつける。

にらみ返すと、二人とも目を逸らしたけどな。

「ここは公園、公共の場で、誰のモノでも無い。仲良く遊べ。それが嫌なら別の所に行けよ。この子たちが先だったんだろ」

「俺達は昨日もここで遊んでたんだよ！ それにお前関係ないだろ。出しゃばるなよ！」

「昨日の話だろうが、今日の事と何の関係がある。それに関係ない訳じゃない、頼まれたから喧嘩の仲裁をしたただけだ。俺は仲良く遊べと言っている。それが嫌なら別の所に行けともな」

男子のグループはまだ怒ったような顔をしながら公園から出て行った。

「ありがとな、潤也君」

「いいよ、お礼なんて。俺そろそろ帰る。早く帰らないと千雨が怒りそうだ」

ついでにジューズを頼まれてたからな。早く帰らないと温くなる  
……『サーマルハンド定温保存』でも使えば問題ないか。

そんな事を思っていると、別の子が明日菜の怪我を手当しようと水で濡らしたハンカチを持って怪我の部分に当てようとしていた。

「あゝ、待て待て、治療用の奴があつた筈だから」

手に持ったビニール袋から出すふりをして『王の財宝』からカエル顔の医者特製の対外傷用キットを取り出す。

これはチューブに詰められたジェル状の薬剤で、塗るだけで消毒・止血・傷口を閉じるという3つの効能を發揮。余程の深手以外は対処できるという優れものだ

それを肘やら膝やら顔の引っかき傷の怪我した部分に塗り、治療は終了。

「後はほっときや治るよ。それじゃ」

「ほんまにありがとな。潤也君」

木乃香のお礼を聞きながらにさっさと公園から出て行く。千雨に遅いって怒られそうだな。

「ただいま」

そう言っただけで家の中に入り、千雨が居るであろう部屋へと入る。

「遅い。何してたんだよ」

千雨に頼まれていたジュースを渡し、椅子に座る。

「人助け。飛んできた鉄骨を殴り飛ばした」

「ソレは一周回ってお前の方が危険人物だ」

等と無駄な会話を繰り返して、ジュースを飲んでから買ってきたアサガオの種を持って家の倉庫へ入る。

倉庫の中を捜すと、埃をかぶった小さめの植木鉢とミニスコップがあったのでソレを持ち、家の庭に出た。

「あちい……」と千雨が呟くが、スルーして植木鉢を日当たりのよさそうな場所に置く。

庭の土を少し掘って植木鉢に土、土、種、土とかぶせて行き、最後に水を掛けて作業終了。

「水やりは順番な」

「分かってるよ。それくらいは私だってやるわ」

さて、これは夏休み前半の話だ。

アサガオの観察日記も予定通り書き終え、俺と千雨は遊び呆けている。

俺は遊びと言つにはありえないけどな。

何をやっているかと言われれば、『アンダーライン滞空回線』を学園都市中に散布している。五千万機以上だぞ？ 作るのに滅茶苦茶な時間がかかった。

だがまあ、これを使ってネットワークを張り、学園都市で起こっている事全てを知る事が出来る。

何があっても対処可能と言う訳だ。ついでに魔法使いの事も調べられるしな。

カタカタとパソコンをいじり、画面に映像を映す。

其処に映っているのは、金髪の少女と、少女と相對している男。

男は何やら叫びながら魔法を放ち、少女は気にすることなく避け、



魔法薬を使った魔法で迎撃する。

魔法に関してのデータは常に取っている。俺の反射が効くかどうか分からないからな。

『魔力』だとか『気』だとかはどうやればどんなデータが取れるのかも分からない。

だから、まずは麻帆良に侵入してきた魔法使いを捕まえる事にした。

洗脳して魔法に関する知識を手に入れた後魔法を使わせ、俺がそれを観測する事で魔法についての知識と能力が効くかの実験も出来た。

『ダークマター未元物質』で魔力を完全に絶つ事の出来る物質も作り出せた。コシを使えば、恐らく転移魔法でも侵入できないだろう建物を作れる。

『ベクトル操作』は出来た。精霊を使うという神秘の技法だが、ベクトルそのものは存在する訳だし、魔術のように別の界の物理法則と言っ訳でも無い。

当然と言えば当然の結果だ。確信は持てなかったけどな。

生き残る為なら何でもやるさ。平和が一番だけだな。

そして今、俺はアメリカに居る。

『メタモルフオーゼ肉体変化』の能力で肉体を変え、お気に入りの垣根帝督に変身する。ちなみに人が変身と言うのは間違いらしいね。

まあそれは置いとくとして、何故アメリカに居るかと言えば、資金調達の為だ。

アメリカ政府に科学兵器の出張販売に来ている訳だな。

と、そんな事を考えている間にノックがあった。

部屋に入って来たのは少し白髪が交じった男、そして痩せていて白衣を着ている男の二人。

「はじめまして、私の名前は垣根帝督です」

「どうも、ミスター垣根。それで、我々に見て欲しい物とは？」

「コレです。いい値で買っただけのならばこれからも優遇しますよ」

そう言って差し出すのは一つのUSBメモリ。

白衣の男の持っていたパソコンでその中身を確認する。

「こ、これは……」

「どっした、博士？」

「これは、現アメリカ軍の最新鋭のヘリよりもずっと凄いものですよ……しかし、どう見ても学生くらいのあなたに、こんなものが作

れるとは思えないが……」

「見た目なんてたいした問題じゃありませんよ。それより、買っていただけますか？」

「ふむ、コレが本当に軍の所有するへりよりも良いモノだと言つのならな。まだ完全には信用できない」

「でしょうね。ですから、別のモノを持ってきました」

そう言つて、予め『王の財宝』から出しておいた機械鎧パワードスーツの一機に被せてある布を取る。

「これなら即物的ですし、必要なら解体して調べればあなた方の利にもなるでしょう」

「確かにそうだ、だが、念のために調べさせて貰つても構わんな？」

「ええ、信用できないでしょうからね」

そう言つて白衣の男は駆動鎧を着用し始める。

この時代においてはまだ大した技術は出来て無い。だから俺の持つ駆動鎧を技術水準を3〜4世代落として販売している訳だ。

企業として存在させてもいいな。名前は思い浮かばないけど。

異常なまでの科学技術を持つ企業。世界中から技術を求められるつてか。

USBを見せたのも、「こういうモノが作れますよ」ってアピールしたに過ぎないし。

結局一時間程調べ、これは信用できると博士が念を押したため、アメリカにこの駆動鑑一台を売ることにした。

価格は日本円においておよそ二十兆程度。一応最新科学だし、売ってるのは技術だ。

取りあえず資金は手に入れた。

そして日本へと戻って来た。

ある程度の広さの土地を買い、ビルを建てる為に建築確認申請をする。

麻帆良内だからか、意外と簡単に通った。

そして、ここで俺の超能力の出番だ。

前から創る為に用意していた設計図を持ち、『カリキコレイト・フォートレス王の財宝』内から『ダイクマター演算型・衝撃拡散性複合素材』を取り出し、『ダイクマター未元物質』と一緒に使って『窓の無いビル』を建築する。

光学系の能力で周りから見えない様に隠蔽し、『ムフポイント座標移動』で移動させ、『テレキネシス念動力』で組み立てる。

日中は常に能力で隠蔽。夜になったら作業開始。それをおよそ一週間程度続けた。

常に能力を使うように演算を組み、毎日時間通りに進める。

基本的に夜中の間にやった作業だが、何とか完成。死ぬかと思っ  
た。

いきなり出来た事に疑問を持った人たちも居ただろうが、ある程  
度は『心理掌握』<sup>メンタルアウト</sup>で洗脳し、後は麻帆良結界に任せた。

寝不足で能力使用を間違える事の無いように予め睡眠をたっぷり  
と取っておいた為、失敗する事は無かった。

念の為に説明をする。

『窓の無いビル』と言うのは、その名の通り窓が無い。

何故かと言えば、建物内で酸素を含む生活に必要なもの全てを生  
産できるため、窓もドアも廊下も階段も通気口も設けられていない  
からだ。

ちなみに必要な電力は俺が自分で発電し、バッテリーに溜めてい  
る。

侵入をさせない為でもある。ちなみに『未元物質』を用いているか  
ら魔法でも入れない。魔力を遮断するからな。

入れるのは現段階で俺のみ。『瞬間移動系統』の能力を使わなきゃ入れない訳だしな。

実際、原作では一方通行の地球の自転のベクトルを利用した砲撃でも傷一つ付かず、内部に対する振動もほとんど無かったというトンデモ建造物だ。

『千の雷』とか『燃える天空』とかでも多分壊せねえぞ。コレ。

内部には『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』や『テストメント学習装置』含む多数の機械類が置かれている。

無人島から発射したいくつかの衛星との通信や『アンダーライン滞空回線』の情報もここで見る事が出来る

『アンダーライン滞空回線』の情報に関しては俺の持っているノートPCでも見る事が出来るのだがな。

何にせよ、コレで俺の隠れ家が出来上がった。何があってもここに逃げ込めば万事OKだ。

隠れ家と言うには目立ち過ぎてるけどな。

### 第三話「現実逃避してないで速くやれよ」b y 千雨（後書き）

窓の無いビルを建築

コレマジでアメリカとかの核シエルターより安全ですからね。  
放射能とか完全にブロックする訳ですし

そして建てた時点で負けは無くなるという事実  
いざとなれば逃げ込めば誰も入ってこれませんから

……卑怯クセエ。今更ながらにそう思いました。

感想・アンケートはいつでもお待ちしております。

#### 第四話「誰が似非超能力者だ！」by 護

轟々と燃え盛る町並み。

ヨーロッパを基調として作られた町並みは無残にも破壊され、瓦礫の山となっていた。

地形は見る影もなく変わっている。

そして、其処に立っている二つの影。

轟音がする度に影は交差し、地形を抉っていく。

片方は白髪、白い服を着た無表情の少年。

もう片方は色素の薄い赤髪、傍から見ればホストのような風貌の少年。

赤髪の少年は巨大な石柱をいとも簡単に砕き、明らかに異常ともいえる大きさの建造物を音速を超えて投げ飛ばす。

白髪の少年は投げられた建造物を砕き、地を裂いて溶岩を露わにする。

数十メートルまで伸びた白い翼と超高温の溶岩がぶつかる。

二つの攻撃の余波で地形が抉れていくが、二人はそれを気にした様子も無い。



二つの影は止まり、向き合う。

「……これで、最後だ。決着をつけよう」

「ああ、構わねえぜ。全力でぶっ殺してやんよ」

白髪の少年の右手には膨大な魔力が籠っていく。

赤髪の少年の背中から漆黒の翼が噴出される。

膨大な魔力の籠った魔法を放つ。

莫大な力を操作して纏めた漆黒の翼が振るわれる。

そして、二つの力は交差し、決着がつく

「起きろー!!」

ゴツン、という鈍い音がした。

衝撃で目が覚め、今まで鮮明に見えていた戦場は見えなかった。

今見えるのはぼやけた教室。

俺の頭が叩かれた音だと気付くまで数秒。痛みは無い。

目を擦りながら叩いた奴を見る。

こめかみに青筋を浮かべた白髪交じりの教師が笑顔で俺の方を見ている。手には辞書。

「さーて、長谷川あ。君は俺の授業で寝たのは何回目かなあ？俺ちよっとど忘れしちゃってね、教えてくれないか？」

「ヤダなあ、先生。ボケが始まって来たんじゃないですか？まだ二度目ですよ」

またもや鈍い音。『空素装甲』はしっかりと働いているらしい。痛みは無かった。多分先生も手加減してるんだらうけど。

「バカな事を言うんじゃない。コレで六回目だろうが」

そう言いながら教壇の方へ歩いて行く。

そのまま授業終了のチャイム、礼を掛けて今日の授業は終わった。

「しかし、リアルな夢を見た」

「夢？ 授業中に夢見るほど爆睡してたのかよ」

そう言うのは隣の席の雨中護君。つちゆみまもせき

入学してずっと同じクラスで毎回仕組んでるんじゃないかと思いたくなる位隣になる回数が多い。

っていつか入学してずっと隣の席コイツなんだよね。

「それで、どんな夢を見たんだ？」

「麻帆良が火の海で、その中心に立つ二人に凄く見覚えがあった」

「ふーん。誰なんだ？」

「さあな、見覚えがあったとは思うが、誰かまでは分からなかった」

「何だよ、つまんねーの」

「うるせーよ、似非超能力者」

「誰が似非超能力者だ！」

ちなみに似非超能力者つてのは、

「俺、超能力が使えるんだぜ！ 凄いだろ！」

と、発言した為だ。実際に超能力が使えた事にはみんなが驚いたがな。

まさか『原石』が居るとは思わなかった。

それでも放っておく辺り、麻帆良では珍しくも無いのだろうか。

能力は『予知』やら『透視』、『テレパシー』など複数の能力が使えるらしいのだが……

その全ての能力が『超』がつくほどに『微妙』なのだ。

例えば……

「あ、雨降ってやがる！ 俺の予知ではくもりで雨は降らなかった筈なのに！」

……例えるまでも無く、隣で嘆いてやがった。だからこそ『似非』超能力者なんだ。

ちなみに俺に付きまとうのは「同類の臭いがする」との事。何処の動物だよ。

確かに『超能力者』ではあるけど。

足音を立てながらゆっくりと歩いて外に出る。

外は其処まで酷くない雨が降っていた。

小降りの雨だが、家に帰るまでにびしょ濡れになる位の雨。

学校の出入り口には千雨が待っていた。

「あ、やっと来た。潤也、傘持ってないか？ 私忘れたから帰れないんだよ」

「あるよ。ほい、千雨用の傘」

カバンの中から折り畳み傘を取り出し、千雨に渡す。

「さんきゅ。……でも、ホントにいつも用意がいいよな」

「そりゃ俺の勘は当たるからな」

『ツリー・ダイアグラム 樹形図の設計者』で雨を予言してるからな。

勘と言つか、もう「今日は雨が降る」っていう確定事項を教えてください。貰ってるようなモノだし。

千雨にも教えていたのだが、今回は傘自体を忘れてらしい。朝は晴れてたしな。

「千、千雨ちゃん……」

隣では顔を真っ赤にして俺の影に隠れている護。

これを見て分かる通り、こいつは千雨の事が好きらしい。認めないけどな。

しんしんと降りしきる雨。

傘を差し、水溜りを避けながら歩く。

十月も下旬に入り、夜や朝方は少しばかり冷えるようになってきた。

時折、千雨は遠くにそびえる『窓の無いビル』を見ながらため息をつく。

そういえば、二年前の夏休み明けから『窓の無いビル』について様々な噂が立っている。

一晩で出来た事を怪しむ奴は居なくても、入口も窓も換気口さえない建物を作る意味があるのか？ と言う奴らが現れ、一時期話題

にもなった。

噂もある。例えば、『宇宙人が地球を攻める為の基地』だとか、『何処かの国の秘密結社が作った超能力者や魔法使いの隠れ家』とか。

前者はともかく、後者は当たらずとも外れず、と言った所か。あの『麻帆良のラッキー仮面』が噂の発信かな？ 可能性は高そうだ。

国の研究機関や魔法使い達も調べようとしたらしいが、全く分かつらず、何の進展も無いらしい。

麻帆良<sup>マホウ</sup>の魔法使いの情報は筒抜けだからな。ゼーんぶわかる。

唐突に思い出したように千雨が話を振って来た。

「そう言えばさ、潤也達は劇は何をする気なんだ？」

「劇って……何が？」

「……まさか、また寝てたのか？」

ハイ、正解。夢を見るほどに爆睡してた。

そう言ったら呆れられたよ。眠いものは眠いんだ。

「この間学校の行事で近くの保育園や幼稚園に劇とかしに行く話になっただろ？」

「ゴメン、多分その時も俺寝てたわ」

「……まあいいや。それで、私達のクラスと潤也達のクラスは合同で同じ場所に行く事になった。あっちの人数が多いから別の学校とも合同でやる事になって、別々に劇とかをやるうって話になった訳だ」

なるほど、俺が寝ている間にそんな話が出ていたのか。

最近ロシアとかアメリカとかドイツから『技術を売ってくれ』って引つ切り無しに連絡が来る。ウザッテエ。おかげで寝不足だ。

金になるからいいけど。特許パテントでも取ってやろうか。

……そうだ、特許パテントがあるじゃないか。今度の休みに早速申請しに行こう。何処の国で取るうかな。

そうになると個人名は駄目だな、目立ち過ぎる。企業名を考えなければ。何がいいだろうか。

「……おい、聞いてんのか？」

「ああ、あっちの学校は別の何かで、こっちもあっちも男子と女子で分かれてやると」

「よし、ちゃんと聞いてたな。……そう言えば、お前が主役らしいな」

え？ ナニソレ？

「聞いてないんだが」



「だろうな、寝てたらしいし」

「……ちなみに誰から？ 俺教えて貰って無いんだが」

「護」

アイツ後でシメる。そう思いながら家に着いた。

「え、それでは、劇の練習を始めようと思う。異論はあるか？」

「大ありだ！ 何で俺が主役！？ もっと他に向いてる奴いるだろ！？」

「先生に向かってなんだその口のきき方は！」

「だったら俺の寝てる間に決めるとかやめろよ！」

「寝てるのが悪いんだろうが！」

ギヤーギヤーと騒いでいる俺達を気にすることなく周りの奴らは準備を進めている。気にしろよ、少しは。

と、思っていると、クラスメイトの一人で委員長君が誰かに話しかけた。

「……しょうがない、対長谷川（兄）の最終兵器。お願いします」

「しかたねーな、確かにコレじゃ話が進まない」

未だにギヤーギヤーと言い争っている俺と教師の間に千雨救世主が現れた。

「……潤也、私、潤也が主役やってるとこ見たいんだ」

「よし任せろ。俺が主役だアアア!!」

態度が百八十度ひっくり返ってヤル気満満になった。

この瞬間、このクラスに居た全員が（シスコンめ……）と思ったのは俺は知る由も無い事だ。

「それでは、気を取り直して劇の練習を始める。主役の内二人は今日は風邪で休みだから三人でやってくれ」

それに俺を含む三人が頷き返す。

「では、始めよう　劇を」

先生がノリノリだった。ライトノベル風の始め方してやがるよ。

「で、実際どんな劇ですか？　炎髪灼眼の打ち手が存在の力を食い荒らす化け物を退治するストーリーですか？」

「それは全く別のストーリーだ」

千雨に横から突っこまれた。あ、本気で言ってる訳じゃ無いから、冗談だって、そんな睨まないで。

「普通の戦隊モノの劇だ。敵が現れる　敵を倒す　ハッピーエンドの流れだな」

なるほど、テンプレートで行くのか。外れる事も無いだろうしな。

一番年上の子でも五、六歳だろうし、いいんだろう。

「それじゃあ早速始めよう」

「正義の熱血戦士、マホレッド！！」

「常に冷静沈着　マホブルー！！」

「メンバーの力持ち、マホイエロー！！」

後二人はいないので飛ばし、決め台詞

「五人そろって、麻帆良戦隊、マホレンジャー!!」

決め台詞を言うと同時に俺達の背後から赤青黄色のカラフルな煙が出る爆発を起こす。

『……って、待て待て待て待て待て!!』

ほぼ全員が同時に突っ込んできた。気にして無い奴もちらほらいるけどな。

削板の『原石』の能力で麻帆良結界が薄れたとでも言うのか？

「どうした？ みんな」

「いろいろとおかしい!! どうやってたらそんな爆発が出んだよ!」  
「?」

「どうやってたらって……気合い?」

そう言って護（主役になった事を教えなかったので無理矢理この役にねじ込んだ）に話しかける。

「根性で出来るんじゃないか?」

『出来るかつ!!』

まさかの総突っ込みだよ。『原石』の能力は使わない方が良かったか。

「じゃあやらない様にする」

「そうしてくれ、アレは幾ら何でも出鱈目過ぎる」

そんな事がありながらも、練習はしっかり進んで行った。

当日。今俺達は少々肌寒い気温の中、バスで移動した保育園に居る。

結構大きい、流石にマンモス校の麻帆良だと思う。人が多い。

紆余曲折がありつつ、途中でガトリンググレイルガンを引っ張り出そうとしたりしたが、取りあえずは劇は成功だった。

カラフルな爆発があったほうが面白いと思ったが、

「いいか、やるなよ、絶対やるなよ！」

「押すな、押すなよ。のノリか。分かった」

「ちげーよ！！ 部屋の中でアレは危ないだろうが！」

と、言われてしまった。

別に火薬を使っている訳では無いから危なくも無いんだが、ソレを説明するのに時間がかかるのとまだ魔法バレは速いかなあと思っただ結果、教えなかった。

魔法バレはまだ後でいいだろう。

今現在、別の小学校との交流の名目もあり、保育園生と小学生で遊んでいる。

保育園の中にある遊具で遊んだりもしていたが、流石に三百人近い人数が一斉に遊ぶのは無理なので近くの公園へ。

ちなみに小学生と保育園生の比率は3：2位だろうか。

かなり適当に算出した数字なのであしからず。

それはともかく、保育園生と遊んでいる訳だ。

「マホレンジャーやって〜」

と、頼まれたりもしている訳だが、千雨との約束がある手前、爆発も起こせないしつまらないんだよな。

それでもやったりはしているけど。

追いかけてこすればキャッキヤと言って笑いながら逃げる。楽しいね。

時折同じ班になった女の子（同じ年とは思えない）と話す。つい

でに既視感とかあるんだが。

目元に泣き黒子があつたりウェーブがかかった髪、後身長と胸とか。

一瞬中学生か高校生かと思ったが、悪寒がしたので思考を停止。本能が生きたいなら思考を止めると命令したんだ。

それはともかく、その女の子と話している。

「……ふーん、保母さんに、ねえ」

「ええ、子供の相手をするのが楽しいのよ」

ウフフ、と口元を隠しながら笑う。ホントに同い年……シコウヲトメロ。

「しかし、まだ小学生なのに夢があるってすごいな」

「そんな事は無いわよ。私の友達も夢がある子って沢山いるわよ」

「君ほど先の事をしっかり考えている子はいないと思うけどね」

「あなたはどつなの？ 将来の夢とか、ある？」

俺は、なあ。

取りあえず金に困る生活はしないだろう。後、命の危険性がある事も無い。

やりたい事を小学生で見つけるっていうのも、難しい事だと思う。  
ソレをやってるからなあ、この子。すごい、としか言いようが無い。

「そうだな……取りあえず、のんびりと暮せればいいかな」

好きな人が出来て、結婚して、子供が出来て。

そういう生活は楽しいかもしれないな。充実してると言えるだろう。正にリア充爆発しろ、と言いたくなる。

前世は交際こそしたものの、其処まで深い仲にはならなかった。

この世界では、楽しく生きて行きたいものだ。

「まるでお爺さんみたいね」

彼女はウッフ、とまた笑っていた。

それにつられて俺も笑う。

「人生つてのは、やりたい事やって、楽しい事やって、死ぬときに『充実した人生だった』って言えばいいんだよ」

最も、それが一番難しいんだがな。

「そうね、私もやりたい事をやる為に頑張るわ」

「俺もがんばるぞ」



「じゃあ、どっちが先に夢を叶えるか勝負でもする？」

「俺は楽しく生きる事だ。夢と言えるのかね」

「じゃあちよつと考えてみてよ」

考えてみて、と言われてもなあ。選択肢は一つだろう。

別にあるかもしれないが、俺はこれでいい。

「科学者、かな」

「ふふ、いいじゃない。勝負よ。どっちが先に夢を叶えるか」

俺はもう叶えてるようなモノなんだけどな。まあいいや

「勝負だ」

そう言って、俺達は笑いあつた。

「そつだ、名前教えてよ。お互い名前も知らないままじゃまたあつても分からないかもしれないじゃない？」

「そつだな、では改めて。俺は長谷川潤也だ」

「潤也君ね。私は那波千鶴よ。よろしくね」

那波千鶴。なるほど、既視感があった訳だ。

この約束が、後に悲劇を生むことになった………とか、モノロ  
ーグが入らないといいな。

#### 第四話「誰が似非超能力者だ！」by 護（後書き）

ナニコレ？

読み返してそう思った。

コレ青春系の小説だったけ？ 魔法使いの物語だよな？ ギャグも入ってるけど。

そして感想で「学園都市の技術で特許とったらどうですか」と言われるまで気付かなかった自分は駄目だ。いろいろと。

何処の国で特許とつたら一番利がありますかね。別にそれはどうでもいい事なんです。数で押し切れば金なんて幾らでも入ってくるので。

それより会社の名前が思いつかない。垣根印の冷蔵庫とかだしたら面白そうだなーとか考えてます。

次話でやっと中学へ入学する……と、思います  
後、来週は更新遅れます。テストが、学生の敵のテストが……

感想・アンケートはいつでもお待ちしております。

ちなみに、今現在の投票率

マナ 一

アスナ 二二

千鶴 一

図書館探検部 一

刹那 一

意外と人気なアスナにビツクリ

第五話「……クラスに、ロボが居る」by千雨（前書き）

PV 45 / 247 アクセス

ユニーク 10 / 941人

総合評価 1 / 370 pt

このような稚拙な作品にここまでの評価をありがとうございます  
テスト期間中ですが、ここまで期待されちゃ書くしかねえ！ と頑  
張って書きました。  
急いで書いたので少しくオリティが低いかもしれませんが。

第五話「……クラスに、ロボが居る」by千雨

中学校へ入学。

入寮するときに相部屋の野郎の事でひと悶着があったが、別段どうでもいい事なので記さない。

その他、小学校の時にいろいろやってたのでお礼参りとか来たけど全部返り打ちにした。

唯の喧嘩で負ける筈も無い。

それと、犯罪者を捕えて洗脳。ハウンドドック『ハウンドドック 猟犬部隊』を作った。

邪魔な奴をさっさと殺す為だけの組織だ。使いやすい。

平均年齢二十二歳位だけだな。日本中から集めたからそれなりに人数が居る。

ついでに脳の『開発』もした。必要な知識は全て『テストメント 学習装置』で補った。

大抵が突発的に犯罪に走るような頭の悪い連中なのでレベルは良くて二か三程度。

ほとんどが零か一。驚いた事にほんの数人だけ四が居る。五は当然ながらいない。

厳密に言うなら、『パーソナルリアリテイ 自分だけの現実』を上レベルに書き換えて

も演算能力の問題で全く使いこなせない。

下手に使うと能力が暴走するから、演算能力に見合ったレベルにしている。

レベル三と四の連中は『グループ』やら『スクール』やらと名前を付けて特別扱いだ。

仕事は知り過ぎた奴の掃除やらやったりしてる事もあるが、基本的に普通に過ごしている。

ちなみに能力者は魔法が使えない事が良く分かった。全身血塗れになったよ。

あ、ちなみに俺自身がやった訳じゃねーから、犯罪者にかける情けは無いつて事で。

気は大丈夫っぽかったけどな。魔力は体に流れるだけでアウトだった。

仮契約なんかで契約執行しても血まみれになるって事だ。面倒な。

アーティファクト手に入んねーじゃん、とか思ってたけど。メタリイーターとかガトリングレールガンとか使える時点でいらなくね？ とも思った。

アーティファクトにだけ魔力を送ればいい話なんだろうけど、ソレできるようになるまで練習する必要があるだろうし、失敗するたびに血塗れとか勘弁だ。

カタカタとパソコンを弄る。

毎日同じようにインターネットを巡り、目的のサイトを探す。

アイツ、ハッカーとしてかなりの腕前だからな。俺の腕を持ってすれば逃げきれない事は無いが、調べられると面倒くさい。

と、いつか、罫を仕込まれてたら厄介だ。自分のサイトを守る為にいろいろ仕掛けてそうだし。

だが、衛星を使って他国のサーバーを経由し、ここでは無いどこからアクセスしていると見せかけてる、もし不審に思われても問題は無いだろう。

……そんな事を思っている間に俺は目的のサイトを見つけ、緊張する。

危うく考え事していて見逃すところだった。

「……何見てんだ？ お前」

俺は気にせず、サイトをクリックし、HPを見る。

……『ちづのホームページ』



フッフッフッフ、中学に入学してからコレが作られる日を楽しみにしていたんだ。

兄貴の俺にさえ教えてくれないからな。当然だとは思っけど。

説明不要だと思うが、テンションが果てしなく上がっているので説明。

これはマイシスターの千雨のネットアイドルデビューと言う奴だ。うん、一行で説明が終わってしまった。

公開されて其処まで時間は経っておらず、案の定ウイルスやハッキング、クラッキング対策をたてている。

「あれ？ コレ千雨ちゃんに似て無いか？」

……そういえば、面倒だからと放っておいたんだった。

「さて、護。選択肢は二つ。自分で記憶を消すか、消されるか」

「まてえい。どっちにせよ何か消すしか選択肢は無いのか！？ 良いじゃんか、ネットアイドル見る位！ アイドルって興味あるんだよ」

「……まあ、お前の姉貴もアイドル目指してるらしいしな。大根役者で歌唱力皆無だけど」

「……まあな。頼む、後で見せてくれ、絶対に誰にも話さないから」

どうしようか、別にみる事は構わないんだが。

ばらさなきゃ大丈夫だろう。後ついでにコレの事は話せない様に頭に細工はしておくか？ だが、一応コイツ口は堅い方だしな。

「よし、見る事を許す。だが、絶対に口外するなよ？ した日には……」

「サー・イエッサー！ ……でも、かわいいぐらいはいいだろ？」

「当然。構わんよ」

そう言ったら、ダツと駆け出してパソコンに齧りつく様に見始めた。

……あそこまで行くと、唯の変態にしか見えないな。

少しは自重と言つてモノを覚えよう、と思った俺だった。

夏休み前。千雨が訪ねてきた。

最近は会って無い。中学は男子と女子が別だし、寮で暮らしてるからな。

相部屋になった護は別の部屋に行ってるから今は二人きりだ。

一心男子寮何だが、俺の妹と言う事で簡単に入れたらしい。何故だ。

アイスコーヒーを二人分用意して俺と千雨の前に置く。

「ああ、ありがとう」

俺はズズツ、と一口コーヒーを啜りながら答える。

「別にいいよ。それで、どうした？」

「……クラスに、ロボが居る」

「ロボ？」

「それ以外にも小学生じゃねえのって位の身長の奴らが居たり、逆に異常に育ち過ぎてる奴らとかもいたりする。それはまだ分かるんだよ。だが、ロボだぞ？ 後大量の留学生」

まあ分からんでも無い。同級生にロボは普通じゃないよなあ。

留学生とかはしょうが無いかな。原作の3-Aってネギの為に集められたような節があったし。

千雨がそれに入ってるのは気に喰わないがな。

あのガキが手を出そうとすれば衛星に積んでおいた光学兵器でDNAから消滅させてやる。

「木乃香も簡単にあのクラスに馴染んでるし、私は疎外感を覚えるよ」

「そうだな、木乃香ってなんだかんだで適応力高そうだし」

「それは暗に私の適応力が低いと言いたいのか？」

「そう言う事じゃない。だからホントに殴るのヤメロ。暴力反対！ 拳を握り始めた時点で土下座に移行。殴った時の手応えに不信感が募るから能力は使わない。」

女に弱いな、俺。基本的に千雨だけにだが。

「ま、いいけどな。お前が居ればここの異常性について話が合うし」

「そりやまあ、な。ある意味木乃香もこの異常性に毒されてきたって事かね」

「コーヒーを啜りながらそう呟く。

千雨は俺の言葉に軽くいらついたように答えた。

「そうだな、最悪だよ」

いざとなつたら本気でこの結界ハッキングして機能できない様にさせてやるうか。

何か不都合でもあつたかな。無いなら今度本当に落としてみようか。

「それでも、偶には木乃香と出かけてんだろ？」

「まあな。町の外だと何故か普通になるし」

「いいんじゃない？ 別に、愚痴ならいつでも聞いてやるからさ、友達とは仲良くしろよ」

「お前がソレを言うか。友達少ないくせに」

笑いながら言われた。友達が少ない訳じゃないんだがなあ。

どうにも不良と思われているらしい。素行は普通だが、お礼参りとかしに来た奴らを返り打ちにした所為でそっち関係だと認識されたんだろう。

訂正するのも面倒だし、授業中は大抵寝てるので教師受けも悪い。それでもテストで毎回同じ様に満点を取るからか、かなり僻まれてる。同じ小学校だった奴を除いてな。

あいつらは何故か気にしないんだよな。理由を聞いたら、

「小学生の頃から自分から手を出した事は無かっただろ。後勉強教える」

と、言われた。確かにそうだけど。勉強を教えるのは一向に構わないけど。

小学校から俺の事を知ってる奴は大抵俺を『唯のシスコン』と見てるらしい。こっちもどうかと思うがな。

否定はしない。する必要も無い。公言もして無いけど。

「まあいいんだよ。俺には千雨と後は弄る奴が居れば」

千雨は軽く顔を赤くしながら顔を逸らす。

恥ずかしがっちゃって。かーわいー！。

「……そう言えば、今度の休みも木乃香と買い物に行く予定何だが、潤也も来るか？」

「今度の休み？ ……確か、用事が入ってたんだ。悪いな」

「そうか、ならしうが無い。今回は二人で行ってくる」

「おう、楽しんで来い」

ケタケタと笑いながら千雨は帰って行った。

仕事用の携帯の着信音が鳴る。

面倒だと思いつつ携帯を手に取り、ボタンを押す。

「八重<sup>やえ</sup>か、原石の『リスト』が出来上がったのか？」

『いえ、『リスト』はまだ作成途中ですが、どうにもロシアの一部勢力が我々の事を探っているようです』

「ロシア？　と言うと、アルトウール・バラノフの野郎か？」

アルトウールってのは、前に俺を……正確に言うなら俺の持つ科  
学力を……利用しようとしているいろいろ仕掛けてきた野郎だ。気に喰  
わない。

『はい、各国に研究施設を置くとの名目でKGBを使って『原石』を捜索、研究するとの事。先日の『グループ』による襲撃で魔法とは違う力の事がバレたようです。』

ハア、とため息をつく。

缶コーヒーを一口飲み、考えを巡らせる。

『原石』自体は裏の人間でも知っている奴はいる。環境によっては普通に発現する事もありえるが、基本的に興味を持たれないのだ。

何故なら、裏の人間は基本的に『魔法』を知っている。

『魔法』という力がある以上、どうやれば使えるようになるかもわからない。『原石』は研究対象としては認識されない。

費用対効果もだが、本当に使えるようになるかさえ分からないのだ。無駄に金を使う事は避けたいのだろう。

興味本位で研究する奴は居るだろうがな。

ここで問題が起きた。先日、俺の持つ科学力と戦力を脅威に思った奴らがいて、傭兵と兵器まで用意して殺そうと躍起になった奴らが居る。

居る場所が分からないから探そうとして衛星まで使い始めたからな。

ソレを潰したのだが、その時に使ったのが『グループ』だ。



『グループ』にはレベル四が二人、レベル三が三人の五人組だ。壊滅させたのはいいが、能力を使っているところを何かに映像を残してしまったようだ。

おかげで、『これは魔法とは違う、何か別の力では無いのか？』との疑問を敵側に持たれた。実際その傭兵には魔法使いも混じっていたらしく、通信を完全に切る前に別働隊に連絡を取られた様だ。

恐らく、その所為で魔力や気が使われずに超常現象を起こしたと言う事が伝わったんだろう。

それも直ぐいろんな所へと広まった。情報統制したおかげでロシアだけで済んだが、知っている人間は今でも消し続けている。

魔力とも、気とも違う第三の力。可能性として『原石』のソレが上げられた。

故に、世界中に存在する『原石』を集め、研究して『能力者』を生み出そうとしている訳だ。

『奴に出来るなら、我々も出来るに違いない』と勘違いしてな。

「『グループ』の連中は後でお仕置きかな」

『今は全員待機しているようですが』

「後で仕事を入れてやれ。休み無しにな。後、頭の回転を良くする為に青汁でも飲ませてやれ」

『了解しました』

まあその辺はどうでもいいんだがな。完璧を期待している訳じゃないし。

「……それで、研究施設は幾つだ？」

『現在確認した限りでは、恐らく三十余りかと』

三十、意外と少ないな。『原石』の数は其処まで把握しきれていないのか。

とはいえ、奴らが『原石』を手に入れた所で『能力者』を生み出す可能性は零。放置しておいてもリスクは無い。が、

「準備期間は分かるか？」

『現段階の情報を見る限り恐らく数年がかりで準備をするでしょう。詳しくは資料を送りますので、そちらを参照ください。……私見としては、早くても来年の冬、遅ければ後二〜三年は遅れる可能性があります』

「そうか、ならいい。今は『リスト』の作成を急げ、アルトウールの野郎はいずれ潰す」

『ハッ、直ぐにでも』

通話を切り、携帯をベッドへ投げる。

ソファに座ってコーヒーを飲みつつ、この後について思案する。

次の休みはドイツでの俺達への協力関係を築きたいと言う機関との会合だったか。面倒な。

千雨と買い物行きたかったな。と思いつつ飲み終えた缶コーヒを捨て、また新しい物を開ける。

『原石』を狙っているなら護も狙われる可能性があるが、麻帆良に侵入してきたら魔法先生が相手してくれるだろ。

流石にそれくらい役に立って欲しい物だ。

それが出来ないようなら本気でこの魔法先生には失望しか無いね。

各国に居る『原石』を捕えられる前に奴らを潰して置くべきかな。廃人にされたらかなわん。

人工的な能力者と違って方向性が特異で希少。調べてみたい。

マッドサイエンティストみたいな思考になってるが、しょうが無い。

## 第五話「……クラスに、ロボが居る」by千雨（後書き）

中途半端に終わってすいません。時間が、時間が無かったんです……。

原石はこの世界にも存在していると言う事で。

原作は五十人程度ですが、新世界もあるのでもう少し増えそうです。

アンケート、そろそろ締め切るべきかなあ。でも原作までもう少し時間があるし。

今みた感じ、千雨、アスナ辺りが凄い人気です。

千雨を選ぶとは……見る眼はあるけど、この作品では手を出すと近親です。

それでもオツケーと言うなら書きましょう（オイ  
ちなみに自分は全然OKです（キリッ

……可能性としては、千雨が入るならハーレムになりそうな気がしないでも無い。  
隠れ蓑にする様な感じで。

企業名が、企業名が思いつかない……

ネーミングセンス零と言われ続けてきたからか、全く持って思いつきません。

もう出さないで行こうかと考えてます（オイ

感想、アンケートはいつでも募集中です！

……今回は評価のお礼の意味も兼ねて勢いのままに書いたんで、来週はホントに投稿できませんのであしからず。

## 第六話「買い物よ。ショッピング」bY廻（前書き）

テスト終了ヒヤッハア！！

……コホン、初めからウザいテンションで失礼。  
漸くテストが終わったんで更新再開です。

そして感想の量に驚いた。アンケートの集計大変そうだあ……

## 第六話「買い物よ。ショッピング」b y 廻

メールの着信音が鳴り響く。

枕元に置いていた携帯を取り、メールを確認すると同時に時刻を確認する。

……まだ七時じゃないか。

そう思ったが、今日は九時から木乃香と遊びに行く約束をしているので丁度いいかな、と思い、準備を始める事にした。

メールは潤也から。

内容は前半冗談（多分）で書いたであろう無駄なラブレターが書かれており、読み飛ばして最後の文を見る。

P S、今日は三時七分から二十二分程雨が降るから要注意。と書かれていた。

何故ここまで正確にわかるんだ……と言う突っ込みはもうしない。慣れた。

トースト、サラダ、牛乳と簡単に朝食を準備し、着替えて時間を確認する。

ゆっくり準備したが、まだ八時半だ。

集合場所は女子寮の出口。まだ三十分も時間がある。

暇なので昨日買っておいた装飾の雑誌を読む。

チラチラと時間を確認しながら雑誌を読み、時間になったので女子寮出口へ。

ドアを開け階段を下りると、木乃香が居た。

「よ、木乃香。まったか？」

「あ、千雨ちゃん。待つてへんよ、ウチも今来たところやし」

時計を見ても五分前、時間前なので別に気にはしない。

「で、何処行くんだ？」

「そうやね、結構暑くなってきたから、夏服見にいかへん？」

夏服、確か箆笥にはサイズが小さくなっていたのがいくつもあった。そろそろ買わなければと思っていたので、ちょうどいいか。

「ああ、私も夏服買いたかったしな」

「ほな、いこか」

「今日は潤也君は一緒やあらへんの？」

「何か用事があるんだってさ。一緒に行けないって悔しかった」

「あはは、潤也君らしいなあ」

そんな話を話しながらいくつか店に入る。

いくつかわいいいものを探してリストアップ。後で撮影にも使えるようなのがいくつもあった。そっち系はもちろんウィンドウショッピング。

金の心配はしていない。

何故か潤也が「宝くじで当たった」とか言って金を置いて行くんだよな。

それも何回もあるから、もう遠慮するのもバカらしくなってきた。おかげで買いたい物も買えてるし。

ありがたいけど、ホントに宝くじ当たってんのか気になる。

そのうち問いただしてみようか。バイトとかして私に金やってるとかだったら何か嫌だし。

「神楽坂は？」



「補習やて、『高畑先生と補習』って喜んで出て行っただえ」

……本当、オッサン好きなんだな、神楽坂。人の趣味は人それぞれだけど。

いろんな店に入って品物を見ていたら太陽はいつの間にかかなり高く上がっていた。

時刻は十二時十分。そろそろ昼食の時間だ。

「何処か店入って昼飯を食べよう。何か食べたい物とかあるか？」

「うーん、特に何か食べたい物とかは無いえ」

「じゃあ適当でいいか」

それから数分、洋食屋を見つけた。

偶にはこういうのもいいかと思ってここに入る事にした。

店に入る前、近くで不良の喧嘩のようなものがあっていた。物騒だな。

中は綺麗なレストランで、メニューも結構豊富。

私はグラタン、木乃香はオムライス。中々おいしかった。

「中々おいしかったな。また今度行ってみるか」

「そうやね、今度はアスナとか潤也君とか連れて行ってみたいえ」

にしても、少し量が多かったか。何処かで休むか腹ごなしでも…  
…そう思っていると、丁度良く近くにゲーセンの看板が見えた。

腹ごなしのつもりでゲーセンへと入る。

レースゲームは意外にも木乃香の勝ち。

「意外と強いんだな。ビックリしたよ」

「部屋でアスナと一緒にやったりしてるんやえ。今度部屋に来て一緒にやる？」

「分かった、今度行かせてもらうよ」

神楽坂は正直苦手な部類の人間だが、意外にも潤也と知り合いらしい。最も、ソレを知ったのは最近だが。

昔怪我したときに手当してくれたんだとか。

意外と3・Aのメンバーと知り合いが多いな、潤也。

ガンシューティングは二人協力プレイで、ここでは私が活躍した。

「ほえ、やっぱうまいなあ。千雨ちゃん」

「これは結構やってるからな」

偶に潤也と一緒にゲーセン行ってやってるときもあれば部屋でP2使ってやる時もある。

でも、潤也ありえないくらいうまいんだよなあ。銃の扱いに慣れてると言っつか、なんと言っつか。

本人に聞いたたら、

「千雨の足引つ張らない様に徹夜で練習した」

とか言ってたし。嘘だとは思っけど。

ゲームの為に徹夜で練習って駄目人間だろ。とは思っが、ホントにやってそっだ。

そしてまた服を探して店を回る。

一通り回ったので少し外れた場所にも行ってみようかと思っていると、どこかから聞いたことある声が聞こえた。

「だーかーらー、ちゃんと持ちなさいって言ってるでしょ！結構高かったんだから！」

「知るか！ だったら自分で持てよ！」

「それじゃ何のためにアンタ連れてきたか分かんないじゃない！」

「そんなのは相咲あいきにでも頼めよ！」

……この通りでこんな大声で話すつて……馬鹿だろ、あいつ等。

こういう場合は他人のふりをするのが得策……

「あ、あれ千雨じゃ無い？　おーい、千雨ー！」

「千雨ちゃん、知り合いなん？　呼んどるよ？」

少し頭を抱える。……こういうとき、他人のふりして逃げたくなくなるよな。

しょうが無いので相手してやる事にした。

「で、何してんのお前等？」

「買い物よ。シヨッピング」

「荷物持ち。強制的に連れてこられた」

うん、大変だな、護。こんな姉が居て。

「千雨ちゃん、ウチ紹介してや」

「あ、そうだな。えっと、こっちは同じ小学校だった同学年の雨中姉弟。姉が廻めぐもで弟が護。こっちは同じクラスの近衛木乃香だ」

適当にあいさつなんかをして握手。木乃香なら仲良くなれるだろう。

廻がキヨロキヨロと周りを見る。どうしたんだ？

「そういえば潤也は居ないの？ 千雨が居るから潤也も居ると思っ  
てけど」

「ああ、アイツ朝から出掛けてたぜ？ 『ドイツに行ってくる。お  
土産はこけしでいいよな』 って言って部屋を出てった」

……何故こけし？

今ここに居る全員心がひとつになったな。

いや、多分嘘なんだろうけど。嘘にしてももうちょっとマシなの  
吐こつぜ。潤也。

「ふーん、その調子だと潤也も変わってなさそうね」

「そうだな、変わって無い。相変わらずのシスコンだよ」

護はため息をつきながらそう言う。……何かあったのか。

「護君と廻ちゃんて同学年なんやろ？ なら千雨ちゃんと同じで双  
子なん？」

「あー。いや、俺達は双子じゃ無い」

「？ なら学年違うん？」

「そうじゃなくてね、あたしが四月生まれで護が三月生まれなのよ」

「あと数日違ったら下の学年だったって事」

「へえ、そんなこともあるんやなあ」

「まあ他に同じ境遇の奴を見た事は無いな」

珍しいしな、こういつの。

潤也も最初聞いた時ビックリしてたしな。

「そういえば、潤也は違う漢字で同じ読みの『宇宙』で『スペース  
姉弟』って呼んだりしてたな」

「それはやめて欲しいんだけどね」

土下座でもしそうな勢いで即答した。其処まで嫌か、『スペース  
姉弟』。

逆の立場だったら、私も出来れば言われたくないしな。今度潤也  
に言わない様に頼んどこう。

「っと、あたしまだ回る店あるのよね。二人も行く？」

「そうだな、私達は一通り回ったし、ついて行くのもいいかもな」

「そっやね、時間もまだあるし」

「アンタは荷物持ちちゃんとやりなさいよ」

「分かってるっての」

こうして私達は廻と一緒に回る事になった。

「買い過ぎだろ……」

護がすごく可哀想だった。

両手いっぱい袋を持っている。廻もいくつか持ってるけど、其処まで大きくは無い。

何故か途中で「お前等の分まで持ってやる」とか言い出したので、ありがたく荷物持ちをして貰った。

廻はソレを見て呆れていたが、気にすることなく次の店へ行った。

「千雨の前だからって格好つけるから……」

何か呟いていたが、聞こえなかった。

木乃香は護を気遣っていたが、護は平気だと言い張っている。顔はつらそうだけどな。

この暑さだ、熱中症にならないとも言切れない。そう思って空を見る。

少し曇って来ていた。雨が振りそうだな。

そう言えば、と思い出して携帯で時間を確認。

もうすぐ三時になる所だ。潤也の予想は三時七分らしいし、そろそろどっかの店で休むついでに雨宿りでもするか。

「廻、そろそろ休憩にしよう。暑いし、倒れたら駄目だろ？」

「そうね、暑くてしょうがないわ。其処の喫茶店にでも入って休みましよ」

暑さでやられ気味な護を連れて喫茶店へ入る。クーラーが効いててかなり涼しい。

入る前にも近くで不良の喧嘩を見かけた。多くないか？

店員に案内されて窓際の席へ。近くの席には驚いた事に村上と那波がいた。

「何してんだ？ っていうか珍しいな」

「この喫茶店最近出来てて、ケーキが美味しいらしいからちょっと味見にね」

「へえ、そうなのか」

ケーキか、食べてみようかな。

でも、甘い物は最近ちょっと気にすることになっている。ネットアイドルとして体型には気を使うんだよ。



「ケーキね、ちょっと興味あるわね。食べてみようかしら」

廻はそう言っただけで店員に頼んでいた。……気にしないのか。私も頼もうかな。いや、しかし……

思考がループしていたが、結局頼まない事にした。唯でさえ隣に居る那波といい、1-Aの奴はレベルが高いからな。それに負けたくは無い。

私達はそれぞれ飲み物を頼んで雑談。

村上と那波にも護と廻を紹介し、仲良くなった。

「……あら、雨が降ってるわね」

ふと外を見ると、ザアアアア。と雨が降っていた。

結構ひどい雨だが、潤也の予想は三十分までに止むらしいしな。

「止むといいけど、大丈夫かしら」

「三十分くらい様子を見よう。それで決めればいい。それに護には丁度いいだろ」

本当にバテてるからな。大丈夫か？

「梅雨は過ぎたと思ったんだけどね……あ、じゃあ夏っぽく怪談話でもする？」

「まだ明るいんだが」

「雨降ってるから暗いし、いいでしょ。暇なのよ」

廻はホント我が道を行くって感じだよな。面白いけど。

「じゃあ、そうね。『セブンスミスト  
Seventh Mist Group』って知  
ってる？」

那波が話し始めた。こういうネタ知ってるのか？ っていうか、  
何処かで聞いたことあるような……

「『セブンスミストグループ』？ 何だ、ソレ？」

「怪談では無いかもしれないけど、話の種には良いかなって。何で  
も、世界中の科学技術を満遍なく上回ってるって話よ」

「それは怪談ではないだろ？」

「まあ、そうなんだけどね。その『セブンスミストグループ』……  
面倒だから『SMG』でいいかしら……その本社がああ、『窓の無い  
ビル』だって言う噂よ」

『SMG』それで思い出した。

確か、ネットで一部の奴らから「ロシア、イギリス、アメリカ、  
カナダ、フランス、ドイツ、日本の七つの国が秘密に兵器を作る為  
の隠れ蓑として共同で作った会社」として『七つの国の屋気楼』と  
か呼ばれてたな。

かなり中二病っぽい名前だが、ネットで流れている名前なので特  
に気にはしない。そう言うのは幾らでも溢れてるし。

「……『窓の無いビル』か」

私が小学四年生の時に突如として現れたビル。

前日まで無かった筈なのに、まわりの人は不審にも思わなかった。

数年たって、窓も入口も通気口も無いって事で誰かが調べたらし  
いけど、何の成果もあげられてないらしいし。

あの土地はちゃんと買い取られていて、持ち主は居るらしいけど、  
探し出せないとか。

何度か撤去しようとしたらしいけど、撤去できなかつたらしい。

噂は『ビルを壊そうとして重機の方が壊れた』『ビルの持ち主が  
重機を魔法で壊した』『土地の権利書をちゃんと持っているからと  
訴えられそうになった』『壊そうとした会社を買収された』とかい  
ろいろある。

真実は分からないけどな。

「……まあ、噂の出所は桜子ちゃんだけどね」

「ああ、あのラッキー仮面か」

アイツ異常に運がいいらしい。宝くじに何度か当たった事がある  
とか言う噂もある。

あいつの勘は当たるからな。もしかしたら本当かもしれない。

「自由研究であるビル調べてみようかしら」

「どつやってだよ、調べられないだろ」

中の音さえ聞こえないらしいからな、アレ。唯中で音がして無いだけっていう可能性もあるけど。

時計をチラッと見る。三時半。

外を見る。晴れてた。

……毎度ながら、すげえ勘だな、潤也。超能力でも持つてんのか？ ……いや、考えるのはよそう。あいつは「大学の研究で天気の子報をやってる友達から教えて貰った」とか言ってたが、大学の友達とかいんのか？ 普通。

「雨、止んだみたいだな」

「あら、本当。じゃあ、帰りましょうか、夏美ちゃん」

「そっだね」

会計を済ませて那波と村上は帰って行った。

「『窓の無いビル』かあ……潤也君は何か知らへんの？」

「さあ、聞いてみないと分からないな」

確かに何か知ってそうだけだな。

「護、アンタ後で聞いときなさい」

「何でだよ。電話かメールでもしとけばいいだろ」

「あんたが聞いた方が速いじゃない。それに今ドイツなんですよ？」

「いや、ホントにドイツに居るかはしらねえよ、そう言っただけで」

本当、何処に行ってるんだろうな。

気になるけど、多分ドイツって答えそうだな。

結局後で護が聞く事になり、もう大体回ったので解散となった。

寮まで歩いて帰り、いつも通りに過ごす。

新しくリストアップしておいた衣装は後でネットで安いのを探すとして、ゆっくりと部屋でくつろぐ。

外はまだ明るい。

何もやる事が無いので、ぐでぐで、っとベッドの上にとらける。

今日は楽しかった。多分護から話は聞けただろうけど、後で潤也に

も木乃香との買い物時の話をしてやろう。

口元がニヤついているのにも気付かず、そう考えた。

## 第六話「買い物よ。ショッピング」b y 廻（後書き）

そんな訳で千雨の一日です。

実は千雨が見た不良の喧嘩は全部潤也の仕業だったり。掃除的な意味で。

権力の無駄遣いってこういう事を言っんですかねえ（え

企業名、沢山の人を考えてくねまして、うれしいです……。

結局レールガンで出てきたセブンスミスになりましたけどね。

本社が何処にあるか誰も知らない、という謎の会社です。従業員いるのかと問いたくなります。

セブンスミスは annburera 様から意見をいただき、かにかま様からも意見を参考にさせていただきました。

ありがとうございました。

アンケートは次話投稿時で終了です。予想以上に多く来たので驚きました。

感想・アンケートはいつでも募集中です。

……日常編書くか、非日常か……うっむ。

第七話「まるでお父さんね」b y 千鶴（前書き）

何だか書きたびに下手になっていってるような気がする。  
うまく書けない……。



第七話「まるでお父さんね」by千鶴

「やらないか？」

ブチッ。

電話が切られた。

千雨に電話して、開口一番にソレを言ったら切られてしまった。何が悪かったんだろうか。ネタに走ったからか？

それはまあどうでもいいのもう一度電話。

何度かコール音が響き、電話に出る。

「やらない」

『言わせねーよ！』

流石に二度目はクドイらしい。怒られた。

それは置いとくとしてだ。

「夏休みも中盤だし、海に行かないか？」

『海？ 今年は例年以上に暑いから海は多いらしいぞ。それでも逝きたいのか』

字が違う気がするんだが。いや、間違っではないかも知れんな。

多過ぎて疲れるだけの可能性もあるし。

「実はな、懸賞に応募したら当たったんだ」

『何がだ』

「海の近くのホテルの宿泊券。団体用。上限四十人」

『……お前さ、本当に運良過ぎないか？』

まあそれは分かるよ。宝くじで当たったと称して企業の売上金を千雨に渡してるからな。

そして今回も例に漏れず俺の仕業。

というか団体様ホテル宿泊のチケットなんて無いだろ普通。精々二人か三人程度のペアチケットが関の山だ。

「いいじゃないか、運がいいのはいい事だ」

『まあな。私も得してるし』

「それで、団体と言う事で千雨が連れて行きたい奴言ってくれ。大体の人数なら俺が何とかしよう」

『本当か？ なら聞いてみる、ちょっと待ってくれ』

そう言っただけで電話が切られる。

今回の海へ旅行。俺の仕業なのは読者様は分かっていると思うが、

説明しよう。

『セブンスミストグループ』の金で島を一つ買い上げ、別の企業の名前を使って経営している。

早い話が千雨と海へ遊びに行きたいが為に作られたホテル。というか作ったホテル。

もちろん普通に営業もやっている。俺達が居る当日だけは従業員『SMG』のメンバーに総入れ替えしてるけどな。

従業員は『猟犬部隊』、その他当日は『グループ』や『スクール』等も警備や仕事に就く。

海での監視、及び孤島なので船での行き来等々。安全性は高い方だと思う。

衛星で周りを見張っているし、いろいろ機械も用意している。

後は『この旅行が嵐の前触れだとは誰も気付かなかった』とかプロローグが入らなければ大丈夫だろう。

P r r r r r

つと、そんな事を考えている間に千雨から折り返しの電話があった。

「もしもし？」

『ああ、潤也。木乃香達を誘おうと思ったんだが、ウチのクラスのバカ共が騒ぎ出してな、全員ついてくるとか言いそうなんだが』

「合計で何人？ こっちは男四人いるんだが」

『え〜っと、全部で二十七人かな』

俺としては別に増える事に問題は無い。ホテル結構大きいしな。つーか上限とか考える必要も無い気がした。

梶咲辺りは女子が増えたと喜ぶだろう。

「ああ、大丈夫だ。何とかするよ」

『悪いな、何分勝手に広めた馬鹿が居たもんで』

多分朝倉と早乙女だろうな。

二十七人というと、多分ザジ、エヴァンジェリン、茶々丸辺りを抜いた人数か？

というか、葉加瀬とか四葉、超辺りが来る事がまず驚きなんだが。その辺を聞いてみた。

『ああ、葉加瀬と超はこれを機会にお前と話してみたいってさ。大学の工学関係じゃねえの？』

「ああ、なるほど」

成績が毎回満点、女子中の超も同じで工学部に所属していて俺は帰宅部。大学生が我先にとサークルに入ってくれって事あることに言ってくる。

「ヤル気無いんだよね。金入らないしさ、特に利がある訳でもないし。」

超はロボで戦力を作る為だろうな。

「気になるのは超の科学力は俺のそれとどれくらい差があるのかって事だ。」

「あつちは百年単位で進歩した科学力。こっちは数十年単位で進歩した科学力。」

「とは言っても、分野の違いもあるから一概にどつとは言えないんだがな。」

「四葉は超に誘われてだと。一緒に行こうって言われたんじゃないの?」

なるほど、納得。そう言う事もあるんだな。

「日にちは三日後、二泊三日だ。準備はしっかりするように」  
「分かった」

電話を切り、携帯を机に置いてベッドに横になる。

P r r r r r r

それは机の上にある携帯では無く、ポケットに入っているもう一つの携帯から鳴った音だった。

ちなみにこの携帯、こちらの声は機械的にジャミングが施されているので盗聴されても誰かは分からない様になっている。

「……………何かあったか？」

『三つ程。一つは『リスト』の作成が終わった事の報告です』

漸くか、意外と時間がかかったな。

世界中を探しまわったからな、時間がかかってもしようが無いだろう。

「後二つは？」

『どつやら、例の七国以外の国が『SMG』を調べているようです』

「……………どつやら、警告しておく必要がありそうだな」

『SMG』は基本的に何処の国からも独立した存在だ。

それに技術を狙ってくる奴らも絶えない。始末が面倒な事この上ないね。

だから、予め『特許を取る訳にはいかない技術』を売る国には釘

を刺してる。大抵グレードは相当落としてるけどな。

特許を取るって事は設計図を明かすって事だ、むやみに特許を取ればいろんな国がソレを手に入れようとする。

ま、それでも問題無い技術ではあるが、中にはちよつと先の技術を国家予算クラスの金で買ってくれる国もある訳で。

先進国としての威厳とやらが関わるらしいよ。国の研究機関の連中が言ってた。

医療関係は特に高く売れる。でも何故病気の治療法書かれた本とかがあつたし。

多分学園都市に居る『冥土返し』の技術だからだろう……と、思う。

これらはまだいい。問題はパワードスーツ駆動鎧だ。

戦力として相当使えるからな。それでもグレードは低いが。

ロシア、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、日本の七国が筆頭だ。というかここ以外売って無い。

何故かネットでこの辺りの情報が流出してたんだが、特に気にはしなかった。

『了解しました。それと、アルトウールが動いたようです』

アルトウール・バラノフ。KGBの生きた伝説とまで呼ばれる人

間。

そう呼ばれるほどの人物だからこそ、KGBを自由に扱えるし、『SMG』を調べる事にも一役買っている。

『原石』の搜索、研究等を任されるほどの地位も名誉も権力もある。実に下らないね。

まあ情報は全部筒抜けなのだな。

「何をした？」

『いくつか裏関係の企業に『超能力者を作れたら情報を提供する』との条件で交渉を持ちかけたとの事です』

この時代の企業は俺の相手じゃ無い。

それに俺の科学力とて上がっているんだ。『今日の最新科学が明日も最新とは限らない』ってな。

まあそれはいい。こいつはどう処理するかな……

「放っておけ、どうせ何処の企業と連携しようと同じ事だ」

いずれ潰すつもりではあるが。

『ハ、ではその通りに』

電話を切り、ポケットに直す。



こっちは仕事用だから他人じゃ見れないし見られない様に工夫してる。

横から見えない様にするシール張るとか。無駄な気がしないでも無い。

三日後を楽しみにしよう。

三日後

PM 7:00

でかいバスの横に女子二十七名、男子四名がいた。

「こんなに女の子が……感激!!」

「ボクは相咲君と一緒に海に行けてうれしいな!」

「だあああ!! ひつつくなかめくろな仲芽黒!」

漫才のようなやり取りをしている馬鹿(というか腐的な要素の關係がありそうな奴ら)を放つといて、全員いるか確認。

「全員そろってるー?」

『そろってまーす!!!』

元気な事で。一部乗って無い奴らも居るようだが。

あそのサイドポニーとか褐色のスナイパーとか。あの辺。

取りあえず全員バスに乗せ、出発。

ホテルが島の為、途中で船に乗り換える。

そして、トランプしながら会話をする俺達。男子だけで。……つまんねえ。

女子はいねえのか!! 具体的にはキャツキャウフフな事してえ! と、相咲が騒ぎ出したので秒間八発程度で殴っておいた。

多分ナンパとかしても拒否られるだろうけどな。

「しっかし、お前がこんなの当たるなんてな」

「上限四十人だしな。ホテル赤字じゃねえの?」

「金は宝くじで補った。俺の激運舐めんな。『火竜の逆鱗』とか普通にでんだぞ」

乱数を直に『エレクトロロマスター電気使い』の能力で弄っただけだな。

結構むなしいんだぜ、「コレ。」

「ホント、凄いやね。ボクにもその運を分けて欲しいな」

「運を分けるってどうやんだよ。無理だろうが」

「でもこういうのは弱いよな、お前」

そして、俺達は全員一斉に手札を見せる。

梶咲「ストレート」

護「フラッシュ」

仲芽黒「スリーカード」

俺「ブタ」

……

「……まあ、あれだよ。こういうときにはお前の激運は使わなくていいんだよ」

「うるせえ！！ 何で俺以外は明らかに揃ってんだよ！！」

ビックリするわ！ 俺の運は低すぎる！ でもまわりから見れば宝くじに当たるけどこういうゲームには運は使わないとか認識されてるらしい。

宝くじ当てたって言うのも実際嘘だけだな。整合性取れてねえ。

落ち込んでいたら護がポーカーでは無くババ抜きとか大富豪やろうと言いだした。

「当然の結果だな」

大富豪とババ抜き、どちらも俺が一抜け。

「何でお前はこういうのだけ強いんだよ……」

そりゃ全部頭でシュミレートしてるからな。一回ごとに修正してるから確実に勝てる。

こつこつ頭使うゲームなら負ける気はしねえな。

逆に運ゲーとかだとボロ負けなんだが。何故だ。

『イメージプレイヤー幻想殺し』の所為か？ いや、でも普段はいつもoff状態で効果は無い筈だしな。

……ま、些細な事か。

そんな事を思っていると、アナウンスが聞こえた。

もうすぐ島に到着するとの事。全員荷物を持ち、準備万端で待ち構えている。どんだけ楽しみにしてんだよ。

やがて到着し、全員船を下りて一端ホテルへ向かう。

ホテルのロビーで案内の人と話をし、部屋のカギを受け取る。

案内の『グループ』メンバーをみて龍宮が表情を変えたが、どうしたんだろうな。

ロビーで女子と男子で分かれ、適当に班を分けて部屋へ向かった。

俺は千雨と二人部屋にしたかったが、千雨に直に拒否られたので少々落ち込み気味に男四人の部屋へ向かう。ツマンネ。

部屋に荷物を置き、水着に着替える為の用意をして更衣室へ。

プライベートビーチで泳ぐ為にこういう施設は一通りある。

水着に着替え、パラソルやら何やらを運び出していると、女子集団は既に泳ぎだしていた。

大抵の物は従業員が用意してくれてるので、俺達も泳ぐことにした。

例によって相咲はナンパに走り、撃沈していたよ。

「あ、潤也君！ ……肌白すぎひん？」

「え？ あ、ホントだ、凄いしろーい！」

反射で紫外線をカットしてるから肌が白い為はかなり目立った。騒ぎ過ぎだろう、幾らなんでも。

ちなみに髪の色も少し色素が抜けてて色が薄い。

「なんでそんなに白いの？」とか「どうやったらそんなに白くなるのか教えて！」とか。

其処まで気になるか。そりゃ女として肌は気にしたい年頃ではあるだろうけども。

しょうが無いので『学園都市製』……もとい『SMG製』の日焼け止めクリームなどを渡す。

どうせこの三日間で使い切れる位の量だ。問題は無い。

「……それにしても、潤也君て意外と肉体派なん？」

木乃香が俺を見ながらそう言った。

いざというときの為にある程度は鍛えてるけど、基本的に必要無いからな。ホントに保険だ。

喧嘩は能力無しでも勝てるくらいには鍛えてるつもりだ。

「つつくのヤメロ！」

誰かが俺の腹をツンツンとついてくる。何がしてえんだよ！

「……何故奴ばかりモテるんだ……」

「大丈夫だよ梶咲君。ボクがいるから！」

「だあああ！！ 人前でそんな発言すんじゃないやねえ！！」

あつちはあつちで騒いでいるようだ。楽しんでいるなら何より。

早乙女がアホ毛を反応させてみたいだけだな。

余談だが、誰かオイル塗って。と言いだした奴に梶咲が目敏く反応し、余計な部分に触れようととして殴られたのをここに記して置く。別に必要は無いだろうけどね。

「千雨〜？ 千雨や〜い」

何処行っただろうな。探しても居ないんだが。

ここは俺たち以外いないからナンパ野郎なんて居ないハズ……

「なあなあ、俺達と遊ぼうぜ！」

「そうだぜ、千雨、ビーチバレーでもやろうぜ！」

前言撤回、居たわ。ナンパ野郎。

スゲー困ってるし、千雨。

取りあえずあの二人は後でサメの餌（サメの大量にいる海域で小さい檻の中にスキューバダイビング。檻は縦横高さ三m程度の特注品）にするとしよう。

このホテルの目玉アトラクションだけだな。普通の檻の大きさは縦横高さ五m程度だが。

男二人……ついでに仲芽黒も入れてやるか。梶咲が居るから喜んで行くだろう。

さて、それは一旦置いとくとしてだ。

千雨の水着姿、眼福です。ヤバイ、鼻血出そう。血流操作で出ない様に操作せねば。

連絡した次の日に店に行って、かわいい水着を自分で選んで買ったらしい。マジかわいい。

今の俺は変態とか言われてもおかしくなさそうだ。っていうか正直言われても構わない。

取りあえずみんなの居る所へ戻ることにした。

護と梶咲の二人をサメの餌にした後、みんなで昼食。仲芽黒はついて行かなかったらしい。



なんでも「本能があそこに行く」と命の危機だと言って「と超直感が働いたらしい。」

昼食はBBQだ。遊んだ後は良く食べるね、みんな。

とにかく人数が多いのでどんどん焼く。

野菜、肉はもちろん近くの海で獲れた新鮮な魚も焼いている。焼きそばやらたこ焼きやらも焼いている。ってかたこ焼きってBBQでやるか？ 普通。

「よし、沢山あるからどんどん食べ！」

「まるでお父さんね」

隣で千鶴がウフフ、と笑っている。

「つーかお父さんて、確かに前世合わせるとそれくらいの年だけだな。」

「お父さんね。こいつ等のお父さんて大変そうだな」

「そうねえ、一人じゃ大変そうね」

「全くだ。ってか、俺一人でこれをどうにかしろと？ 勘弁してほしいね。」

「お父さんおかわりー！」

「よーしどれがいい？ って誰がお父さんだ！」

鳴滝姉待てやコラー！ と叫びながら追いかける。

キヤツキヤと笑いながら逃げ回る鳴滝姉を追いかける俺。周りの奴らは面白がってはやし立ててる。

全員から笑われたよ、そこまで面白かったか。

結局、日が暮れる直前まで海で遊び倒し、ホテルへ戻って来た。

相咲と護はかなり憔悴していた。護の超能力で生き残ったとか言ってた。

馬鹿だなあ、アレは絶対壊れない様に『未元物質』でコーティングまでしてたのに。壊れて襲われるなんてことある訳無いだろうに。

まあ知らないからしょうが無いのだろうけど。

夜は夕食まで各自部屋で休憩。大半が寝てるらしい。遊び過ぎだろ。

ウチの男二人は精神的に疲弊して寝てたが。タフだから明日には復活してるハズだ。

夕食はバイキング。全員疲れが見えるが、それでももしっかり食べ

てた。

夜、日はすっかり暮れ、浜辺には静寂が漂う。

明りはホテルから届いているモノのみ。それ以外は無。

ホテルからは結構な距離があり、其処からは音は届かないだろう。

現れた妙な気配に気付いたのは、少なくとも裏に通じている者達。

妙な気配、それも向かっているのはこのホテル。

アイコンタクトを交わし、それぞれ動く。

大切な者の為、依頼を受けた為、ナニカを探る為。理由は様々。

大切な人を守りたいと思っている少女は、麻帆良から出た事で大切な人が狙われたと推測し。

依頼を受けた者はとある少女から依頼を受け。

ナニカを探ろうとした少女はこのアクションによってどう動くのかを推測した。

目的は違うが、それぞれの目的の為に共闘を選ぶ。

恐らくこの島に侵入してきたであろう者達もプロ。普通ならば気付かれるような事は無い。

だが事実として気付かれるナニカがあった。

そして夜は深まり、物語は幕を開ける

第七話「まるでお父さんね」by千鶴（後書き）

ちよつとカツコよく書きたかっただけです（え

後、戦闘シーンの練習で。

絡ませるにはこういうのが丁度良かったんです。

普通なら全員ついてくるとか無いでしょうけど、そこでついてくるのが3-Aクオリティだと思ってます。

今回、突っ込みどころは多々ありますが、見逃していただけると嬉しいです。

アンケート集計結果。

千雨 十  
アスナ 五  
マナ 五  
千鶴 四  
八カセ 三  
超 二  
図書館探検部組 一  
刹那 一  
高音 一  
刀子 一  
シスターシャークティ 一  
ココネ 一

すげえ、千雨一人群を抜いてる……っていつか一位が二位の二倍かよ。

そんな訳でヒロインは上から順に千雨、アスナ、マナと言う事で、いや、千雨一択でも構いませんけど。

近親でもOKな人多いんですね……人の事言えませんが。

千鶴……個人的に好きだから入れちゃ駄目ですか？

っていうか、マーボー様がすげえギリで来たんで入れるのに手間取りました。でも入れてくれてありがとうございます。

次回、戦闘。

戦闘シーンがうまく書けるといいな（オイ

第八話「……『国籍不明』の『多国籍軍』か」by 潤也（前書き）

この回、グロテスク等一部不快な表現があります。お気を付けください。

そして今回難産だった……戦闘難しい。  
後どうしても長くなる。削りましたけど。

第八話「……『国籍不明』の『多国籍軍』か」by潤也

侵入者。

それに潤也が気付いたのは監視の報告を受けてからだっただ。

事実として、まともな戦闘など『グループ』や『スクール』との模擬戦以外ほとんどした事が無い上、衛星で監視している為に気が抜けていた所為だろう。

監視をしている者からの連絡を受け、直ぐに行動を起こす。

少女達が気付くよりずっと早く気付いていた事になる。

テレポートでホテルの管理室へ入り、状況を確認する。

衛星からの映像に映っているのは、少数で動くいくつかの団体が海中を進んでいるナニカのデータ。

「数はどれ位だ？」

「確認できる分だと、おおよそ二百程度かと。依然として増え続けていますし、戦力的にはまだ何とも言えません」

敵は二百程度。対してこちらの戦力は多く見ても五十程度。

数では負けているが、それだけで戦力が決まる訳でも無い。

「念の為に連れて来て正解だったな。『グループ』と『スクール』」



を動かせ」

「直ぐに」

「『獵犬部隊』は沿岸を警ら。映像を視落とすなよ。それと、奴らはどうやって侵入してきた？」

「恐らくは船かと。海岸から二キロ程離れた場所に小型の船がいくつかあります。ある程度近づいたら別の方法で侵入した可能性は高いと思われれます」

そう言っつて画面に映されたのは中型の船。人数的には二、三十人程度は余裕で入りそうだ。

だが、明らかに侵入者全員が入り切れる大きさとも思えない。

恐らく、まだ遠くに巨大な船が用意されてるのだろう。

「他は？」

「およそ二十キロ程沖に出た場所に二隻程軍艦があるようです」

「オイオイ、軍艦まで引つ張つてきてるのか」

面倒だ、と呟きながら近くのPCを操作する。

画面に一筋の光が降り注いで見えなくなつたと思うと、光が消えた時に船には中央に巨大な穴があき、ゆっくりと沈んでいた。

軍艦など、莫大な光による熱で骨組みを溶かしてしまえば最早使

い物にならない。

ゲーム感覚で戦艦を沈めた後、別の画面を映し出す。

「海中はどうなっている？」

「ソナーを使って未だ捜索中です。かなり遠い場所に潜水艦がある可能性も否めません。未だ敵はソナーの探知範囲に入り続けていますので」

チツ、と舌打ちをする。

潜水艦でソナーの範囲外から侵入なんて真似がそこらの連中に出て来るとも思えない。

学園都市のソナーの範囲は十キロ程度では済まない。だからこそ違和感。

そこらの組織が使つような技術で、この島に配備されているソナーを掻い潜れるとは思えない。

数は小規模で盗まれても問題ないレベルの技術とはいえ、一国の軍が使用するレベルのモノだ。

ましてや、魔法使いにはそんな事が出来る技術は無い筈。いや、知らないだけである可能性はあるのだが。

なら、それだけの装備を整えられる部隊と言つ事になる。

「……『国籍不明』の『多国籍軍』か」

「可能性は高いかと」

「……敵が来た方向は分かるだろう。ソナーで探知していた筈だ。逆算して方向を割り出せ」

「分かりました」

相手が魔術師なら潜水術式でも使えるんだろうな、と思いつつ思案する。

敵の数は二百。対してこちらは多く見積もっても五十人程度。

能力者が居るとはいえ、相手は魔法使い。油断はできない。

ハア、とため息をつく。

千雨と楽しい思い出作りに来ただけなんだがな。と思いつつ、告げる。

「……『Equ・Dark Matter』をいくつか用意しておく、  
『猟犬部隊』に支給しておく」

「直ぐにでも」

「情報は常に全員に流し続ける」

それ以外にもいくつか『パワードスーツ機械鎧』を用意し、『パワードスーツ猟犬部隊』に使う。  
せる。

大抵の戦力差ならコレでどうにかなる筈だ。

(俺は出来るだけ出たくないね。戦闘なんて面倒事は千雨に危機が迫った時だけでいい)

「搜索は続ける。発見次第俺及び戦闘員に連絡だ。……同時に、何故奴らがここを攻めて来たのかも調べる」

男達は雇われた。

金を貰えれば大抵の事をやる。

そして、今回の仕事はとある施設への侵入。そしてその施設を徹底的に調べる事。

手に入れたデータを全て渡せば依頼完了となる。

最初に依頼を受けた時は楽勝だ、と思っていた。

『セブンスミストグループ』と呼ばれる科学者たちの会社。

魔法を使える彼らからすれば、科学より魔法の方が優れている。だから、魔法を使える自分たちにとって、魔法を使えない彼らのデータを盗んでくるなんて事は簡単だと思っている。

だからこそ、油断と慢心を捨て切れなかった。

森の中。

暗く、光は月明かり程度しかない状況で、侵入者たちはその少年を見つけた。

「やあ、遅かったね。侵入者」

ボサボサの黒髪、眠そうに開いた半眼の目。身長は高く、スマートな体型だ。

侵入してきた男達は警戒する。

武器を構え、身体強化の呪文を使う。

魔法使いは居ない。潜入において、唯の砲台でしか無い魔法使いなど足手纏いだ。

だが、念の為にここに来ているほぼ全員の魔法使いは海岸沿いで待機している。

この場にいるのは魔法剣士として特化した者達のみ。

「だらだらとやるつもりも無いし、早速終わらせようか」

一瞬で、景色が変わった。

先ほどまで居たのは森の中。

だが、今見えるのは男たちの方向を向いているいくつもの砲台。

男達は驚く、これは魔法なのではないか、と。

だが、魔力を感じなかった。何らかの方法で移動させられた可能性もある。

これが偽物の可能性もある。

「さあ、殺戮さつりくしてあげるから迅速に死亡しなよ」

動きは見ていた筈だった。

当然だ、戦闘で余所見をするほど男達も馬鹿じゃない。

それに、この状態を見て油断が出来ないと悟る。

経験を積んだからこそその判断。だが、それでも読めなかった。

突如現れた金属バットを右手に持った少年は、適当に横薙ぎに振る。

「がっ!？」

「何!？」

当たる筈が無い。そう判断していた。

それでも、当たる筈の無い攻撃は事実として当たり、数メートルをノーバウンドで吹き飛ばすような攻撃を受けた男は頭から血を流して絶命している。

(どういう事だ……?)

あくまでも冷静に考える。

元々男達は友人でも無ければ顔見知りですら無い。

唯の雇われが複数人固まって動いているだけに過ぎない。

故に、慣れ合わないし、けがの手当てなどは必要ならやるだけだ。

そして、少年はもう一度手に持った金属バットを振る。

横に振る為、衝撃は横から来ると推測した男はとつさに側頭部をガードするが、衝撃は真正面から来た。

とつさに張った障壁でさえ突き破り、派手な音を立てて男の頭を打ち抜く。

倒れた男はピクリとも動かず、死んだのかと推測する。

「あゝあ、つまんない。早く終わらせて寝たい」

少年はまたバットを振るおうとする。

男達はバットを振らせるのは危険だと考え、瞬動で一斉に近づき、それぞれの得物で襲い掛かる。

だが、少年の目の前で不自然に動きが止まる。

体を何かで掴まれている感覚。強力な力で掴まれている為か、ナイフを持った腕は青くなつてきている。

グシャリ。

そして、男達は後ろから何かに頭を潰された。

再び訪れる静寂。

「……さて、もういない？」

「居ないみたい。情報来ないし、別のところに移る？」

少年の右側、森の一角から出てきたのは身長百五十位の小さい少女。

腰まである長い髪を揺らしながら少年に近づく。

「それにしても、随分と簡単だったね。やっぱり『イリュージョニスト幻術使い』は便利ね」

「君の『テレキネシス念動力』が無ければこううまくは行かなかつたよ」



ある筈の無いモノを、あたかもそこにあるかのように見せる『イリュージョニスト幻術使い』。

見えない力で遠くのモノを動かす『テレキネシス念動力』。

幻術で敵対する人物を一人に絞らせ、もう一人は念動力（詳しく言うなら空気で作る手のようなモノ）で攻撃する。

バットは唯の見せかけだ。

「さて、一つ聞きたいんだけど……アンタ、ちゃんと服着てるわよね？」

「何を馬鹿な事を。見て分からないのかい？ ちゃんと服を着ているじゃないか」

『イリュージョニスト幻術使い』とは、無いモノを有るように見せる能力。

つまり、この場合どういふ事かと言つと……

「アンタ元露出魔じゃない。五、六回捕まってるでしょうが。この能力で服を着てるように見せてるだけって事が何回あったと思ってるの」

あくまで見せてるだけであり、触ると服では無く皮膚を触っている感覚がするのだ。

ぶつかった際、出来れば見たくも触りたくも無いモノに触れてしまつと言つ事も何度かあり。

ぶつかる度に念動力で吹き飛ばすと言う事件がしばしば起きてい  
る。

「アハハハ、ばれたか。別にいいじゃん、服着て無くても、それと  
もアレがいい？ 僕の演算弄って出来た『ゴッドモザイク』とか…  
…」

「死ねっ！！」

ゴウツ！ と空気の手が少年へと伸びる。

だが、空気の手は少年をすり抜け、後ろの木を大破させる。

「危ないなあ。そんな物を他人に使っちゃ駄目だよ」

少年は何事も無かったかのように破壊した木の左側から現れた。

移動したのではなく、初めから其処に居なかった。

「……相変わらず面倒な奴。連絡が来た、さっさと次の場所行くわ  
よ」

少女は半分キレた状態で歩き出す。

「アハハ、乙女だねえ。この程度で心を乱すなんて、『グループ』  
のもう一人の連続殺人犯とは大違いだ」

未だに笑いながら、少年は少女の後に続く。

二人の少女はホテルから少し離れた丘にいた。

この島に妙な気配が侵入してきたからと、様子を見にホテルの外に出たまではない。

だが、その妙な気配が次々と消えて行く。

距離が遠い為、大まかな方向位しか分からないが、二人の内一人にとっては別段見えないと言う訳では無かった。

「どうだ？ 龍宮」

龍宮と呼ばれる少女は銃に取りつけられたスコープを覗き込み、恐らく敵が居るであろう方向を視ている。

「……見えた。だが、既に絶命している様だぞ」

「やはりか……」

何者かがこの島に侵入してきた者達を殺して回っている。

戦闘の跡は無い。強力な魔法が使われた様な跡も無い。

魔力や気を感じる事もたまにあるが、それも直ぐに消えてしまう。

「……魔法を使わずに敵を殺している？」

「可能性はあるね。特にこの島、物騒な人がゴロゴロいたし」

ホテルに入り、従業員を何人がみた。

だが、その大半の従業員から血の匂いがした。

何故このような島にそんな人達が居るのか、かなり疑問が浮かぶが、解決はしない。

龍宮は一人みた事のある人物が居たが、安易に話しかけようとは思わなかった。

何故かと言えば、数年ほど前に仕事で紛争地域に行った際、その女性が敵を皆殺しにしていたのを視たからだ。

味方はほぼやられ、自分一人で戦い、援軍も少ない状況で、その女性含む複数人はあつという間に敵を殲滅した。

その女性と軽く話はしたものの、あちらは覚えても居ないだろう。

その際に魔力も気も使わずに戦っていた事から、『そういう力』も存在するのだ。と言う事を知った。

そして、この島でも同じことが起きている。

つまり、侵入者はその人達を敵に回すと言う事。

自分ならそんな命を捨てるような真似はしないだろう。と思う。

「放っておいても、直に収まるだろうね」

「だが、楽観視はできないぞ。狙われているのがお嬢様なら、隠密に優れた者が来る可能性が高い。私達にさえバレるような者達は罔か捨て駒だろう」

「……可能性はある。だが、あの人達の領域テリトリーで暴れ回っている以上、一人としてこのホテルに侵入、島からの脱出が出来るとは思えない」

「知り合いなのか？」

「昔ちよつと会っただけだ。あつちは覚えても居ないだろうさ」

肩をすくめ、スコープから目を離す。

そして、感じる一つの違和感。

「刹那っ！」

「分かっている！」

刹那は直ぐに袋から刀を取りだし、鞘から抜く。

刀を構え、周りを視て敵を探す。

龍宮は銃を抜き、魔眼を発動させる。

「……どうやら、話している間に敵に囲まれていたようだね」

「だから油断はできないと言ったんだ」

がさつ、と音を立て、複数の方向から敵が現れる。

「魔法の射手 連弾・雷の十五矢」

指輪をつけた右手から魔法の射手が放たれる。

十五の矢は刹那と龍宮を狙い、ソレを合図に一斉に襲い掛かる。

魔法の射手は二人の間に打ち込まれた。

無理矢理分断される形となった二人は、仕方無く一人ずつで敵と戦う。

刹那は刀を振るう。

金属音を響かせ、ナイフを持った男と対峙していた。

最初の攻撃で森の方へ飛ばされ、野太刀を振るうには使い辛い状態へ追い込まれていた。

時折神鳴流の技で牽制、攻撃をするも機動力の違いで避けられる。

野太刀を振るうには森は狭すぎる。

時折後ろに下がって魔法で牽制を掛ける人間達、常に刹那の目の前で刀とナイフをぶつける人間達、遠距離から銃で足や腕を狙う人間達。

それぞれが役割を果たし、連携を取っている為、刹那には荷が重い戦いとなっていた。

護衛の為にきたとはいえ、元々神鳴流は対人戦では無く対魔戦を想定しているモノと言う事、更には経験の違いもある。

荷が重いどころでは無い。むしろこの状態を保っているだけマシだと言えるだろう。

だが、その状態を長く続けられる訳では無かった。

魔法による牽制、魔力強化された攻撃、気で練られた攻撃。

次々と放たれる攻撃を、次第に避けきれなくなっていた。

小さい傷が所々に出来、体力的にも精神的にも追いつめられていた。

そして、刹那の一瞬の隙について、後ろから男がナイフを振り下ろす

一方、龍宮は終始有利だった。

敵は近距離戦を得意とする者ばかり。普通なら、銃を使う龍宮にとって前衛の居ないこの状態では不利だろう。

だが、この少女にそんな事は関係無かった。

逆に言えば、近距離戦が得意なだけで神鳴流では無い。

神鳴流に飛び道具は効かない。だからこそ戦術を考える必要があるが、この男達はそう言う訳ではない。

経験こそ段違いだ、神鳴流の様に全く効かないと言う訳では無いのだ。

腰につけていた二丁の銃を抜き、襲い掛かる敵に撃ち続ける。

障壁を張る者も居たが、魔法<sup>専門</sup>使いでは無い以上、その強度はたかが知れている。

連続で撃ち続ければ、いずれ破れる。

だが、それで終わるほど男達も甘く無かった。

男の一人が障壁を全力展開して特攻を仕掛け龍宮の目の前まで来る。



龍宮はそれに怯む事無く銃を撃ち続ける。

だが、男を盾にしてその後ろに一人の男が隠れていた。

直ぐに銃を撃とうと構えるが、近距離戦ではやはり男の方が上で。

銃を魔力強化されたナイフで切られ、逆の手に持っていた銃は蹴りで弾かれ、男はもう片方に持っていたナイフで喉のどを狙う。

魔力強化され、銃も無く、逃げられる距離では無いと悟った龍宮は覚悟を決める。

突如、ピタリとナイフが止まった。

「駄目よ、大事なVIPの団体お客様なんだから。これ以上傷一つでもつけるようなら社長に怒鳴られるわ」

声が出た方向に顔を向ける。

朝にロビーで見た顔。黒髪にウェーブがかかった髪。

ゆったりと微笑みながら、右手をこちらに向けていた。

隣には、小さい傷を作ってはいたものの、特に酷い怪我は無い様子の子の刹那が居た。

良く見れば目の前の男だけでなく、周りに居た男達も動きを止め

られている。

「……一体、どうなっている？」

刹那は不思議そうに、動きを止められた男達を見て呟いた。

「社長としては生かして置いた方がいいのかしらね。情報も取れるだろうし」

刹那の隣に居る女性は携帯に手を伸ばす。

もはや、この場に居る男たちなど眼中にない。

「……あ、社長？ 取りあえずホテルの近くまで来てる連中どうします？ 情報とか……あ、もう捕まえた奴が居るんですか。じやあもういりませんね。処分して良いですか？ ……ああ、ありがとうございます」

携帯を操作し、通話を終えた女性は男達に向き直る。

「さて、処分の許可が出たわ。ここは幸い通り道でも無いし、よっぽどのモノ好きでも無ければ片付け終わる前に来る事は無いでしょ」

ゆっくりと微笑み、右手を振る。

「腸はかわたをぶちまけろ」

響き渡る絶叫、悲鳴。

何かに引き裂かれた様な傷口が出来ている男は、腹が裂けて内臓

が出掛けている。

胴体を真つ二つに断たれた者。四肢を切断された者。腹を引き裂かれた者。

大声で叫ぶ男達に、うるさそうに顔をしかめた女性は、またも指で何かを操るような仕草をする。

何かが締まっていき、まわりの肉からゆっくりと裂けて行く。

(……やはり、あの切り口は……)

龍宮は一つの予測を立てるが、今考えてもしょうが無いと思い、頭から消す。

一秒もかからず、その場に居た数人の男達の首が全て落ちた。

「……さて、掃除も終わったし、社長があなた達とは少し話をしたいそうよ」

そして、少女達は少年の秘密を一つ知ることになる。

第八話「……『国籍不明』の『多国籍軍』か」by潤也（後書き）

戦闘で批判を受けないかがとても怖い（オイ

というか正直六枚羽使えば早かったんじゃない？ とか書き終わって  
から思いました。

秘密……なにばらそうかなあ（え

でも能力者にはならないと断言します。ってか、二人とも能力次第  
で戦い方完全に変わりますからね。

次回、多分また戦闘が入ります。長くなって分けたんで。

……宿題なんてデストロイ！ おかげで書く時間が無かったぜ！

第九話「何にせよ、今接触するのはリスクが高すぎる、カ」by超（前書き）

お気に入り登録千件突破！

こんな稚拙な作品を登録して下さいありがとうございます。これからがんばりたいと思います。

七夕なのに特にネタも思いつかなかったので普通に進めます。

いえ、本編がこんな中途半端な時に外伝入れてもだめだろうとは思いますが。

では、第九話。少しグロテスクな表現が入っていますので、お気を付けてください。

第九話「何にせよ、今接触するのはリスクが高すぎる、カ」by超

時は少し遡る。

少女達が丘へ移動し、少年が本格的に動き始めた頃、天才と呼ばれる未来人は動いていた。

元々この時間にあの少年は存在していなかった筈だ。

未来世界には、先祖でもあるかつての英雄に近しい人物として、長谷川千雨の名は確かに存在している。

それは変わり様の無い真実だ。

だが、兄の方　長谷川潤也は名前が存在しなかった。

親等の親類は存在していた、だが、彼だけは何処をどう探しても存在していなかった名前のハズだ。

それこそ、イレギュラーとして現れた可能性がある。

しかし、そう決めつけるのは早計だ。

可能性はイレギュラーだけでは無い。もしかすると、歴史から抹消されるほどの『何か』をしでかした人物という可能性もある。

今回、海への旅行に便乗して彼の性格等を確認しようとした。

性格は妹第一主義と言ったところだろう。あまりのシスコンぶり

に呆れたものだが。

だが、夜になってその評価を改めざるを得なくなった。

龍宮と刹那が何かを話していた。

会話を盗み聞きすると、「何者かがこの島に侵入している」との事。

部屋に戻り、葉加瀬と共に双眼鏡で外を見る。

其処には、地獄が広がっていた。

頭を潰された死体。バラバラにされた死体。何かに全身を潰された様な状態になっている死体。焼け焦げている死体。

死屍累々とはよく言ったものだ。と思う。

死体の山が其処そこかしこ彼処に放置されている。

ソレを処理している者たちも居るが、処理するよりも増える方が圧倒的に速かった。

葉加瀬は途中で見るのを止め、横になる事にしたらしい。流石にあんなものを見ては気分が悪くなるだろう。

『懸賞で当たったチケット』で旅行に来て、この状況。何か裏があるのではないかと考える。

あの少年が鍵になるのか、それともあの少年は何の関係も無いのか。

それに繋がる何かを探していた。

「何にせよ、今接触するのはリスクが高すぎる、カ」

波の音を規則的に立て続けている海岸。

其処で起こる連続した爆音、悲鳴、銃声。

「クソ、何だアレは!!」

海岸で岩陰に潜む一人の魔法使いが叫ぶ。

この場には、先ほどまで五十人近くの魔法使い達が潜伏していた。

一人一人が手練であり、傭兵としての力はそれなりにある方だし、プライドだってある。

だが、襲撃してきた者達にそのプライドは完膚なきまでに叩き潰



された。

おかしな仮面をつけた連中。

手には銃を持っていることから、恐らくは敵だろうと認識し、攻撃を開始したまでは良かった。

自分たちの攻撃で起こった風で砂が巻き上げられ、視界が狭まる。

やった、と思った魔法使いも居れば、倒せていなくても怪我は負っただろう。と考える魔法使いも居た。

結果的に、その判断は甘いといしか言いようが無かった。と思う。

男はもう一度岩から敵を見る。

黒一色の服装の中、顔を覆う仮面だけが金と白で、縦の長さが顔の二倍以上ある異様な形相だ。目や口のための穴は存在しない。

仮面全体が携帯電話のLEDデコレーションのように発光し、複数の色の光で模様を描いている。

しかも、その奇妙な外見の敵が十人程度。

戦闘を見ず、結果だけ聞けば、五十人を超える自分たちを相手にしている状況を見て、敵を無謀だと笑うだろう。自分だってそうだと男は思う。

だが、この状況を見て、それでもまだ数の多いこちらが有利かと問われれば、間違い無くこう答える。

完全に不利な状況だ。負けてもおかしくは無い。

元々地の利はあちら側にある。それを差し引いても、この状況は異常だった。

仮面の中心部から生物的な外見の翼が何枚も展開され、こちらの攻撃は一切通らない。

逆に、あちらの攻撃　白い翼を振るうような攻撃は障壁を簡単に喰い破る。

「ふざけている……」

そう呟くしかない。勝つ方法が見当たらない。

鉛細工のように伸ばされた翼は魔法の射手では傷一つ入らず、『雷の暴風』レベルの魔法を使っても倒せるか怪しい。

敵が使っているのは相当強力なライフルだ。障壁に集中しなければ突き破られる程に。

集中した所で白い翼で喰い破られる。

幾ら一体一体の性能が良くても、こんなことがあるか。と言いたくなる。

数の暴力が全く通じない。

最終的に戦いとは数で決まる。それは真理の筈だ。

だが、この仮面の男達に常識は通用しなかった。

次々と味方を倒し、敵は疲れを見せる事無く殲滅を進行させる。

「やあやあ、頑張ってるね。そろそろ終わる頃だと思って見に来て  
やったぞ」

そんな折、現れたのは一人の少年。

色素の薄い赤い髪をなびかせ、真っ白な肌はこの夜の闇の中では  
一際目立つ。

一瞬、場違いにも程があると思った。

仮面の男達もかなり驚いているようだった。表情は分からないが、  
恐らくは困惑しているのだろう。拳動が怪しい。

仲間の一人は一瞬の隙を突き、仮面の男達を振り切って少年を人  
質に取る。

「動くな！ このガキの首を落とされたく無かったら言う事を聞け  
！」

男は隠していたナイフを少年の首に添え、声を上げる。

仮面の男達は直ぐに潰そうと動くが、少年はそれを手で制した。

「うん？ …………… 必要な情報は集まったな。もういらぬか」

この場に居る魔法使い全員の頭に奇妙な感覚が走った後、バチツ  
！ と音がした。

少年を人質にしていた男はゆっくり後ろに倒れ、ピクリとも動かない。

「一応まだ生きてるが、どうせもう用済みだ。処分していいよ」

銃声が鳴った。

少年が言った直ぐ後、近くに居た仮面の男は迷うことなく引き金を引いた。

「さて、軍艦二隻に潜水艦が一隻、依頼人はロシアの元KGBの重役で、軍艦と潜水艦を用意したのもロシア。傭兵を雇った、もとい戦力提供した魔法関係の組織は大量にあるみたいだな」

男達は驚く。

我々全員がソレを全て知り得ている訳ではない。

一人一人が別の情報を持って、パズルのピースの様に組み立てなければここまで完璧な答えは出ない筈だ。

拷問をして吐かせたわけではない。

魔法を使って記憶を除いた訳でも無い。

それらなら、まだ何とかなる。

だが、今の奇妙な感覚は分からなかった。

理不尽なまでにあっさりと、記憶から情報を抜き出した。

魔法では無い、別の力。

男達が来たのは『彼』に協力しようとした組織の一員であった為

『彼』は世界中にいる『原石』を研究すると言っていた。

魔法使いも、それで『超能力者』に対する対抗策を用意しようとした。

だが、全ての魔法使いがそう思った訳ではない。

中には、『危険があるなら消した方がいい』と考える者もいた。

名目上、今回の作戦は『施設の情報を盗む』事だが、いくつかの組織のメンバーには『超能力者を発見次第殺害』という命令も受けている。

簡単に言えば、魔法使いは超能力者が怖いのだ。

魔法と言う神秘の力を使う人間にとって、自分の全く知らない未知の力を使う超能力者が恐ろしい。

だからこそ、何か被害を負う前に消してしまおうと、存在そのものを無かった事にしようとした。

「『スクール』に通達しろ、潜水艦の大体の位置は掴んだ筈だ。『潰せ』とな」

何か通信機のような物を使って誰かと連絡を取る少年。

そして、場違いな程にのんきな音楽が流れる。

ソレを聞き、がさごとポケットをあさくり始めた少年。

「あん？ ……あ。柎、どうした？ ……ん、もういらん、必要な物は手に入れたし、捕えた ……その前に、近くに二人いるらしいな。こつちには常に情報流れてんだ、直ぐわかる。後で話す事があるから連れて来い。敵は好きなようにして構わん ……」

通話を終え、辺りを見渡す。

「さて、後片付けはちゃんとやつとけよ。死体の処分は任せる」

そう言った後、少年は文字通り『消えた』。

其処から先の事など、話すまでも無い。

ガチャ、とドアを開ける。

中には綺麗に掃除してある部屋があり、高級そうなソファや家具が置いてあった。

「ここは応接室よ。社長は直ぐ来るから座って待っててね」

そう言つと、少女たちを連れてきた女性は何処かへそそくさと行つてしまった。

手持無沙汰になってしまったが、取りあえずは座る事にし、ソファに腰掛ける。

ふかふかで柔らかく、それが高級品だと一発で分かる。

「……私達と話したいとは、一体どんな人なんだろうな」

「さあ、私にもわからない。それより、何の目的があつて彼らがこの島に来たのか、だ」

「？ 偶然じゃ無いのか？」

「偶然ですべて片付くならいいんだがな……」

先ほど何処かへ行ってしまった女性は紅茶を持って来て、机に置いた。

それをコップに注ぎ、刹那と龍宮に渡す。

「「ありがとうございます」」

お礼を言っ、一口飲む。

香りと風味が、何も知らない二人にも良い物だと思わせる。

その時、ガチャ、とドアの開く音がした。

そして、現れたのは長谷川潤也。

「あ、れ？ 君も呼ばれたのかい？」

てつきり『社長』と呼ばれた人物が来ると思っていた二人は脱力する。

「うん？ ……そうか、其処から説明する必要があるのか。面倒な」

そう言っ、龍宮達の前のソファに腰掛ける。

目の前に置かれた紅茶を一口飲み、話し出す。



「……さて、まずは迷惑を掛けた事を謝ろうか。すまなかった」  
そう言って、頭を下げる。

龍宮と刹那は困惑するが、潤也は話を続ける。

「聞きたい事は多々あるだろうが、取りあえずは要点だけ言っぞ。今回、狙われたのは『この島そのもの』だ、木乃香じゃない。そして、狙ったのは『アルトウール・バラノフ率いる組織』。既に殲滅済みだ、心配はしなくていい。で、聞きたい事は？」

狙われたのは木乃香じゃないと聞き、刹那は胸を撫で下ろす。

「まずは君が何故そんな事をしているのかを話して欲しいんだが？」

「ソレを話すと長くなるんだが。取りあえずは簡単に話そうか」

そして、話す。

『セブンスミストグループ』とその裏の顔、『原石』と『超能力』、そして『アルトウール・バラノフ』との関係。

これらは今回の事を話すには避けて通れない事だ。

「超能力は、まあ見た方が速い」

怪我をしている刹那に手を出す。

「手を出して」

言われるがままに手を出し、掴まれる。

『一方通行』の能力で身体を操作し、再生促進させる。

元々小さい傷ばかりだったのもあり、見る見るうちに傷は無くなつていった。

「……凄い」

「だが、魔力を練ろうとすれば体に負荷がかかって最悪死ぬ。メリットもあればデメリットもあるのさ」

「……なるほど、だが、私達に話して良かったのかい？」

「別に構いやしねえよ。今回この島が襲われたのは『グループ』や『スクール』を招集して『過剰戦力』が集まった為にこうなったんだ。迷惑掛けたのはこっちだし、謝るよ。超能力に関しては、知らないと言いきれば後は俺が何とかしよう」

『グループ』と『スクール』は、裏の人間達からすれば知られた存在。今回の事と言い、既に『超能力者』が存在して、『SMG』に所属していると言うのは周知の事実のようだ。

その所為で、この島に二つの巨大な戦力が集まる事から、『ここ』に何かあるのではないか？』と疑われた。

過剰戦力を用意した所為でいらぬ疑いを与えてしまったらしい。

その辺は考える必要があるな、と言う潤也に刹那と龍宮は驚きを隠せない。

それほどの戦力を有する『SMG』を、クラスメイトの双子の兄が統括しているなど、驚きは大きい。

「……ちなみに、長谷川妹は関係者なのかい？」

「いや、あいつは知らない。出来るだけ普通に生きて欲しいね」

「なら、あなたが関係していると知ったら、あっちの組織は人質とかに使う可能性も……」

「そんな時は『窓の無いビル』に千雨連れ込んで戦争始めるだけだ」

この人、本気で妹第一主義なんだなあ、と思う刹那と龍宮。

「というか、あのビルに入れるのか？ 転移魔法符でも、魔法使いの『扉』<sup>ゲート</sup>の魔法でも入れなかったのに」

「そりゃ、そう言う風に作ったからな。能力者、それも限られた奴しか出入りは出来ないよ。俺は無論入れる」

でなけりゃ作った意味が無い、と続ける。

刹那と龍宮は、「今日だけで何回驚いてるんだろう……」と思っ  
てたりするのだが、特に気にはしなかった。

「あのビルの中には何が入ってるんだ？」

「企業秘密です」

さも当然とばかりに答える。

「こういうことまで教える義理は無い。」

「後は、そうだな。お詫びの意味も込めて、一度だけ何でも言う事聞いてやるよ。あんまり無理な事は出来ないけどな」

紅茶を飲みつつ、刹那の方を向く。

「桜咲は何がいい？」

「……それは、『お嬢様の護衛』とかも出来ますか？」

「いいけど、期間はちゃんと設けるよ。でないと永久に守り続けなきゃならなくなる。そうだな、危ないときに言ってくれれば無傷で助けよう。後、桜咲は敬語はいらん、普通に話してくれ」

「分かり……分かった」

「龍宮は？」

今度は龍宮の方を向き、問う。

「口止め料でも払ってくれればいいよ」

「それは心が広い事で。後、依頼を頼む事があるかもしれないから。よろしく」

携帯を出そうとして、夕食の時に携帯取られて3 - Aほぼ全員に俺の携帯のアド知られてんだっけ、と思い直す。

「携帯番号とか知ってるよな？」

「ああ、ほぼ全員に回ったよ」

やっぱりか、と呟く。

(知られても問題は無いんだがな。プライベート用だし)

と思い、気にしない事にした。

「依頼と言つと？」

「主に千雨の護衛とか」

ああ、と龍宮と刹那は二人揃って納得する。この人ならそうだろうな、と。

「一応、そういうのが必要無い様にしてるんだがな」

「と、いうと？」

「そんな事迂闊に話す訳ねえだろ」

「それはそつだ」

一口紅茶を飲む。

閑話休題

「弾とか銃は支給する。でも銃は後で返せよ」

「それは構わないけど、いいのかい？ 一応世界最高の技術で作られてるんだろ？ 壊れたり盗まれたりしたら……」

「いいんだよ、どうせ盗られたって大した損害にはなりやしねえ」

手を振って否定する潤也。

そうは言われても、使うこっちは気を使うんだ。と思う龍宮だが、口には出さなかった。

「最後に、俺に係する事は誰にも話すなよ。『絶対に』『誰にも』だ。分かったか？」

「分かった」

「私もだ」

恐らくは大丈夫だろうと思い、それで話は終わった。

各自部屋に戻り、明日も遊ぶから、と早めに休むことにした。

「『スクール』は任務達成、と。そうだな、後は『獵犬部隊』をい

つでも動かせるようにしておけ。全員だ。俺を敵に回した事を、全力で後悔させてやる」

携帯に向かって、そう告げた。

第九話「何にせよ、今接触するのはリスクが高すぎる、カ」by超（後書き）

事件解決。犯人は特に意外性も無い奴だった。

正直Equ・DarkMatterが使いたかったただけでした（え

龍宮と刹那が秘密を知った。どうにかなる訳でも無いけど（え

予定は未定という作者のスタンスが如実に表れてきている気がする。

宿題が多くて書くのが遅い……。おかげで矛盾や誤字が出てくるかもしれない。

学生って大変だあ（オイ

そんな訳で次の更新は少し遅れる可能性大ですので、よろしく願います。

感想・評価はいつでもお待ちしております。



第十話「良い写真を取らせて貰ったよ」  
「b y朝倉（前書き）」

つなぎの話なので、っていうか時間が無かったなので短めです。

クオリティがだんだん下がっている気がしてならない。

見捨てられないかが気になる。大丈夫だろうか……

## 第十話「良い写真を取らせて貰ったよ」「b y朝倉

浅い眠りから目が覚め、ゆっくりと目を開ける。

「あ、起きた。結局、お前は何処行ってたんだ？ 戻って来たのも知らなかったし」

護がベッドの中から俺の方を向いてそう言う。

枕元に置いている時計で時間を確認するが、まだ七時だ。

「飯の時間はまだ後だろ。俺はもう少し寝かせて貰う」

「いやいやいや、俺の話聞いてた？ 何処行ってたの？ って聞いたんだが」

「外を散歩してたんだよ。夜景が綺麗だった。道に迷って戻ってくるのが遅れたけどな」

ああ、なるほど。と納得して護はまたベッドに潜り込んだ。

敵の数が多くて死体処理は夜中までかかったし、人手が足りなかったから俺までやる羽目になったんだよ。

寝たのは三時頃。正直寝た気がしないし、倒れないか心配。

この程度で倒れるような体じゃないけどな。一日寝ない位で倒れたりはないよ。

……昨日レベルのハイテンションで遊ばなければ、ね。

そんな事を思いながらもつひと眠りし、起きたのは八時前。

朝食は八時半になっていた筈だから、そろそろ起きて準備をしなければならぬ。

目を擦りながらベッドから出て、寝間着から普段着へ着替える。

ベッドの方を見ると、他の三人はまだ寝ていた。

とつと起こして準備させ、食堂へと向かう。

食堂へはロビーを通過して行く為、時間まで暇つぶしをしている奴らを見つけた。

眠そうに眼を擦ってる奴とか、多分夜中まで喋ってたんだろつな。あ。女子ってそう言うの好きだろつし。

俺達も時間まで暇なので、各自テレビや置いてある本を適当にとつて読んだりと各々好きに過ごしている。

俺はブランダに出てベンチに座り、ぼくっとしていて、後ろから声を掛けられた。

「おはよう、潤也」

「ん〜？ 千雨、おはよう」

後ろを向いて上下逆になった視界で千雨を見つけた。

眼鏡を掛けておらず、髪も結んでいない。

その隣に居たのは同じように髪を結んでいない神楽坂。

……こうしてみると、この二人似てるな！。と思う。

俺にとって見分けるのは造作も無いが、背格好なんかをみると姉妹だと思っても不思議じゃ無いだろう。多分。

髪の色とかはほぼ同じだしね、眼は違うけど。

「や。おはよ、潤也」

ちなみに神楽坂、木乃香繋がりでも千雨とも遊びに行ったりしている。要は仲のいい友達だ。

「よう、神楽坂。珍しいな、髪を結んでないなんて」

「そう？ まあ、いつも結んでるしね。それに千雨ちゃんも似たようなものじゃない」

「千雨は今までずっと見てきたからな。こういうときはいつもと違う髪型だといいんだが」

「じゃあ、どうしろって言うんだよ」

「そうだな……ポニーテールとか、やってみる？」

個人的には有りだと思う。ポニーテール千雨。

萌えるよね、ポニーテール。

「ポニーテールね……大河内みたいにか？」

「まあね、神楽坂みたいにツインテールにしてもいいと思うけど」

「ツインテール……考えておく」

そう言っって千雨はロビーへと戻って行った。

「千雨ちゃんのツインかあ、見てみたい気もするな」

「気になるか。俺は一度だけ見た事がある」

最も、今みたいに髪は長く無かったけどな。

いつまでも立っているのもなんなので、神楽坂を隣に座らせる。

「しっかし、暑いわね。まだ朝なのに今日はこんなに暑いとは思わなかったわ」

昨日の朝が少し涼しかった分、今日の朝が余計に暑く感じられるって所か。

冷房に頼り過ぎるのもなんか嫌だしな。

「今日の最高気温、四十度近く行っってさ」

「ゲツ、マジ？」

「マジ。今日は超暑いぜ」

ケタケタと笑いながら自販機でアイスコーヒーを買い、神楽坂にも渡す。

「ん、ありがとう」

「神楽坂も偶には髪形変えればいいのに。あの髪紐気についてんのか？」

「あれ高畑先生に貰ったモノなのよ。だから大事にしてるの」

ふーん、と相槌を打つ。

顔をニヤけさせていたら、神楽坂はちょっと顔が赤くなってそっぽを向いた。

「愛されてるねえ、高畑先生」

「愛っ……いや、別にそう言う訳じゃ……」

顔を真っ赤にして否定しようとするが、それじゃまるで否定出来て無い。

そうですって言ってるようなものだ。

原作でもこうだったなあ、と思い出す。

最近原作なんて全然思い出さなくなったから、ほとんど覚えて無  
い。

要所要所の大きいイベントは微かに覚えているが、それ以外は全  
然だ。

「好きなら好きでいいだろ。告白してみれば？」

「こ、こくっ！ 告白！？ そ、そんなのまだ早いわよ！！」

慌て過ぎだろう。其処まで慌てる事か。

「ハハハ、俺でよけりゃいつでも手伝っけどな」

「……うん、そんな時は頼むわ」

素直でよろしい。ってな。

時計を見る。そろそろ朝食の時間だ。

「さて、朝飯だ。行こうぜ神楽坂」

「うん」

朝からまた泳いだ。

流石と言うべきか、あのクラスのテンションの高さはウチのクラスで屈指の高テンションである梶咲までもが音を上げた。

それでも、嫌な顔一つせず一緒に遊ぶ辺り、フェミニストだと思う。

俺はパラソルの下で横になり、遊んでいるみんなを見る。

このクソ暑い中、海に入るのはさぞかし気持ちいいだろう。

ビーチバレーをしている連中もいるが、あっちはあっちで砂だらけになっている。

「暑い〜！」と叫びながら海に入ったりもしているな。

ジッと見ていると眠くなり、軽くひと眠りしようと思えば目を閉じた。

まわりがざわついているような感覚がする。

なんていうか、話声っていうか、野次馬の声っていうか、そんな声。

ゆっくり目を開けると、千雨が目の前に居た。目の前というか、胸のあたりに顔があった。

「やっと起きたか、早く離せ……」



千雨が呆れたような疲れたような声を出している。

寝ぼけた頭で状況を確認する。

まわりには面白がって集まっている連中、ほぼ全員が集まっている。

何人かは微笑ましい目で見ているようだが、ほぼみんなニヤニヤしながらこつちを見ている。特に朝倉と早乙女。キモイ。

目の前には千雨がいて、抱きついている。俺が。

千雨の首に手を回すようにして抱きしめるようにしていたらしい。

そのまま頭を俺の胸に押し付けて寝ていたと。

うまい具合に挟まって抜け出せなかったらしい。

「……あゝ、悪い」

ぱっ、と手を離して起きあがる。

頭を搔いて、近くのクーラーボックスからスポーツドリンクを取りだす。

「仲がいいね。良い写真を取らせて貰ったよ」

「後で焼き増ししてくれ」

「了解」

スポーツドリンクを千雨にも渡し、開けて飲む。

暑い中寝ていた為、かなり喉が渴いていた。冷たくて美味しい。

「……って待て、何当たり前のように取引してんだよお前等！」

「え？ 良いじゃないか、俺が抱きついてる写真位」

「いやいや、おかしいだろ、普通取り乱してカメラ奪い取る所だろ  
！」

欲を言うなら一眼レフとかで撮って欲しかった。

千雨の上目遣いとか致死級だぞ。致命傷だぞ。少なくとも俺には。

「ああ、なるほど、奪い取って俺に保存しておけと」

「ちっがう！！ データ消せって事だよ！！」

朝倉は既にカメラ持って何処かへ走り去って行ったが、千雨の頼みならばしょうが無い、血の涙を流す覚悟でさっきの写真のデータを消そう。

そんな訳で、朝倉を速攻で捕まえてカメラを奪い返して来た。

砂浜なのになんであんな速いんだ……と誰かが呟いているのが聞

こえるが、特に気にせず千雨にカメラを渡す。

「ボス……本当に消すんですかい？」

「誰がボスだ。消すに決まってるだろ」

こんな事もあるのかと、この島にも『アンダーライン滞空回線』を散布しておいたのだ！

と、言う訳でも無いので、写真は普通に消されてデータは消えた。というか、こんな事の為に『滞空回線』ってマジ技術の無駄だろう。

その後、特に何も無く一日が終わり、夜を迎えた。

流石に二日連続で襲ってくる訳も無く、一応警戒しておいたものの、無駄に終わった訳だ。

無駄に終わったから良かったんだがな。

朝、朝食を食べて帰りの仕度をし、船とバスで麻帆良へ帰る。

船とバスの中ではみんな寝ていて、起きている奴はいなかった。

ついでだが、俺と千雨は宿題はとっくに終わらせていた。

いつも通りお互いにやる分を絞って効率的に終わらせていたので、夏休みは始まって一、二週間で自由になった。

だが、神楽坂を始めバカレンジャー（この頃既にできていたらしい）が終わらないと終盤に泣きついて来て、結局教える羽目になった。

それでも最後の日のギリギリまでかかったんだがな。

これを機にテストの時は俺に教えて貰おう、なんて言い出したが、テスト前って特にやることも無いので許可。

余裕こきやがって……と言った視線を護をはじめ男子寮の連中に向けられたが特に気にせず。

色々あった夏休みは終わりを迎えた。

第十話「良い写真を取らせて貰ったよ」「b y朝倉（後書き）」

終わりを迎えた夏休み。

この作品っていつになったら原作入るんだろうか（オイ

次はヤツの最後ですかね。その次は未定です。

ネタは特に無い（え

取り合えず頑張ります。宿題と向き合って。

……現実逃避してやらなかったら怒られたんだよなあ（当たり前前

第十一話「大学の単位ヤバいんですが」b y 奏（前書き）

アルトウール編完結。

いや、そんな名前をつけた覚えは全くないんですが（え

いつもより早く書き終えたので、いつもより早く投稿。

正直、駆け足で書いた感があります。

まさか連日投稿とは誰も思っまい（オイ  
まあ読者騙すって誰得だよって話ですが。

……ネタが切れたなあ。

第十一話「大学の単位ヤバいんですが」b y 奏

2001年 九月十一日。

この日、とある町が地図上から切り抜かれた。

ロシア、某町。

其処にはいくつもの研究機関が実験をしている、日本で言う学園都市のような町だ。学校は無いが。

円形で直径四十キロ程度、ロシアの中でも田舎の方にある。

そして、その大量にある施設の中、いくつものモニターが並んでいる部屋。

その中心に、男は佇んでいた。

コーヒーを飲みながら、ゆっくりと画面に映る報告書を読む。

(……ふむ、これならうまくいきそうだ)

コトツ、と机の上にコーヒーの入ったコップを置き、カタカタと  
弄り始める。

モニターに映る画面は変わり、何かのリストの様なものが浮かび上がった。

その横には やxと言った記号が記され、 の書かれている人物の横には何処かの研究所の様な名前が書かれている。

『原石』

普通に生活しているうえで、何かしらの条件を満たし、自然発生した『超能力者』。

この男達が使っている研究機関自体は元々存在していて、名目や設備を改良、変更して使いまわしているモノだ。

前回の『SMG』関連であろうホテルへの襲撃は失敗したが、それはもうどうでもいいことだ。

うまくいけばデータが得られるかもしれないが、もはや『原石』を手に入れた今となっては関係ない。

研究が進めば、この男達も超能力が使えるかも知れないからだ。

魔力を必要とする『魔法』、気を必要とする攻撃、例えば日本の『神鳴流』等。様々な物があるが、超能力はそれらを必要としない。

(超能力を手に入れば……無限に、それこそ絶対的に力を振るい続けられる)



感じた限り、見た限りでは、能力の発動に何か必要と言う訳でも無さそうだった。それが原因。

そしてこの男は、本物の『超能力者』の逆鱗に触れた事にさえ気付かなかった。

アラート  
警報が鳴り響く。

其れは目の前のPCから発せられる音だった。

ザザザア、とノイズが入る度に、画面に映っていたデータは次々と消えて行く。

そして、最後のデータが消えた時、真っ黒になった全てのモニターに『SMG』と書かれた文字が現れた。

『……やあ、元気にしてるかな？ アルトウール』

機械的な声、人工的にジャミングの掛けられている、人を不快にさせる声がした。

流暢にロシア語を話し、使いこなすその男を、アルトウールと呼ばれた男は知っていた。

「……垣根……帝督……!？」

男は驚く。

恐らく、今現在魔法使いにとって最重要人物とも呼べる男だった。識別できたのは他でも無い。『SMG』という社名をこんな事に使う男。

そしてその高圧的な喋り方には覚えがあつた。

「何の、用だ」

『ほう？ 俺がこうしている事を見ても、何の用か分からないと？』

「何の用だと聞いている」

男はイライラしながら返す。

悪戯にも程が過ぎる。そう考えてもいたし、悪戯じゃないならこれはロシアへの敵対行為だとみなし、戦力を使う権利が男には、アルトウールにはある。

流石に国を敵に回すような事はしない筈だ。頭の回る人間なら尚更。と、そう考えた。

だが、次の言葉で、その絶対的な利点<sup>アドバンテージ</sup>は崩れ去つた。

『簡潔に言おうか。お前、ロシア政府から見限られたよ』

一瞬、その言葉の意味が分からなかった。

硬直し、その言葉の意味をゆっくりと考える。

「そんな、バカなことが……」

『さあてね、お前も大分バカだとは思うがな』

そして、ガラガラと何かが締まる音。

敵が侵入してきたときの為の防壁が下りたのだ。

「!?!? どういう事だ? 何故防壁が……」

『逃がさない為だよ。それ以外に理由はない』

そして、画面に一つの紙をデータ化した物が映された。

「『アルトウール・バラノフの行った事とロシア政府は無関係である』だと……? 貴様、何をした!?!」

ロシア大統領の名前、ご丁寧にサインまで書かれていた。

『『何をした』、か。お前が暴走したから始末してくれって事だよ。まさか交渉をしに言ったらあっちが既にこれを用意してるなんて思いもしなかったぜ。この証書を用意すればロシアとは敵対行為をしないとしたからな』

「そんな筈は無い! 大統領が私を切ってもロシアが不利益を被るだけだぞ!?!」

『ふん、頭が回って無いのか。』SMG』と敵対するぐらいならお前を切ると判断したんだよ、ロシア政府は』

理由としてはいくつもある。

第一に、『SMG』の技術力が異常な事があげられる。

ロシアと友好的な関係で技術を買ってくれば大国としての権威は落ちる事は無い。

だが、アメリカや日本、イギリスやドイツなど、『SMG』と取引をしている国はいくつもある。

つまり、『SMG』との交渉が出来なくなれば、大国としての権威はおろか、先進国としての力も無くす。

『SMG』との取引は、金こそかかるものの、既に出来上がっている技術なのだ。開発するより楽で速い。

発展途上国でさえ、この会社の協力を得ればあつという間に先進国の仲間入りが出来るだろう。

そうなれば、ロシアは衰退の一途をたどり、アメリカと対抗できうる国は無くなる。

最も、バランスが崩れる上に無駄に技術を流出させる事を嫌った潤也はそんな事はしないのだが、其処は交渉術の見せどころだ。

第二に、アルトウルがロシアにとっていつでも切り捨てられる駒だと言う事。

元KGBとしてカリスマもあり、現場での指揮などは群を抜いて高い。

だが、逆に言えばそれだけだったのだ。

政治的な思惑など気にしない上に、軍に対する思い入れが強過ぎる。

今回の『原石』強奪、実験もかなり無理やり通しただけに過ぎない。

それで通ってしまったのがヤツのカリスマの面倒な所だ、とロシア大統領は言っていた。

詰まる所、無駄が多過ぎる。

無理な事でも、この男ならやってくれりと勘違いした連中が政府内に居るせいもある。そちらは大統領が始末すると言っていた為、潤也の感知する所では無い。

『端的に言えば、お前はもう用済みだ』

「ふざけた事を言うな！！ 研究だって、直ぐに成果が出る！ そうなれば、貴様を殺してやる！」

『……ク、ククク、アハハハハハハ！』

最初こそ堪えていたが、直ぐに耐えきれなくなり、笑う。

笑って、嗤って、晒う。

『お前、本気で研究すれば直ぐに超能力が使えるとでも思ってたのか。おめでたい頭をしてやがる』

笑いを抑えながらそう言う。

『第一にお前、どうやって俺を殺すつもりだ？』

「そんなの、お前の居場所を突き止めれば……」

そう言いかけて、止まる。

そして、ゆっくりと思い出す。

かつて一度、垣根帝督と名乗る潤也の居場所を突き止めようとした。

垣根帝督と言う名の日本人は存在した。だが、容姿が全く違う。

取引、交渉に現れる垣根帝督は茶髪、ホスト風の顔立ちと言った男。

だが、その容姿でその名前の人間など、存在しなかった。

居る筈なのに、居ない人間。

戸籍を弄ったのかとも考えたが、其処までやる理由が思い浮かばない。

『第二に、お前じゃ俺は殺せない』

「そんな事、やってみなければわからないだろう！」

『いいや、やらなくても分かるさ』

そして、モニターに映し出されるのはいくつかの映像。

『……ザ、ザザア……こちら『猟犬部隊』 チーム。制圧完了しました』

『こちら『猟犬部隊』 チーム、制圧まで後数分程度かと』

『こちら『猟犬部隊』 チーム。『原石』の保護完了、制圧まで後数分です』

そして、他の『猟犬部隊』からの報告の音声と映像が断続的に続く。

煙を上げている施設、破壊された施設。恐らくは防衛の為の魔法使いや傭兵であろう死体が転がっていた。

「……こ、こんな、事が……」

『一時間前から既にこの施設への報告なんかは遮断させて貰っていた。気付かなかったか？』

元々現場で動く為、ある程度の知識こそあるが、専門では無い。

だからこそ、分からなかった。

『『原石』は既に保護させて貰った。これ以上お前とおしゃべりをしている暇も無いだろうな』

「……………何？」

ゴツ！！

その疑問に答える前に。莫大な轟音がした。

同時に、大きく揺れる施設。

『ふん、予定通りか』

「貴様、一体何を……………」

『簡単だ、この町を切り抜いたのさ』

その言葉に、呆然とするアルトウール。

「切り抜いた、だと？ そんな馬鹿な事が出来る筈が無いだろう。」

第一、そんな事をすればメディアが大騒ぎするぞ！？」

『……………そうか、お前は知らないんだな』

「……………何？」

それは一つの疑問、情報が完全に遮断されていた状態で起こって



いた事。

『現在、アメリカで同時多発テロが発生している。メディアはそれに釘付けだ。こっちの作戦は大かた終わってからさっきのが使われた。メディアが気付いた時、もうこの件は終わっているし、この件はテロとして処理される。ロシア政府ともそう示し合わせているのでな』

アスレイド  
地殻破断

超音速ステルス爆撃機に搭載された大型ブレードが引き裂いた大気の刃に砂鉄を混ぜ、時速一万キロオーバーの速度を乗せることで摂氏8000度を超える気体状のブレードを生み、目標点を爆撃する。

三キロの砂鉄があれば一時間でユーラシア大陸を切れる程の威力を持つ強攻高速爆撃戦術。

極めて大雑把な攻撃に思えるが、ブレード表面の『模様』を電気に操ることで、直線のみならず、曲線・点攻撃も可能で、その気になれば一機で複数のラインを描くことすら出来る。

この円形の町の円周を、そのまま切り取る事が出来るほどに。

「貴様、アメリカでテロが起こる事を知っていたのか!？」

『いやいや、流石にそんな事は知らなかったよ。唯、今回はテロに便乗させて貰っただけさ』

軽い調子でそう言う。

本来なら夏休みの段階で潰しにかかりたかったが、ロシアとの交渉、そして予想以上に早くアルトウールが準備を整えた事で、準備が遅れ、この日になった。

『さて、そろそろ楽しいおしゃべりの時間は終わりだ』

瞬間、轟音と共に厚さ二十センチの防壁がブチ破られた。

コツツ、コツツ、と規則正しくなる足音。

そして、煙が晴れて、その姿を見る。

整った顔立ち、黒髪にウェーブがかかった髪、スレンダーな体つき。

一見すれば美人と言えるその女を見て、アルトウールは恐怖した。

「え、エアロスラッシャー『空気裁断』……………」

「それは初耳なのだけど？」

『俺も知らん。大方映像で柎おまえを見た奴らが勝手につけた名だろうな』

大方能力を見てカマイタチだとも思ったんだろ。と続ける。

「てゆうか社長、私そろそろ大学の単位ヤバいんですが」

『お前大学行く意味あるのかよ。大学行こうと『SMG』で働くな  
ら一緒だろ？』

そうは言ってもちゃんと行きたいんですー。と言った後、一瞬で機械を解体した。

「もう殺つていいんですよね？」

『ああ、オメガシークレットの暗号は掛け終わってる。仮に壊し損ねてもデータを解読する事は出来ない』

オメガシークレットとは、簡単に言えば実用性のない高難易度最優先のゲテモノ。

一度この方式で暗号化してしまうと、どんなに小さなファイルも大きなファイルも等しく解読に200年かかる。

しかもファイル一つ一つに異なる乱数処理が施されるため、一つのファイルを解読したら次のファイルのためにまた200年かけなければならぬ。

しかも学園都市製のスーパーコンピューターでも、だ。ゲテモノ以外の何物でもないだろう。

それを、万が一の可能性を考えて全ての研究施設のデータにかけた。

解読される可能性は無くなったと言ってもいいだろう。

ニヤア、と、ゆっくり、三日月形に口を釣り上げて笑う。

柊が来た道を逆にたどれば、その道にはおびただしい程の数の死

体が放置されているだろう。

それでも、返り血一つついていない事を考えれば、異常としか思えない。

「さあ、殺して解して並べて揃えて晒してあげる！」

『何処の人間失格だお前は』

腕を振る。それだけで壁に引つかき傷のような物が出来、次々と部屋の機械を壊している。

「クッ！」

身を翻して机や機材の影に隠れるが、次々と破壊され、隠れる場所が無い。

念の為、といつも持ち歩いている銃をホルスターから抜く。

物陰から様子をうかがい、こちらへの意識が薄れる瞬間を待つ。

攻撃の隙間を縫い、一瞬だけ意識がアルトウルから外れる。

その瞬間を狙い、物陰から飛び出して銃を放った。

出てきたところをとっさに反応して腕を切り落とすが、放たれた弾丸は柵の眉間へと吸い込まれるように動いていた。

衝撃で後ろへ飛ばされたまま、その体は動かなくなる。

「ハア、ハア……」

右腕を抑え、息を整える。

腕を切られた断面辺りを見ると、何かを血が伝っていた。

「これは……糸？」

空気で編み込まれた、と言うより、空気を直に圧縮して作られた  
空気糸。

半径五百メートルは余裕で伸ばせる程の長さを保てる。

『グループ』内で二人いる大能力者レベル4の内一人。

「だが、もう死んだのなら関係ない……」

そして、感じる違和感。

（あの女は死んだ筈だ。頭を打ち抜かれれば超能力者だって死ぬはずだ）

そう、自分に言い聞かせる。

ならば、死んだ筈の柁の柁の能力は、何故まだ発動している？

「フ、フフフフ」

ゆらりと立ち上がり、アルトウールを見る。

「ビックリした？ 弾丸程度で死ぬなんて思っちゃ駄目よ」

パツパツ、と埃を払いながら、傷一つない体を見せつけるように凜と立つ。

「私の周りにはね、常に糸が纏わりついてるのよ。まるで毛玉みたいにね」

柵の周りには全方位に、死角無く、空気を圧縮して作られた糸を編んだ壁が存在している。

ソレを抜けるには強力な砲撃か、空気を一時的にでも無くすしか方法が無い。

防御にも、攻撃にも使える万能な能力。

『御託はいい。さつさと終わらせる。時間はあまり無いんだ』

「りよーかーい」

『まあ、なんだ。チェックメイトこれで終わりだ』

そして、残ったのは噴水のように血を噴き出すアルトウールの姿だけだった。

帰りの飛行機、超音速旅客機に乗っている柊は、潤也と通信していた。

「にしても社長、今回のアメリカでの同時多発テロってホントに知らなかったんですか？」

『そんな筈無いだろ。事前に知って、情報を流したっていうのに、碌な準備さえせずにテロを引き起こされてんだよ、アメリカは』

「ふーん、間抜けですね」

『まあ匿名で証拠も大したものじゃ無かったからだろうな。それでも、しっかり調べればテロに繋がるようにしたってのに』

「やっぱりアメリカは大雑把ですね」

『……お前な、そういう偏見はいらんだよ。あっちだって大変なんだぜ？俺がテロの詳細な情報出したら疑われかねないからな』

普段の行い的に、と続ける。

どの道そんな事をやっても利益が無いのでやる筈も無いのだが。

「そんな事を連続殺人犯の私に言いますか。こんな見た目なのに危ない女だっというのも偏見ですよ」

ハア、と通信機の向こうで溜息をつく声が聞こえる。

『お前のそれは唯の趣味みたいなもんだらう、趣味で人を殺すってどうかと思うがな。いっその事本当に零崎を名乗ったらどうだ？』

「嫌ヤですよ。現実と創作の見境がついて無いとか言われそうじゃないですか」

『今更過ぎるだらう……』

ついさっき『人間失格』の決め台詞をパクってた奴が言うか、と笑う。

「全く持って、傑作ですね」

柊もつられて笑う。

事後報告。

破壊されたのは何もロシアの研究機関だけでは無い。

イギリス、フランス、ドイツなどの各国も、超能力研究に協力していた機関は存在した。

それらは『獵犬部隊』『スクール』等の暗部組織によって壊滅させられた。



本当に運よく残っているHDもあったそうだが、オメガシークレットで暗号化された為、解読は不可能。

そしてこの事件は、九月十一日、アメリカ、ロシアのみならず、世界各国で起こったテロ事件として、表の歴史に記された。

だが、アメリカとそれ以外ではまず手口が全く違う為に、別事件としてとらえる者達は多々いた。

別事件と捉え、尚且つ潤也が情報を流したままにしておいた為、「『SMG』に敵対すればこうなる」という見せしめの意味を持っていた事を、裏に通じるほとんどの者が理解した。

## 第十一話「大学の単位ヤバいんですが」by 奏（後書き）

時間軸がずれてる気がする（え

戯言シリーズって多分もうちょっと遅かった気がするんですよ。でも一年か二年位早まったって事でここは一つ。

逆鱗って、アレです。千雨達との夏の思い出づくりを邪魔したからです（え

自分でも相当理不尽だとは思いますがねww

アンケート、では無くリクエストを募集します。必然的に外伝となりますが。

annburera様から意見を頂いたので、ソレを参考にと。今のところグループを主役にした物語を一つ考えてはいますが、どうせならこういう話を書いて欲しい、っていうのが在ったらぜひ言うってください。

ネタ切れなのでそういう意見を頂けると嬉しいです。全部書けるとは限りませんが。

上手く書けるかどうかは別ですけど（オイ

……グループ主役の物語、かなり長くなりそうなんだよなあ。

もしかすると長くなり過ぎて更新が遅くなる可能性もありますけど。

いや、外伝書く位なら原作入れよといわれるとどうしようもないですが。

ついでに質問ですが、主人公設定って乗せた方がいいですかね？

乗せた方がいなら直ぐにでも書きますが。

そんな訳で、感想・評価・リクエストを頂くと大変喜びます。

## 外伝一 序章（前書き）

雷鳴をBGMに執筆。

停電しないかびくびくしながら書いてましたww

追記、短いです。ビックリするほど書けなかった。

## 外伝一 序章

ガヤガヤと騒いでいる講義室。

そこで、凜とした佇まいで次の講義を受けようとしている一人の人物が居た。

ひいらぎかなで  
柊奏。

『セブンスミスグループ』の暗部『グループ』のリーダーにして、『SMG』中五人しかいない大能力者<sup>レベル4</sup>の一人でもある。

伊達眼鏡を掛け、勉強モードと言った感じでノートと向き合って勉強している。

元々能力者は演算を使って能力を使う為、必然的にレベルが高いほど頭がいいと言う事になる。

そして、大能力者ともなれば、その知能はかなりのモノだ。

それ以外にも、日常的に『能力開発』を受けて能力の調整を図っている。

何が言いたいかと言うと、この大学の勉強は予習復習をしなくても十二分についていけると言う事である。

それなのに何故勉強しているかと言えば、単位が足りなくて留年させられそうだからだ。

『グループ』の仕事で海外に行く事が多い為、必然的に出席日数を気にする必要がある。

大学の教授は、「これ以上はやばいからコレで手を打とう」と課題を提出すれば単位をあげると言われたので、その課題をやっている途中である。

最も、それも時間があれば直ぐに終わる類のモノなので、時間を見つけてちよこちよこやっている、と言う訳だ。

大学では病気がちで良く休むと情報操作をしているので、教師も甘いのである。

そんな折、携帯が鳴った。

鳴った、と言うよりバイブレーションがした、と言うべきだろう。

ともかく、ソレを確認してメールを見る。

内容は八重から「仕事が入った、夕方いつもの場所へ」とのメールだった。

八重という人物について、柊は特に知っている事は無い。



「うん、ありがと。光輝、理香」

五人はそれぞれ車の席で、用意されていた軽い食事を取る。

顔文字で喋る女性が居るが、全員特に気にはしない。慣れているのだ。

もうコレでチームを組んで一、二年にもなるし、今更とやかく言うような事は無い。

……顔文字で喋っているのに理解できると言うのもおかしい事だと思っが。

「しかし、大学なんて言っで楽しいのか？ あっちこっち飛び回るのが不便だろ？」

短い黒髪、大柄の体格、筋骨隆々とした感じの男が言う。

「龍ちゃん駄目だよ、そんなこと言ったら」

「（ ）（ ）凸」

身長百五十位の中学生程度にしか見えない女の子《安心院梓》と、顔文字で喋る肩ぐらいまでの黒髪の女性《井上理香》が言う。

「悪かったな、後俺には九澄龍司くすのみって名前があるんだよ。龍ちゃん言っな」

「あはは、良いじゃないか、龍ちゃん。親しみを持てるよ」



茶化すように少年、鏡光輝かがみこうきが言う。

「おしゃべりは其処までよ、八重から連絡が来たわ」

ザザザ……と、軽くノイズが入り、ハッキリとした声が聞こえる。

『ハハハ、仲がよろしい様で』

機械的な声、社長と同じように機械で処理された声でした。

「御託はいい、さっさと仕事の話をしろ」

『うん、それじゃあ早速始めよう。僕もあまり時間が無いんでね』

「……何故？ 聞かれたくないのは分かるけど、其処人が多いの？  
それに口調もいつもと違う」

『まあね、これはいつも通りの口調。僕もれっきとした社会人だからね。敬語を使うときと使わない時位分けてるよ』

信じられないーい。と呟く梓。

梓にとって、No.2とも取れるこの人物が普通の社会人だと言う事には驚愕物だったらしい。

そんな事はハッキリ言えばどうでもよく、さっさと話を進めろ、と言いたげに座ってるのが二人。

「早く話せよ」

「>>〇(<・>)〇<<」

龍司と理香はさっさと終わらせたいと思い、仕事を説明するように言う。

『そうだね、じゃあ早速。君達には日本に入ったテロ集団を掃討して欲しい』

「また？ この間はイタリアのヴェネツィアまで行って潰して来たじゃん。それに今度は順番的に『スクール』じゃないの？」

『『スクール』は君たちの後に残っていた残存勢力相手に戦闘したんだよ』

「(「。口。)」」

「そこまで驚くような事じゃ無いでしょう。アレ結構大きめの組織だったし、大半は潰したけど他の勢力と手を組んだ可能性もあるしね」

驚く理香に説明する。

九日前、ロシアのとある地域が切り抜かれた。

その時研究機関と手を組んでいた者達が、脅威の度合いを間違えて『SMG』と一戦やらかそうとしていた為、『グループ』がソレを制圧。

その後残存勢力を掃討する為に『スクール』が入り、ほぼ完全に殲

滅された。

そして今回、ロシア内のごたごたの所為で警備が甘くなり、『とある物』が盗まれた。

それらの連中がその『とある物』を使ってテロを起こそうとしているらしい。

理由の半分はロシアからの秘密裏の依頼でもあり、もう半分は日本の警察から依頼を受けたものだ。

麻帆良や関西といい、魔法使いの協会は存在する。

それは魔法使いの犯罪者を出さない為だ。もしくは出して魔法使いも身内で片をつける為。

だが、今回の件に関しては場所が東京である上、いろいろと手を回せるSMGを抜擢した。

理由は簡単。判明している敵の中にテロリスト、それも賞金首に成るほどの魔法使いがいて、それを止められる程の腕の者が居ないのだ。

タカミチ・T・高畑は魔法世界へ出張中。近衛近右衛門は先日的一件で旧世界のほぼ全ての組織と会談の為居ない。

ならば、実力も申し分ない『SMG』へ頼もうと言う事になった。

実質、制裁を加えたが、敵対しない限りはこのような事をしないと明言している上、裏で有名な魔法使いを雇っていたアルトウールを

いとも簡単に殺した事で実力も分かっている『SMG』に依頼するのは不自然な事ではないだろう。

「なるほどね、で？ 時間とかは分かっているのか？」

『警察から資料を渡して貰ったけど、無駄だね。ほとんど意味の無いものばかりだ。あるのは経歴と多少の戦闘に関する位、こんなのとっくの昔に調べ終わってる』

「じゃ、どうするの？」

『僕がいろんなところから情報を引き出して調べた。三日後に決行するってところまで絞れたよ』

啞然とする五人。

これで普段社長からの命令を渡すだけの役である八重が、どうして信頼されているのかが分かった気がした。と五人は思う。

『結構手間取ってね、面倒だったよ。流石に慣れてるみたいで、情報の消し方がうまい』

それでもここまで詳細に調べ上げるとは、相当な情報屋なのだろうか、と龍司は推測する。

「でも、決行する日なんて相手にしか分からないんじゃない？」

『うん、それに関しては簡単だ。日本の首相及び外交官各位が一樣にそろってからね。テロを起こすには申し分ないよ』

「……なるほどね。でも、戦力は私達だけ？ 数的な問題が出てくるわよ」

『「獵犬部隊」をいくつか動かす許可を貰った。後、『どうしようも無くなれば俺も出る』って社長も言ってたからね』

一瞬、シンとなる。

「……マジか？ 社長動くのかよ」

「信じられないね。僕は」

「／＼（。□＼＼）（／／□）／／」

「ウツソー！？ じゃあさ、本気見れるかな？」

「そうね、本物の『超能力者<sup>レベル5</sup>』の本気が見れるかもしれないわね」

元々めつたにこういう仕事をする人では無いので、驚きが隠せない。

『ロシアから盗まれた『物』の所為だからね。ロシアも使わせずに回収したいだろうし、社長も今回は被害被りそうだから全力でやるって言ってたから』

そして、彼らは動き出す。

安心院梓、井上理香、九澄龍司、鏡光輝、柊奏。

彼ら五人を総称して『グループ』と呼ぶ。

それぞれ犯罪者として捕まるべき存在ではあるが、裏の世界から表の世界を守る為に存在する組織だ。

外伝一 序章（後書き）

顔文字で喋る奴とかいねえだろ馬鹿。と思われる方、すみませんが  
あきらめてください（え

そして今回どつちかというところプロローグ的な感じになってしまった

……

ちなみに動き出すと書いてますが、多分今週はエタります（マテ

気力と体力とテンションが戻り次第執筆再開します。

## 外伝一 動乱（前書き）

復・活！

きつちり前回の投稿の次週には復活できました。

……でも、裏の話より正直千雨との話を書きたかったり。

先生の怒りとクラスマッチと模試のニコンボが終わった俺は誰にも止められない！（え

今回、独自解釈入っております。多分今回に限った事ではありませんせんが。



## 外伝一 動乱

『グループ』に仕事が伝えられた次の日。

それぞれのメンバーに資料が渡され、行動を開始した。

光輝・梓ペア。

「む、なんで私が変態とペアなのよ」

移動用の車の中で、梓が頬を膨らませながら呟く。

「ははは、しょうが無いさ。このペアが一番都合がよくて効率がいいんだから」

「アンタ奏と同じ大能力者でしょ。一人でいいじゃない」

「残念ながら、僕の能力は単体で戦闘するには向いてないし、君の能力にとってもプラスに成るだろう？」

「……それは分かってるけどさ」

納得がいかないとばかりにそっぽを向いた梓を見て、光輝は資料に目を通す。

資料に書かれていたのは、潜伏している可能性のある廃工場や港だった。

三十程度はゆうに超えており、時間がかかりそうだと無意識に呟く。

「取りあえず、この場所へ向かって」

そう言って、運転手に一つの場所を示す。

「何？　ここが一番怪しいの？」

「まあそうだね、僕の勘では其処が一番怪しい」

勘かよ、と思つたが口には出さず、梓は資料に目を通した。

『獵犬部隊』にせよ、慢性的な人手不足だ。戦力はあつても数が無い。

故に、『グループ』のメンバーまで動かされていると言つた。

……実質的な能力者の数は数万人規模でいるのだが、日本各地に散っている為、一か所に集まるには時間がかかる。

そういうしている内に一つのポイントに到着し、ザッと一度眺める。

「どう思うっ？」

「うん……そうだね、コンテナばかりだ」

見渡す限り、放置されたコンテナばかりがあつた。

だが、こういう場所は隠れるにはもってこいだし、魔法使いなら探査用の魔法でも使っておけば侵入を感知する事は難しくないだろう。

「畏に気を付けなよ。梓は早とちりで失敗しやすいんだから」

「分かってるわよ、あんたこそ、ちゃんと服着てるんでしょうね？」

「残念ながら着ているよ。流石に素っ裸だと攻撃防ぐのが難しい」

ジャリジャリと足元の石を蹴り飛ばしながらコンテナを一つ一つ確認していく。

十数個を一つ一つ開けるのを面倒くさがりながらも確認し、いないので放置する。

へらへらと笑いながらコンテナを開ける光輝を見て、梓は舌打ちをする。

そして、光輝がコンテナの一つを開けた瞬間、内部から攻撃された。

（勘が良過ぎるのよ、あの変態！）

爆炎が光輝を包むのを横目に、能力を使ってコンテナを潰す。

内部からまた魔法を使ったのだろう。連続した音の後、コンテナに穴があき、其処から一人の魔法使いらしき者が現れた。

黒いローブを全身に纏い、クレイモアのような大剣を背中に担いでいる。

敵の数は一人。

こちらは現在二人。

数の上では勝っているが、それで驕る様な真似はしない。

百メートル位の距離がある為、能力での攻撃には少し時間がかかるだろう。それに、届かない。

近づかなければならないが、相手がプロであれば、恐らく遠距離からの攻撃も殺気で避けられる。

どの道、梓の能力は発動までに多少のタイムラグがある為、不用意に使えない。

光輝の『イリュージョニスト幻術使い』の能力でタイムラグを隠してはいたものの、いくつかのプロセスを段階的に踏む必要がある為、どうしても時間がかかってしまう。

演算能力の低さが嫌になってくる、と梓は思った。

奏、光輝は涼しい顔で自身より複雑で膨大な計算をやっている。

それがレベル3強能力者とレベル4大能力者の壁。力の差。

せめてもう少し早く演算処理できれば、と思う。

「さて、手早く済まそうか」

そうすれば、アレだけの攻撃を生身で受けたくせに傷一つなく平然

としているこの変態に一矢報いれるのに……と、割と本気で思った。

「っていつか、ホントに何で無傷なのよ」

「真面目に開けると思った？ 扉の影に隠れながら開けたに決まっているじゃないか」

流石に奏ちゃんみたいに自動防御機能がある訳でも無いしね。と続ける。

開けた瞬間に吹き飛んだのも全部嘘と言った。恐らく幻術だろう、と梓は考える。

爆発は放たれた魔法をその辺の石でも使って爆発させたのだろう。

『イリュージョニスト幻術使い』とは、相手の脳内の電気信号を操作し、誤認させたり、認識させなくしたり出来る。

特性上相手の脳内の電気信号を読み取る必要があるが、その手段として電波の様に円形に念話のような形で強制的に幻覚を見せている為、簡易的な探知能力としても使える能力だ。

実際には視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の内二つか三つを誤認させる程度しか能力は見込めない、というかそれしか出来ないのだが。

更に、近接に限らず戦闘は全く持って出来ない。

元が暗殺の為の組織なので、殲滅しようと思うと奏を連れてこなくてはならなくなる。

「相手は恐らくプロだ。攻撃に一瞬の戸惑いも無かつたし、来ることもハッキリと悟られてた」

「どうするの？ どの道捕えるんでしょ。甘く見る気は無いけど、一人なら直ぐに終わるんじゃない？」

光輝は首をゆっくり横に振る。

「それが駄目なんだよ。見た目と数じゃ相手の戦力は正確には測れない。社長がいい例だろ」

そう言われ梓は社長を思い出す。

唯の中学生が一国の軍隊相手に勝てると言つ事実を聞かされ、相当驚いたものだ。

確かに、そう言う事を考えれば、見た目と数じゃ戦力は測れない。

だが、そう言つた異常な力を持つ者もほんの一握りだ。

潤也然り、英雄と呼ばれる者然り、そんな存在は数えるほどしかない。

「其処まで考えなくてもいいんじゃない？」

「駄目だよ。こういう事態において、『最悪の事態』を考えないのは三流だ」

長々と話しているが、あちらも警戒し、こちらも不用意に動けないからこそ話せているのだ。

だが、ソレは破られた。

魔力も気も使わないから見つからないと言っ訳ではないが、見つかり辛くは有る。

だが、これだけの距離で、ほんの数分で気付かれるなど思っていなかった。

魔法の射手がいくつも飛んでくる。

咄嗟に梓の能力で空気の壁を作り、防ぐ。

フードをかぶっている男は爆風の中を瞬動で移動し、大剣を振り上げて踏み込む。

梓はヤバい、と本能的に横に飛ぶ。

魔力強化された大剣は地面に小さなクレーターを作り、ローブを取った金髪の男は直ぐに構えなおす。

梓は石の破片で軽く傷を作りながら距離を取る。

男は距離を詰め、追撃を加えにかかる。

「こつちだよ」

男の後ろには光輝が立ち、拳銃を構えている。

「弾丸に障壁を突破する仕掛けがしてある。無駄な抵抗はしない事

だね」

銃口を向け、殺気を向けながら警告をする。

男はそれを見た後、梓を警戒しながら光輝の方を向く。

どちらにも、この状況は好ましくは無いのだ。

「今回は一度退いた方が良さそうだな」

「こちらとしてはそうもいかないんだけどね」

そう言いながらも、内心面倒だと思っていた。

大剣を使う男は完全な魔法剣士タイプ。

対するこ二人は奇襲を専門にしている。真正面からの戦闘はあまり得意ではない。

戦う事は出来るが、分が悪い。倒そうと思えば、時間を掛けなければならぬし、実際倒せるかもわからない。

(コレが龍司達や奏ちゃんなら、相手に出来るんだろうけどね……)

先ほどから能力を使っただけだが、殺気や気配を肌で感じる敵は五感では無く勘。いわゆる第六感で見つけ出す奴が偶に居る。

それに、誤魔化すのは良くて三つ。後の二つで見つけられる可能性



もある。

一度殺気を消せば何かをしたと怪しまれるし、下手に能力を解けば一瞬でやられる。

そもそも、魔法使いなら絨毯爆撃の様な攻撃をすればやられる。誤魔化すだけで完璧に逃げきれぬ訳ではないのだ。

一方、男にとってもここで戦うのは得策とは言えない。

『とある物』の護衛についているのだ、無駄に戦闘して魔力を消費する訳にもいかないし、何よりここで戦闘すれば巻き込む可能性がある。

それだけは避けなければならない。絶対に。

『アレ』を破壊すれば、被害は自分にまで来る。

余計な事はしたくない。

「……流石に退いた方が良さそうだ」

「こちらも引かせて貰おうか。流石にここで戦うと不味い」

それだけ言った後、男は転移魔法で何処かへ消えた。

「……転移魔法か。縮地レベルの瞬動、戦闘力とかを考えて、ランクで言うならAAから上位かな？」

ラカン表で言うなら1600前後位であろう実力。

相性の問題もあるが、まともに戦うにはレベルが高い。

それに、「ここで戦うと不味い」と言う事は、何か仕掛けでもしてあるのか、あの男が『例の物』を持っているのか。疑問が募る。

「イタタ……」

「あ、大丈夫だった、梓？」

額に切り傷を作っている梓を手当てしようと、医療キットを取り出す。

怪我にそれを塗りながら他のメンバー達に連絡を入れる。

「うん。でも、逃がして良かったの？」

「いいの。どの道僕らじゃ相手をするには実力不足だ」

奇襲ならともかく、真正面からの戦闘とか苦手だし。と言って笑う。

「取りあえず、もう一度この辺りを搜索して、何も無いようなら一旦戻ろうか。後は『猟犬部隊』に任せてもいいし」

そして、二人はもう一度何も無いか確認し、一旦戻る事にした。

龍司・理香ペア

とうの昔に使われなくなった古い廃工場の外に、二人の人物がいた

「……光輝から連絡があった。敵の一人と戦闘したらしい」

「、（・―・；）ノ」

「大丈夫だ。梓が軽く怪我をしただけらしいからな。敵には逃げられたらしいが」

驚く理香を制しながら考える。

（……いつもの事だが、勘がよすぎるだろう。一発で敵と遭遇とは）

それとも一番敵が居そうな場所に向かったのか？ と疑問を浮かべる。

リストアップされた資料を見て、光輝達に向かった場所を確認する。

海に面したコンテナの廃棄場所。

物を隠すにはうってつけたが、隠すだけなら別に他にもある。

（一体何を基準に選んでるんだか）

本人は頑なに『勘だよ』と言い張るだろうが、運がいいのか？ と  
思い、考えるだけ無駄か。と頭を振った。

自分達は既に三つ目を回っている。

敵にも盗まれた物にもアジトにもたどり着けてない。

分担された場所の内、比較的場所が小さい事で搜索の時間が少ないのだ。

「そろそろ敵と遭遇してもおかしくないハズだがな。さっさと終わらせたいものだが」

「（＾ー＾）」

頷きながらそう言う理香を横目に、工場内の搜索を始める。

困っている金網は理香の『ハイポイント座標移動』で四角く切り抜き、侵入した。

草は荒れ放題に伸び、建物の古さから見てホームレスなどもいそうだったが、見かけなかった。

扉を次々と開け、内部に何か隠されていないかと探すが、特に見つかりはしなかった。

「……またハズレか」

「（　・　）（　・　）」

「其処まで落ち込んではいないよ。別に戦いたい訳でも無いから無理香に若干慰められながら、また歩を進める。」

結構な広さらしく、数十分程度歩き回ってもまだ全て見きれしていない。

ガタン、と音がした。

警戒し、銃を抜いて足音を殺し、忍び寄る。

音がした部屋のドアを押してゆっくり開け、中を見る。

開けた分では異常は見当たらない。

半開きのドアから内部に忍び込む。銃は構えたまま、龍司のみ。

バン！ と後ろから押さえつけられる。

（押す形になっているドアの裏側に隠れていたのか……）

見た限り、敵は一人。だが、他に敵が居ないとは限らない。

目に入るのは右手の指輪、部屋の奥、ドアからは死角になっている位置にいる数人の敵。

柱の陰に隠れている女は銃を持っていた。ならば、容赦も遠慮もいらない。いや、元よりするつもりも無い。

「理香！」

トスツ、と肉を裂く音と共に絶叫が響いた。

『ハイポイント座標移動』で予め用意しておいたコルク抜きを体に重なるように転移させたのだ。

『空間移動』系統の能力の特徴は、転移先の硬度に関わらず割り込むように転移する為、唯の紙でダイヤモンドさえ切ることが可能だ。幻覚や超スピードなどで照準が狂うと無力化してしまうが、動いていない敵が相手なら無類の強さを誇る。

とはいえ、レベル強度は3。自身を転移させる事は出来ない。

それでも、この場においては相当な利点だ。アドバンテージ

龍司は跳ね上がるように立ち上がり、銃の射線から外れる。

放たれた銃弾は壁に当たり、風化していた脆い壁に穴をあける。

(……一発貰ったか)

離れる際に一発貰っていた。だが、弾丸は掠る様に当たっただけだ。特に問題は無い。

どの道放っておけば、『オートリパース肉体再生』で勝手に治る。

手に持った『スマートウェポン演算銃器』を構え、壁ごと打ち抜く。

赤外線を使用して標的の材質・厚さ・硬度・距離を正確に計測し、即興で最も適した火薬を調合、合成樹脂の弾頭を形成して発射する

銃であり、その気になれば鋼鉄の壁さえ打ち抜く事が出来る。

脆くなった柱など、壁にすらならない。

悲鳴を上げ、柱の陰から出てきた女は 手に持ったアサルトライフルを乱射し始める。

「理香！」

またも、トンツ、と音がし、銃の薬室をその辺にある壁の破片が的確に貫いた。

一瞬動きが止まり、女は銃を投げ捨て、腰にさしていた拳銃を抜く。

龍司は地面を蹴り、高速で女を押さえつける。

他の柱に隠れていた敵は『演算銃器』スマートウェポンで足を打ち抜き、銃は理香の

『座標移動』アップポイントで離れた場所に飛ばした。

「制圧完了、か？」

押さえつけて気絶させた女を放置し、周囲を見る。

警戒して辺りを探ったが、敵はいなかった。

八重に連絡し、『獵犬部隊』に回収させることにした。

「（ー）（v）」

「おう、お疲れ」

黒い収集車の中で、適当に飲み物を飲みながら会話している。

(……何で会話が成立してるんだ?)

運転手の疑問は至極当たり前ではあるが、会話が成立しているのだからしょうが無い。

実際、聞いている側からすれば、

「(ー)v」 「小かつこオーバーラインダッシュオーバーライン小かつこ閉じるブイ」

としか聞こえないのだ。理解しろと言う方が無理だろう。

「……それで、次は何処へ？」

「一旦合流する。情報を纏める必要があるだろうし、光輝と梓が逃がした敵も確認する必要がある」

「わかりました」

光輝の『幻術使い』の能力を持ってすれば、顔と声を再現することが可能だ。

だが、脳に作用する為に機械などを用いると意味が無い。だから合流する必要がある。



速い話、八重からの連絡を待つのが面倒なだけなのだが。

そして、全員を回収した黒い収集車内。

「いや、まいったね。まさかあんなレベルの敵が居るとは思わなかった」

「油断は死を招く。気をつける事だな」

「分かってるって。そんな睨みつけないでよ、龍ちゃん」

誰が龍ちゃんだ。と返しながら情報を纏める。

魔法剣士の男の顔と声を確認し、対策を練る。

「銃は使ったのか？」

「残念ながら『衝槍弾頭』シヨックランサーを使う機会は無かったよ」

『衝槍弾頭』シヨックランサーとは、表面に特殊な溝を刻む事で、銃弾をなぞるように迫る『衝撃波の槍』を作り出し、破壊力を何倍も増幅させている弾丸だ。

その威力の高さはその辺の魔法使いの障壁なら容易く貫ける。ちなみに対魔法使い戦ではほとんどの人員がこれを使っている。

弾丸が空気との摩擦で発生させる熱で溝は消滅し、敵対組織に回収されても仕組みがバレないという利点もある為、戦闘では重宝して

いるのだ。

この弾丸の真骨頂は弾の後の衝撃波なので、神鳴流の様に弾丸を切っても意味が無い。

「なら、障壁の堅さは分からない訳か」

「流石に理香ちゃんの『座標移動』は防げないだろう、『切り札』<sup>ジョーカー</sup>は隠しておいた方がよくないかい？ 瞬動も相当練磨されてたし、当てるのは難しいかもしれないよ？」

「ならどうするんだ？ 動きを止めて『座標移動』で潰すのが手っ取り早いだろう」

「私がやるわ。それなら問題ないでしょう？」

奏の言葉に二人は黙る。

「……一応サポートはするよ。まかせつきりには出来ないしね」

「俺達の目的は『物』の回収だろう。倒す事が目的じゃ無い」

「どの道、彼が持つてる可能性もある。彼が護衛なら、倒さなきゃ回収はできないと思うよ？」

ハア、と龍司が溜息をつく。

「……面倒な敵だな。八重は何と言っている？」

「回収できれば何でも良いって。潜伏しているポイントはもう割り

出した、『獵犬部隊』と一緒に制圧に乗り出すって言ったよ」

龍司の問いに梓が答える。

怪我はもうほとんど治っている。相変わらず治癒が速いな。と呟く。

あの医療キット。龍司自身は使った事は無いが、相当な代物らしい。

「しかし、もう割り出したのか。速いな」

「尋問が面倒だって。社長が頭を直に覗いたらしいよ?」

なるほど。とその場の全員が頷く。

相変わらず規格外だ。と全員が思いながら次の確認をする。

「日時はどうなってる? まさか今すぐとは言わんだろうな」

「今夜零時よ。夜の方が動きやすいしね」

今夜零時。『グループ』と『獵犬部隊』による狩りが始まる。

## 外伝一 動乱（後書き）

ギャグを織り交ぜつつシリアスに話を進めるって難しい。

龍司と理香の戦闘シーンはメタルギアをイメージ。能力使ってる時点でいろいろ破綻してますけどね。

主人公がスゲー空気。外伝だから当たり前だけど。読み直したら特に「能力使って武力チート」とかして無かった。

感想はいつでも募集しております。

追記。シスターズを出して欲しいと言われたが、ヒュ・ズ「カザキリとエイワスが居る時点で多分完全なる世界側完全に詰むよ？

後戦力過剰もいいところだと思う。俺自身は全然構わないんですが  
(え

ここまで来ると新しい転生者（もちろんチート）でも出てこないと話にならない。

エイワスは命令とか聞かないと思うけど、カザキリなら行けるでしょうし、て言うかガチで天使と戦える奴とフェイトとか戦闘に成るのか？雷速とまともに戦えるならいけるかもしれませんが。

それ以前に創造主エイワスに勝てるのか？正直エイワスが負けるイメージができないのは俺だけじゃないはず。

外伝一 終幕（前書き）

最近劣化気味。というか書く時間が無くて急ぎ気味でうまく書けない。  
もしかすると更新が隔日じゃなくなる可能性大です。

## 外伝一 終幕

九月二十二日 午前零時。

東京、及び東京周辺にて戦闘が起こっていた。

その殆どは『パワードスーツ駆動鎧』を着ている『パワードスーツ獵犬部隊』と、とあるカルト集団が武装しての戦闘だ。

とはいえ、『パワードスーツ獵犬部隊』の数そのものは其処まで多く無い。

カルト集団側には魔法使いや魔法を使わないプロも混じってはいたが、『パワードスーツ獵犬部隊』にも能力者はいるし、『パワードスーツ駆動鎧』を装備している『パワードスーツ獵犬部隊』相手に唯武装しただけでは勝てない。

能力者はその殆どがレベル0〜2。まともに戦闘に使える能力では無いが、ある程度は役に立てることが出来る。

銃弾と悲鳴、怒号と銃声が辺りに響く。

既にこの辺り一帯には、能力者が深層心理に働き掛ける特殊な結界の様なモノを張っている。

戦闘では無く、隠蔽を専門とした部隊『ブロック』。

基本的に『グループ』や『スクール』の後始末の為の組織なので人数は多く、その仕事は速い。

そして、夜は更けて行く

「……」か」

黒い収集車から降り、一言つぶやく。

「うん。ここが敵の本拠地だ」

「ボロっちいね」

「そんな物よ、テロリストって」

「(。。。。)」

其処には、廃墟と化した建物。もとい工場があった。

海に面しており、港として使える場所でもある。

雑草も生え、閉鎖されたままの状態である為、隠れる場所も多い。

入口の柵を切り抜き、堂々と中に侵入する。最低限物音を立てない様にしたりはしているが。

竜司・理香。梓・光輝・奏。

班を二つに分けて内部へと入る。

梓・光輝・奏。

カツン。足音が鳴る。

工場内を歩き回り、地下への道を見つけた。

「でも、簡単には行かせてくれないみたいね」

「当然よ。私とて雇われの身でね、もう一人いるんだけど、そいつは別の場所行ってるのよ」

チツ、と舌打ちをする。

予定が狂った。大剣を持った男は別の所に居るらしい。

先に倒して、龍司達の援護に向かうことにする。

そう決め、腕を動かして空気の糸を一齐に女へと向かわせる。

無数の糸が女に絡みつき、肉体をバラバラに　しなかった。

「っー」

障壁で一瞬防ぎ、後ろへの瞬動で範囲から逃れる。

「……なるほど、空気が。全く、超能力者ってのは扱いが面倒で困る」



そう言う言葉が聞こえた。

直後、複数の魔法の矢が飛んでくる。

全員散って避け、建物の陰に隠れる。

(……無詠唱魔法)

詠唱を行わず、ほぼインターバル無しで放てる魔法。

こいつも魔法剣士タイプか、と考える。

「梓」

コクン、と頷き、集中する。

バコン！！ と派手な音を立て、隠れているであろう柱を破壊する。

そして、張り巡らされた糸で女を捕まえ、光輝が『幻術使い』の能力を発動させようとする。

「『雷の暴風』」

ゴッ！！ と壁を喰い破って外へと魔力の奔流が突き抜ける。

咄嗟に避けたものの、演算式が乱れた為に能力が一時的に解ける。

「チッ！」

銃声が響き、銃弾が飛び交う。

女はサブマシンガンを持ち、辺り一帯を薙ぎ払うように撃つ。

奏は直ぐに演算式を組み直し、糸で壁を作って銃弾を防ぐ。光輝と梓は建物の影にまた隠れる。

銃を撃ちながら詠唱を始め、それに気付いた奏は糸を増やし、攻撃に転じる。

そして、攻撃がぶつかる。

「空気を使ってるなら、空気をかき乱してみたらどうかと思ったんだが、正解かな？」

予め用意しておいた遅延呪文、ディレイ・スベル『紅き焰』をぶつけ、空気を一瞬無くしてから数十の魔法の射手。

恐らくはやっただろう。

「どうしてそこまでの確に超能力に対しての戦い方が出来るのかな？」

「何、昔。と言っても二、三年前だが、超能力者と戦った事があったね。おかしな能力を使ってたよ。確か『鏡花水月』とか言ってたね。アレはビックリした、攻撃した筈なのに其処に居ない。ぬらりくらりと攻撃を避けられる。逃げるので精一杯だったよ」

それ本当に原石か？ と思った光輝は悪くないだろう。

確かに原石は人工的な能力者と違って特異なモノが多いが、この女の言っているのは違うんじゃないの？ と光輝は思考するが無駄だとあきらめる。

「でもま、関係無いよ。この戦い、僕たちの勝ちだ」

「何を言っている？ 一人やられたのに、随分と余裕……」

「やられた？ 随分と愉快的な夢を見たみたいね」

クスクスと笑う奏。

そして、自身の隣に現れる光輝。

「残念、さっきのは偽物なんだよ」

そして、その両手にはサイコロの様な四角い何かが握られている。

「君は動けない。終わりだよ」

そして、そのサイコロの様なものを投げた。ソレは女の近くで何かに潰されるように凹み、爆発した。

爆炎と衝撃が身を包む。

「ケホケホッ！ …… ちょっと威力が強かったかな？」

「障壁あるんだし、良いんじゃない？」

そして、部屋の外から三人が現れる。

「しかし、何よそれ」

「社長から渡されてたんだよ。確か、『TNTポケットキューブ』だったかな」

威力はダイナマイト級の衝撃で爆発する爆弾だ。ぶっちゃけ人間に使う様な代物では無い。ついでに言うと潤也が作ったネタ武器である。

（というか、何がネタ武器だよ社長。一人簡単に殺せるじゃないか……って、まだ死んでないみたいだけど）

障壁で多少阻まれた上、爆発したのは体から少し離れていた事、魔力で身体強化をしていたらしく、気絶し、やけど、片腕が吹き飛んでいるなどの大けがを負っているものの、死んではいなかった。

「……頑丈ね、アレ喰らっても死なないなんて」

「全くだよ」

真正面から戦うのは光輝のやり方では無い。

裏をかき、手の内を隠し、敵を騙して戦う。それが光輝のやり方。

「ふふ、ジャスト一分だ。いい夢は見れたかい？」

そして、三人は奥に歩を進める。

理香・龍司ペア。

爆発音が壁に響く。

「……あつちは随分ドンパチやってるみたいだな。こっちもさっさと終わらせたいモンだが」

ゴト、と大剣を降ろしながら男は呟く。

「チツ……」

相対する龍司は傷だらけ、理香は頭を打ったのか、血を流している。

「下がってる、理香。俺がやる」

「おいおい、お前一人じゃどうにもならん事は証明済みだろ？ 今更一人で戦っても勝てるとは思えねえよなあ」

だが、頭に怪我をし、能力を満足に使えない理香では、唯の足手まといにしかならない。

「ふん、関係無い」

「そうかい、なら……」

ブオン！ と大剣を勢いよく振り回す。

「潔く死ね」

ダンッ！ と地面がへこみ、勢いよく、弾丸の様に龍司に迫る。

それを紙一重で避け、距離を取らず、そのまま殴りかかる。

それを避け、大剣を振りまわしつつ詠唱を始める。

「魔法の射手 連弾・火の十五矢」

複数の矢が龍司を狙い撃つ。

それをかすりながらも避け、近づいての近接戦闘<sup>インファイト</sup>。

『グループ』内で唯一気を扱える上、『発条包帯』<sup>ハードテーピング</sup>で底上げしている為、その身体能力は『戦いの歌』などを使った魔法使いに劣らない。

だが、『発条包帯』<sup>ハードテーピング</sup>は本来『駆動鎧』<sup>パワードスーツ</sup>と併用して使うモノである。

『駆動鎧』と比較して分厚い装甲や巨体が無い分、小回りが利いてより機動力が増した事が利点だが、使用者を保護する身体的プロテクトが一切存在しないため、身体に対して甚大なる負担をもたらす。

そして、龍司はそれを『<sup>オートリパース</sup>肉体再生』で補う事で使用時間を延ばして

いる。

だが、現在それなりの時間使い続けている。

体への負担は馬鹿に出来ない。怪我をしても再生するが、それにまけて治療しなくていいと言う訳ではないのだ。

(……流石に、俺には荷が重いな)

既に、あちらも剣を置いて殴り合いに発展していた。

身体能力はあちらが上、経験もあちらが上、射程も魔力も気もあちらが上。

ならば、どうやって勝つ？

条件をリスト化し、勝つ為の条件をリストアップする。

一人で戦うには荷が重すぎる。だが、理香は戦線離脱状態。期待しろと言う方が無理だろう。

他の三人は別の所で戦っている。こちらへ呼ぶにも時間がかかるはずだ。それ以前に呼ぶ時間が無い。

「考え事する余裕があんのかい？」

至近距離での魔法の矢。

ネギの使う様な拳に乗せての攻撃を放ち、龍司は壁を破って外にでる。

ブオン！！ と風を切るような音と共に大剣を振り下ろされる。  
間一髪で避け、体制を整えようとする。

「させねえつての！」

大剣を振りまわし、体制が崩れたまま避け続ける。

「終わりだ……」

横風に振るわれ、首に掛かる

ガキイイン！ と音を立て、大剣が床を転がる。

「危ない危ない、危うくやられるところだったわね」

「奏……あいつ等は、どうした？」

「先に行ったわよ。あっちのルートにいた女は倒したしね」

「アア？ あいつを倒したのか？ ……殺したのかよ？」

「いいえ？ 死んで無いわよ。ギリギリで。腕は吹っ飛んだけど」

チツ、と舌打ちし、大剣を拾う。

「で？ もうアレは奪ったのか？」

「今奪ってる最中よ……っと、言ってるそばから連絡が来たわね」



携帯を懐から取り出し、通話する。

「もしもし？ ……うん、分かったわ。こっちもギリギリで間にあったし ……ええ、じゃあ直ぐに」

携帯を切り、男に向き合う。

「あなた傭兵でしょ？ もう戦う意味無いんじゃない？ 既に例の物 『中性子爆弾』は確保したそうよ」

「 ……そうだな。お前等が戦った相手を生かしている事にも驚きだが、もうここまでやられてるんなら見捨ててもいいだろ。じゃあな」

そう言つて、男は転移魔法で消えた。

静寂。

戦いが終わり、力が抜けて息を吐く。

「お疲れね。おぶつてあげようか？」

「構わん、一人で歩ける」

ふらふらしながら立ち上がり、歩き出す。

「理香にお礼いつときなさいよ。私に連絡したのあの子なんだから」  
「そうだな。と言い、そのまま歩き出した。」

コツン、コツン、コツン。

規則正しく足音が鳴る。

「クソ、あいつ等容赦ねえな。片腕吹っ飛ばしたってこんな傷口にならねえだろ、普通」

男の呟きが聞こえる。

そのそばには寝ている女性。ただし、右腕が無い。

コツン、コツン、コツン。

「割のいい仕事だと思ったのによ。仕事だったとはいえ、コレで恨むなっつう方が無理だわ。『SMG』！」「

声に怒気をはらませ、呟きは大きくなる。

コツン、コツン、コツン。

其処で、男は足音に気付く。

大剣を構え、ゆっくり、足音を立てない様にドアへと近づく。

詠唱をし、遅延呪文を用意し、身体強化の呪文を掛ける。

コッソ、コッソ。

足音はドアの前でとまる。

ザン！！

鉄でできた壁をいとも簡単に切り裂き、そのまま遅延呪文を解放して『紅き焰』を放つ。

魔力も気も使った感じは無かった。だが超能力者の可能性もある。油断はしない。

死体もみずに気を抜くのは三流だ。

「っつーかよオ。あいつ等が手強い相手だったとか言うから来てみたって言うのによオ。何だア？ このバカみたいな三下は」

其処に居たのは。

無傷で、いらついた顔をした色素の薄い赤髪の少年。

「で、調べてみれば賞金首。額は確か二百万ドルっつーそれなりの額だった見てエだが。こんなもんかよ。ツマンネエな、オイ」

「……また超能力者か。うざったらしい」

「また？ ……オマエ、随分と愉快的な勘違いをしてるみてエだな」

「……何？」

「超能力者つてのはな、強度分けされてんだよ。お前等と戦った奴らは最高でレベル4」

一息置き、口元を歪めて言う。

「俺はレベル5だ。格が違うんだよ。今なら投降すりゃ無傷で助けてやるが？」

まるで相手にならないと言いたげにそう告げる。

「ふっざけんじゃねえよ！ 誰が投降なんてするか！ あいつの腕を奪ったんだ！ 手前等全員同じ目にあわせてやるよー！」

「そうか、哀れだな。オマエ」

男は大剣を振りかぶり、振り下ろす。

「もう少し有能なら、生き残れただろうによ」

グシヤッ。

事後処理は『獵犬部隊』と『ブロック』に任せ、『グループ』の仕

事は終了した。

重症の龍司は入院するはめになったが、其処まで期間は長くないとの事。

それ以外のメンバーはおおむね普通どおりに過ごし、いつも通りの日常を謳歌している。

賞金首の二人組はぎりぎり生きており、メガロへと引き渡された。

……なお、潤也は千雨の部屋に遊びに行ったら着替えに偶然遭遇してしまった為、冗談抜きで本気の張り手を食らわされた上、五日間ほど口を聞いてもらえてなかったらしく、相当不機嫌状態だったので、八つ当たりで賞金首は両手両足が使い物にならなくなったとの事。

## 外伝一 終幕（後書き）

外伝終了。なんとなく後で書き直しをしそうな気がする。もう少しクオリティを上げる為に。

TNTポケットキューブ……知ってる人いるかなあ？ 居ないと予想。気になる人が居るなら教えますが。

千雨に関しては小さい頃から見えてきてはいるんですが、もう住んでる場所違うし、あれですよ、恥ずかしいんですよ。

「わ、悪い！」「もう、仕方ないなあ」「みたいにはならない。どこのギャルゲーだよ

そんな感じで解釈してくれるとありがたいです。

今回は本編に。裏の話無しで、千雨視点。

コレが書きたかった。こっちが書きたくて外伝はモチベーションが保てなかった。

ちよつと書く時期間違えたかな、とは思つ。

夏休みに入ったらクオリティの高いやつ書くよ、きつと（え  
午前中学校何ですがね。

夏休みなのに学校とかソレなんて鬼畜？ と言いたい。おかげで執筆時間が減るじゃないか。  
できつる限り頑張りますが。

追記、シスターズは出さない事になりそうです。エイワスは出無くてもヒューズ「カザキリなら……」とは思わないでもないけど、うん、過剰戦力には違いない。

地平線という距離に居る相手を地殻ごとぶっ飛ばしますからね。理

不尽。

第十二話「あの兄にしてこの妹あり、だね」bY龍宮（前書き）

外伝は黒歴史。読み返してそう思った。本気で。

総合評価四千超えありがとうございます。これからもがんばりますのでよろしくお願いします。



## 第十二話「あの兄にしてこの妹あり、だね」b y 龍宮

携帯の着信音が鳴る。

眠い目を擦りながら携帯を手に取り、電話に出る。

「……もしもし？」

『あ、長谷川？ 今アンタのお兄さん追っただけだよ。明日菜とデートしてるっばいよ？ 気にならない？ なるよね？ 場所は……』

「こちらが何かを言う暇も無く、朝倉がそう続ける。

潤也がデート？」

珍しい事だが、私は別に知った事じゃないし……。

……何だか、胸の辺りがちょっとズキンとする。締め付けられるっていうか。なんていうか……。

良くは分からないが、あまり調子が良くない事だけは確かだ。

そう思いながら簡単に朝食を作って食べ、冬用の クリスマスに潤也がプレゼントしてきた 赤いコートを着て、朝倉のいるであろう場所を目指す。

「あ、来た来た。遅いよ、早く隠れて」

そう言って朝倉と物陰に隠れながら潤也の様子をうかがう。

二月に入ったばかり、しかも朝なので相当冷える。でもコートがあるから其処まで無い、と言ったところだろう。

潤也は白を基調とした冬服を着ている。似合ってるな、あれ。

神楽坂は冬用のコートを着てマフラーを巻いている。

二人とも結構似ている為、兄妹に見えない事も無いし、カップルに見えない事も無い。

……ちよつとイライラしてきた。何でかは分からないけど。

二人は笑いながら町を歩き、時折店に入っては何かを探すように店の中を歩き回っている。

「ホント、あの二人お似合いのカップルじゃ無い？ 似てるから兄妹にも見えるけど」

「さあ？ でも、あのオジコンのアスナが同学年の潤也君に惹かれるとは思えないけど」

目の前で朝倉と早乙女が話している。

他には木乃香、那波、佐々木、柿崎、釘宮、椎名がいる。

周りを見ると追跡、もといストーカーは既に結構な人数に達しており、数人ごとに分かれているんなところに隠れて様子をうかがっている。

どうしてウチのクラスはこういう事だけ行動が速いかな……。

軽く頭を悩ませながら、追跡を続ける。

『こちらブラボーチーム。む、アレは……洋食屋かな？ 二人とも入っていくよ』

龍宮がそう報告し、一斉に入って行った店、洋食屋を見る。

外装を綺麗に装飾された店で、上品な印象を受ける。

「あ、ここ知ってる。確か凄く美味しいって有名なんだよね」

「前に行った事あるな。確か木乃香達と何度か」

「うん、行った事あるえ。アスナもここ美味しいってしつとるやろうし、それ含めて此处選んだんちやうかなあ」

「どうでもいいが、私達もそろそろ昼食食べないか？ 時間的にも丁度いいだろ」

私達はそれぞれ監視できる場所に移動し、順番に昼食を食べる事

になった。

近く、というか隣のファミレスに入り、窓際の席から潤也達を見る。

「それにしても、潤也君がデートねえ。何だか盗られた気分」

「盗られたって……那波の物じゃないだろ」

「あら、それじゃあ千雨ちゃんのもの？」

ウフフ、と笑いながらストレートに聞いてくる。

いや、物とかそういう事じゃなくってだな……。

「お？ お？ なんだかラブの予感？」

「うっさい黙れ」

「イエス・ボス！」

早乙女を一睨みして黙らせ、監視を続行。

適当に昼食食べつつ、普通に食べに来た女子中学生を演じつつ監視。

『洋服、小物、化粧品、ブティック、アクセサリ。その他いろんな店に入っては見て回ってるようでござるが、何も買って無いみたいでござるよ?』

ウチのクラスの忍者（公然の秘密）が潤也と神楽坂を尾行しながら報告する。

あの二人、どうにも麻帆良でもいろんなものが売ってあるショッピングモールだったり商店街だったりを回っているらしい。

何か欲しい物でもあるのか？ それとも唯のショッピングか？

「うむ、やっぱり唯のデートかな？」

「いや、それにしても見て回るだけって事は無いでしょ。流石にそれだけやるなら何処か別の場所に遊びに行くとかするだろうし」

「いやいや、恋人なら会えるだけでうれしいモンなんだよ」

「おおつ、流石クラスで唯一の彼氏持ち！ 言う事が違う！」

柿崎が当然の様な顔をして言うが、潤也の性格的に二人の内どっちかが欲しい物があつたら、よっぽどの物じゃない限り買いそうな気がするんだが。

二人はニコニコ笑いながら次の店に入る。

……なんつーか、こつ、もやもやするな。

「ん、ん〜？」

「どうしたん、パル？」

「いや、なんかラブ臭がね……」

早乙女がアホ毛をびくびくさせながら言う。

そんなアホ毛は引き千切られてしまえ。さっきのはラブとかじゃ無かったぞ。

家族愛的な事ならラブかも知れんけど。

まあ今は関係ない。

「ブラボーチームは引き続き遠距離から気付かれない様に監視。アルファチームは気取られない様に尾行。常に情報を流せ」

『『了解（でいざる）』』

無線機《何故か龍宮が持ってた》を使用し、連絡を取りつつ尾行。

「何だか長谷川が秘密結社のボスみたいに見えるよ」

「間違つて無いと私は思うね。スクープの予感？」

「黙ってる」

「イエス・ボス！」

またも一睨みして二人を黙らせ、双眼鏡で監視。

周囲に気取られない様に尾行つて中々難しいからな。

長瀬を《忍者と言う理由で》先行させ、道順は龍宮に《眼がいい、後自発的にやるといったから》双眼鏡などでナビをさせつつ状況を報告させる。

アルファチームは長瀬を筆頭に運動神経の高い連中をばれない様に配備させ、ブラボーチームは龍宮を筆頭に遠距離からの監視、及びナビゲート。

私達は普通に買い物に来たと周囲に思わせつつ尾行を続行。

途中誰かと電話で話している様だと報告があつたり、ソレを聞いてて神楽坂の顔が引きつっているると報告があつたりしている。

龍宮が「あの兄にしてこの妹あり、だね。兄妹そろって人を顎で使う事に長けてるんじゃないか？」と、刹那と話していた事は余談である。

その時、着信音が鳴る。

「あ、私のだ」

朝倉が携帯を取り出し、通話し始める。

近い上に声が大きい為、私にも会話の内容が聞こえてきた。

「あ、東堂先輩。どうしたんですか？」

『どうしたじゃありませんわよ！　あなた、そろそろ謹慎とかの処分が出ますわよ？』

「……え、マジですか？　と言うか何ですか？」

『マジですわね。あなたのジャーナリスト精神は認めますが、少々入り込みすぎですわ。少し抑えなさい』

「いや、そう言う訳にも……」

『何度か迷惑だと学校に連絡が来て、新聞部の部費の削減も予定されてますの。少し自重しなさい！』

「え！？　部費の削減！？　私の所為じゃないですよ。先輩だってそうじゃないですか！」

『わたくし私はちゃんと限度を弁えていますわ。迷惑だと言われる一歩手前で退くのがプロですわよ！』

いや、それもどうかと思うんだが。

迷惑だと思われなような行動をしるよ。

「……うう、分かりました」

『よろしい、ならば直ぐに長谷川潤也の尾行を中止しなさい』

「はい……って、何で知ってるんですか？」

『先ほど迷惑だと私に直接連絡が来ましたのよ』



「え、マジっすか？　っていつか東堂先輩の連絡先とか潤也君知ってるんすか？」

『一度取材させて貰った事がありますのよ。その時に何かと便利だから、との事で連絡先を交換しておきましたの。あの人中々情報通ですからね』

「分かりました。直ぐに止めます」

ピ、と携帯を操作し、向き合う。

「よし、追跡を続行！」

駄目だコイツ早く何とかしないと。

とか思ってる間に潤也達が移動しているらしく、尾行。

「朝倉と長谷川が本当に不味い気がするんだけど？」

「ソレ私も思った。でも、ここまで来たら私達も引けないわよ！」

チア組が何か言ってるが、スルーだスルー。

……というか、連絡がいつてるなら既にバレてるんじゃないか？

そう思ったが、全員ハイテンションになっていて話を聞きそうに無いので気にせず尾行。

『こちらアルファチームでございます。どうやら店に入って何か買った様子でございますが』

「了解、龍宮、見えるか？」

『小さい袋が見える。包装してあるところを見ると、誰かにプレゼントでもするつもりなのかな？』

プレゼント？ 誰に？

潤也から神楽坂に、か？

……気になるな。

「長瀬、会話を聞き取れないか？」

『難しいでございますな。隙が無い、というか街中では結構近づかないと会話は聞こえないでございますし、あの二人、異様なまでに勘が良いでございますから』

……どうするか。潤也に聞くつても無理だろうし、神楽坂に聞くのは……木乃香に任せるか？

でもそれだと部屋に戻ってからじゃないと怪しまれるだろうしな。

「本格的に何処かの悪の秘密結社が秘密を探ろうとしてるみたいだ

ね

「しっ、パル、それを言っちゃ駄目。千雨ちゃんはそのカッコイイお兄さんが気になってんのよ」

「お？ 近親？ 近親？」

「黙ってる。いい加減アホ毛引き抜くぞ」

「すみませんでした！ ボス！」

双眼鏡で監視しつつ早乙女を黙らせる。

気になってるのは認めるが、そういう感情じゃねえよ。

なんつーか、こう、上手く言えねーけどさ。

例えるなら、可愛がってた弟に彼女が出来た、見たいな感じ。兄貴だけど、むしろあっちが可愛がってたけど。

……ヤバい、余計な事考えなきゃよかった。ちょっと顔が赤くなっ  
って来た。

深呼吸して気持ちを落ち着け、監視を続行。

そろそろ日が暮れるんじゃないか？ そう思って周りを見ると、夕焼けが見えた。

「もう日が暮れる時間か」

「そうね、デート楽しかったでしょうね」

「……………」

なんだか傷口を抉られた気分だ。

『あゝ、ちょっと良いでござるか？ 隊長』

「どうした、長瀬」

『見つかった。というか捕まったでござる』

「……………ハ？」

『いや、だから捕まったでござる。どうすればいいでござるつか？』

見つかった？ 捕まった？ 体を鍛えてはいるがそれこそ平均的な身体能力の潤也に？

というかそれで私に連絡するなよ。見つかったら面倒だろ。

「お前の犠牲は忘れない。総員退避！」

バツ、と蜘蛛の子を散らすように一斉に散って逃げる。

私はというと、逃げる瞬間に那波に捕まえられ、龍宮が何故か私を捕縛して連れて行かれた。というか龍宮、なぜいるんだ。

木乃香を先頭にどこかへ向かって歩いていく。

「は、離せ！ 何で捕まえるんだよ！」

「いや、潤也に頼まれてね」

「サプライズ、と言う奴よ」

サプライズ？ 何のだよ。

そう思いながら引き摺られ、潤也と神楽坂の近くに来る。

まわりには木乃香、長瀬、那波、龍宮、桜咲、神楽坂、潤也がいる。ニコニコして何のつもりだお前等。

桜咲だけちょっと離れた場所に居るが、何でだよ。

広場の様な場所だが、時間が時間だからか、他の人が居ない。全くといって良いほどに。

「えっと。はい、千雨ちゃん」

神楽坂がそう言って包装された袋を手渡して来た。

「……私に、か？」

「うん。ハッピーバースデー。誕生日おめでとう、千雨ちゃん」

ハッピーバースデー！！ と一斉にクラッカーが鳴る。

一瞬呆けて、ビックリする。

「は？ って事は、お前等……」

「この為に手伝ったんだよ」

「にんにん。驚いたでござるか？」

……オイオイオイ。

尾行してデートを監視してた事も全部お見通しかよ。

「朝倉は邪魔だからご退場願おうと思ったんだが、無理だったみたいだしな」

余計な噂まで散布しかねなかったから邪魔だったとの事。

其処で急遽、捕まった事にして散らせた、と言う訳らしい。

私の行動お見通しかよ……潤也なら確かにやりかねないが。

「って事は、神楽坂とのデートってのは……」

「あ、やっぱり朝倉達そんなこと言ってたんだ。潤也にプレゼントを選ぶのを手伝って貰ったのよ。木乃香は先に買ってみたいだったしね」

なるほど、ね。

ちょっと放心していると、潤也が近づいてくる。

「ハッピーバースデー。千雨」

にっこりと笑って潤也が包装された立方体の箱を私に渡す。

それを笑って受け取り、他の奴らからも次々にプレゼントを渡される。

うれしいな。うれしいんだが。

……ヤベエ、私すっかり忘れてた。潤也へのプレゼント用意してねえ。どうしようか。

「その様子だと、プレゼント買うのを忘れてたって所かしらね？」

那波に見透かされ、言葉に詰まる。

潤也の方を見ると、変わらずニコニコ笑っていた。

「いいさ、俺は千雨が笑顔ならそれでいい。俺へのプレゼントは千雨の笑顔だ！」

恥ずかしいセリフを照れる事無く言う。

それに私はちょっと顔を赤くしながら、深呼吸して潤也の方を向く。

「ハッピーバースデー。潤也」

上手く笑えたかは分からないけど、精一杯笑った。

潤也もうれしそうに笑って、他の奴らのほうを向く。

「よし、これからパーティーだ！ 許可は既に取っている。存分に騒げ！ 他の奴ら呼んでもいいぞ！！」

そう言つと、思い思いに人を呼び始める。

集合場所は近くの店。貸し切つたらしい。先生も呼んで許可を取つたとの事で騒いでも怒られたりはせず、問題無いらしい。

集合時間を告げ、全員が一度帰ることにした。

雪が降り始め、また冷え始めた夜道を歩く。

潤也からのプレゼントはブレスレットだった。

いつでも付けていて欲しいと、こういうモノにしたらしい。

ペンダントやネックレスと迷った。とも言っていたな。

「何にしても、デートってのは杞憂だったか……」

なんとなく口をついて出たが、デートに杞憂ってどういう事だよ。

ソレを聞いていたのか、潤也も驚いている。



「……俺はさ。いつでも千雨の傍にいるよ」

昔、同じ言葉を聞いた気がする。

みんなと違う、と苛められていた頃。同じ事を言ってお守ってくれていた。

「ずっと、傍にいる。賭けてもいい」

「……賭けてもいい、っていうのはさ。余程の自信が無いと言っちゃ駄目なんだぞ？」

「大丈夫さ。自信がある。俺はずっと傍にいる」

賭けてもいい。

その言葉が、胸の奥にすっぱり収まる。

何だか暖かくて、自然と笑顔になった。

久しぶりに潤也と手を繋いで、雪の降る夜道を歩いていく。

第十二話「あの兄にしてこの妹あり、だね」b y 龍宮（後書き）

千雨がヤンデレな一面とかキャラ崩壊を見せた気がしないでも無い今回。

やっぱり日常は書いてて楽しい。うん。

本当に二月二日にやりたかったけど、待てないので投稿。一応本編と関係ありますので。

というかこれハーレムになるのか？ 完全千雨ルートに入った様な気がする……。

大丈夫、他のヒロインにこれから期待しよう（え

賭けてもいい。これは名言だと個人的に思う。漫画版『魔王』より抜粋。

次はちよつと飛んで夏休み、かな。その後ちよつと原作に関係ある話になると思います。

第十三話「そう言うのはカップルでやる事やと思つえ」「b y 木乃香（前書き）

宿題が多い。下手すると夏休み入る前より大変です。  
遅れても仕方が無い。うん、仕方、無いですよね？

第十三話「そう言うのはカップルでやる事やと思っえ」by木乃香

夏休み。

二年生になり、一学期を過ごし、夏休みに入った。

最近神楽坂が良く来る。

寮に入ってくる訳じゃ無い。千雨以外が入ると確実に口説かれるからな。主に楣咲に。

ちなみに千雨が入ってくると、ほぼ全員無言で道を開けるらしい。  
千雨談。

だから近くの喫茶店に呼び出されたりしてる訳だ。

で、神楽坂は高畑先生に告白したいらしい。

だが、「今年こそは」と意気込んだは良いものの、麻帆良祭では告白できなかつたとの事。

今度は告白したいから協力してほしいと言って来た。

適切かは分からないが、アドバイスして勇気が出るように話してと、まあいろいろやった。

そして当日。男子寮。

「レッツ夏祭りイイイイイイイイ!!!」

『イエエエエエエエエ！！！』

取りあえず馬鹿みたいに騒いでいるこいつ等をどうにかしたい。

「大変だな、潤也も」

「全くだ。最終的に俺が鎮圧したからな」

結局、寮の管理人に「やかましい！！」と怒鳴られ、それでもテンションを下げなかつたので鎮圧。

主導は相咲。沈めておいたから今日の夏祭りにはこれないだろう。

「夏祭りだからと羽目を外し過ぎていいと思っているのなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」「そげぶっ！」「とか言うやり取りがあつたのは、まあおいとくとして。

それより、俺は一つ言いたい。

俺の妹は世界一！！！！

浴衣着てる女の子ってすごく萌えるよね。すごく好きなんだよ。

髪もいつもとちょっと違ってあげて纏めてるし凄く綺麗。やっぱり浴衣には女の子を綺麗に見せる魔力があるよ。いや、千雨に魔力が無いとか言う訳では無く、浴衣は千雨の魅力を引き出すだけでしかない訳だが、それでも浴衣着てる千雨は誰よりも綺麗で可愛くて俺好みで世界一だって言いたい訳なんだよね。それにこの祭りの雰囲気もまた浴衣とマッチしてて一層良いよね。暑いけどそれでちょっと上気した頬とか色っぽくて艶やかで鼻血が出そうだけど耐えて見せるに決まってるじゃないか。やっぱり浴衣着た千雨は萌えるよね。いや、むしろ蕩れと言った方が……（以下略）

「帰って来い」

スパーン！ と空になったペットボトルで叩かれ、現実に戻る。

浴衣着た千雨を見て、また思考の無限ループに陥りそうになるが、何とか耐える。

ペットボトルをゴミ箱に捨て、屋台を見て回る事にした。

綿あめ、たこ焼き、お面等々。祭りに定番とも言えるこれらは当たり前のように鎮座している。

中には焼き鳥とか、クジとかもあるんだが、買わない。

クジは千雨があまり乗り気じゃ無かったしな。

「お、潤也。それに千雨ちゃん」

「ん？ ああ、護と廻か」

「よつす、潤也、千雨」

「おっ」

双子組が集まったな。

片や兄と妹、片や姉と弟という組み合わせだけど。

というか廻。お前随分と男勝りな性格になったなあ。

「……………いや、元からか？」

「何がよ。私の顔見て考え込むの止めなさい」

「いや、男勝りだな、と思ってな」

可愛くはあると思うんだが……………うん、完璧に性格で損してる。

「俺もそう思うよ。もう少し女としての自覚を持って欲しいね」

「雨中廻、武力介入を開始する」

ポコポコ殴られながら護に聞く。聞きたい事があった。

「梶咲どうしてる？」

「あゝ、あいつは逃げた」

「逃げた？」

誰から？ もしくは何から？

「仲芽黒から」

「……なるほど。でも良く生き返ったな」

「ああ、アレには俺もビックリしたよ『復活！』<sup>リ・ポーン</sup>とか言って復活したからな」

素っ裸になったのか。というか死ぬ気弾でも打ち込まれたのか梶咲は。

いや、そんな状況になるなっつー話だけだね。おかし過ぎるだろ。

「さあ、梶咲を探しに行くわよ」

「え、俺は千雨ちゃんと回りたい……ハイ、スミマセン。サガシマス」

……蛇の一睨みでカエルが動かなくなったな。

ドンマイ、いい事あるよ。護。

その後五分位ですっかり護の事を忘れ、金魚すくいをやっている。

「よっ、このっ」

ポンポンと簡単に取れるもんじゃないね。とっても育てきれないけど。



楽しむ為にあるよね、こつこついの。金魚にしてみれば堪ったもんじゃないけどさ。

「あ、千雨ちゃん」

「お、木乃香か」

こちらもまた浴衣着て綺麗。千雨とはベクトルが違う。

木乃香は大和撫子って感じだろう。遠くに見える桜咲も浴衣着ればいいのにな。つかストーカーは止めるよ。

「一緒に回るか？」

「そっやね、でもなー……」

「？ どうした？」

歯切れ悪く答える木乃香に疑問をぶつける。

「えつとな、アレ見て」

そう言って指差す先には渋いオッサンと神楽坂がいた。

タカミチ・T・高畑。千雨達の担任教師。出張が多くて千雨からは不評。

会わないから記憶から消えて行くんだよな。偶に思い出すから完

全には忘れないけど。でも最近は神楽坂からいつも聞かされてるから消える暇が無い。

「ああ、なるほど。デートか。時間はもう少し後だと思ってたんだけどな。教員の労働時間的に」

「正解や。潤也君に勇気もろたって言ってたえ。後、今日は出張から帰って来たばかりで仕事は既に終わってたって言うってたみたいや。後巡回」

そりゃこれだけ人が居ると何か起こってもおかしくないしな。巡回くらいはしてるだろう。

「まあ、アドバイスってか勇気づけはしたけど。其処まで大したことはやって無いと思うぞ?」

「ああやってデート出来とるんや、ウチら今までできひんかったんやえ? 凄いと思うけどなあ」

そうでも無いけどな。この日が近づくにつれてストレスっていうか、心労っていうか……が、溜まって来たとか言ってたけど、それを取り除いただけだし。

こういつとときにこそ超能力は役に立つ。……と言う訳では特に無い。

低周波振動治療器、と言う奴を使った。

見た目は唯の湿布の様な外見の電極で、両肩と背中に貼り付けて使用するものだ。

電流を流してストレスを軽減するマッサージ機のようなもので、脳波の乱れから最も効果的なパルスパターンを計算している。

ソレをデート前までやって不安やストレスを取り除いていた訳だ。

半分眉つばのつもりでやってたけどな、神楽坂。

原作では確か、普通に先生とデートしてた様な気もするんだが、何せ最後に読んだのは十数年前の事だ。記憶にはほとんど残って無い。

緊張もストレスの一つだし、普通に接している所を見ると効果はあつたらしい。

「取りあえず、見るだけってのも楽しく無いだろ。たこ焼きでも食べながら行こうぜ」

出店でたこ焼きとジュースを買い、食べつつ、屋台を除きつつ稚拙に尾行。

ある程度素人感を出さないと、プロと間違えられて余計な警戒されかねないからな。

「はい、あ〜ん」

「いや、流石にソレは……いや、ちょ………はむ」

たこ焼きを干雨に食べさせる。やべえ、かあわいいなあ。

もう一個食べさせるか。

「あら、仲がいいのね」

ウフフフ、と笑いながら千鶴が現れた。

流石に3・Aナンバーワンの巨乳。浴衣の上からでもそれが分かる。デカイ。

「え？ これ位普通だよな？」

「そう言うのはカップルでやる事やと思うえ」

「私もそう思うんだが」

木乃香と、若干顔を赤くした千雨が答える。

「……いいんだよ。俺のメモリーに千雨の可愛い画像を残したい」

「お前の脳味噌はパソコンか」

念写みたいに、写真の表面の電気を操ってインクを操作。画像を自由に作ったりもできるからな。ある意味パソコンだ。っていうかプリンター。

「でも、今日は村上はいないんだな？」

「夏風邪引いちゃったみたいだね。私はいいつて言ったんだけど、折角の祭りだから楽しんできてって送りだされちゃったわ」

「ああ、なるほど。風邪ならしょうが無いよな」

「途中まで長瀬さん達さんぽ部と一緒にだったんだけど、人が多くてはぐれちゃってね」

「ソレは大変だな。連絡は？」

「したけど、人ごみの中で探すのは大変だから各自で楽しもつて事にしたの」

なるほど、下手に時間使うよりいいが、一人で回る事にならないか？ それ。

「潤也君達が見えたし、丁度よかったのよね」

あ、左様で。

「で、どうする？一緒に神楽坂追うか？」

「あら、どうして？」

「アレだよ、アレ」

指をさした先には 誰もいなかった。

「あれ？ いない。見失ったかな？」

「話しかけたせいかしら？」

「いや、そんな事は無い。探そうと思えば連絡網があるけど……」

携帯を取り出し、少し考えてから携帯を仕舞う。

連絡は無しだ。

「……神楽坂を追うのは止めだ。やっぱり、こういつとき位二人きりにさせてやるのが友達ってもんだ」

凄く今更な気もするけどな。後、俺らの後ろからついて来てる奴らも解散させよう。

「……そうやね。ウチらも祭りを楽しもか」

「そうだな、祭りを楽しみに来たんだからあつちは無関係なよな」

「そうね、二人きりでデートさせてあげるべきよね」

……俺は時々、千鶴は全て分かった上で行動してるんじゃないかと思うんだ。

デートを知ってるあたり、特に思った。

ま、いいか。祭りを楽しむとしよう。

「まずは射的にでも行くか？」

「オツケー、今回こそ勝ってやる」

まず、後ろに隠れて俺達を追いかけた朝倉達を強制的に解散させた。

その後、近くにある射的屋で千雨に打ち勝ち、何故か居た龍宮と射的勝負で引き分けになり（両方全弾当てた）、花火があるらしいので良く見える場所に移動。

よくよく思えば、場所は龍宮神社なんだから龍宮が居ても不思議では無かった。

ソレはともかく、人が少ないポイントを龍宮から教えて貰い、移動。

まばらにだが人はいる。本当に数えるほどで、神社の所と比べれば凄く少ないし、花火も首が痛くなるほど曲げなくていいので楽。

後で飽き誇るべきかな。

ドーン！！ ドドーン！！ と派手な音が鳴る。

花火が夜空に浮かび、花を咲かせるように火が散る。

「た〜まや〜！ か〜ぎや〜！」

ちなみにこれ、江戸の二大花火師「玉屋」と「鍵屋」のことらしいよ。

花火が終わり、休憩ついでにジュースを買って寮近くの公園に居

る。

千鶴は村上が心配だと先に帰った。

「やっぱり祭りには花火だよな」

「そつやね、綺麗やったわ」

首が痛くなるほど曲げなくてもいいといつても、神社の場所と比べてと言うだけで、首は痛くなるもんなんだよ。

首を動かすと、乾いた音が鳴る。

ついでに辺りを見ると、見知った顔が二つ。公園の一角、こちらからも、多分あっちからも見え辛い場所にいる。

神楽坂と高畑先生。あの二人、何してんだ？

高畑先生に神楽坂が何か話してる。顔を真っ赤にしてるあたり、告白したか？

会話が聞こえるようにしたいが、隣で話す千雨達の会話で良く聞こえない。

神楽坂が俯いて、高畑先生が何か話す。

ダッ！ と神楽坂が何処かへ走り出した。

「……………振られたか？」



「いきなり何を呟いてんだ？」

「そうやえ？ アスナデート中やのに、なんか不吉やえ？」

「いや、その本人が、の話なんだが」

「「へ？」」

指をさし、高畑先生を見つけさせる。

「……あゝ、失恋か？」

「俺が見た限りじゃ、そうなるな」

多分。顔真つ赤で次に逃げるってそれ以外ないだろう。

「うーん、上手いかんかったんかなあ？」

「……潤也、神楽坂が何処行つたか分かるか？」

「分かるけど、何で？」

「追いかけてやれ。まあ、なんだ、お前なら安心するだろ、あいつも。今回ばかりは私もちょっと気の毒だと思っしな」

「……安心するの意味が分からないんだが。」

「取りあえず追いかければいいのか？」

千雨達を寮に送り（直ぐそこだったので数分も掛かって無い）、

神楽坂を追いかける。

場所なんて『アンダーライン滞空回線』でも使えば知るのには問題ない訳で、麻帆良の丘に居る所を見つけた。

「よう、神楽坂」

神楽坂はベンチに座り、意気消沈といった雰囲気であんなに沈んでいた。

「……あ、潤也。……ごめんね、手伝って貰ったのに、振られちゃった」

アハハ、と笑いながらそう言う。

「……全く、世話の焼ける奴だよ、お前は」

「え……」

というか、こういうのは俺のキャラじゃ無いと思うんだがな。千雨は何を思ったんだか。

ポン、と頭に手を置き、ぐしゃぐしゃと撫でる。

「悲しいときは、泣けばいいんだよ。無理して笑うことあねえ。俺の胸で良けりゃ貸してやるからさ」

頭を俺の胸の部分に押し付けるようにして、そう言う。

「強情張ってもしょうが無いぞ？」

「別に、強情張って、なんか……うっ」

うわああああん。

神楽坂の泣き声が響いた。

顔をくしゃくしゃにして、俺の胸に顔を押し付けて泣く。

「よしよし、泣け泣け。存分に泣け」

ただし、泣いた分だけ笑って貰うけどな。

そう思いながら頭を撫でる。

女は笑顔が一番だ。

満月の浮かぶ夜に、神楽坂は俺の胸で泣き続けた。

そして、同時刻。桜通りにて初の犠牲者が出た。

第十三話「そう言うのはカップルでやる事やと思っえ」「b y木乃香（後書き）

今回は明日菜のターン。

ラブコメってどう書けばいいのか良く分からない（え

恋愛模様とか難しいです。日常は楽しいですけど。

原作に關係ある話、漸くここまで来た。

次回、『吸血殺し』<sup>ディーブブラッド</sup>を飲もうとしたエヴァンジェリンは……どうなるか、あなたの目で確かめてください！（嘘

いや、『吸血殺し』<sup>ディーブブラッド</sup>発動した血を飲んだ段階で吸血鬼が灰になるのは確定なんですがね。

感想を頂けると作者はとても喜びます。

第十四話「私にそう言う趣味は無い！」byエヴァンジェリン（前書き）

土日は宿題を片付けるので早めに投稿。

でもちよつと急いで書いたので無理矢理感がある気がします。ご了承ください。

ちなみに吸血鬼繋がりで「カレンデュラレイキエム」を聞きつつ執筆。

あつちの吸血鬼はガチモンのホラーですけど。ネギまの吸血鬼（笑）とは大違いで。

## 第十四話「私にそう言う趣味は無い！」byエヴァンジェリン

満月の夜。

潤也は神楽坂を抱えて、女子寮への道を歩く。

男子寮の方が近い位置だったが、流石に男子寮に女子を泊まらせる訳にもいかず、朝帰りとかさせたら千雨に殺されそう。等と思っていた。

神楽坂は泣き疲れて寝てしまった。

浴衣で背負うのが難しい為、お姫様だっこをして連れて行っている。

日が沈んでいる為に夏でも結構涼しく、時折吹く風は冷気を含んでいて気持ちがいい。

丘から女子寮への道には、桜通りがある。

そして、今現在その現場で二人の女子生徒が抱き合っている。(?)

そう言うプレイでもしてんのかな？ と思って隠れつつ覗く。

回り道でもして女子寮に行っても良かったが、この道が一番近い。後回り道は面倒臭い。そんな考えだった。

物陰に隠れていると、声がかけられた。

「おい、其処に隠れている奴、出て来い」

バレたか？ と思考する。

だが、一般人に悟られるほど潤也もへボでは無い。『裏』の関係者だろうと推測する。

ばれてるならいいか、と思い、神楽坂を木に寄りかからせ、一人出る。

終わった後は出来れば記憶を操作して、関係者だと思わせない様な工夫をしなくてはならない。

もし相手が魔法協会の者なら、学園の『内側』にいる八重は、そんな事をもみ消せる立場では無い為、余り派手にはできない。

「……一人か？ もう一人いるだろう」

「寝てるんだ。寝かせてやってくれや」

そう言うのと、しょうが無いか、といって諦めた。

いや、諦めたと言うより、始末を後回しにした。というべきだろう。

「それで、貴様。何処まで見た？」

「抱き合ってる所まで。大丈夫、俺は君等がそう言う趣味でも引いたりしないから」

少女はぼかんとした表情を浮かべるが、顔を良く見れば血が着いている。

そして、寝ている女の子の首筋にも血。そして噛まれた後。

そついや原作に吸血鬼っていた様な……等と考えていると、少女が怒ったように何やら言ってきた。

「どついう趣味だ！ 私にそう言う趣味は無い！」

「いや、だって抱き合ってたじゃん。そう言う趣味じゃないならなんだよ」

「……まあ、どうでもいい。貴様の記憶は消させて貰う。まさか最初に血を吸ったときに見つかるとは思わなかったが」

話が噛み合わない。というか会話する気あるのこイツ？

呆れながらもそんな事を思う。そして、一つの疑問。

『血を吸った』と、そう言った。

吸血鬼。それも一般人に手を出す位にプライドの無い奴だと、イラつきを覚える。

「安心しろ、殺したりはせん。『誇りある悪』として、女子供は殺さん」

その言葉に、またもイラつきを覚えた。



「『誇りある悪』、ねエ」

「……何が言いたい？」

ガラリと変わる雰囲気、少女は少しの動揺を見せる。

だが、ほんの一瞬。六百年の経験は伊達では無い。

「いやア、べつつにイ？ 一般人襲ってる奴が『誇りある悪』とか抜かしてるから面白くってさア」

笑いを堪えながら少女と向き合う。

「御大層な理由でもあるンだろうが、それがあからつて一般人を襲っていい理由にはならねエ。下らない理由で襲ってンなら余計にな。一般人に被害出してる時点で、テメエの悪はチープ過ぎる。テメエのやってる事は唯のチンピラとかわりやしねエよ」

その言葉に、少女は静かに怒気をはらませる。

「ふざけるなよ？ 悪の魔法使いである私を馬鹿にするつもりか？

……身の程を教えてやる」

手に持った試験管を放り投げ、武装解除の魔法を放つ。

だが、放たれた『氷結・武装解除』は潤也に当たる前にその向きを変え、地面を凍らせた。

「……何？」

今の現象に目を見開く。

異常だった。

本来ありえない方向へと、向きが変わったのだ。ベクトル疑問を覚えな  
方がおかしい。

この時点で、少女 エヴァンジェリンは、最早記憶を消すと言  
う事ではなく、殺すと言う事に目的が変わっていた。

いや、厳密に言うならば、殺すしか方法が無い様にしか思えない。

何の予備動作も無く、魔力も気も使わず、異常な現象を引き起こ  
す。そんな奴を相手に、封印された状況で手加減などできる筈も無  
い。

実力が未知数過ぎる。

そして、ふと気付く。

魔力も気も使わず、異常な現象を起こせる連中。

一年程度前、ロシアの一部を切り取った組織には、そういった連  
中『超能力者』が居ると言う事を。

「……『超能力者』？」

呟くその言葉に、潤也は反応しない。

だが、可能性は消えない。

「……茶々丸！」

故に、油断はできないと悟った。

だからこそ、科学的に記憶を覗かれ、この事件を発覚させる事を恐れたエヴァンジェリンは待機させていたロボットの従者を呼び寄せる。

トンツ、と軽快な音と共に地面に降り立つ。

「油断はするな」

「イエス、マスター」

そして、構える。

「今更だな。数増やした所でかわりやしねエよ」

対する潤也は構えない。構える必要が無い。

殺気を発し、互いに殺し合いを了承する。

だが、潤也には殺すつもりなどない。本当に殺すつもりなら『<sup>ディ</sup>血殺し』を使っている。

今は唯、イラつきから一発殴ってやるうと思っただけ。

「茶々丸、情も手加減もいらん。……女子供を殺すのは私の矜持に

反するが、お前のソレは子供とも一般人とも言えん。殺しても文句は言つまい？」

「そオだな。別にどオだつてイイ事だろ。      どの道、テメエじゃ力不足だ」

「ぬかせ……やれ、茶々丸」

地面をける音と共に、茶々丸が潤也へと近づく。

数メートルと離れていた距離は物の数秒で詰められ、潤也へと拳が迫る。

「言つただろオが。力不足だ」

その拳は届かず、肘から折れる。

知覚できない速度で何かをやつた……そう考えるが、手はポケットに入ったまま動いてない様に見える。

布の擦れたような音も聞こえない。

ならば、と次は残つた左腕でひじ打ちを繰り返す。

だが、それも無駄。潤也は動く事さえなく、その腕は壊れる。

「無駄だ」

唯一言。そう告げる。

唯一撃。横風に蹴りを放つ。

それだけで、茶々丸は上半身と下半身の半分に分断された。

「茶々ま……っ!？」

同時に、風速百二十メートルにも達する空気の塊が、砲弾となってエヴァンジェリンを襲う。

咄嗟に放った魔法薬で『氷楯』を使い、一瞬防いだ後、攻撃圏内から脱出する。

これで、倒れた女子生徒からは十分な距離を取る事が出来た。

「貴様……」

「何言ってるんだよ、オマエ。殺し合いだろ？ 躊躇う意味がねエ」

「……チツ、そうだな」

またも複数の魔法薬を取り出し、放り投げる。

「『魔法の射手 連弾・闇の十七矢』」

そして、潤也に触れてまたも向きが変わり、地面へと叩きつけられ、派手な音と共にコンクリートを破壊する。

「無駄だっつってんだろオがよ」

ダン！ と足元を思い切り踏みつける。

固い地盤が歪み、振動する。

潤也を中心にコンクリートへ放射状の亀裂が走りまわる。

歪み、破壊されて飛ぶ破片はエヴァンジェリンを正確に狙い撃つ。

ソレを飛んで回避し、次の攻撃へと移る為に魔法薬を取りだした所で、思考が一瞬止まる。

「ギャハハハハ！ どオしたよ、手が止まってンぞ！！」

地面を更に踏み抜き、砕けたコンクリートの地面を更に砕く。

そのベクトルを操り、潤也はまるでロケットの如く夜空へと飛びあがった。

(な……に……！？)

その背中には強大な暴風の竜巻のようなものが四本着いている。

空中に飛んで散らばっているコンクリートの破片など関係無い。

壮絶な音を立てながら破片を吹き飛ばし、エヴァンジェリンへと迫る。

その状況でも必死に思考し、手に持った魔法薬で魔法を発動させる。

魔法薬は割れたが、魔法は異質な形で発動した。

咄嗟に放った筈の魔法の矢が、手元で暴発する。

「なっ　　!?!」

ソレは驚愕。

六百年もの間生き、常に練磨し続けた魔法の使用に失敗した。

動揺は隠せない。

「　　逆算済みだ。異物の混じった空間。ここはもう、テメエの知る場所じゃねエンだよ」

世界は素粒子で構成されている。その種類は多種多様。

そして、魔力とは世界に存在する万物のエネルギー。

魔法使いの使う魔力とは、世界から吸収し、それを変換して形作られている。

そして、潤也のやった事は簡単だ。

『<sup>マター</sup>大気中に存在する魔力に、この世に存在しない物質である』<sup>ダーク</sup>未元物質』を加えた。

異物が混じる事によって、通常とは違う法則で動き出したそれらは、魔法を異質なものと作りかえる。

例えば　魔法の矢をその場で爆発させる。

例えば 氷の楯の厚さが異常に大きくなる。

例えば 魔力の変質により、魔力で保たせている既にかけられた呪いや記憶に関する魔法を変質させる。

ねじ曲げられた法則は潤也本人が多少は融通出来るものの、一定以上は干渉できない。

そして、法則がある以上、それを知ってしまえば対処は出来る。

だが、そんな暇は与えない。

「不幸だな、オマエ」

エヴァンジェリンの目前へと迫り、堅く拳を握る。

「オマエ、本当についてねエよ」

ゴガン！！ と音がした。

潤也の拳は障壁を抜け、エヴァンジェリンの顔面を正確に捉え、へとクリーンヒットし殴り飛ばす。

やや鋭角に打ち込まれた拳は、エヴァンジェリンの体をいとも簡単に吹き飛ばした。

数百メートルを一瞬で飛んで行き、何処かの建物の壁を壊して内部へと入る。



衝撃で顔面の骨は折れ、鼻血を出して建物の内部でエヴァンジェリンは気絶した。

「ここで会ったのが俺じゃなかったら、まだマシだっただろオナ」  
風を操作し、地面へと音も無く降り立って辺りの惨状を見渡す。

(……ヤベ、やり過ぎたな)

放射状に走り回っている亀裂。変形した街灯。

辺り一帯戦場にでもなったのかと問いたくなる状態だ。

「ま、いいか。後は」

潤也は全く気にせず歩を進め、二つに断たれた茶々丸を見る。

両腕は使えず、助けも呼べないで其処に倒れたまま。何の役にも立ってはいない、が。

「オマエ、さっきの戦闘映してたろ」

今はまだ、学園に知られてもメリットが無い。

故に、科学の産物である茶々丸はその頭を科学的な方法で『ハッキング』され、そのデータを完全に消した。

正直な話、殺せば手っ取り早かった。

だが、流石にイラついたという理由で人を殺すのはなあ。と思っ

てもいる。人ではないが。

殺人鬼でも無いし、殺しを楽しんでいる訳でも無い。

必要なら殺す。それ以外ならできうる限り殺さない。基本的にそう言うスタンスだ。

いつもなら後始末までやるのだが、と思って周りを見る。

ド派手に戦闘した為、この状態じゃいつ誰が来てもおかしくない程だ。

バレない内にさっさとずらかるか。等と思いながら被害の及ばないよう配慮した木陰へと向かい、神楽坂を探す。

潤也の失敗は二つ。

『未元物質』の展開範囲が異常に広がった事。

そして、神楽坂明日菜の記憶が、魔法によって封印まほうによつてふういんされていると覚えていなかった言う事を知らなかった事だ。

木陰で寝ていた筈の神楽坂は、頭を抱えて痛みを耐えていた。

第十四話「私にそう言う趣味は無い！」byエヴァンジェリン（後書き）

エヴァ終了のお知らせ（＾o＾）ノ

とはならなかった。生存フラグです。

でも男女平等パンチを喰らったハートアンダーブレードさん（誰

いや、正直死ぬには理由が弱いかなと思ひまして。

ぶつちやけ原作でも気にいつてるキャラですし。

というか前回のあとがき読んだ方々。エヴァの死亡シーンそんなに

見たいんですか？ww

いや、死ぬ可能性は限りなく高いのはまだ続きますよ。

幾らなんでも退場するには早すぎる。せめて（ネタバレしています）  
してから死んでくれ！

315

実は描写して無いだけでエヴァの呪いとか女子生徒とかの受けた記憶消去の魔法も変質してたり。

でもちよつと無理矢理感がぬぐえない今回でした。

というか地味に八重のポジ出てきたww一応原作キャラです。魔改造ではないです。協力って言うか雇ってるだけで。

次回は学園側のを少しと明日菜とアスナの話

投稿は早くても火曜日かと。遅れても水曜には。

第十五話「アスナって呼んで」by明日菜（前書き）

宿題が速めに終わったので投稿。頑張った。頑張りましたよ。  
やはり目標があると早く終わらせたくなる。……どっかで聞いた事  
あるな。

アスナの大半独自解釈で書きましたけどね。  
最近、独自解釈多いなあ……。というか無理矢理な展開が。

## 第十五話「アスナって呼んで」by明日菜

目覚めは必然だった。

当然だ、アレだけの轟音が近くで鳴って、起きない方がおかしいと思う。

私がゆっくりと目を開ければ、目に入ったのは草木。

顔を上げ、音が続く方を見る。

茂みの向こう側では、地面がひび割れ、街灯がねじ曲がっている。

……一体、何が起こってるの？

極めつけには、空中へと飛ぶ誰か。

遠目だが、赤い髪と後ろ姿で潤也だと分かる。

背中には竜巻のようなものが四つ着き、誰かと相對しているように見えた。

相對しているのが誰かは分からない。潤也とかぶって顔も姿も見えないからだ。

だが、飛びあがって誰かと相對して、何かが爆発した時、唐突に頭痛が私を襲った。

ズキンズキンと痛む頭を押さえる。

何も考えられなくなる。

何も見えない。聞こえない。

痛みに呻いていると、何かが見えた。

巨大で人の様な何か。そして、それに立ち向かう赤毛の男、いや、少年とも呼べる人。

『そんなガキまで担ぎ出すこたあねえよ。後は俺に任せときな』

(誰 ?)

次に移ったのは、死にかけている渋いおじさん。

『幸せになりな嬢ちゃん。あんたにはその権利がある』

(つつ !)

頭痛が酷くなる。

横に倒れ、流れ出る知らない誰かの記憶に混乱する。

自身の知らない記憶。録画されたビデオを早送りで見ている様な  
感覚。

(何、これ )

時間が経ち、少しだけ楽になって目を開ける。

目の前には心配した顔の潤也が居た。

「どうなってんだ？ 身体に異常は見当たらない。なら魔法的な何かか？ さっきの『ダイクマター未元物質』がそれに影響を及ぼしたか？」

焦って何かを言っている。

でも、何を言っているか、理解できない。

理解しようとしても、頭痛が酷くて考えられない。

潤也は何かを考え込むような顔をして、ブツブツ言っている。

「チツ、メンドクセエ事になったな……ここまで複雑な記憶に関する魔法じゃ、無理に破壊すれば記憶破損が起きる可能性がある。なら全部一気に解除するしかねえか」

そして、右手で私の頭に触れる。

私が見ている事に気付いたのか、笑う。

「安心しろ、俺が何とかしてやる」

そう言って潤也は目を瞑る。

頭の中で何かが動く様な感覚がした。

目をつぶれば、見えるのは何かの数式の様な、魔法陣のモノ。



それらはゆっくりと、型にはまるように動いている。

カチリと音がする度、頭痛が収まっていく。

全ての魔法陣や数式が消えると同時に、私は意識を失った。

ここは、何処？

真っ暗な部屋。誰もいない、何も無い部屋。

『あなたは、誰？』

後ろから声がした。

振り向けば其処には、私の小さい頃の姿がある。

「私は神楽坂明日菜」

『私はアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』

ゆっくりと、静かな声でそう答えた。

「ここはどこ？」

『ここはどこでも無い』

世界がぐらりと揺れる。

先ほど見た赤毛の人達の記憶。

風景は何処かの町。手を繋いで楽しそうに笑う私。

『思い出した？』

何を？

これは、私の記憶なの？

『そう、これは私の記憶で、あなたの記憶』

あなたの記憶？

『うん』

世界が揺れて、風景はまたも変わる。

高畑先生、それと、誰か知らない人。

ここで、私は記憶を封印された。

『そして、其処から今のあなたの人生が始まった』

一緒のクラスだった委員長と喧嘩して、小学校で友達になった木乃香と遊んで、小さい頃から一緒にいてくれた高畑先生に恋して。

木乃香と一緒に居た千雨ちゃんと仲良くなって、一緒に遊ぶうちに潤也とも仲良くなって。

『俺でよけりやいつでも手伝うけどな』

そう言って、高畑先生とのデートの協力もしてくれた。

『悲しいときは、泣けばいいんだよ。無理して笑うこたあねえ。俺の胸で良けりや貸してやるからさ』

失恋して、頭を潤也の胸に押しつけながら泣いて。

一緒にいると楽しくて、悲しい時も一緒にいてくれた。

木乃香と千雨ちゃんは親友で、よく遊ぶ。

潤也は偶に会うだけ。でも、会う度にいろんな事をやって楽しい。

高畑先生は小さい頃から面倒を見てくれた。親の様な人だったけど、面倒を見てくれて、好きになっていた。

告白したけど、なんとなく胸には靄がかかっていた。

高畑先生の事が好きで、告白した筈なのに、なんとなく変な感じがした。

『私は、タカミチはあまり好きじゃない。嫌いじゃないけど、好きでもない』

どうして？

『私の意志なんて関係なく、記憶を封印すれば幸せになれるなんて思っていたから』

それも、一つの選択肢ではあったんだよ、きっと。

『『紅き翼』の総意で、私の意志なんて無かった。助けてくれたけど、助けてくれなかった』

そんな事は無い。ナギだって、ガトウさんだって、命がけで私を助けてくれた。

『記憶だって、私の一部。それを封印したら、私は私じゃ無いよ』

……………。

『だから、助けてくれたけど、助けて貰って無い。ナギはきっと助けるって言うてくれたけど、出来なかった』

……………。

『潤也はどつなの？ ずっと一緒にいられる？ 私を助けてくれる？ 眞実を知っても、一緒にいてくれる？』

分からない。

でも、秘密を抱えていたら、いつかきつとバレる。

頭がよくて、勘が良くて、隠し事なんて出来る相手じゃ無いから。

『なら、話すの？ どうなっても、私は知らないよ？』

話さなくてもバレるなら、いつそ話した方が楽になれる。

それで離れる様なら、それまでの関係性だったんだよ。

い。  
隠したままもやました感情を残すより、教えて嫌われた方がいい。

……でも、一つ思ったんだ。

『何を思ったの？』

一緒にいて楽しくて、困った時に助けてくれて、泣いたら慰めてくれて。

いつだって頼りになるお兄さんみたいで。

「私はきつと、潤也の事が好きなんだ」

心から、本当にそう思った。

ゆっくりと、目が覚める。

いつも見ている天井、私と木乃香の住んでいる寮の部屋。

浴衣を着たまま寝てたかな、と思ったけど、自分の状態を見てみれば下着だけで寝ていた。

汗をかいたからシャワーを浴びようと、いつも通りリフトから飛び降りる。

すると、其処には正座させられている潤也の姿と、般若のお面が後ろに見えて、笑っている千雨ちゃんと木乃香がいた。

「お、起きたか、神楽坂。シャワー浴びるなら行っていいぞ、潤也の眼は塞いでるから」

一転、般若のお面が見えなくなった千雨ちゃんは優しい。

「……えっと、これ、どんな状況？」

「覚えてないのか？ 昨日潤也が連れて帰って来たんだがな、何時

「だっただと思っ？」

「昨日の事は覚えていない。潤也が私の頭を触れてからの記憶が無いから。」

「……何時？」

「朝の四時だよ。何かされた覚えは無いか？」

「や、だから俺は何もしてないんだってば」

「黙れ、ちよっと静かにしてろ」

「……ハイ」

タオルで目を縛られ、正座してる足の上には漬物石の様なものが置かれている。

「唯今絶賛折檻中やえ」

ニコニコしながらそんな事を言う木乃香。怖い。

「……ちよっとシャワー浴びてくる」

見なかった事にして、シャワールームへと入る。

……本当に、好きなのかな？



唯今絶賛折檻中の潤也です。

酷いや酷いや、昨日はいろいろ忙しくて俺まともに寝てないのに！

ぶっ倒れてる神楽坂を見て、『アクセラレータ一方通行』の能力で身体の状態を確認すると、頭の中の魔法的な要素で頭痛が起こってると分かった。

直ぐに『イマジンプレイカー幻想殺し』で破壊してやろうかと思ったけど、流石に超複雑な記憶封印を無理矢理破壊したら何か不味い事になりそうだったので、『一方通行』の能力で電気信号を操作。

そのまま頭の中にある魔法陣を解除して、念の為に『窓のないビル』で精密検査して。

三十分位仮眠取って。

それから学園の動きをちよろっと見てから連れてきた。

だから四時だった訳だが。

女子生徒は記憶消去の魔法を破壊。簡易的で対して複雑でも無く、簡単に解けそうだったから解いた。そっちはどうなっても知らん。

適当に記憶を改ざんして放っておいた。

後は魔法先生方に任せる。

桜通りはほぼ全壊。

コンクリートはそこから一帯にばらまかれて、建物も一部破壊されてる。

流石に内輪だけでどうにかできる問題ではなく、工学部の作業用ロボとかを借りて修復作業をしているらしい。

エヴァンジェリン（昨日学園長達の会話を盗み聞きして漸く名前を思い出した）は療養中。かなり酷い怪我らしい。大丈夫かねえ。

顔面を思い切り殴った俺の言うセリフでは無いけどな。

麻帆良中、今はこの話題で持ちきりだ。

一晩で破壊された桜通り、宇宙人がどうのこうのとか、超能力者がどうのこうのとか。

正直、吸血鬼の殺気より千雨の表情が怖い。

目が見えなくても心配だけで、というか殺気で分かる位に怒ってる。殺気を当てられるほど悪いことしたか、俺？

ちくせう。これだから朝帰りをさせるのは嫌だったんだ。

後で『吸血殺し<sup>ディーブブラッド</sup>』の詰まった輸血パックでも送ってやろうか。吸

血鬼め。

いや、血を抜くの面倒だしいいや。顔面の骨が陥没して背骨も折れてるから死にかけらしいし。

というか神楽坂のアレ何だよ。

面倒くさい魔法使ってやがったし。『ダイクマター未元物質』で余計複雑化させたの俺だけだよ。

解除に十五分位かかったじゃねーか、魔法先生に見つからないか冷や冷やしたぞ。

記憶封印って事は、多分今はもう戻ってる筈だ。

どうなってるかは見る前に何処かへ行ったから良く分からないが、声を聞く限りじゃ平気そうだ。

それより漬物石これどうにかしてほしいなー。ホント。

「妹様ー、まだ駄目？」

「後一時間ぐらいやってる」

「流石に死にそうなんだけど」

「軽い方だろ」

確かに軽いんだけどさ、少なくとも漬物石としての標準的な重さはあるわけよ。別に重さも正座の痛みも特にねーけど。

ベクトル操作ってホント便利だよね。

「吸血鬼に襲われて神楽坂が倒れたと思えば、治療して連れて帰ってきたら折檻かよ」

俺の一日踏んだり蹴ったりだな。しかも睡眠不足。

「……何言ってるんだ？」

「戯言だよ」

事実だといっても誰も信じないだろうしな。それでも、こうでもしなきゃ暇でしょうが無い。

ガチャ、とシャワールームから神楽坂が出てくる。

何故分かるかだって？ 君、俺は『透視能力』クレアホイアンスというモノがあつてね。

いや、普段は使わないよ？ 流石に其処まで犯罪者じみて無い。

「……まだやってたの？」

「どうにかしてくれ」

「……千雨、潤也を解放してあげてよ。私何もされてないからさ」

「……分かった。というか、お前なんか性格変わったか？」

「いや、別に変わって無いけど」

そう言いつつ漬物石を退けてくれる。

寮に入る時も寮監との戦闘があったりするんだがな。

実は、桜咲と龍宮に寮に侵入する為に手伝って貰ったんだが、寮監にバレたんだ。

桜咲と龍宮を同時にノックアウト出来る人間が居るなんて思わなかった。それも唯の一般人なんだぜ？

俺も『反射』が破られる気がしてしょうがない。いや、使う気も無いのだが。

何はともあれ、目も見えるようにして貰った。ちゃんと服は着てるようだな。

「助かったよ、神楽坂。ありがとう」

「……って呼んで」

「うん？」

「アスナって呼んで」

……何故急に？

ソレ聞いて千雨と木乃香が動きを止めたんだが。

ピタリ、という擬音語が見えた気がするよ。

「え、何で？」

「何でもいいじゃない。アスナって呼んでよ」

「……いや、別にいいけどさ」

「じゃ、今度からちゃんとアスナって呼ぶようにね」

ニコニコしながらリフトを上がっていく。

本能が、速くこの部屋から脱出しろ！ と告げるが、動けない。

そんな事を言うと、この二人が「何を……むしろナニをしたお前？」という雰囲気になるに決まってるだろうが！

ギギギ、と油の足りない自転車の如くゆっくりり首を曲げると、其処には般若のお面が背後に浮かぶ、笑った顔の二人が……。

……第二ラウンド、突入か……。

一方、学園の魔法先生達は上へ下への大騒ぎだった。

当然と言えば当然。

エヴァンジェリンという、十四年間共に学園の警備の仕事をしてきた人物が、いきなり吸血なんて事をしだしたかと思えば何者かに顔面の陥没、背骨の骨折という重体を負わせられた。

封印されているとはいえ、六百年の経験は大きい。

ソレを駆使しても、勝てなかったという事か。

「それで、エヴァの容体は？」

「現在治療中ですが、どうにもおかしな事があるようです」

「おかしな事、とは？」

「なんでも、呪いが変質しているとかで。見て貰った方が速いかも  
しれません」

「……それもそうじゃな」

そして、瀬流彦教員に連れられ、治療中の部屋に入る。

其処には、顔面の骨の陥没して、端整な顔は崩れ、憎悪に満ちたエヴァンジェリンが居た。

背骨が折れている為満足に動けず、治療を受けている。

「大丈夫かの、エヴァンジェリン？」

「無事とは言えん。見て分かるだろう」

その言葉にも、敵意と憎悪が入り混じっている。

下手に怒らせても駄目だろうと思うが、調査をしなければならぬ。

「呪いの事は分かつとるのか？」

「多少な。アイツ、碌でもない事してくれた」

顔こそ分かるが、名前もいる場所も分からない。

唯の偶然で出会っただけというのなら尚更探すのは難しいだろう。

「茶々丸は？」

「今修理を受けておる」

二つに断たれた上、両腕を破壊された絡繰茶々丸。



桜通りに放置されており、見つけた時は意識（？）も無かった。

工学部に直ぐ運ばれ、データを確認して貰った所、その日一日のデータが完全消滅してるとの事。

「なるほど、後始末までしっかりしている。ふざけた程にな」

「またも顔を歪ませ、歪に笑う。」

「ブチ、殺す。絶対に、私の手でぶち殺してやる」

自身に向けられていないと言うのに、治療していた魔法使いは気絶しそうになった。

それほどまでに強烈な重圧。殺気。憎悪。悪意。

並みの人間では、向けられた瞬間に気絶してもおかしくない程のソレを受けても、近右衛門と、後ろに控える瀬流彦は多少顔色を変えただけだった。

それが自身に向けられていないと言うのも大きいだろうが。

「それで、私に何の用だ？」

「うむ、呪いについてじゃ」

「さっきも言ったが、多少しか分かって無い」

「分かっておる。今から調べるから少し待ってくれ」

そう言って何かの呪文を呟く。

「……む？ 『登校地獄』にこんな呪いは無い筈じゃが……」

「何？ どういう事だ」

一つの違和感。

『ダークマター未元物質』によって変質した呪いは根本的な意味は変えず、しかし呪いの変質をした。

本来『学校に登校させる為の呪い』である『登校地獄』だが、変質した呪いには更に『毎日自宅で三時間の学習』というのが追加されていた。

だが、同時に『学校に登校させる』という呪いが多少弱まっている。

「……ハア？」

「いや、本当なんじゃって。何故かそうなっておるんじゃ」

減るならまだしも増えるだと？ とキレかけているエヴァンジェリンだが、それは一つの可能性も示していた。

(……『変質』させられるなら、『解呪』も出来るかも知れんな)

殺すには惜しい人材か？ と考え始めるエヴァンジェリン。

何にせよ、戦った敵を報告する気は無い。

赤い髪と超能力。探すには材料が少なすぎるが、探し出して見せる。と、そう考える。

(……体格から見ると、中学生から高校生か。いや、見た目は当てにならないか)

クラスメイトの姿を思い出してそう感じる。

冷静に、敵を見極めて探し、殺す。

いや、解呪させてから殺す。そう決めた。

その為には、魔力を取り戻さなくてはならない。

だが、その為には呪いを解く必要がある。と、そう考える。

(……まずは探してからだな)

倒す云々は探し出してからどうにかすればいい。

だが、見つからないのならどうしようもない。

とはいえ、しばらくは治療を受ける羽目になりそうだが。

「それじゃな、エヴァンジェリン」

「あん？」

「お主を襲った者の容姿等、分かる事を教えてほしいのじゃが……」

「却下だ。アレは私が殺すと言っているだろう」

「……の割には随分と冷静じゃのう」

「血が抜けて冷静になってるだけだ。腸煮え繰り返る思いだよ」

そして、また殺気が漏れだす。

ソレを宥め、次の話題へ。流石に十四年も一緒にいるだけあり、性格は分かっている。

「別の質問じゃ。何故あの時桜通りにおった？」

「侵入者の撃退だ」

「嘘はいらん。倒れている女子生徒の首筋に噛まれた跡があった」

チツ、と舌打ちする。

流石に誤魔化しきれないと悟る。

「血を吸ったよ。偶然通りかかった女子生徒の血をな。侵入者との戦闘で負けそうになったから魔力の補充をする為にな」

真実は語らない。

あの場を見ている者はいなかった。ならば、これでも通用するだろう。

「……ふむ、取りあえず納得しておこうかの」

そう言って、瀬流彦教員を連れて出て行く。

（……いつか、必ず）

殺しつくしてやる。

憎悪を抱き、そう誓う。

## 第十五話「アスナって呼んで」by明日菜（後書き）

アスナのターンはまだ続いた。

内面の対話ってこんな感じでOKですかね？ 原作ではそんなの無かったぞコノヤローと言う方は『未元物質』で変質したと考えてください。

『未元物質』 超便利（笑）

次回までアスナのターンかもしれないです。ご了承ください。あくまで「かも」ですが。

エヴァの呪いは迷った。別にどんな呪いでもよかったですけどね。別候補は『学年で十指の成績を取る事』『授業をさぼらない事』等々。

地味かつ精神的なダメージありの呪いってどんなのがあったかな。

……そろそろタグの『原作崩壊？』のハテナマーク消すべきかもしれない。

そして、とある作品に影響されて近いうちに、もしくは忘れないうちに番外を投稿する可能性あり、です。

第十六話「ようこそ、『窓のないビル』へ」b y 潤也（前書き）

いつの間にか総合評価が五千を超えそうな件について。

まさかここまで伸びるなんて思っていなかった……。

こんな稚拙にここまで評価を頂けるとはありがたい限りです。

では、夏休みを謳歌している学生。プラスして宿題を増やす先生と学校と最後にリア充が爆砕する事を祈って。

第十六話「ようこそ、『窓のないビル』へ」boy潤也

朝からずっと千雨と木乃香に折檻されて、結局部屋に戻って寝たのは二時間ぐらいなわけよ。

それはともかくとして、何故俺は呼び出されてんだろうか。アスナが俺を呼び出す理由が分からない。

高畑先生に振られた訳だが、手伝ったお礼を言いに来たとかそんなんか？

そんな事を考えていると、カランコロンと言う鐘の音が聞こえる。

誰かが来たという事なので、入口に目を向けるとアスナが居た。

「まった？」

「いや、全然」

アスナは俺の対面に座り、どういづべきか迷っている。といった表情をしている。

どうしてそこまで分かるかって？ コイツほど感情が表に出やすい奴は……いや、今日から少し感情は読みにくくなったけど。

どうでもいい事だよ。そんなのは。大した問題じゃない。

コーヒーを一口含み、喉を潤す。程良い苦みと香りが口内を刺激する。



「……さて、どうして俺を呼んだ訳？」

早速本題に入る。正直眠いです。寝たいです。

「……潤也は、魔法って信じる？」

……んん？

そう言う話か。でも何で知って……封印されてたのってその記憶だったのか？

「……信じるとして、何でその話題が出るんだ？」

「関係あるの。私の過去の話と」

……誰かに聞かせられるような話じゃ無くないか？

万一誰かに聞かれたら面倒な事になりそうだな。

「アスナの秘密か？」

その問いに、コクンと頷く。

「なら、場所を変えよう。誰かに聞かれたら面倒だ」

金を払って喫茶店を出る。

そのまま尾行が無い事を確認して、とあるビルの前まで来る。

「じじって……」

問いには答えず、『座標移動』を発動する。

ヒュン、と空気を裂いて、『窓のないビル』内部に入った。

「さて。ようこそ、『窓のないビル』へ」

ソファに座らせ、コーヒーを淹れてテーブルに置く。やっぱり暑いときにはアイスコーヒーだよな。

アスナはかなり驚いており、未だにショックが抜け切れて無い。

そりゃ、正体不明の建物の持ち主が俺だって知ったらこうなるよね。

今まで入った事があるのは龍宮位だろう。

銃のアドバイスをくれるからな。新しいの開発するときにはそういうのが重要なんだ。

反動とか、弾速とか。まあいろいろ。内部で銃の試射をやって貰ってんだよ。

「……そろそろ大丈夫か？ 魔法関係は俺は知ってる。分からない所は後で質問するが、いいよな？」

「あ、うん。大丈夫」

そう言って、一度深呼吸する。

そして、話を聞いた。

驚いたね、まさかアスナがお姫様とは。いや、原作ではあって、俺がソレを忘れてただけだろうけどさ。

で、最後まで話して、俺を見る。

「これを聞いて、潤也は私の事をどう思った？」

どう、って言われてもな。

ぶっちゃけどうも思っただけ。っていうのは無いにしても、其処まで思う事は無いんだよな。

長生きしてんだねって言っても、やろうと思えば俺も千七百年くらいは生きられるし。逆さづりになるけどな。

魔法世界でナギ……確かこの物語の主人公の親父……に助けて貰ったらしいが、高畑先生達に記憶に封印を掛けられてた、と。

というか、何を思えと？

大量の人の命を吸った事か？ 戦争の兵器として使われていた事か？ 世界を滅ぼす可能性がある事か？

下らないね。本当に下らない。

そんな事で軽蔑したりしない。誰にだって幸せになる権利位あるだろう。アスナの場合は余計にな。

自分の意志でやってた訳じゃ無いんだし。自分で悪党に成り下がった訳じゃないんだし。

というか、それを言ったら俺も似たようなモンだろ。

人の命は吸って無いが、利用してる。戦争の兵器を大量に生み出してる。世界は俺一人で滅ぼせる。

……どちらかと言えば、俺の方が性質タチ悪くないか？

「ま、秘密については分かったよ。……それで、だ。俺も一つ、秘密を話そう」

「潤也の秘密？」

「そう、俺の秘密。千雨も知らない秘密だ」

桜咲と龍宮、後はウチの社員《幹部のみ》位は知ってるけどな。

「俺こと長谷川潤也は、超能力者である」

……いや、そんなジト目で見んなよ。本当なんだから。

「見せたほうが速いか」

と、言っても何がいいかな？ ベクトル操作とか地味だしな……  
よし、ここは『ダークマター未元物質』を全力展開してみよう。

実は、人前で見せるのは今が初めてだったり。

そうして、アスナは展開された三対六枚の白い翼を見る。

「……凄い」

白い翼に触れてもふもふしたりしている。てか、もふもふ出来るのか、『未元物質』。

「コレが俺の超能力の一つだ」

「他にもあるの?」

「まだまだたくさんあるぞ?」

系統で分けるとそんなでも無いが、細かく分けると結構沢山ある。

『原石』の能力とかは説明するのが難しいけどな。

その他、手から火を出したり、水を操作したり。電気を出したり、プラズマ……は、作ってないが。

「ま、コレで俺とアスナは共通の秘密を持ったわけだ」

「共通の秘密?」

「そう、俺はアスナを裏切らない。だからアスナも俺を裏切るなよ?」

「……もちろん!」

久しくゆびきりげんまんとかやった。千雨としかやった記憶は無いけど。

そして、コーヒーのお代わりを注ぎ終わり、ソファに座る。

「……ついでに言うと、『SMG』っていう会社は俺が作った」

ズズズ、とコーヒーを啜りながら言う。

アスナはコーヒーを飲みながらピタリと動きを止め、カップを置く。

「……本当？」

「当然」

驚く理由は単純明快。『SMG』は完全に世界に知られたからだ。

最近までは知っている者は知っている。というか調べようとする気も起きない連中が噂ばかり流すから都市伝説化していたのだが、誰かが調べてネットに流したために『世界最高峰の科学力を持つ会社』として認識された。

誰が流したのかは、もう探すのは不可能だと思っしか無い。

ネットの世界は広い。大本のパソコンに辿りつくのさえ出来るから分からないからな。

というか、別にはばれても俺達に問題は無いんだが。強いて言うなら各国が表だっていい寄ってくるのがウゼエ。

でも犯人は突きとめてたり。麻帆良で俺に隠し事が出来ると思うなって話だよ。

ちなみに『能力者』は数万人規模だ。いろんなところから集めまくった。一か所に集めた方が『システムスキャン身体検査』や『開発』するにも楽だし。

『パラメータリスト素養格付』もある事はあるんだが、意味が無い。『レベル強度』は俺が任意で変えられるからな。

場所は北海道。土地の一部を買い取り、ロシアと交渉して手に入れた北方領土とかで研究がされてる。

今までは別に場所を用意していたんだが、いかんせん、数が多くなったので大きめの土地を探した結果がこれだよ。

本山は『窓の無いビル』だけだな。あ、麻帆良にも結構な数が入り込んでる。いろいろ使えるからね。

少なくとも麻帆良中には『AIM拡散力場』が蔓延してるって訳よ。

「じゃ、社長の『垣根帝督』ってというのは？」

「偽名。当たり前前だろ？ 超能力で外見を変えてるんだ」

自分で自分の首を切る、つまりは自分で自分に責任を押し付ける事が可能だ。トカゲの尻尾切りみたいな感じで。

そんな事態にはならないけどな。多分。

「凄いだね」

「おほめにあずかり光栄です、姫御子どの」

「アスナって呼んでよ。その呼び方は嫌いな」

「ソレは悪かった」

嫌いなのかよ、『黄昏の姫御子』って名前。確かにいいとは言えねーけどさ。

「でもま、コレで話は終わりか？」

「うん。……嫌われないで良かった」

「嫌う訳ねーだろ。余程の事をしない限り」

例えば千雨を殺しかける。

……駄目だ、想像しただけで黒翼が出そうな気がする。無意味に自転エネルギー五分という時間のベクトルを持ったビルを何処かへ無造作に投げつけるでも可。

『座標移動』でビルの外へ出て、そのまま適当な店で食事を取る。

アスナの奴、ずっとニコニコしっぱなしだったな。何が嬉しかったんだか。



途中で当たり前のように朝倉と出会い、いつも通り適当に扱って別れる。

「じゃ、俺これから用事あるから」

「誰かと遊ぶの？」

「会う予定の奴が居るんだよ」

「誰？」

「超と葉加瀬。話す事があるんだ」

ちよつとムスツとした顔をした後、「今度また遊びに行こうね」といって帰って行った。

……去り際に、「千雨ちゃんは妹だからいいけど、増えるなら……」

……とかは聞こえて無い。聞こえてないったら聞こえて無い。

「ハカセ、これはそっちの部品じゃ無かった力？」

「あ、そうです。道理で足りないと思つてたんですよ」

カチャカチャと工具を弄り、私とハカセは茶々丸の修理を続ける。

「全く、酷い事をするものです」

怒った様にいうが、それは昨日から何十回、何百回と聞かされている。いわゆる耳タコだ。

エヴァンジェリンと相對して、まともに戦えそうなのは、少なくとも高畑先生くらいしか私は知らない。

だが、茶々丸は胴体を真っ二つで両腕破損、エヴァンジェリンは顔面と背骨に骨折。吸血鬼じゃなければ死んでもおかしく無かつたらしい。

高畑先生はエヴァンジェリンと一時同級生だったとも聞いているし、彼が生徒である二人にそんな真似をするとも思えない。

……いや、可能性だけなら他にもいるか。

長谷川潤也。

イレギュラーで、私の知らない存在。実力は当然未知数。

あの島で見た光景は偶に思い出す。

殺戮された兵士。圧倒的な火力で倒す兵士。どちらが『SMG』

兵かは言うまでも無い。『MGS』では無い。決して。

超能力も、私は存在さえ知らない。いや、少なくとも私の知っている未来にはそんな物は存在しなかった。

私というイレギュラーで、何かしらの変化が起こったのか？

いや、『SMG』が出来たのは私の来る数年前。私が影響を与えたと言う可能性は少ない。

並行世界、という可能性も否定しきれないが。

少なくとも、彼が『SMG』に関与している可能性は限りなく高い。あの島の一件で、私はそう思った。

故に、調べ上げた『SMG』の資料をネットにばら撒いた。とはいえ、普通に調べて出てくる情報しか手に入らなかったのだが。

私の高度な電子プログラムを持ってしても、それだけしか分からなかったという事。

計画に変更を加える必要があるかもしれない。

「……さん。超さん！」

「ん？ 何ダ？ ハカセ」

「全く、ぼーっとしてて手が動いていませんよ」

「ああ、悪いネ。考え事をしていたヨ」

「……彼、もしくは計画の事ですか？」

「両方だヨ。流石に鋭いな」

頭の回転は本当に速い。仲間にして良かったと思う。気遣いもしてくれし。

「私は、それよりも茶々丸を壊した人の事が気になります」

「ん？ そりゃ俺だよ」

「そうか、あなたか」

……ん？

「……何故、入ってきている？ 鍵はかけておいた筈だが」

「あんなもん俺に意味がある訳ねーだろ」

当たり前だ、とでも言わんばかりの態度。

一体、どうやって入って来たのか。『瞬間移動』テレポートでも使えるのか？

「ま、そんな事はどうでもいいさ。俺は警告に来たのさ、超鈴音」

「……警告、だト？」

「そう、あまり無駄な動きはしない方がいいぜ？ 自分の首を絞める事になる。お前等のいう計画にしても、もう少し回りに気を配る

んだな」

……まさか、知られたと言っのか？

ありえない、最大限気を使って、計画を話したのは八カセだけのハズ！

「一体、どうやったネ……」

「世の中、知らない事つてのは意外とあるもんだ。魔法を始めとして、未知なる科学つてのもまた然り」

魔法の事を知っている。そして、『未知なる科学』と？

警告といつてもいたし、『SMG』に関与しているのは確かなよ  
うだ。

それにしたって、どうやって……。

「『麻帆良の最高頭脳』が聞いて呆れるね、全く。もう少し考えて行動しようぜ。お前、コレが機密ならいつ消されてもおかしく無かつたんだからさ」

「……それで、警告力」

「そ。天才と呼ばれる位の頭持つてんなら少しは考えろってこつた」

「君も、天才と呼ばれる位の頭脳は持っているじゃないか」

「俺を『天才』なんて呼ばないで欲しいね。どちらかといえば『天

災』さ」

天災か。自身が兵器だとしても言うつもりか？

「一つ、聞いても？」

「いいぞ」

「茶々丸を壊したのは、本当にあなたなんですか？」

「あー、それは悪かったよ。あの吸血鬼がウザくってさ。殺し合いに発展したからつい壊しちまった」

ダルそつにそう答える。

ウザい？ それだけの理由であの伝説の『闇の福音』ダイク・エヴァンジェルを敵に回したのか？

結界で封印されているとはいえ、実力は相当なモノの筈……。

という事は、アレだけの怪我を負わせたのも彼、という事か。

その前に、彼女と戦って無傷とは、一体どうやったんだらうか……。

「……従者として、エヴァさんに仕えた結果ですか」

「ま、そうなるわな。それと、二人に言っておく」

何だ、まだあるのか？

「俺の事は、誰にも話すな」

……なら何故本人が来たんだ。

顎で使える人員など幾らでもいるだろうに。態々来るとは。もしくは顎で使われる人員なのか？

「俺が来たのは、まあ、アレだ」

「どれネ」

「アレだよアレ。エヴァ？ ってのが俺を探してるっぽいし、今度会ったら問答無用で戦闘開始だろうしな」

……という事は、彼も怪我なりなんなりしているのか？

戦闘を避けたいと言う事は、強いと認めていると言う事だろうし……。

「今度会ったら俺殺しかねないし。千雨……それとまあ、アスナや木乃香とか千雨と仲のいい奴に何かするようなら問答無用でブチ殺すつもりだし」

前言撤回。彼女をかなり過小評価していた。

「幾らなんでも、そんな簡単に行くの力？」

「甘く見るなよ。あの程度、どうにでもなるしどうとでもなる」

其処まで豪語するか。それほどの自信なのか、それとも一度戦闘したからなのか。

「ま、従者としている茶々丸が『計画』に必要なら、壊されない様に精々俺に辿りつかない為のプロテクトでもしておくんだな」

それだけ言うと、目の前から文字通り『消えた』。

ふう、と一息つく。

「……………どう思うネ？ ハカセ」

「さあ、分かりませんが……………少なくとも、今度から会話に気をつけましょう」

「そうだな。計画は必ず成功させなければならないヨ。以後気をつけようか」

失敗する訳には、いかない。



第十六話「ようこそ、『窓のないビル』へ」b y潤也（後書き）

超達に釘を刺した今回。後アスナのターン。

アスナがヤンデレに……？ 潤也が後ろから刺されそうな気もしますが。

ぶっちゃけ茶々丸壊れたら作り直せよって話ですが、計画直前にソレをやられるといろいろ破綻する、という。予備や保険くらいあるとは思いますがね。

超の心の声。

流石に心の中でもヨとかノとかつかわねーだろ。と思ったんで。

今回は……特に何も考えてないです。

強いて言うなら番外が完成すれば番外ですかね。

伏線は敷き終わった。いや、そんなつもりも特に無かったんですが（え

ともかく、番外、もしくはそろそろ原作入ると思います。

………なんとというか、キャラ崩壊ってタグに書いた方がいいかもしれない。

## 番外一（前書き）

今回R18じゃね？とか思ってしまった。多分大丈夫だろうとは思いますが。

## 番外一

十一月に入って数日。

最近乾燥していて、麻帆良では風邪が流行ってるらしい。

そして、千雨が病気にかったとの事。

木乃香からメールがあり、保険医の先生に診て貰ったらなんかの病気かもしれないから病院へ。

病院で風邪だと検査結果が出た。と千雨から連絡が来た。のが十数分前。

今授業中なんだけどね。どうしようか。

寮に帰ってるのかねえ？ 寮に着いたとかメールが……あ、今来た。

『寮に着いた。今から寝る』

と書いてある。大丈夫かな？

「オイ、長谷川。何をそわそわしてるんだ？ トイレにでも行きたいのか？」

「先生のツラがズレてるので笑いを堪えているだけです」

今からでも寮に行って看病をしてやりたいところだが。昼前だし、

消化のいいモン作ってやりたいし。

どうするか、と考えていると、先生が憤怒の形相で睨みつけてきた。

にこやかに笑ってみると、青筋が浮かび上がって起こった様な顔に。そして笑ってる顔に。

何あの先生、一人で百面相してるんですけど。面白っ。

とか考えつつ、帰る準備を整える。

「じゃ、先生。俺、妹が心配なんで早退しますー」

「待てコラ長谷川ア！」

激怒している先生を放って帰ろうとすると、誰かに制服の襟を掴まれた。

後ろを振り向くと、攻撃的な美を表したような容姿の持ち主で、艶やかな闇色の髪をアップに纏めており、普段はスラリとした体躯を強調させるタイトな紺色のスーツを着ている女の先生。

追記すると、唯我独尊タイプの自信家で傍若無人な性格。授業は脱線ばかりの迷惑先生。

というか、何故俺はこんな説明的な思考をしているのだろうか。

「何するんですかー。俺は妹の看病に行くんで休みます。病氣らしいんで治り次第きますからー」

「なら尚更お前がいくべきではないだろう。保険医の先生に頼め」

「頼みますよマギー先生」

「私をどごその手品師の様な名で呼ぶな」

名前は魔義流<sup>マジキ</sup>先生。有能だけど知れば知るほど駄目な人って有名。噂の出所は相咲だけだな。

「いやじゃないですかー、俺が行っても。この俺が病気なんて掛かる訳無いでしょう」

「そうだな、私はお前の肌の色で病弱だと思っていた頃が懐かしいよ」

真っ白だからな、俺の肌。女の先生方が良く秘訣とか無い？とか聞いてくる。

そんな事はどうでも良くて。

「早く行きたいんです。妹が俺を待ってるんです」

「さっきその妹から連絡があつてな。『学校サボらせないでほしい』と」

マジか、千雨そんな事言ってたの？ 超ビックリ。

というか行動読まれてんな、俺。流石双子。

「だからさっさと教室に戻れ、長谷川」

「マギー先生の意地悪」

「おほめ頂きありがとう。それといい加減ゴミ箱にダンクシュートするぞ」

止めるよ。アンタ本当に教師か？

涸<sup>かれの</sup>之先生とか見習えよ。いや、あの人はあの人で傍若無人な所あるけどさ。アンタより常識人だよ。

「それに多分寮監の人に捕まるぞ？」

……あー、忘れてた。

龍宮と桜咲を同時にK・Oノック・アウトする驚異の寮監が居るんだった。

大丈夫。きつと『視覚阻害』タミイチエックが何とかしてくれる。

対象物を『見ている』という認識そのものを阻害することで、誰からも見えなくなることができる。

発動中は対象者の目の前に居ても肉眼では捉える事が出来ず、例え目の前で能力を使われようと完全に認識不可能になるという、正に潜入にはうってつけの能力。

……唯、あの寮監気配で見つけそうな気がして怖い。

真正面から行っても気付かれる気がするから『座標移動』で直に部屋へ行った方が速いかも知れん。

そんな事を考えつつ、魔義流先生に激怒している先生のいる教室へ放り込まれた。

授業はすべて終わり、漸く下校の時間となった。

速攻で寮に荷物を置いて女子寮へ向かう。千雨に連絡入れておくのも忘れない。

さっさと着く為にある程度大丈夫だろう的な速度で女子寮へと向かう。

正面から『視覚障害』タミーチェックで通ろうとしたけど、鏡を見ていたらしく、一発で見つかった。

このまま戦闘に突入されると、「押してダメなら引いてみると言うだろう?」という感じで『木原神拳』を使われそうな気がしたので、おとなしく退散。

金を払って龍宮に手引きして貰い、壁をよじ登って侵入。よじ登ったのは気分。

段ボールに入って潜入しても良かったが、効率的に却下。いや、ならよじ登るのも却下だろうって意見は無しで。

そして、千雨の部屋に入る。ちゃんとノックはした。

ドアを開けて部屋に入り、ベッドの傍に来ると、千雨は寝ていた。

丁度いいから濡れタオルやアクエリアス、ポカリ等の水分、後その他を用意。人の家をあさくるなよ、とか言わないで欲しい。買ってきたんだから。

流石に冷蔵庫の中は見せて貰ったが。あんまり中身は入って無かった

「……………ん、？ 潤也……………」

「お、起きたか」

ベッドの傍で濡れタオルなどを常備し、体温計や恐らく処方されたであろう薬を用意している。

正直、体温計より俺の能力使った方が信用は出来るんだけどね。

「……………なんで、いんだよ」

喋るのも億劫だと言う感じ。無理にしゃべらなくてもいいのに。



その気になれば以心伝心出来るから。文字通り。いや、やらないけどな。

「そんなの決まってるだろ。心配だからさ」

タオルを取り、冷やしてある別のタオルを乗せる。

「ん、ありがとう」

「どういたしまして。何か飲むか？ 汗かいてるだろ？」

「少しくれ」

「あいよ」

熱でダルそうにしてるため、起きあがるのも手伝う。

その際首や脇わきや足首に付けているタオル巻き保冷剤がずれる。熱があるならこの辺りに付けて冷やした方がいいらしいよ。おでこは気休めなんだって。

いや、やってた俺が言う事でも無いけど。

コップに注いで、ストローをさして渡す。こっちが飲みやすいだろうし。

ちゅー、とアクエリアスを飲んでる千雨の顔の汗を拭く。

本格的に介護の人だな、俺。

飲み終わり、またせつせと首、脇や足首にタオル巻き保冷剤を用意。

昼には食欲が無いと何も食わず。流石に病人にカロリーメイトとか食わず訳も無い。いや、コレが護とかならやってた可能性もあるが。

夜になり、寝ていた筈の千雨は「中々寝付けない」という。

薬も飲ませたし、問題は無い筈だけどなあ。

熱が中々下がらない。後、夕方になってからあんまり水分とらなくなつた。

大丈夫か？ オイ。

体温計《ついでに能力》で熱を計ると、四十一度を超えていた。

え？ コレ風邪か？ 熱高過ぎだろう。幾らなんでも。

寝ないと体力も落ちるだろうしな。それに食わずに薬飲ませたら消化器官に異常が出る可能性も……。

「……座薬、いくか？」

「それだけは、ヤダ」

といつても、熱を下げるならこれほど手っ取り早い物は無いし、熱は今も上がってるし、きつそうだし。

「……寝付くには、コレが一番だと思っただけどなあ」

俺自身使った事は無いが。

当たり前だろ？ 『一方通行』の能力はベクトル変換。ウイルスは完全シャットアウトしてるんだ。病気になるてかからない。

よくよく思えば、それはそれで免疫力弱くないか？ 俺。

……大丈夫、きっと大丈夫。俺の生命力を信じよう。

結局、千雨は座薬を使う事を拒否しまくったので使わなかった。明日には熱が下がっていると信じよう。

一旦寮に戻ってシャワーを浴び、また戻ってきて、看病を始めた。

370

翌朝。

熱は微妙に下がった。

汗はかいてるし、水分は（少しだけ無理矢理）とらせたし、加湿器と空気清浄機も使って、結果が一度だけ下がるってどういう事だよ。

寝ずに看病してたのに。いや、ちょこちょこ寝てたけどさ。

ともかく、千雨は相変わらずきつそう。

汗をかいたので着替えさせる事にした。恥ずかしかったが、「胸を見るなよ」と言っただけで済んだ。

背中も汗で濡れていたから、タオルで拭く。

女同士でやって貰った方がいいんだろうが、アスナや木乃香は生憎学校だしなあ。

え、俺？ サボったよ。当然。

千雨が病気なのに勉強なんてしてる意味は無い。というか元々やってもあんまり意味無いんだが。

朝にはちよつとだけおかゆを作り、水分を取らせて寝させた。

やはり中々きつそうだ。

その間俺は千雨の部屋の家事。炊事洗濯掃除何でも来い。洗濯は千雨が嫌がったけどな。

これは後で自分でやって貰おう。下着なんて俺に見られたくないだろうし。

昼にちよつとおかゆを作ってみた。

「食べれるか？」

「少し位なら」

蓮華ですくい、息を吹きかけて少し冷まして食べさせる。

上半身は起こしてある。寝たまま食べるってのも駄目だろう。

「ほい、あ〜ん」

「ん」

パクツ、と食べ、ゆっくり咀嚼する。

やべ、この状態の千雨見て可愛いと思ってしまった。小動物みたい。

熱で苦しんでるのに、と思うとちょっとアレだけど。

夕方には木乃香達が来てくれたが、流石にうつるかもしれないので部屋に入るのは遠慮して貰った。

むしろあんまり寝て無い俺の方が、見て無い千雨より心配された。薄く隈が出来てるらしい。

この日も夜はあまり寝付けなかったらしく、あまり顔色は良くなかった。病気なのだから当たり前だとは思うが、程度は有るだろう。

熱が中々下がらない。いい加減『窓の無いビル』で本格的に診療すべきか？でも医者いないしな。内科は専門外だ。怪我ならなんとかなるが。

というか、バラすきっかけが風邪ってどうよ。

あー、ヘブンキヤンセラー『冥土返し』的な医者いねーかな。病気だけどぞ。

顔色の悪い千雨を見てると心配になる。

また一旦戻ってシャワーを（略）

翌朝。

熱は中々下がらない。未だ四十度の境をうろついている。

いい加減千雨の体力もヤバイと思うんだよね。あんまり食べないし、飲まない。汗かくのに。

脱水症状にならない様に最大限気を使い、加湿器で少しでも水分の代わりになればと思う。

ホントに風邪か？ コレ。本格的にヤバい気がするぞ。

汗が凄いので下着まで着替えさせる。見ない様に気を使った。

背中とかは軽く濡らしたタオルで拭いたりしている。風呂とかは入れねえしな。

千雨自身あまり寝てなくて辛そうだしだ。

家事の出来ない護は今頃カップ麺で過ごしてるだろうがな。

「大丈夫か？ 千雨」

「あんまし、大丈夫じゃ、無い」

だろうね。喋るのも辛そうだよ。話しかけなきゃよかったか。

そろそろ本気でヤバいんじゃないかと保険医の先生に見て貰ったが、「多分風邪の筈。症状は風邪。熱が高すぎるけど」と言われた。

熱以外は風邪ってどうよ。熱が下がれば治るのか？

体温を下げるにはどうするか、薬はちゃんと飲ませたし、解熱剤はおかゆをちよつと食べさせて飲ませたし。

それでも下がらないならどうしろと？

学園都市製の方が効きそうだから、薬の効果をキツチり確かめ、内部の成分を分析して、千雨の体にあうか調べてから服用させた。

でも、あんま効かなかった。消化系の問題か？ 体力弱ってるしな。

夕方になると、木乃香達が折り鶴を持って来た。学校で作ったらしい。

「というか、潤也の方が大丈夫か聞きたいんだけど」

「俺は大丈夫だよ。風邪も引いてないし、体調はいたって良好だ」

「でも凄い隈が出来てるえ」

「寝る時間があんまないからな。看病しっぱなし」

「大丈夫なの？」

「熱が下がんねーんだよ。薬も飲ませたし、保険医の先生に診て貰っても風邪だって言うんだが」

本当に風邪かどうかも怪しい。熱が異常に高いだけの風邪ならいいんだが。

「それじゃ、お大事になって伝えてな」

「おう」

部屋先での対応に慣れたらしい。二人とも気を使っていると言う事を理解してくれてるみたいだし。

部屋に入られると、本当にこのタチが悪いウイルスに感染する可能性があるからな。ただし俺は除く。

いい加減熱下がれよーと思いつつ熱を測る。まだ下がって無い。

体力がもどれば一気に治る可能性はあるんだけどね。体力を戻す方法が無い。

まさかDB見たく「千雨の体力を全開になるまで戻してくれ」なんて頼みをシエンロンが聞いてくれるとも思えない。



というか、それ以前にいたら「風邪治してやって」って頼むだろ  
うけどね。ドラゴンボールねーかな。

在ったら死ぬ気で集めるけど。などと不毛な事を考えていると、  
千雨が起きたらしい。

「ん……」

「何か飲むか？」

「いや、いらない」

声に力が無い。連呼するが、大丈夫か？ ホントに。

「……ここまで、きたら。しょうがない。いくか……」

「何に？」

「アレだ……」

なるほど、アレか。直ぐ用意しよう。

双子のテレパス舐めんなコリア！ と喧嘩腰になりつつ準備する。

眼の前には、ベッドの上でお尻を出して俺の方に向けてる千雨の姿。

うつ伏せに寝そべり、顔は赤い。いや、顔色は悪いが。眼は少し涙目だ。

不覚にも萌えてしまった。俺のバカ。

ズボンを下げ、入れる物を用意する。

パンツはギリまでしか下げるなよ。と威嚇されたのでその通りにし、構える。

「……………じゃ、行くぞ」

「よし、いじ」

あ、座薬の話です。そう言わないと、いろんな人に間違った解釈をされそうなので言っておく。

ロケット型のソレを肛門にあて、ゆっくり入れる。

「ん、あ……………」

千雨の声を聞き、ちょっと意地悪したくなる俺が嫌になる。いや、流石に俺でも、こんなシチュエーションで苛めようとは思わん

よ。

Sではあるけどな。と無駄な事を考えつつ押し込む。

押し返されない様にしっかり奥まで入れる為、力を込める。

なんとなく征服感がある。

「う……ん……」

R18とか入れるべきじゃね？ 等と思いながらしっかり奥まで入れる。

しっかり入れたのを確認し、服をしっかりと着させる。

「はい、終わり」

「……黒歴史か」

そう言っつなよ。プライドだけじゃ生きていけないぜ？

学園都市製、言わなくてもいいと思うが、成分分析などきっちりやった物だ。

後は効くのを待つだけ。熱が下がるといいのだが。

翌朝。

今日はすっかり寝れたようだ。熱が大分下がった。

おかゆを用意し、食べれる分だけ食べさせ、水分を取らせて寝させる。

だんだんと顔色が良くなって来ている。この分なら明日には治ってるかも知れんな。

あくびをしながら家事を終え、ちよつと仮眠を取って看病を再開。

とはいえ、ぐっすり寝ているので俺はもう特にやる事は無い。熱もほとんど引いたし。

結局、よく眠れず、水分もあまり取れなかったので衰弱し、その所為で長引いていただけらしい。

座薬を使ったのはいい判断。だと思う。別に方法があつたのかも知れんが。

昼過ぎには自分で起き上がれるようになり、俺を安心させた。

うどんなどの消化のいいものは今日までかな。と思いつつ、夕飯の用意。

すっかり主婦になった気分だ。やってる事はいつもとあまり変わ

らないのだが。護、家事出来ないからね。

夕方、またアスナと木乃香が来てくれた。

「もう熱が下がったし、明日か明後日くらいには戻れるよ」

「インフルエンザとかじゃ無かったの？」

「性質の悪い風邪だったらしい。漸く治って来た所だ」

「なら良かった。潤也君も気を付けなあかんえ」

「俺は風邪如きに負けない」

「そう言う人が風邪を引くんやえ」

馬鹿は風邪を引かないと油断したバカが風邪を引く。

なんとなくそんな言葉が頭をよぎった

揚げ足取りとでも言うのだろうか。特に意味があった訳じゃ無いが。

顔色がいい。これならちょっと目を離しても大丈夫か。

そんな訳でちょっと睡眠を取らせて貰う。

「ん……」

私はゆっくり目を開ける。

見慣れた天井。首や脇にはタオルで巻かれた保冷剤がある。

熱の所為であつた頭痛も大分引き、立ち上がるのも楽になった。

座薬はちよつと思ひ出したくないけどな。

潤也は帰つたのか？ と思ひながら飲み物を取る為にキッチンへ向かう。

冷蔵庫には、潤也が用意してくれたのであろう飲み物や食べ物がいろいろ用意されていた。生真面目だな、アイツ。

当の本人はリビングのソファで寝ている。隈が出来ているし、ずつと起きて看病してくれていたのだろう。

それにうれしくなり、寝ている潤也の隣に腰掛けた。

寝顔を見ながら微笑み、ベッドに戻る為に立ち上がろうとする。

「あ、つと」

ヤバイ、と思ひながらふらつく。

「あぶねーな、おい」

潤也が起きて、私を支えてくれた。

「……起きてたのか？」

「ちょっと前からな。まだ完全に治った訳じゃないんだ。寝てる」

「あ、ちょっと」

そのまま、俗にお姫様だっこと呼ばれるやり方で持ち上げられ、ベッドに連れて行かれる。

「無理はしない事。まだ治って無いんだからな」

そう言って、また寝るつもりなのか、リビングへ向かう。

「……潤也」

「ん？ どうした？」

ちょっと、面と向かって言うのは恥ずかしいが。

「……ありがとな。看病してくれて」

「……大切な妹だからな。礼なんていいんだよ」

シニカルに笑った潤也は、そのままリビングへ行った。

……大切な、『妹』……か……。





## 番外一（後書き）

千雨が風邪を引いちゃった回。うまくかけた気はしない。

治療に関しては浅知恵ですのであまり当てにしないようお願いします。

ぶっちゃけ座薬の所が書きたかっただけだったり。

でもアレ以上詳しくすると、R18な展開だと思われて削除しろ、って言われそうでチキンな作者には出来なかった。

座薬って医療行為だから大丈夫ですよね？

次回はまた番外な可能性。今度は千雨の　な姿を書きたい。

## 番外二（前書き）

この回に出てくる千雨はキャラ崩壊を起こしている可能性があります。  
す。

御注意ください。

魔が差した、とも取れる回です。ハイ。

## 番外二

月明かりの照らす部屋。

俺は特に何をするでもなく、ベッドの上で寝転がっていた。

年が明け、両親から「正月くらい帰って来い」と言われたので、千雨と共に帰省中だ。

そのくせ、二人ともどっかに出掛けて、「今日は帰れない」とか言っていてやがったので、現在千雨と二人きり。

寮にいろいろ持っていき、簡素で質素な部屋になっている自室を見渡す。

ノートPC位なら『ゲートオブパピロン王の財宝』に入ってるから適当に弄ったりできるが、その作業もちよつと飽きた。

夏休みに、茶々丸とか言う人形の頭覗いた時の設計構想を垣間見て、面白そうだと思いだしながら書きだす作業も大分前に終わり、かなり適当に書き加えている。

作ってみるかなーとか、半分冗談で思っている。

その場合、多分『未元物質』で装甲を作り、武器にはガトリングレールガンを用いて、念の為に人工知能と遠隔操作制御装置でも付けるんだろーとか思う。

本家涙目だな。茶々丸憐れ。魔力は用いて無いから燃料の問題が

大きい。ま、どうにかなんじゃね？ 創るかどうかも分からない訳だし。

夏休みの自由研究のノリで作れそうな気もするが。

日がすっかり沈み、外には雪が降っている。

どの道俺は気温が上がろうと下がろうと関係無いのだが。今は能力切ってるけど。

冬の夜は乾燥して星が良く見える。天体望遠鏡でも組み立てようかな、とか思ったり。

暇つぶしに地球の自転速度を変化させてみようかな、とか思ったり。

何をするにも面倒なのでこのまま寝ようか、とウトウトして来た所でコンコンノックのと音が鳴る。

「いいぞ」

返事をして直ぐにガチャ、と開けられるドア。

「うわ、真っ暗。何、もう寝ようとしてたのかよ」

「いやあ、特にやる事無くってさ」

真っ暗な部屋に慣れていた所為か、廊下の明かりで千雨の姿がよく見えない。

パチン、と千雨がスイッチを押して蛍光灯がつく。同時に視界が真っ白になり、一時的に目が見えなくなった。

目をパチパチさせていると、頬に何か当てられる。

「って、冷たっ！」

ビックリしたよ。部屋の中って暖房効いてるから能力切ってたんだよな。

ベッドから起きあがり、何か手渡される。

「ジュースだよ。飲むだろ？」

「ん、ああ。ありがとう」

早速開け、一口飲む。

「レモン味が」

口の中がレモン味になったのでそう判断。ラベルなどは特に見ない、というかまだよく見えない。好き嫌いも無いし問題ない。

「冷蔵庫に有ったのを適当に持って来た」

「ふーん、炭酸の飲み物なんてあの親が買ってるのかねえ」

結構ほったらかしにする親だしな。子供の事は子供に任せる的な感じ。

漸く目が見えてくるようになったところで、違和感に気付いた。

「……千雨、おまえ何着てんの？」

「Yシャツ」

「誰のだよ」

「潤也のだけど？」

俺のかよ。いや、確かにクリーニングに出して寮に持ってくの面倒だから、持って来た覚えは有るけどさ。

長袖の奴を着てるが、下がパンツだけって寒くないか？ 家の中大体暖房付けっぱなしだけど。

俺のシャツなので、ダボついて手首のところは指しか見えて無い。

ボタンはいくつか外され、千雨の胸元の白い肌が見えている。

下は多少隠れているが、やはりYシャツ。下着を軽く隠すだけで太ももなどはしっかり露呈している。

ネットアイドルやってるだけあって、スタイルは良く、細くて白い足は陶器を思わせる。

この千雨の状態を簡潔に表すとするなら、裸Yシャツというものだ。

「何でソレ着た？」

「いや、風呂上がったら丁度よく目に入ったから」

髪はタオルで纏めてあり、水気を含んでいる。

眼鏡はかけておらず、少し上気した頬は色つぼく見える。

「ま、いいけどな。むしろありがとう」

ケタケタと笑う千雨はベッドに座りこみ、自分のジュースを飲む。

「しっかし暇だな。父さん達は明日の昼位なんだろう、帰ってくるの」

「らしいな。呼んだのは父さんたちなのに」

ホントだよ。帰って来いと言ったのはそっちなんだから、家にいるよっつー話。

ゴクゴクと喉を鳴らしながら炭酸を飲む。……炭酸のジュースってこんな味だっけ？ 美味いけど。

最近飲んでねーなーと思い、気になったのでラベルをしてみる。

『レモンソーダ』

……ソーダじゃねーか！ 酒じゃん。やっぱりあの親炭酸とかじゃなくて酒買ってやがったな。

ある意味予想通り。そして多分……

「……どうした？」

見てみれば、千雨が飲んでるジュースもレモンサワーだった。軽く振ってみて貰うと、もうほとんど飲み終わってた。

アルコール類は取りたくないんだがな。演算に支障をきたすから。こんな状況で危険なんて無いと思うが。

気にしないでいや、と思ってそのままレモンサワーをゆっくり飲み干す。

机に空になったジュースを置き、ベッドにあおむけに寝そべろうとする。

千雨はとつくにジュースを飲み終わり、俺の横に座っている。

つまり、必然的に膝枕を要求した訳だ。

が、避けられた。

「ケチー、膝枕位いいじゃねーか」

寝そべったままそう言うと、千雨が俺の上に倒れ込むようにのしかかって来た。顔が俺の横に来る。

「どうした？」

「いや、なんとなく」

トクントクン、と心臓のリズミカルな音を感じる。



＼シャツと言う事もあり、胸はしつかり当たっていて柔らかい。その感触に顔がちよっと緩む。

それに気付いたのか、千雨がニヤッと笑って言った。

「エロ兄貴」

「そんな恰好で言うな」

背中を指でつ、つゝとなぞってみる。耳に息を吹きかけて。

「う、ひゃっ」

ビックリしたのか、直ぐに退こうとするが、捕まえて逃げられない様にする。千雨は背中が弱いのか？

そのまま背中をなぞっていると、最初はビックリしただけらしく、反応は薄かった。

位置をチェンジさせ、俺が千雨を押し倒している様な形になった。

今度は首をゆっくり舐めてみる。

「ちょ、潤也……」

肩口からゆっくり舐め上げ、右耳を甘噛みする。

「はむっ」

「お、いつ」

唇で啜くわえる様にして耳を舐めてみた。

手を使ってどかさうとするが、その手は俺が押さえていて動かさない。

念入りに、丹念に、耳を舐めまわす。肩まで下がり、また耳まで舐め上げる。

耳から首を通り、肩へ向かう。そして逆に移動し、一往復する度ビクンと震える千雨を両手で拘束しながら、舐め続ける。

「は、あ。潤、也あ……」

吐息が漏れ、甘い喘ぎ声が聞こえる。

ヤバイ、アルコールが効いたのか、これ位ならいいやって、気が大きくなってる。度数は高くない筈だが。酒に弱かったのか？

少なくとも初めて飲んだしな。

声を聞く度に感情が昂り、制止する気が無くなってくる。

口を離して千雨をみてみると、頬に赤みが差してちょっと艶っぽい。艶やかとも言つ。

汗をかいて肌に張り付いたシャツは胸を強調し、タオルがほどけて少し湿った髪がベッドに投げ出される。

眼は軽く涙目になっており、可愛くて抱きしめたくなる。

ていうか抱きしめた。

千雨の横に寝そべり、腰に手を回す様にして抱きしめたら、千雨は俺の首に回す様にして抱きしめてくる。

今なら全世界を敵に回しても構わない気がして来たよ。

アルコールが本格的に回って来たのか、ガチでリミッターが外れそう。

「歯止めが、きかねエ」とか「最っ高オに飛ンじまったぞ」とかこんな時に言うセリフじゃねーだろ。なんてパニくった事を考える。

もう一度舐めてやろうかと顔を近づけると、ゆっくり横に動いて位置が変わり、今度は逆に俺が押し倒される形に変わった。

そしてそのまま、俺の首筋が舐められる。

「うぁ、お」

ビックリして変な声が出てしまった。千雨はこんな気分だったのか。

「お返しだ」

千雨は耳では無く、そのまま横に行って右目をぺろりと舐めた。

「うにゃああ!?!」

眼球を舐めるだ！？ 常識人の千雨がそんな事をするなんて…  
…俺の悪影響だと言われると否定できないが。

眼球を舐めると視力低下の恐れがあります。良い子は真似しないでね。というテロップが頭の中を横切った。

そのまま丹念に念入りに眼球を舐められる。

背筋がゾクゾクとして変な感じだ。電流が走る様な、奇妙な感覚。頭がピリピリする。

瞼を閉じようとしても無理矢理開かれ、腕で抵抗しようにも足で押さえつけられてる。

能力は演算が乱れてて使えないし、使う気も更々ない。

一舐めされる度に体が震え、口からは意味のない言葉が漏れる。背中に汗が流れ、足は攣った様にびくびくと動く。

上に乗られて逃げられず、止めさせようにも腕が使えない。唯なされるままだ。

詰んだ。

されるがままに眼球を念入りに舐められる。

脳髓が融ける様な感覚。甘い吐息に溶けそうな気がする。

「んふっ」

表面をなぞるように舐められ、瞼の裏まで舐め尽される。

長く感じた眼球舐めは終わり、右目は千雨の唾液で濡れている。

ちよつと顔を離れた千雨は恍惚とした表情をしており、楽しそう  
だ。

……兄妹揃ってS気質かー。等と考える。千雨限定ならMでもい  
いや、と思ったのは間違いじゃ無い。

常識なんてブチ壊せ！ このまま襲え！ 頭の中でそんな言葉が  
繰り返される。

理性が崩れそうだ。

千雨は俺の胸に頭を置き、そのままぎゅっと抱きしめてくる。

俺も抱きしめ、数分。二人とも動かず、体温を確かめるようにず  
っと抱きついたままだ。

心臓の音がハッキリ聞こえる。生きていて、近くにいると実感で  
きる。

「……今なら、アルコールの所為にしてやるぞ」

「……なんだ、分かってたのか」

頭も少し冷え、思考も戻って来た。最後まで行く気は流石に千雨  
には無かつたらしい。

俺はいつでもOKだけどな！

誰かに怒られそうな事を考えながらまたギュッと抱きしめる。

「最近さ、潤也はいろんな奴と一緒にいるよな」

「いろんな奴？」

「神楽坂とはよく遊びに行ってるみたいだし、那波はこの間一緒に  
保母の仕事したって言ってたし、龍宮と一緒に居る所もよく見る」

……ああ、そんなこともあったな。

アスナとは夏休み以降よくどっかに遊びに行くようになった。主  
にアスナから誘って来る。

那波は本当に偶にだが保母の仕事の手伝いをして欲しいと頼まれ  
る。子供の扱いが慣れてると言われた。特にそう言う事は無いんだ  
が。

アレか、背後に七色の爆発を起こすからか。男の子には大人気だ  
よ。

龍宮は言わずもがな、『試射』だ。窓の無いビルで一通りやって  
貰った後、餡蜜を奢ったりしている。どっちにも得があるんだが、  
俺の礼みたいなものだ。

龍宮は腕が鈍らない様に、俺は銃の性能をテスト出来る。利害が  
完全に一致したからな。龍宮はバイアスロン部で練習してるらしい

けど。

「長瀬とか古菲はよく手合わせして欲しいとか言ってるみたいだし。木乃香をお見合いから逃がす為にいるいろやったりしてるって聞いている」

スゲーなオイ、其処まで分かってんのかよ。ビックリだ。

長瀬とか古菲は軽くあしらってるけどな。拳法使う奴相手にまともにも戦えるか。能力も使う訳にはいかねーし。

木乃香はナビゲートしてるだけだがな。『アンダーライン滞空回線』で逃げ道を割り出すのは難しくない。

「ずっと傍にいるって言ったけど……なんつーのかな、どっかに消えそうな気がしたんだよ」

消えそうな気がした、か。

「言っただろ？ 『賭けてもいい』ってさ。約束は破らないよ、俺は」

「……なら、いいんだけどな」

そんな不安になる様な事か？ 『ベクトル操作』がある以上、俺が死ぬ確率なんて殆ど無い。核さえ防ぐからな。

千雨は知らないからしょうがないが。

「バカレンジャーに勉強教えるくらいは全然構わないんだが……な

んて言えばいいのが分かんないけど……他の奴と仲良くしてると、羨ましいとか、ずるいとか思ったりするんだよな」

……。

「なまじずっと一緒にいた分、依存してんのかと思って一時期離れてみようかと思っただけど、無理だったし」

そんなこともあったなーと思う。一週間程会わないのは、まあ学校からして違うからしょうがなかったが、一カ月位会わなかった事もあったな。

「そんなに心配なら、しっかり手を握っている事。俺はどこにも行かないし、ましてや消えたりなんてしないよ」

「……なら、いいけど。ちゃんと隣にいてくれよ、お兄ちゃん？」

お兄ちゃんなんて久しく呼ばれたな。小学校入学の時位から呼ばれなくなったからな。

……『兄』、か。心配しなくても、隣にいてやるよ。



## 番外二（後書き）

何だか純愛（純愛？）なルートに入りそうな感じだった回。というか千雨の嫉妬の回。

これはifとして捉えてくれた方がいいかも知れないです。裸Yが書きたかっただけですから。

裸エプロンとか書きたいけどR18で100パー消されるから自重します。

正直ハーレムとか俺の技量的に無理っぽかった。でも頑張る。

実際、ハーレムといっても龍宮は仕事仲間とか相棒とか言った方がしっくりくるんですがね。

アスナと千鶴はきつと振り向いてくれるよ。明日菜は既に振り向いてるよ。

千雨も既に振り向いてるようなものですがね。

今回は漸く原作開始。いろいろ忙しいからちよつと遅れる可能性あり。

感想を頂けると嬉しいです。

## 設定集（前書き）

書いて欲しいと要望があったので書いてみました。

見なくても全然OKです。むしろネタバレが入ってるので見ない方がいいかもしれません。

というか、オリキャラ多過ぎて疲れたwww

9 / 19 更新

## 設定集

主人公

名前：長谷川 潤也はせがわ じゅんや

年齢：14歳（現在中三）

身長：174cm（どの道『肉体変化』で弄れる）

体重：85kg

容姿：赤髪黒目。顔は千雨を男っぽくした感じ。

体型はある程度鍛えているので細マッチョ。

髪は赤い。だが、ベクトル変換で紫外線などを反射していた為色素が薄い。

性格：一言で表すなら用意周到。基本的に知り合いには甘い、本気で敵対すれば容赦なく人肉を引き裂く。

善意には善意で、悪意には悪意で返す奴。基本S。

好きなモノ：千雨 アスナ 珈琲 弄りがいのある奴 自分に好意を向けてくる者

嫌いなモノ：大切な者に手を出す奴ら 無駄な喧嘩をふっかける奴

能力：『とある魔術の禁書目録』に出てくる超能力全て』

基本的に反射は有害物質だけに設定され、それ以外は『窒素

装甲』で防いでいるが、削板の『原石』の能力を使えば頭を狙撃されても痛い済む。

超能力者は魔法が使えないが、神に『副作用無し』と頼んでいるので実は魔力が扱える。(でも気付いてない)

『アクセラレータ一方通行以上の頭脳』

読んで字の如く。一方通行を超える演算能力と頭脳を持つ。

これのおかげで勉強せずにすんでいる。

超能力は演算能力で規模や精度が変わるので、世界最高峰と言ってもいい頭脳を持つ潤也は同時に世界最強の超能力者でもある。

『ゲートオブバビロン王の財宝』

基本的に倉庫。学園都市の産物が入っている。

『学園都市の科学産物』

端的に言ってしまうえば、学園都市で作られたモノが全てである。  
『アンダーライン滞空回線』とか『パワードスーツ駆動鎧』とか。

補足：基本的には『窓のないビル』にいる。麻帆良の一角に作り出した。

『ダークマター未元物質』を駆使している為に魔法ではどんな手段を使っても入れない。

『空間転移』系統の能力者《それでも高レベル》でなければ入れない。

名前：垣根かきね 帝督ていとく

年齢：14歳

身長：185cm

体重：85kg

容姿：禁書の垣根（潤也の変装。というか『肉体変化』使っただけ）

補足：『セブンスミストグループ』の社長（表向き）。潤也だと知  
っているのは刹那、真名、千雨、アスナ。暗部のグループとスクー  
ルのメンバー。後八重。

名前：御上<sup>みかみ</sup>零<sup>れい</sup>

年齢：0歳（作られたばかりだから）

身長：152cm

体重：60kg

容姿：肩甲骨辺りまである黒髪。すらりとした体型でつり上がった  
目が特徴。

性格：適当。大雑把ともいう。どこぞの慢心王みたいな話し方をす  
る。

性能：体表はロンズデーライトの上に『<sup>ダークマター</sup>未元物質』で作られた新物  
質がコーティングしてあり、強度は真正面から『白き雷』を受けて  
も傷つかない程度。

学力は最低限一般レベルはある。

『新物質』を使って白い翼を展開できる。強度は『雷の暴風』を逸らせる位。真正面から防ぐと破損する。

製作者はもちろん潤也。

右腕：エーテルキャノン『アルファダガー』を装備している。光の<sup>ダガ</sup>剣は細胞を核から破壊できる。

左腕：？

補足：二十七話にて3 - Aに入る事になる。出席番号二十六番。

名前：八重<sup>やえ</sup>

正体は瀬流彦。実質潤也の右腕として働いている。

能力者では無い。

『セブンスミストグループ』通称『SMG』

世界最高峰の科学技術を持つ会社。

島を所有しており、其処で研究や実験を行っている。情報の流出に

は敏感である。

ロシアとの交渉で北方領土を所有地として手に入れた。

原石を匿っており、居場所と仲間を提供して簡易的な研究に協力して貰っている。

本部は麻帆良に存在する『窓の無いビル』。これを知っているのは数名のみ。

#### 『暗部組織』

敵対勢力や人物を消す為の組織。大半が元犯罪者で構成されている。日本全国に散らばっている為、日本で起こった事に関しては直ぐに対処できる。

世界中に支部・協力機関があるので、全世界の裏関係の事件に対応している。

#### 『グループ』

基本的に暗殺が専門。諜報やスパイ活動もしている。

裏の世界から表の世界を守る為に存在する組織。

名前：柊 奏 ひいらぎ かなで

年齢：二十一歳（大学三年）

身長：百六十 cm

体重：五十五 kg

容姿：黒くウェーブがかった髪。黒眼。スレンダーな体型だが胸は大きい。整った容姿で目元が少しだけつり上がっている。

性格：基本的に物事を要領良くこなす。話し方は丁寧で、穏やか。

能力：大能力者。レベル4 空気を圧縮して糸を創りだし、操作する能力。エアロスラッシャー 『空気裁断』と呼ばれている。☐

最大距離740m。最大本数七千四百本。

補足：グループのリーダー。元無差別連続殺人犯。

ある程度武術の嗜みがある。

名前：鏡 光輝 かがみ こうき

年齢：二十歳



身長：百七十二cm

体重：七十kg

容姿：黒髪黒眼。ボサボサの短髪。いつも眠そうにしている。スマートな体型。

性格：変態。話し方は穏やかで、よく物事を茶化す。

能力：大能力者<sup>レベル4</sup>『幻術使い』<sup>イリュージョニスト</sup>。範囲内に入れば、五感の内最大で三つまで操作が可能。

特性上相手の脳内の電気信号を読み取る必要があるが、その手段として電波の様に円形に念話のような形で強制的に幻覚を見せている為、簡易的な探知能力としても使える能力。

補足：変態。直ぐに脱ぐ癖がある。猥褻物陳列罪で何度か捕まっている。勘が良い。

近接戦闘は全くと言っていいほど出来ない。

能力を応用し、某境界線上の『不可能男』の様な『ゴッドモザイク』が出来る。

名前：九澄<sup>くすみ</sup>龍司<sup>りゅうじ</sup>

年齢：二十一歳。

身長：百七十五cm

体重：九十kg

容姿：筋肉質の高身長。短い茶髪。少しタレ気味の眼と低い鼻が特徴。

性格：大雑把。仕事以外は基本的にだらしない。

能力：強能力者『オートリパース』。能力を発動させれば自身の傷を治せる。致命傷レベルになると傷をふさぐのが精一杯。

補足：戦闘は『スマートウェポン』と『発条包帯』を使った戦いをする。

距離を置きながら銃で撃ち、内側に入り込まれないよう強化した身体能力で逃げる。

また、グループ内で唯一『気』が使える。

元強盗犯。

名前：安心院 梓あしひつ あすな

年齢：十四歳

身長：百四十七cm

体重：四十二kg

容姿：腰まである赤みがかかった茶髪が特徴の少女。

性格：よく早とちりする。我儘が多いが、その度グループの誰かが

止めている。

能力：強能力者<sup>レベル3</sup>『念動力<sup>テレキネシス</sup>』。大気操作の能力に近い。圧縮された空気の手の様なもので攻撃する。発動するまでに少し時間がかかる。操作できる最大重量は百七十kg程度。

補足：苛められた過去があり、苛めていた連中を皆殺しにしている。

名前：井上理香<sup>いのうえりか</sup>

年齢：十八歳

身長：百五十六cm

体重：五十二kg

容姿：肩まである黒髪。垂れ気味の目が特徴。

性格：人見知りする方で、人と話す時は顔文字を使う為、初対面ではまず話している相手は必ず頭の上に『？』が浮かぶ。

能力：強能力者<sup>レベル3</sup>『座標転移<sup>ム↑フポイント</sup>』。一度に飛ばせる距離は330メートル。最大重量は1250kg。自分は飛ばせない。

『空間転移<sup>テレポート</sup>』と違い制限が少ない為、同レベルでも能力の質も規模も『座標転移<sup>ム↑フポイント</sup>』の方が大きい。

補足：特になし

潤也のクラスメイト

名前：雨中うちゅう護まもる

身長：170cm

体重：72kg

容姿：茶髪で長身。イケメンかつワイルドで爽やかな青年。

性格：基本的に良い奴。困っている子がいたら助けてあげる位に。でも価値観が残念過ぎる。そして演技力が大根役者レベル。

超能力を持つが故に中学に上がる前に中二病にかかった事がある。

能力：『原石』。透視やテレパシーなど複数の超感覚系能力を持つ珍しい超能力者だが、その能力は効果や範囲が小さく、非常に微妙。（テレパシーの効果範囲は半径5m以内、予知夢は一部を除き内容がおかしい、など）。総評は『微妙』である。

潤也曰く「無駄に多く能力持ったから一つ一つが残念なスペックに落ちたんだろう」との事。

名前：梶咲 賢すきさき けん

身長：172cm

体重：73kg

容姿：それなりに整った顔立ち。

性格：ハーレム目指す残念な奴。女子に対してセクハラ発言が多いが、嫌われてはいない。そもそも男子校なので会う機会自体少ない。

補足：自称エロゲ・ギャルゲマニア。成績はそれなりに良い。美少女以外はアウトオブ眼中。

名前：仲芽黒 吉希なかめくろ よしき

身長：158cm

体重：52kg

容姿：背が低く童顔で眼鏡をかけており、白髪のショートカットという容姿であるため、女子にも見える中性的な美少年。

性格：心優しい少年。その割に梶咲を弄る事が多い。

補足：栴咲への好意は既にカンスト気味。栴咲以外はアウトオブ眼中。

名前：濱面 司拳はまじら しあけ

身長：169cm

体重：87kg

容姿：ぼさぼさの茶髪にジャージとジーパンが主な服装

性格：不良で喧嘩っ早いが、臆病者でもある。意外と純情な奴。

補足：学力は未だ小学生レベル。学校に殆ど出て無いので当然とも言えるが。

潤也の知り合い。

名前：雨中 廻あめの中 めぐり

容姿：ショートながらも艶やかで手入れの行き届いた髪にヘアバンドをしており、幼げな顔立ちできめ細かい肌質をしている。普通に美少女。

性格：悪い上に常識が無い。でもやると決めたら一直線。勘違いの

塊。

補足：アイドルを目指している。その割に歌唱力皆無で大根役者。護の姉。同学年だが双子では無い（廻が四月生まれで護が三月）。

名前：東堂とうどう

容姿：ハーフであるため金髪のロングヘアを持ち、前にたらしめている髪の毛先をカールさせており、小豆色のリボンで髪を二ヶ所結んでいる。

性格：朝倉が師匠と呼ぶ程のパパラッチ。自分の考えをとこころ構わずに言う。

補足：美少女なのに性格に難があり過ぎて一歩引かれている。意外と乙女な人。ウルスラの新聞部部长。

校内で起きた事件を翌日には記事にして掲示するほど新聞づくりに入れ込むが、『晒し上げ精神』故に悪趣味なネタで行き過ぎることもしばしば。

麻帆良男子校の教員。

名前：魔義流まぎりゅう

容姿：攻撃的な美を表したような容姿の持ち主で、艶やかな闇色の髪をアップに纏めており、普段はスラリとした体軀を強調させるタイトな紺色のスーツを着ている女性。

性格：唯我独尊タイプの自信家で傍若無人な性格だが案外打たれ弱く、漢言葉を使用する。相咲曰く「知れば知るほど駄目な人」いきなり現れては場を引つ掻き回す面倒な人。常識が無い。

補足：スペックが異常に高い。頭の回転は潤也と並ぶレベル。家庭生活能力がゼロ。

名前：潤之<sup>かれの</sup>

容姿：黒髪で眼鏡をかけている。スーツ姿が似合いすぎて普段着だと絶対に分からない。

性格：超がつく常識人。東大出身でスペックが高い為、いろんな意味で暴走しやすい潤也達に苦労させられている。

補足：富士山などの何気ない景色を見て喜んだりとそついう感性がピュア。



## 設定集（後書き）

基本的に生徒会の一存と禁書をリスペクトしております。

潤也と零、グループの面々以外はほぼ出ませんけどね。教師に至っては名前しか出て無い人もいますし。

第十七話「お邪魔させていただきます」bYネギ（前書き）

アスナのキャラがブレにブレている気がする。

というか、平日より休日が忙しいとはどういう事だ。書く時間が増える筈なのに、減っているなんて……。

## 第十七話「お邪魔させていただきます」byネギ

いつも通り、駅について電車から降りる。まだかなり余裕がある時間帯だ。

首に巻いたマフラーをつけ直し、駅から出る。

寒さは少し和らいだけど、まだまだ寒い、と思う。

二月に入り、後一カ月もすれば期末テストかーと憂鬱になった。最近は特に成績が悪い訳ではないのだけれど。

二学期の中間、期末では驚かれたわね。「あのバカレツドのアスナが好成績だと!？」って。

イラツと来たけど、まあしょうがないと思う。今までの成績を思い出せばそういう評価になってもおかしくない。

今、私と木乃香はとある人物を待っている。

木乃香から聞いた話だと、学園長の知り合いの新任教師が来るらしい。

学園長に頼まれ、その新任教師を迎えに来てる。

学園長の知り合いならきつとジジイだと思ったけど、潤也が「ナギ・スプリングフィールドの息子だぞ?」って言った時は驚いた。

どうして潤也が知ってるのかもだけど、ナギの息子が教師っていうので凄く驚いた。

馬鹿だったのに？ 息子は馬鹿じゃないの？

十歳でメルディアナを卒業した天才らしい。馬鹿から生まれたのは天才だったのか、と何だか失礼な事を考える。

本人は魔法学校中退だつて公言してたからいいと思っけど。

アリカは確か頭良かったと思う。

ネギ・スプリングフィールドっていうらしい。どう呼ぶか。ネギ先生でいいかな。心の中ではネギでいいか。

「それにしても、遅くない？」

「うーん、もうすぐ来ると思っえ」

ならいいけど。赤髪で子供なんて目立つから直ぐ分るだろう。

というか、普通教員って一般生徒より早く行く必要があるんじゃないの？

それにナギの子供って今思えば私達より年下の筈……。

「と、思ってる間に来たわね」

「あ、あの子？」

「だと思っけど」

ナギの息子だ、顔も髪の色も似てる。眼鏡を掛けてるけど。……  
何故あんな目立つ杖を背負っているんだろっか。

「あの〜、ネギ・スプリングフィールド先生ですか？」

木乃香が話しかけた。ナギの息子に敬語……何だかおかしい感じ。

「あ、そうですけど。何か？」

「ウチ、近衛木乃香言います。迎えに来たんです」

「神楽坂明日菜です」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「それじゃ、おじいちゃ……学園長の所へ案内します」

礼儀正しい。ナギとは本当に似ても似つかない性格だなあ。

木乃香が先導して、麻帆良学園女子中等部にある学園長室へ向かう。

校舎へ入ろうとすると、どこかからタカミチの声がした。

「お〜い、アスナ君！」

「あ、高畑先生。おはようございます」

手を振っているのが見えたので、挨拶しながら振り返す。

「お久しぶりでーす!!! ネギ君!」

「久しぶり、タカミチーっ!」

どうやら知り合いらしい。まあよく出張に行ってるから知りあっても不思議じゃないわね。

そんな事を考えていると、タカミチが校舎から出て来た。

「今日からA組はネギ君が担任になる」

「この度、この学校で英語の教師をやる事になっています。よろしくお願いします」

ぺこりとお辞儀され、なんとなく私達もお辞儀で返す。

「でも、教育実習生ですよね。子供ですし」

「そうなるね。でもしずな先生もサポートにつくし、大丈夫だよ」

ハハハ、と笑いながら校舎の中へ入る。それに続いて私達も校舎内に入り、学園長室を目指す。

一応学園長室自体は別の所にもあるらしいけど、学園長は結構ここにいる。

私や木乃香の監視、とかいう名目もあるんだろうか。面倒事は一

纏めにするつもりなんだろう。

コンコン、とノックをし、中に入る。タカミチは職員室へ向かった。

いつも通り妖怪じみた頭をした学園長の姿があり、隣には源先生がいた。

ちゃんと挨拶し、本題へ。

というか、私達までここに居る必要は無いんじゃない？

「……なるほど。修行の為に日本で学校の先生を……そりやまた大変な課題をもちろつたのー」

修行つて言つていいの？ 木乃香もいるけど。

「まずは教育実習じゃ。今日から三月まで……ちなみに、ネギ君には彼女はおるかの？ おらんのならウチの孫娘このかなぞ……」

「ややわー、おじいちゃん」

ガンツ、と金槌で頭を叩かれ、頭から血を流す学園長先生を見て、ネギは軽く顔が引きつってる。

いつもの事だし、慣れた。いつも言う学園長もどうかと思うけど。

最近、お見合いから逃げる為に私や潤也を呼び出す回数も多くなつた。潤也はナビゲートだけ。

何であんなに詳しく逃げられる場所とかルートとかが分かるんだろう。本人は「学園の監視カメラをハックした」って言ってたけど、無い場所もある筈なのに。

とか考えてると、いつの間にか話が終わってた。

「あ、そうそうもう一つ。アスナちゃん、木乃香、しばらくネギ君を君等の部屋に泊めてくれんかの？」

「え？ 何ですか？」

「まだ住む所決まっとらんじゃよ」

まだ住む所が決まって無い、ね。

「教育実習生が来るって、少なくとも数カ月前からは通達が来ている筈じゃないんですか？ それで用意出来て無いつて仕事が出来ないと思われませんか？」

「ふお！？ 何故そんな事を？」

「いえ、かなり気になったので。それなのに『住む場所が無い』。これって実習生を送ってくる学校の方から文句が来ても言い返せませんよね？」

にっこり笑ってそう言う。ナギの息子だ。きっと何かある。性格的に。

魔力は多いし、聞いてみればまだ十才。暴発すれば何が起こるか分からない。



メルディアナをちゃんと卒業してるから、最低限の魔力コントロールとかは出来るんだろっけ。

「む、確かにそうじゃが、寮の方に空きが無くての……」

「へえ、英国イギリスからの実習生。それも子供なら高畑先生とか同居に適任じゃないんですか？」

潤也曰く、「学園長には正論出せば勝てる」らしい。だからちょっとやってみる。

ちなみに「タカミチと同じ部屋」と聞いてちょっと嬉しそうにしていた。さっきも仲良く話していたし。

「確かに高畑先生は適任だけどね。出張が多くて大変なのよ」

しずな先生が問いに答えた。

木乃香は魔力量が多くて狙われる。其処に「英雄の息子」を連れてくれば狙われる要素は増えるし、周りの人に被害が及ぶ可能性まで出てくる。

ソレならタカミチレベルの実力者の膝元に居た方がマシだと思う。学園長も強いらしいけど、よく知らないから分からない。

潤也が居れば大抵の敵は何とかなるだろうけど。千雨ちゃんに被害が出ない様に、麻帆良に入った瞬間潰されるだろう。

というか、千雨ちゃんの裸を見た。とか潤也の耳に入ったら十階

建てのビルが音速で飛んできて驚かない。もしくは上半身と下半身がさよつなら。

まあ、そうなったらどの道ネギに生き延びる道は無いでしょうね。麻帆良に居る限り逃げられないだろう。

学園長たち含め、自業自得としかいいようが無い訳だし。

大体、木乃香には魔法関係の事は教えて無い筈だから、この子を一緒に生活させるとばれる可能性が上がる。バレさせたいのなら別なんだけど……。

……女子寮に住む事が、ネギにとっていわゆる『死亡フラグ』なのかも。

ナギには恩があるし、何とかしてみよう。

「……分かりました」

「ウチもええよ」

「ホッ……では、仲良くの」

そのまま学園長室を出て、私と木乃香は教室へ向かった。

いつも通り騒がしい教室に入り、超から肉まんを買う。おいしい。

カバンを机に置き、いつも通り準備をする。

「ねえアスナ。新しい先生が来るって本当？」

「朝倉、アンタホントに情報速いわね。もう来てるわよ」

「え、マジ？ 来るまで分からなかったなんて、新聞部の恥！」

知らないわよ。大体、教育実習でも来てすぐ授業は無いでしょ。普通数日前とかには入っておくべきだと思う。首席で卒業したらしいから常識は心配して無いけど……。

……いやでもナギの息子だし、常識外れでもおかしくないわね。

コンコン、とノックの音が聞こえた。

そのままドアを開け、春日と鳴滝姉妹がしかけた黒板消しが落ちる。

だけど、その黒板消しは一瞬空中に浮き、止まった。

……まさかとは思うけど、障壁で何でもかんでも防いでるとかじゃ無いわよね？

と思ったら普通に落ちて頭が白くなり、他にしかけていたトラップに次々とかかる。

トラップにかかり、ようやく止まって誰が入って来たか分からしく、ほぼ全員叫んだ。

「えーっ！？ 子供！？」

一斉にネギに寄って行く。確かにビックリするわよね。

そして、そのまま自己紹介。

「今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど、よろしくお願いします。」

……今、確実に魔法っていいかけたわね。

本当、大丈夫かしら。

授業は何とか普通に終わり、放課後。

流石に授業中は何も無かった。何かあったら流石にフォローしき

れないけど。

「アスナ、ちょっと買いだし付きあってんか」

「え？ 買いだしって、何の？」

「ネギ君の歓迎会のやえ」

ああ、なるほど。歓迎会のお菓子やらジュースやらを買う訳ね。

「いいわよ。じゃ、早速行きましょ」

「全く、先に帰ってるなんて思わなかったわ」

手分けして買いだしに出て、木乃香は既に帰ったらしい。ちょっと離れてたし、まあしょうがないかな？

ついでにネギを探してきてなんて言われたし。

「……ん？」

アレは、本屋ちゃん？

本を大量に積み上げて階段を下りている。アレじゃ落ちてもおかしくない。

手伝ってあげるべきよね。と、思ったら、足を捻ったのか、体が傾いて横に落ちる。

ここから感卦法と瞬動で何とか　　と思ったら、ネギが杖を構えているのが目に入った。

まさか、こんな人目のつく場所で魔法を……使ったわね、何の躊躇も無く。

確かに人命を優先はすべきだけど……もうちょっとやり方は無かったものかしら。

まあ、今更言ってもしょうがないわね。私は見て無い、見て無いこと。

今来たふりをして教室へ連れて行かなくちゃね。

「ネギ先生、何してるんですか？」

「あ、神楽坂さん。宮崎さんが足を捻って階段から落ちたみたいで……って違う、捻ってこけたみたいなので、保健室へ連れて行くのを手伝ってもらえますか？」

あ、ここはまともな対応。階段から落ちたの一言はいらなかったけど。

「じゃあ背負って連れて行きますから、一応先生も来てください」

「分かりました」

保健室へ連れて行き、軽く処置して貰った後、私達は教室へ向かった。

特に酷い訳でもなく、異常は無かった。

「えっと……どうして教室へ行くんですか？」

「見てからのお楽しみ、という奴です」

ガララツ、とドアを開け、一斉にクラッカーが鳴る。

「ようこそ、ネギ先生ーっ!!」

ほぼ全員の揃った教室で、歓迎会が始まった。

「遅かったやん、アスナ。何しとったん？」

「本屋ちゃんが足を捻ったらしくて、先生と保健室へおぶって行っただのよ。大した事は無かったみたいだし、今はもう普通に歩けるけどね」

コップにジュースを注ぎ、一口飲む。

「……しかし、いつにも増して元気がいいわね」

「ネギ君かわええからな」

かわいい、のかしら。よく分かんないけど。

さつき本屋ちゃんが図書券渡してて、また騒いでたし。委員長は銅像とか。

相変わらずのシヨタコンよね。死んだ弟の影響もあるんでしょうけど。

「やあネギ君。初日の授業お疲れ様だったね」

「あ、タカミチとしずな先生まで来てくださったんですか」

「僕は元担任だし、しずな先生は僕が出張に出ている間の3・A担任だったからね」

ネギの方はタカミチとしずな先生と話してる。こんな所で流石に魔法を使ったりはしないわよね。うん、きっと大丈夫。

その後、特に何も無く終わり、お開きとなった。

「じゃ、ネギ先生は私達の部屋に泊まるんですね」

「ハイ、お邪魔させていただきます」

……本当、ナギの息子とは思えない礼儀正しさね。

「アスナ〜、ネギ先生〜はよ行こ」

「あ、待ってよ木乃香」



私が木乃香の元へと走り、その後が続いてネギが来る。

……これなら、きっと大丈夫よね。

「……は、は……」

アレ？ 何だか魔力が渦巻いてるんですけど？

な、何だか嫌な予感。

「はつくしよい……」

くしゃみと共に風邪が巻き起こる。

その風はスカートを上げ、魔力が籠って『武装解除』が付与されていた。

……あ、危ない。危うく『武装解除』される所だった。というか何でくしゃみで『武装解除』されるのよ。

『魔法無効化能力』が無かったら、私今頃素っ裸よ？

コレが木乃香だったら素っ裸なわけだし、千雨ちゃんだったら修羅<sup>也</sup>が飛んでくるだろうし。

うわあ……いや、でも……うわあ。

絶対にくしゃみはさせちゃ駄目じゃ無い。見捨てる訳にもいかな  
いし。

「す、すみません」

『きっと大丈夫』を撤回するレベルね。大丈夫じゃないわ。本当にメルディアナ首席で卒業？

前途多難ってこういう事を言うんだなあって、本気で思った日だった。

第十七話「お邪魔させていただきます」byネギ（後書き）

よくよく考えると一話目でこの流れじゃ惚れ薬騒動も無いんですよ。  
ね。

本屋は……惚れるのか？

アスナの魔法無効化能力つて、武装解除防げますよね？愛衣のアーティファクトの全体武装解除防いでたし、防げない事は無い筈。自覚してるし。

ネギエ……出落ちは免れたが、爆弾庫の中で火の作業をさせている様なものだからなあ……ネノギにならない様にしなければ（オイ序盤で死なれると流石に困る。

次回はまた日常。非日常も入る可能性あり。

## 第十八話「今、充電中」 by 明日菜

いきなりで悪いと思うが、これにはみんな同調してくれると信じてる。

『リア充爆発しろ』

実際にリア充って見てるの嫌だよ。幸せそうだし、女がいるし、人生バラ色見たいな顔してるし、彼女がいるし、彼女出来てるし。

彼女と一緒に登校して来たりしてたら嫉妬どころじゃない。目線に質量があつたら麻帆良が壊滅しているだろう、位のレベルの目線を向ける。

いちやいちゃしやがって……と言いたいが、大抵その邪魔は出来ない。彼女と一緒にいると流石に……ねえ？

最終的に何が言いたいって、潤也もげろって事なんだけども。

目の前の会話を聞いていて凄くそう思う。

「潤也、私疲れたよ……もうやだあの子」

「よしよし、頭を撫でてやろう。だから機嫌直せ」

とか言いながら頭を撫でてるんだぜ？ 神楽坂の方はそれで満足って顔してるし、背中に抱きついてるし。

コレをリア充と呼ばざるして何と呼ぶ。

「護、悪いがコーヒーを淹れてくれなーか？ アスナが離れない」

「ああ、構わなーよ」

そう言っただけ俺は立ち上がり、キッチンでコーヒーを淹れる。コーヒーを淹れる機械のメーカーを見れば『SMG』と書いてある。

『SMG』は今回はこういうのまで売り始めたのか……最初は世界トップクラスの技術を持つ会社だから、もっとこう、凄いのを予想してただけだな。

実際には隠してるだけらしいが。

テーブルまで運び、三人分置く。神楽坂は未だに潤也に抱きついたらまま。

「いい加減離れないか？」

「もうちょっと……今、充電中」

何のだよ。充電って何を充電してるんだこの娘。

「で、何が疲れたんだよ」

「うん……アレだよ。新しい先生。子供の」

ああ、確か有名になってたな。姉貴も騒いでたし。十才の子供が先生とか、世も末だな。

世も末って言葉で、実はこの部屋が三人部屋でもう一人いるけど不良で帰ってこない奴の事を思い出した。

潤也とは結構仲が良かった筈だけど。入寮の時もめてたしな。いろいろと。最終的には入れる事になったけど、たまにしか帰ってこねえし。

まあ、今はそんな事はどうでもいい。

「それがどうした？」

「あのご魔法使いなんだけど、秘匿意識が異常なまでに低いのよ。何度バレかけた事か……その上、ウルスラの先輩に武装解除かけるし」

うっかり魔法の事を口走りやすいらしい。

「というか、武装解除を一般人に使っていいのか？」

「駄目だろ。常識的に考えて。ドッジボールつつースポーツでの事で態々魔法使うとか。精神が未熟過ぎるね」

「でも十才なんだろ？」

「あの餓鬼、公式的にはオックスフォードを飛び級で卒業した事になってるぞ」

うわあ、随分と派手にやったんだな。

というか、其処までの天才が麻帆良で教師をやるって時点で噂に

ならないのはおかしい。

と言う事は、嘘か。まあ普通に考えて嘘なんだろうけど。

「大学卒業できる程度なら、精神もある程度は成長してなきゃなあ」

悪い笑みを浮かべてる。凄い悪人面だ。苛める気か？ Sだよな。潤也って。

「潤也がドッジボールやったら相手が死ぬから駄目だね」

「んー？ 流石にそんな事はしないよ。本気出せば数センチで空気摩擦でボールの方が燃え尽きるだろうから」

人外だよな、本格的に。どうやったら人間の腕でドッジボールのボールが数センチで空気摩擦で燃え尽きる様な球放れるんだよ。

ビックリ人間ショーか！

「ソレはともかく、魔法バレはして無いんだよな？ その子供先生」

「頑張ったよ、私。一般常識が欠け過ぎてて驚いたけどね」

うん、俺は非常識の代名詞が同じ部屋だからそう言うのにはもう慣れた。

常識がある分こっちがマシ……なのかね？

こっちも偶にビックリするぐらい非常識な行動に出るけどな。主に千雨ちゃん関係。

「でもまあ、アレだろ。口で言うだけなら誰でもできるし、魔法なんて非現実的なモノを信用する訳ねーだろうし」

「超能力なんて非現実的なモノを使う俺達が言っても、説得力なんてねえだろうけどな」

まあそうだけどさ。それ以前に魔法の事知ったのも一年くらい前だしさ。

俺は2001年、9・11事件の次の日、魔法について知った。

『能力者』の『原石』という立場で、望むなら同じ『原石』達の様にとある島で過ごすと言う方法もあると言われたが、俺は断った。

なんだかんだでこの学校居心地いいしな。

それに、大抵の『原石』はその異常性故に周りに拒絶されて、自ら島に行くのが殆どって話だったし。

……一番驚いたのは潤也が本当に『超能力者』だったって事だな。

『SMG』社長の『垣根帝督』に才能を見出された。とか言ってたけど、本当かどうかは知らない。

嘘だとしても、本当の事を俺に話すといろいろと不都合があるんだろう。

「それにしたって、一応魔法学校を首席で卒業とかじゃ無かったのか？ 魔力コントロールくらい出来て当然じゃね？」



「魔力量が多いらしいからな。コントロールも難しいんだろ」

ま、関係無いしどうでもいいが。と続けながらコーヒーを飲む潤也。興味の無い事にはとことん興味ねーのな。

分かったた事だが。

「いや、でもそれで千雨がひんむかれたら目玉の一つや二つ位弾いても文句は言えないよな。四肢を弾いてもいいけどさ」

うわぁ……千雨ちゃんの事になるととことん思考回路が物騒だ……。

いや、コレも分かったた事だけどさ。

「もう少し加減しようぜ。流石に目玉とか四肢弾くとかは無いだろ」

「バカ野郎！ 町中でそんな事になったら俺は見た奴全員の記憶から消してついでに目玉弾く必要があるんだぞ！」

「目玉弾くなっつー話だろうが！！」

常識で考えろ！ いや、超能力者相手に常識語るってもどうかと思っが。

ソレにしたって目玉弾くはやり過ぎだろう。見た奴のまでってのは流石に冗談だろうが。

「それにしたって、記憶を消すなんて出来るのか？」

「俺に出来ない事は……多分あるだろうな」

無いとは言い切らないんだな。さっすが現実主義者。リアリスト自分の出来る事を分かってるんだな。

「いや、でも……（勝てない）敵はいないし、記憶関係も処理できるし、科学方面も……うん、大抵の事は出来るな」

むしろできない事の方が少ないんだな。うん、分かってたよ。

括弧の中が俺には分かるよ。誰と敵対するつもりだテメエ。

「そついえば、何日もお風呂入ってないみたいだったし、お風呂にも入れたわよ……ああ、職員寮の奴に高畑先生がね。流石に子供だからって女子寮の大浴場に入れる訳にはいかないでしょ。千雨ちゃんとお風呂場で会ったら絶対潤也がキレるし」

「まーな。当然だよ。幾ら子供だからとて容赦はしない。手加減もしない。同情もしない」

「外道だな」

「超能力者ですから……妹の為なら人類半分消滅も仕方無い」

「待てコラ。超能力者って俺も含まれてるだろうが。それに何？麻帆良でセカンドインパクトの予感！？」

流石にしないと思うが……いや、本当にやりそうだなコイツ。

素手で地面陥没とか、地殻を一人でひっくり返したりとか、自転車を止めたり……は、流石にできねえだろ。実際、どんな能力を使うのか知らないけどな。

千雨ちゃんの為なら地雷原をタップダンスしそうだ。全部爆發させてもきつと無傷なんだろうけど。

「……そう言えば、もうすぐ期末テストだね」

露骨に話の路線変更。このまま続けると大変な事になりそうだと思うたんだらう。

「そーか、もうそんな時期か」

「テストは大嫌いだ、俺は」

「学生の敵だらう、テストは」

お前は全教科満点だろーがよ。嫌みか畜生！

「テストかー……」

「……？ どうしたの？」

「いや、胸糞悪い事思い出した」

「胸糞悪い事？」

「昔、小学校高学年の頃だったかな？ 俺は毎回全教科満点。千雨

は平均点。さて、一部の教師は何と思うでしょう？」

「ハア？ 一部の教師はどう思うって……スゲー、位じゃねーの？」

「……千雨ちゃん、不憫な目にあっただ？」

「正解。『出来の良い兄』と『出来の悪い妹』だとさ。平均点取ってる時点で出来が悪いってのもどうかと思うが、それを聞いた時は一瞬で沸点突破してブチ切れたね」

……ああ、そっぴやそんな事もあったな。

そんな噂が一時期流れて、潤也常に鬼神モードだったからな。迂闊な事話すと犬神家の刑に処されてたし。

それに何より……

「ま、そんな事を言ってた教師は汚職やら何やら私生活含めネットに全部ぶちまけたけどな」

数人の教師は社会的に殺され、後ろ指を差される様な事になって、自主的に辞めて行ったらしい。

今は何処かの田舎の村で暮らしてるとか言う噂だ。

犯人は捕まって無いと言ってたが、コイツだったのか。

「まあ、アレだ。過ぎた才能は周りからうとまれるんだよ。その時の捌け口が一番近い千雨だったってだけで」

自分で言うのはどうかと思うが、確かに的を得てる。

確かにコイツ毎回テスト満点だしな。うとまれてもおかしくないし、比較するには双子の妹の千雨ちゃんが一番都合がよかったんだろ。

「今後満点とつて目立つ様な真似は避けるかとも思ったが、ソレをやったらやっただで妹が足を引っ張ったとかいうバカが出て殲滅したし」

懐かしいな。そんな事もあった。

犬神家よろしく、頭から公園に埋まってたからな。アレには驚いた。

むしろそれで外傷は擦り傷だけ、頭には異常が無いと言うのが不思議でならなかったよ。

窒息はしかけたらしいけどな。

というか、犬神家シリーズやめろって話だよ。怖いんだよ！昔の話だけだよ。

「こんなことなら初めから平均点を計算して丁度やる。見たいな縛りプレイでもやってりゃよかった」

テストが簡単過ぎて笑ったわー、等と言っていやがる。

「随分と上から目線ですねこの野郎」

「実際上ですからねこの野郎。俺からすれば唯のぬるゲーなんだよ」

「本当に縛ってあげようか？」

「勘弁してくれ。言葉のあやだぞ」

神楽坂ってさらっと変な事を言い出すよな、偶に。

縛りプレイの意味を履き違えてるし。

「むしろ俺が縛りたい」

「いいよ？」

「「え、いいの？」」

ビックリした。この上なくビックリした。

まさか縛っていいよとか言われるとは思わなかった。いや、言われたのは潤也だけだよ。

神楽坂ってマゾ？

「潤也になら……」

顔をちょっと赤くしている。……リア充滅べ。いや割とガチで滅べ。

当の本人はちょっと頭を抱えている。何でだよ。

「……アスナ、そう言うのは他に人がいないときに言えよ。護がいるだろう?」

「俺は邪魔だって言外に言ってるのか?」

邪魔したろーかこの野郎!

「冗談よ」

カラカラと笑う。……いや、まあ確かにそうなんだろうけどさ。さっきの反応割とガチじゃ無かったか?

深くは詮索しない。きっと危ないんだ。俺の本能がそう言ってる。

「で、テストの話だったか」

「うん、また勉強会開く? 最下位脱出でも目指してみる?」

「バカレンジャーだっけ。成績悪い五人組。毎回毎回教えてるのに最下位脱出しないよな、お前等」

「私の代わりに桜咲さんが入ったの。バカホワイトって呼ばれてる。みんなやる気ありませんから」

「ご愁傷さま。桜咲って人。そんな言われてんだね。」

「というか、万年最下位なんだっけ。麻帆良女子中の3-A。」

「ウチのクラスは潤也の影響もあって毎回一位を取れる。やる気の無い奴も一部いるが。」

「ああ、桜咲か……ならしよが無いよなあ。四六時中ストーカーしてるんだし。勉強してる時間なんて無いだろ」

え？ ストーカーしてんの？ 誰を？

俺の疑問は解決される事無く、次の話へ移っていた。

「で、どこで勉強すんの？」

「また図書館島じゃ無い？ タカミ……高畑先生の時は出張が多くてテスト勉強は自分たちの教室でやってたけど」

「俺が教えるようになってから図書館島になったんだっけ……別に場所の変更はいらないだろ。来たい奴だけ来るよーにして伝えたいくれ」

「ん、分かった」

この時点で神楽坂は漸く潤也から離れた。

アグレッシブだよなあ……行動力があると言うか、潤也の事好きなんだなって普通に分かる。

潤也は気付いてて放ってるんだろうけど。あいつが気付かない筈が無い。俺でさえ分かるんだし。

「それじゃ、私そろそろ帰る」

「おー、じゃあな。気をつけて帰れよ」



「其処は『送って行ってやる』とか言うべきじゃないの?」

「お前に勝てる一般人を見てみたいわ」

確かに身体能力ならトップレベルだよな。喧嘩になっても負けるのか? 神楽坂。

「それにまだ明るい。暗くなってるならまだしも、明るいうちから送ったらあの触覚とパイナップルが嗅ぎ付けるだろうが」

「むー、しょうが無い。愚痴とか聞いてくれただけでありがたいし。じゃあね」

ボタン、とドアが閉められ、帰って行った。

「さて、俺は俺でやる事があるんだ。晩飯作るのはちょっと遅れるぞ」

「ああ、構わないけど、何するんだ?」

「ん? まあ大した事じゃねえよ。念の為にな」

「ハア?」

そう言つと、潤也もドアから出て何処かへ行った。

……何しに行ったんだろつな。というかどこに。

第十八話「今、充電中」by明日菜（後書き）

護視点で書いてみた。特に意味は無い（え

宿題の量の多さに呆れて現実逃避して書いた。きっと何とかなると信じて。

同じ部屋の不良……世紀末帝王と言えば分つてくれると信じてます（オイ

いや、モブではないけどそこまで重要でもない。なんというか、修学旅行のときの人数あわせの為というか（え

正直図書館島の話どうしようか迷ってる次第です。ついでにエヴァの話も入れる予定ですが。

今回は図書館島関係。エヴァ視点は……多分入ります。

第十九話「そのセリフ万能だと思ったら大間違いだからな」by千雨（前書き）

レッツ三連投稿。頑張って書きましたぜ。

そして今回、いつにもましてご都合主義在りです。

後書きにちょっとお知らせがあります。

第十九話「そのセリフ万能だと思ったら大間違いだからな」by千雨

いつも通り、エヴァンジェリンは茶々丸を連れて教室へ入る。

特に何も変化の無い日常。だが、苛立ちは募っていた。

去年の八月。自身を殴り飛ばした男。

やっている事を一蹴され、戦闘となつてやられた。

茶々丸は半分に断たれ、自身は背骨と顔面の骨折と言う重傷を負った。

情報は掴めず、足取りが分からない。

見た目は学生だと思っていたが、実際には違うのか。それとも、検索しても分からない様な仕掛けがしてあるのか。

ガイノイドである従者の茶々丸から情報を聞くも、思い出した特徴に一致する生徒は数名いたものの、容姿は全く違う者だった。

容姿だけならば、強いて言うなら同じクラスの長谷川や神楽坂に似ているな、位にしか思っていない。

いつも通り騒がしいクラスメイトを一瞥して、いつも通り席に座り、いつも通り文庫本を取り出して読み始める。

奴を見つけるにはどうすればいいのか、それは分からない。

もしかすると、もう麻帆良にはいないのかもしれない。ならば、予定通りあの少年を襲うだけだ。

十五年も封印されている。約束の時は過ぎていく。そして、肝心の呪いを掛けた男は死亡したという噂が流れている。

ならば、親のツケは子供に払ってもらうしかあるまい。

担任であり、獲物であり、恋した男の息子。

暫くしてから、少年　ネギ・スプリングフィールドが来た。

授業が終わり、夕刻。

帰りのHRの時間となり、担任のネギは勉強会を言い始めた。

「テストも近いので勉強しましょう！　その……うちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので！」

何がだ、と複数名思った事は置いておくとして、勉強すること自体は悪い事では無い。

唯でさえ万年最下位というレッテルを貼られているのだ。中にはそれを無くしたいと思う者もいて。

千雨も「まともな事を考えていたんだな……」と、教師の考えに對して少しばかり上方修正する。

が、次の言葉で覆された。

「提案提案！ お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

「……じゃあ、それで行きましょう」

一瞬考えたそぶりを見せた後、そう発した言葉に頭を抱えたのが二人。そのほかの者は大抵騒いでいる。

千雨とアスナだ。

千雨は当然ながら十才の教師に對しての評価はもうこれ以上下がり様が無く、最早マイナスの域にまで達しかけている為、怒りを通り越して呆れしか出てこなかった。

アスナは実際親類で、何とか普通に過ごさせたいと思っていたが、最近「無理なんじゃないか？」と思い始めている。

部屋ではロープでソファに縛り付けておかねばいつの間にか自身の布団に潜り込んでるし、常識を知らないにも程がある。いや、英単語野球拳を十才で知っているのもどうかとは思っただが。

それはともかく、担任の許可を得て騒ぎ出したクラスメイトを横目に、アスナは溜息をついてぼつりと呟く。

「……そう言えば、昨日潤也がまた勉強会開いてくれるって言うってたわね」

「あ、本当？ 潤也君に教えて貰うと分かりやすいよね」

呟きに反応したのは近くにいた朝倉。

「そうですね、超さんに匹敵するか、それ以上の頭脳持っていると聞きますし」

その話を聞いていた雪広もまた、反応を示す。

実際、二人ともテストで満点と言うふざけた点数を叩きだしている訳で。

もう驚嘆する事も無く、むしろ満点じゃなかったら体調でも悪いのか？ と心配されるほどである。

バカレンジャーと呼ばれる集団が英単語野球拳で脱がされる状況を見ながら、アスナは思った。

(……これ、バレたら普通にクビよね。千雨ちゃんは参加して無いからいいけど)

正直、危険度は龍宮などの関係者ほぼ全員がハッキリわかっている為、無理矢理参加させようとはしない。そもそも関係者はほとんどが下らないと一蹴して参加していないのだが。

新田にバレたら不味いだろう。という考えを持った生徒は、この

クラスでは少なくとも片手の指で足りる程度しかいなかった。

潤也にバレると物理的に飛ぶというのは彼を知っている者の常識だ。

「……大丈夫じゃ無いな。これは」

「お疲れだね、千雨ちゃん」

「私はお前があの先生と一緒にいて疲れない事がおかしいと思う」

「潤也に愚痴聞いて貰ったりしてるし、大丈夫だよ」

少しばかり教室の空気が冷えた気がしたが、恐らく錯覚だろう。  
と近くにいた龍宮は思った。

「……そうか、潤也も暇なんだな」

「護と部屋で駄弁ってたって言ってたよ」

「ふうん……私はちょっと用事があるから会つのは勉強会の時か。  
どうしたらこの気持ちは抑えられるのかね」

英単語野球拳で脱がされたバカレンジャー集団。そしてソレを囃はや  
し立てる周り。後、止めようとしている担任ネギ。

その光景にイラつきは正直溢れる寸前まで来ており。

「笑えばいいと思うよ」



「そのセリフ万能だと思ったら大間違いだからな」

今度会ったら盛大に愚痴を聞かせてやろう。と心に誓う千雨であった。

「えっと……どなたですか？」

「千雨ちゃんのお兄さん。すごく頭いいんだよ」

何とかネギが英単語野球拳を止めさせた後（始めさせたのも彼なのだが）、疑問を零す。

取りあえず、頭を良くする魔法は『偶然にも』失敗した。アスナの気付かれない妨害によって。

疑問に答えるのはパパラッチ朝倉。大抵の情報ならば、彼女に聞いた方が速い。

「長谷川さんの、ですか？」

「そ、このクラスの人は大抵潤也君の事知ってるよ。頭いいし、ルックスいいし、シスコンだし」

最後のに関してはネギは何か言いたそうにしていたが、取りあえず先に聞くべき事を聞く。

「それで、その潤也さんに勉強を教えて貰っているんですか？」

「まー、大抵はね。テスト期間になるとバカレンジャー含む何人が図書館島行って勉強するのよ」

ちなみに、アスナがバカレンジャーを脱退したのも彼が原因ではないか、と考える者までいる。いや、まあ当然と言えば当然だとは思うのだが。

そのほかのバカレンジャーに関しては、勉強中も他の事に目が行って集中出来ない為、成績が上がらないのだろう。という見解である。

基本的に勉強継続していく物の為、効率上がる方法は有れど、流石に其処まで簡単に成績が上がる筈も無く。

……まあ、本当に頭に何か知識を詰め込みたいのなら『テストメント学習装置』でも使えばいい話ではあるが。

記憶は弄れば良いだけの話であるし。

というか、其処までやる義理なんて全く存在しない為、やらない。と言っのが現状だ。

「教え方は凄く上手で分かりやすいし、全員やる気出せば最下位脱出位は出来るんじゃないかな？」

気楽にそう言う為、今度会わせて貰おうと決心したネギであった。

「マスター、勉強会があるようですが、どうしますか？」

「行く訳が無いだろう。態々勉強しに行くなど面倒だ。それに、あのおかしな呪いの所為で毎日勉強させられているからな」

茶々丸の質問に少しイラつき気味に答える。

変質した呪いの所為で『一日三時間の自宅学習』という呪いが追加され、しぶしぶやっているのだ。これ以上は勉強などしたくも無い。と言ったところだろう。

おかげで成績の順位は上がっているのだが、卒業できない彼女がらすればそんな事はどうでも良く。

今年はネギが居る為、呪いを解いて卒業できる可能性もあるが、態々卒業まで待つ意味も無い。

今の平穏な日々は気に入っているが、卒業云々は学園長に処理させればよい事でもある。

「長谷川さんのお兄さんと言う事ですが、赤髪で長身なら、マスタ

「の言っていた方の可能性もあるのでは？」

「……そうだな。見た目は近いかも知れん。会ってみるのも一興か」  
実際には学校に所属しているならば、学校のデータベースに無いなんて事はない筈なのだ。

だが、それを考えた上での発言。当たりだとは思っていない。

超能力者を見分ける方法など知らない。だが、半年以上呪い続けてきたのだ。その姿は未だに脳裏に焼き付いて離れない。

故に、見ればわかる。

実力は相当。最盛期の自身も敵うかは分からないほどに、ふざけた力を持っていた。

魔法の軌道を捻じ曲げる。そういう類の能力を使うのだろうか。

だが、足でコンクリートを砕き、その上背中に竜巻の様なものをつけて、砕かれたコンクリートの中を無傷で突っ切って来た。

何か秘密がある。

魔法使いの障壁の様なものを常に張っているのか。またはそういう能力が使えるのか。

どの道、超能力者に関しては情報が異常に少ない。

機械に関しては最も使える茶々丸でさえ、超能力者、それに関係

する『SMG』についての情報は殆ど得られなかった。

「……超能力者、か」

ポツリと呟く。

一つだけ分かった事がある。

これは超能力者と戦った者達の間で噂になっていることらしい。実際に生き残った者は旧世界中では両手の指で足りる程度しかないとか。

その者達が、関わりたくないと思いつつもネットに流した情報。

『超能力者は、魔法を使えない』

使わないのではなく、使えない。

その根拠たる所以は分からないが、実際に戦った今は思う。魔力の高まりどころか魔力を精製する事さえしている様には思えなかった。

だが、気は使えるらしい。神鳴流などの技を使える訳では無い様だが。

更に、どんな能力を使っていたのかもバラバラ。同じ見た目の人間が違う能力を使っていると言う者もいる。

ネットに溢れる情報。どれが真実なのか、虚偽なのか。

科学に疎い少女に、真実など分かりはしない。

窓の無いビル内部。

照明の無いその部屋で、一人の少年が椅子に座っていた。

少年の目の前にモニターがいくつも現れ、移り変わる。

座っている椅子から脳の電気信号を読み取り、いくつものモニターを見て、操作命令を飛ばす。

操作に手など必要無い。

思考をすれば、機械が読み取って暗証番号や周波数を入力される。

(ふん、学園長達も考えなし、と言う訳では無かったようだ。下らない考えのようだが)

部屋の中央、見た目は特に何の変哲も無い椅子に座り、目の前に現れるモニターを確認して音声を拾いながら鑑賞する。

其処に映っているの近衛近右衛門、タカミチ・T・高畑。

『……なるほど、『魔法の本』で図書館島地下へ誘導するのですか』

『うむ、わしのゴーレムで見張りをする故、心配はいらんよ』

『そうですか……それと、エヴァの事ですが』

『分かっておる、エヴァを倒した者は全力で探しておるが、見つからん』

『やはり、彼女に手伝って貰った方が良いでしょうが……』

『エヴァの事じゃ、無理じゃろうな』

その言葉にタカミチは苦笑する。

『ですが、桜通りの件は？』

『一般生徒も襲われているようじゃが、殺される事もあるまい。毎回見つからん様にわしも監視しておるし』

『ならば良いのですが……ネギ君に試練を与えるにしても、エヴァは少し実力が違い過ぎるのでは？』

『だからこそじゃ。実力が伯仲しておると手加減も難しい。エヴァ程の魔法使いだからこそできるのじゃ』

『そうですか……アスナ君も、最近は少し大人しくなったようです』

し。仲良くなれたのでしょうか？』

『そうじゃの、やんちゃだった頃が懐かしいわい』

フォッフフォッフオ、と笑う学園長を前に、タカミチは少し考え込むような顔をする。

『どうした、タカミチ君？』

『いえ……何でも無いです』

何かを言いかけた後、それを取り消す。

何かあると言っている様なものだが、学園長はあえて追求をしなかった。

気持ちとしては、昔に戻った様な感覚がした。と言ったところである。記憶が戻っている事を知らないから、唯の勘違いで済ませたようだが。

『ネギ君には丁度よい試練になるじゃろう。一般の生徒の安全はわしが保証する。大丈夫じゃ』

『一応僕も時間があるときは監視をしたいですが……次に動くのは、恐らく来月でしょう？』

『そうじゃな。満月の周期を考えればその位かのう』

『他の魔法先生には問題ないと通達してあるんですよね？』



『もちろんじゃ。ネギ君の為じゃからのっ』

チツ、と潤也は舌打ちをする。

(ネギの為、ね。その為には一般人が多少襲われた位はどうって事無いってか?)

イラつき気味にそう思考する。

英雄の子供。それがどれほどのネームバリューを持っているかなど、想像に難くは無い。

それは木乃香にも言える事だが、本人が魔法関係を知らない事、親が旧世界の魔法組織の長と言う事もあり、MM元老院の接触は難しい。

まあ、麻帆良にいればいつでも接触は可能なのだが。刹那は常に近くにいると言う訳では無いし。

それ以前に不審者が麻帆良にいた場合、100%の確率で潤也に何かしらのアクションを起こさせる。

『疑わしきは罰しろ』というスタンスである為、怪しいなら取りあえず機動力奪つとこうぜ。という感じである。狂犬の様な考え方ではあるが。

もちろん一日に出入りする人間すべてを見ている訳ではないし、誰でも怪しんでアクションを起こしている訳ではない。

魔力・気を『アンダーライン滞空回線』で感知、それを発している人間を特定し、

情報を徹底的に洗う。

超能力の中には『情報をダイレクトに制御する能力』もあるのだ。情報戦では負ける気がしない。

黒の場合はもちろん潰し、白でも監視はつけたまま。

それでも全く関係の無い一般人相手に何かするということは無いです。

(……現状では何かしら被害を受けてはいないが、このまま続けさせると面倒かもしれないな)

この件を解決する方法は二つ。

エヴァンジェリン自身を潰すか、エヴァンジェリンの目的を潰すか。

前者は言うまでも無く、『ディーブブラッド吸血殺し』での抹殺。細胞レベルで消せば恐らく死ぬのだろうが、面倒だと考える。

自分の手で殺す事はあまりしたくは無いですし、まだした事はない。衛星の光学兵器で戦艦を沈めた事はあるのだが。そして、潤也は事件次第では人肉を引き裂く事も躊躇わない。

後者は簡単。呪いを消すと言う事。

目的が無くなれば、吸血をする意味が無くなる。だが一度プライドを叩き潰している為、呪いを解いて襲い掛かってこないとは限らない。その為、この案は恐らく使われない。

( ……面倒だな。もうすぐ期末テストで勉強を見る必要もあるし )

そして、別のモニターが現れる。

表示されているのは火器銃器の類。そして、設計して製作段階の『機械人形』。

グラビティガン  
重力銃やガトリンググレールガン。そのほか多数の兵器の設計図や機能を現した表が浮かんでいる。

戦力と言うなら、本気を出せば麻帆良は二時間もあれば制圧出来るだけのものがある。

よっぽど碌でもない事をしない限りはそんな事はしないが、準備だけは進めておこうと思考する。

碌でもならない事にならなきゃいいが。と呟く潤也だった。

第十九話「そのセリフ万能だと思ったら大間違いだからな」by千雨（後書き）

人形に関しては「これ戦力やばくね？」と引かれるようなのを目指します（オイ

エヴァ再開フラグ。そして死亡フラグ。死ぬのか、死ぬのか？（マテ

まあそれはどうでもいい（え

漸く夏休み。たったの十三日間と言う短い期間。更に「ハハツ、笑うしかねえや」と言うばかりの山の様な宿題。

ぶつちやけ更新が途絶えます。一週間から二週間程。

がんばりますが、どうやっても一週間で終わる量じゃねえww

そんな訳で更新ができませんが、待っていて頂けると嬉しいです。

……感想を頂けると、宿題がはかどりますー ・、（チラッ

**第二十話「私は出来るだけ楽をしたいのですが」by綾瀬（前書き）**

息抜きに書いてたらいつの間にか一話出来上がった（笑）

そんな訳で二十話です。

第二十話「私は出来るだけ楽をしたいのですが」by綾瀬

カポーン。

そんな音が聞こえてきそうな場所。女子寮の大浴場。

各々体を洗い、ゆっくりと湯に浸かっている。

「アスナー、大変や！」

「ん？ どうしたの、木乃香？」

現れたのは木乃香、早乙女、宮崎、綾瀬の図書館島組。

何やら慌てたようにして近づいてくる。

「実は噂なんやけど……次の期末で最下位を取ったクラスは解散なんやて」

ええ〜〜！！ と驚くバカレンジャー達。

(……クラスが解散って、一体どうやったらそんな事に?)

一人冷静に考え込むアスナ。絶対裏があると考ええる。ネギの事もある為、疑心は大きい。

「で、でもそんな無茶な事……」

「そ、そうだよ、ウチの学校クラス替え無しの筈だよ」

「桜子達が口止めされてるらしくて詳しい事はよく知らへんのやけど、なんかおじ……学園長が本気で怒っとるって。ウチらいつも最下位やから」

「その上、特に悪かった人は留年！！　どころか小学生からやり直しとか……」

え……と固まるバカレンジャー達。

(だから小学生からやり直しとかあり得ないって……)

やはり一人頭を抱えるアスナ。小さくため息をついた後、近くにいた千雨の所に行き、湯につかる。

頭を湯船の隅に付けて全身を伸ばす。

「……どう思う？」

「ねーだろ、流石に。義務教育っつーのがあるんだし、流石に小学生からやり直してのはな」

「だよねー」

けらけらと笑いながら千雨に同意する。

「アスナさん。元バカレンジャーのあなたにも手伝って欲しいですが」

「何を？」

近づいて来た綾瀬に、単純に疑問をぶつける。というか、いきなり手伝って欲しいと言われたら誰でもそうなるとは思うが。

「『魔法の本』を手に入れたいのです」

「『魔法の本』？ 何それ」

「『魔法の本』とは、我が図書館島探検部の活動の場である図書館島の深部にあると言われる本です。なんでも、読めば頭が良くなるとか。まあ大抵出来のいい参考書の類だとは思いますが、それでも手に入れられれば強力な武器になります」

『魔法』という単語の付いている時点で既に関わる気が失せているアスナ。

「……そんな物探している暇があったら勉強した方がよく無い？ 参考書手に入れても勉強できなきゃ元の木阿弥でしょ？」

「私は出来るだけ楽をしたいのですが」

「じゃあ私に出来るアドバイスは無いわよ」

早い話、今日はさっさと寝て明日潤也にキッチリ教えて貰った方が時間も有効利用できる。

それさえしたくないと言っのならもう出来るアドバイスは無く。『勝手に行って勝手に探せ』という状態だ。

「ゆえってば、アレって唯の都市伝説だし」



「ウチのクラスも変な人多いけど流石に魔法なんてこの世に存在しないよね」

「アスナはそう言うの信じらへんのやったな」

「まあね。あっても私は頼らないわよ」

笑いあうクラスメイト。アスナは少し顔を俯かせる。

話に夢中になって気付いた者は其処にはいなかったが、実際関わって来たアスナにとってはもう関わりを持ちたくも無い事だった。

自身が国の兵器として百年間程度使われて来た事。道具の様な扱いを受けた事。

ハッキリ言っ、思い出すだけでも気分が悪くなる程だ。

当時は感情が無いといつてもいいほどだったが、今は違う。感情はちゃんとあるし、嫌な事は嫌だと言える。

何より、潤也が受け入れてくれた事が大きい。

拒絶されていればまた感情が薄くなっていたかもしれないが、ちゃんと受け入れて認めてくれた。それだけで『自分』を保てる。

そう考えると、ちょっとだけ頬が緩む。

だが、この場にはそれを敏感に感じ取る者がいた。

「ハッ、コレはラブ臭！？ 一体誰から!？」

ザバア！ と勢いよく立ち上がってキョロキョロし出す早乙女。周りの者はいきなりの事で驚いている。

「どうしたですか、パル？ 他の人に迷惑ですよ」

「あ、ゴメン。なんか急にラブ臭がね……結構近くだったと思うんだけど」

湯につかりなおし、頭を傾げる。

(……相変わらず勘が良いわね……)

ばれても問題は無いけど、一応気をつけておこう。と思うアスナ。

「やっぱさ、こういうのは潤也君に聞いた方が速いんじゃないかな？ いろいろ知ってるし、噂の事も知ってるでしょ。どう？ 千雨ちゃん」

「知ってるのは知ってるだろうけど、実際にあるかどうかは別問題だろ」

「手伝って貰えたらラッキーですね」

「明日の勉強会の時に聞けばいいんじゃない？」

「それもそうだよな。丁度よく勉強教えてくれるって言ってるんだし」

けらけらと笑いながら湯船から上がる。

## 図書館島。

その蔵書量は半端では無く、地上部だけでもものすごい量の本があると言つのに、地下には更に大量の本があると言つ。

ぶつちやけ地下のは魔法関係の禁書だったりなのだが。

それはともかく、一足先に来てだらけている人物が一人。潤也である。

午前中は当然ながら学校にいた為、昼食を取って早々と来ている。興味のある本は大抵読み終わっているので、新しい本を探すかなーと思つている状態だ。

その時、まだ勉強会まで時間があるが、誰か来たらしく、足音が聞こえる。

場所は図書館島の一角でちょっと広めのスペースがある場所だ。木乃香達に教えて貰った場所で、机や黒板などもある。

現れたのは二人。エヴァンジェリンと茶々丸。

潤也からすれば、勉強会にこの二人が来た事の驚き。

エヴァンジェリンと茶々丸からすれば、目的の人物が目の前にいると言つ驚き。

故に、目があつた瞬間に殺気をぶつけ合う。

「よお吸血鬼。久しぶりだな。元気にしてたか？」

「おかげ様でな。貴様こそ随分と元気そうじゃないか」

互いに笑いながら距離を詰める。

一歩間違えれば殺し合いに発展しかねない状況。間には茶々丸が入る。

「……どうした、茶々丸」

少しイラつき気味に、静かに問う。

「マスター、ここで戦うのは賢明とは言えません。場所もそうですが、昼間ともなれば人も多いですし、目撃されると隠蔽が面倒です」

「へえ、中々良く考えてる。出来た従者がいて良かったな」

片手で口元を押さえながら言う。

ヒュン、と風を切る音が聞こえた。

「頭に乗るなよ、超能力者」

「舐めてンじゃねエぞ、吸血鬼」

エヴァンジェリンの首には窒素によって形作られた不可視の槍、ボンバーランス『窒素爆槍』が喉元に突きつけられている。

潤也の首には魔力によって操作される複数の糸が巻きついている。

数秒睨み合い、このままだと時間の無駄だと判断して、二人とも殺気を霧散させる。

「チツ……長谷川潤也、だったか」

「何だ。エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル？」

「貴様は私が殺す。必ずだ」

それだけ言い放ち、その場所から出て行く。

茶々丸はその後に続き、一度潤也を見た後、出て行った。

(……超と葉加瀬はキツチリとプログラムでも組んでたのかね。しかし、あそこまで簡単に引き下がるとは思わなかった)

実際には力を取り戻していない、更に満月でも無いこの状況で戦っても前回の二の舞だと分かっているからこそその判断だ。

一度やられている以上、慢心も油断も出来ない。

まあ、こんな一般人ばかりの場所で戦ってもどちらにも利は無いのだ。当然の判断でもある。

その後、本を探すのも面倒になって麻帆良のAIMを観測、計測をして暇をつぶしている潤也。

AIM使って確か何かが出来た気がするんだよな。と思いながらも全く思い出せない。

そのまま時間が過ぎ、メンバーが集まった。

「……マクダウェルと絡繰以外全員参加かよ」

「今回はみんなやる気みたい」

何故？ と疑問を浮かべ、学園長達の話を思い出して納得する。

(一部は小学校からやり直したと思ってて、一部はネギの為か)

まあやる気があるのはいし事だ。と呟いて黒板を用意し、勉強会を始める。

「えっと、よろしくお願ひします」

そう言いつつお辞儀しているのはネギ。勉強を教えていると言っ  
事について来たらしい。

「ああ、千雨達のクラスの教育実習生の。こちらこそよろしく」  
握手して席に座る。一応先生なので敬語である。

他のメンバー……特にバカレンジャーと呼ばれる者達は既に勉強  
の準備を始めている。

「じゃ、今回の目標は？」

「取りあえず学年最下位からの脱出でいいんじゃないか？」

「うん、いいと思うよ」

「じゃ、学年最下位からの脱出でいいか？」

「ま、待ってください！」

急に口をはさむネギ。何だと言いたげにそちらをみる。

「どつせ狙つなら一番を目指しましょうよ！」

その言葉にみんな驚く。

常に学年最下位の3・Aが学年トップ。それは傍から見れば無理  
ゲーである。

だが、それをやろうと言い出すネギ。無謀な挑戦でも、一位を目

指したらしい。

ざわつくメンバー。流石に無理がある。とか、いやでももしかしたら。とかの声が聞こえる。

「……ハア。で、結局どうすんだ？」

クラスの委員長である雪広に聞く。

「……そうですね。折角ですし、一位を目指しても損は無いでしょ」「よう」

どうにも全員やる気になったらしい。あまり乗り気では無い者も数名見受けられるが。

「なら、手伝ってやろうかね」

超、葉加瀬、雪広の全教科のノートを全部読み、一学期と二学期の中間期末のテスト問題をみて、考える。

テスト範囲と性格等から教師の出す問題を予測し、一学期と二学期の中間期末のテストでその問題の出し方があってるかを確認。

全てを把握したうえで、黒板にテストに出るであろう要点だけを書き出す。

所要時間、およそ一時間である。

ほぼ全員がポカンと口を開けて驚き、呆けている。



「コレが俺の予想だ。超とかなら分かるだろ。性格と範囲から出る場所を絞った。少なくとも六十点は堅い」

「うむ、確かにコレは当たってると思うヨ」

超の一言もあり、全員が一斉にそれを写し出す。ちなみに黒板は三つほど使っている程の量だ。

「あー、疲れた」

椅子に座り、買って来たコーヒーを飲む。

「す、すごいですね。テスト問題の予想を立てるなんて」

「いや、そう難しい事でも無いですがね」

でも糖分が欲しい。と切実に思う潤也。後でパフェでも食べに行くことと決める。

アクセラレータ

一方通行を超える頭脳は伊達では無い。

そもそも中学生の内容は其処まで難しいものではなく、しっかり勉強していれば点数は取れる物である。

その中でも特に出るであろう場所を予測するのはそう難しくは無  
い。

(……というか、学園長も随分と頭の悪い課題を出したもんだ)

中学生では教科ごとに担当の先生がつき、成績はその担当の先生

の腕次第、と言うのが通常だ。生徒側の勉強量にもよるが。

担任の先生が全教科の教員免許を持つてゐるならまだしも、ネギはどれ一つとして持ってない。

学はあつてもそれを教えるのに特別長けていると言つ訳でもなく、實際別の先生がやれと言われれば当然辞退する。

（まあ、勝手に出て行つてくれるならそつちがいい気もするが）

これまでのネギの行動を考えれば、もう一遍魔法学校やりなおして来いと言われてもおかしく無いだろ。と思考するが、もみ消されるんだろつな。と思う。

その後、教師のネギとクラスでも点数の高い超と葉加瀬、雪広と共に勉強を教え続け、休憩時間。

「『魔法の本』？」

「そ、潤也君なら何か知つてゐるんじゃないかと思つて」

早乙女が勉強が終わるなりそんな事を言ひだし、考える。

「ああ、アレか」

「知つてゐるの？ 本物？ 偽物？」

「パチモンだろ。魔法なんてねーだろつし」

だよー。と笑いつつ席に座る。

真実を教える気なんて皆無だし、そもそも学園長の掌の上っていう事が気に喰わない。と言つのが潤也の考えである。

正直関わりたくも無いが、余計な事をしだすなら叩き潰す。または経済的に制裁を与えてもいい。

学園長を失脚させるだけの物は既に揃っている訳で。というか、それが簡単に集まる時点で今の学園長はどうかと思うが。

時計を見て、時間を確認。

「よし、じゃあ勉強を再開だ」

既に休憩時間を過ぎており、真面目な者は既に始めている。

とはいえ、基本的な部分はほぼ復習し終えているし、テストの予想部分の応用でもやってればいいのだが。

予想部分が当たっているか怪しいと思うだろうが、超の一言もあってその疑惑も薄れ、一心不乱に勉強している。

バカレンジャーには三十分おきに頭がショートしかけている者もいるようだが。

「潤也、ここ教えて」

アスナは分からない所は積極的に潤也に聞く。近くに超達がいる

のにもかかわらずだ。

朝倉や早乙女もすっかり集中して勉強している為、アスナの意図に気付く者はおらず。

密着しながらニコニコして勉強している。

その後、呼ばれては教えつつ勉強を進めた。

日曜日と同じようにして勉強をして、期末テスト当日を迎えた。

「で、結局どうだった訳？」

「ホントに一位を取った」

スゲー、と感心する俺。

良く取れたよね。一位。平均点高くなるのは分かってたが。

「ホントに取ったんだ。最下位から出るのは分かってたが」

「そっぴゃあ、ああいう事が出来るならもっと早い段階でして欲しか

「たったって言ったぞ。全員」

「ヤダよ、面倒臭い。頭使うんだ、アレ」

喫茶店の一角。パフェを食べながらそう話す。

やるのは簡単だが、面倒臭い。唯それだけ。他には特に理由はない。

「千雨も今回は結構点数良かったんだろ」

「まあ、な。いつもより高かった」

千雨はケーキを食べながら話す。

カロリーは高く無い。腰回りとか気にしてんのかな。

「それより私はあの子供が担任になった事がおかしいと思う」

「労働基準法違反だしな。普通に考えて」

「だろ？ 絶対おかしい」

イライラしながら話す千雨を宥めながらパフェを食べる。甘い。

「今はみんなパーティーやってんだろ？ 行かなくて良かったのか？」

「いいんだよ。木乃香とか神楽坂とか誘ってくれたけど、それより早く、というか終了式終わってすぐメール見て来たからな」

「そりゃ終わった直後にメールしたし」

二年が終わったから俺奢りで甘いものを食べようと言っ訳でここに来ている。

正直最近はず雨と二人で話す機会が無かったし。ず雨分が足りて無かった。補給、補給。

「よくアスナ達に捕まらなかったな」

「あいつ等の行動パターンは把握済みだ。抜け出すのは難しく無い」

「流石。頭の回転が速いね」

ケタケタと笑う。まあ結構簡単だしなあ。

俺の所にもメールは来たけど、ず雨に頼まれてスルーしておいたし。

「春休みか。どう過ごそうかね」

「どっか遊び行くか？ 旅行でも可」

「中学生二人でか？」

「誤魔化す位どうにでも出来るさ」

海外なら偽装パスポートはもちろん、飛行機ならファーストクラス、ホテルならスイート。最高級を揃えるだろう。

いや、別に偽装である必要は無いんだが。中学生でもちゃんとパスポートは発行してくれるし。

もちろん、金はどこから出るんだよ。という当然の疑問は出る訳だが。

そんな問題は『馬券』とか『競輪』とかで解決する訳で、いや、中学生がそう言うのやっていいかっていうと駄目なだけだね。

実際には『SMG』の資金を使ってる訳だし。金なら腐るほどある。使うときは使わないとなあ。とは思う。

「温泉でも行く？」

「何でだよ……どうせなら行った事の無い場所とか行ってみたいな」

「北海道とか九州とか？」

「何でそんな端っこばかりだよ。四国とか東北とかでもいいだろ。何なら海外でもいいけど……いや、流石に中学生二人で海外は無いか」

俺としては別にどこでもいいんだけど。

海外か、治安が良くて観光に向いている場所をリストアップしてみるか。

国内でもいいけど、どこに行こうか。

それにしても、春休みは本当にどろちゃって過ぎそつ。



## 第二十話「私は出来るだけ楽をしたいのですが」by綾瀬（後書き）

期末テスト、終了式までキンクリ。

ぶっちゃけ終了式はこうでもしないとネノギは避けられなかったの  
で（オイ

だって、ねえ？ 原作通りだとガチでネギ君回避不能な死亡フラグ  
が建っちゃうし。

まあそれはおいとくとして、春休み編どうしようかな、と。

オリジナルストーリー入れようかなと思ってるんですが、それだと  
原作全く進まねえ、という。

エヴァとのことも大分中途半端な気がしますし。どうしようか悩ん  
でる次第です。

この後のことも変わってきますし。

エヴァさんは今回流石に殺し合いまでは発展しなかった。少なくとも  
も多少の常識は持つてるだろう、と思ひまして。

というか、殺さないでの意見が多くて……いや、嫌いじゃ無いんで  
すよ。嫌いでは無いんですが、なんといいいますか……。

まあ実力の問題ですかね。仮にも最強クラスの魔法使いですし。使  
いやすいといえますか。

感想・評価はいつでもお待ちしています。

……後二日位で更新ペースは戻るかと。多分。うまくいけば。

第二十一話「準備は出来たか？」 b y 潤也（前書き）

英語が強敵過ぎて全俺が泣いた。

後用事もあるんでまた二、三日更新が遅れる可能性があります。

## 第二十一話「準備は出来たか？」by潤也

窓の無いビル、内部。

チュツ チャップスを舐めながら、マイクロマニピュレータをつけた腕を動かす。

マイクロマニピュレータとは、金属製の精密作業用グローブだ。

人工筋肉とモーターで1 $\mu$ m単位での精密動作が可能という物で、使い次第では病気の手術などにも使える優れ物である。

ちなみに何をやっているかと言えば、二か月ほど前から製作していた機械人形の仕上げだ。

設計段階で既に八重にドン引きされ、一人で製作し始めて二カ月。

漸く完成した。

名前どうしようか、適当でいいかな。……面倒だから後回しでいいや。

ボディにはロンスデーライト、所謂ダイヤモンドより堅い物質を用いている。

生成には隕石衝突級の熱と圧力が必要となるが、『一方通行』の能力で反動をゼロに抑えた全力の『原子崩し（メルトダウン）』を溶鉱炉とする事で精製を可能とした。

他にも複数の能力を同時に使う事が必要だったけどな。流石に『原子崩し（メルトダウン）』だけで隕石衝突級の熱と圧力は出無い。近い出力は出るけど。

例えば、『アクセラレータ一方通行』の能力で熱と圧力を逃がさない様にしたりとか。

ベクトル操作が出来るっていう事は、音や熱みたいな全方位に分散される現象に指向性を持たせられるっていう事でもある。

熱が勝手に逃げて温度が低くなったり、音が漏れて聞かれたくない事が聞かれてたりする事が無い。

それを利用して、熱と圧力を逃がさずに利用する事が可能って訳だ。

圧力・熱の計算とか場所を用意するのが面倒だったけどな。

その他、『Equ・Dark Matter』にも使われている『未元物質』の力を使って製造された新物質を表面にコーティングして使える様にしたり、腕にもいろいろ仕込んだりしている。

なお、コーティングしてある為に金槌で叩いても大丈夫。

ハイパーダイヤモンド《フラーレンロンズデーライトより堅い物質》でも良かったんだが、機械を使つての原料の収集率が悪かったし、新物質をコーティングした時点で強度も大して気にしないのでロンズデーライトになった。

作ってから八重がドン引きした訳が分かったよ。すげえ、コレ。

確かに設計段階から相当な戦力になるのは分かってたが、実際作ってみると本当に引く。

エネルギーは日本中に蔓延しているAIM拡散力場からエネルギーを供給されると言う物。日本中に能力者がいるからこそ出来る。別の方法もいくつか用意してはいるけど。

AIM自体は微弱な力だが、蔓延して、収束して、エネルギーへと変換させるならば相当なモノだ。

風斬は天使にまでなったしなあ。と思いつつ起動。

取りあえず性格は凄かったとだけ言っておく。

春休み二日目。本格的に始まってから一日目は人形作ってたからな。

侵入者がいても魔法先生に頑張つて貰おう。いつもは大して働いて無いんだし。何か本格的にヤバい事があつたら八重が何とかするだろ。一応こういうときの為の保険は用意している訳だし。

仕事は速いからな、アイツ。年上にアイツっていうのもどうかと俺は思つたりしてた時期があつた。今はもう無いが。

「準備は出来たか？」

「出来た。温泉だろ。何処に行くんだ？」

現在旅行鞆を持ち、千雨と二人で駅に居る。

チケットも既に購入しており、後は時間が来て急行に乗りこむだけだ。

「まずは群馬だな。川中温泉つてところ」

「群馬か。何で群馬なんだ？ 有名な所は別にもあるだろ？」

「そりゃ、三大美人の湯につかつて千雨にもっと可愛くなって欲しい……痛いつて叩くな」

顔を赤くして無言で叩かれた。恥ずかしがるなよ。

「その後は和歌山の龍神温泉、最後に島根の湯の川温泉だ。ゆっくり回るつもりだし、着替えとかはちゃんと持って来たよな」

「まあ、長くなるって言つてたからな。一週間分は用意して来たけど」

だからそんなにあるのか。『王の財宝』に入れたいです。持つのが面倒。重く無いけど。

駅で急行に乗り、ガタンゴトンと揺られながら群馬に到着。

道中駅弁を食べたり、取りとめのない事を話したり、千雨に近づくナンパを追い払ったりと対して面白い事は無く。

急行から降り、駅のホームで地図を確認してタクシーに乗る。

周りは森と川で自然にあふれ、都心と言ってもいい麻帆良にいた俺達からすれば風情があっといういい場所だ。

キッチリと予約しておいたため、中学生二人と言う事で怪訝な顔をされたものの、ちゃんと通してくれた。

ロビーを通過して和室の部屋へ案内され、寛ぐ。

「いい場所だな」

「そうだな、麻帆良にいと縁がないからな」

完全に縁が無いって訳じゃないが。森とかはある訳だし。

それでも、こういう絵になる様な場所は無いんだよな。

「折角だし、ちょっと歩かないか？」

「そうだな、まだ昼だし。辺りを見て回るっていうのもいいんじゃない」

無いか？」

携帯のGPSで位置を確認し、地図を使って近場の周辺の観光スポットを探す。

タクシーを拾い、三十分ほどかけて甌穴群おつけつぐんと言う場所にやって来た。

川底で石が何万年もの間、急流にもまれるうちに岩盤を削ってきた穴のことで、四万川には大小8つある。

最大は直径、深さとも約3m。国道から近くまで下りられ、間近で見られるとの事なので降りてみた。

水は透き通るような青色で、周りにはごつごつした岩が大量にある。

「すげー……」

千雨は驚きながらも写真に収めている。

結構広い様で、見て回るだけでも一苦労と言う場所。でも来る価値はあったと思う。

ある程度見て回り、日も暮れ始めた所でバスを使って旅館へ帰る。時間的にもいいので、目的の温泉に入る事にした。

千雨は結構楽しみにしているようだ。温泉なんて入る機会殆ど無かったもんな。



もちろん混浴……は、無かったので普通に入る。別に悔しくなんか無いやい！

まあ冗談は置いとくとして、感想。凄い。

露天風呂にゆっくりつかる。疲れが取れるね。千雨がより綺麗になつてるといいな。

風呂に入った後は卓球でもやるかと思ったが、千雨は風呂に入った後で汗をかくのは嫌らしい。拒否された。

コーヒー牛乳を二人で飲み、夕食。すごく、豪勢でした。

その後、携帯ゲームで時間を潰しつつ夜。

「久方ぶりの温泉だったな」

「最後に行ったのは小学校の時だっけか。懐かしい」

「まさか二人で来るとは思ってたけどな」

そう言ってシニカルに笑う千雨。

浴衣っていいよね。眼鏡もせずに髪をおろして浴衣。すごくいいです。

「一応言っておくがまだあるからな。後二か所回るんだぞ」

「そっか、そうだったな。楽しみにしとくよ」

そして、寝る時間。

当然ながら一つ屋根の下、別の布団とはいえ、傍で寝るのだ。二人とも特に気にして無いけどな。ある意味ショック。

そんな事を考えながら、この後の日程を考えつつ眠りにつく。

翌日の朝。

体内時計は完璧に作動しているらしい、七時ジャストに起きた。

朝食の時間はまだ後だった筈なので、もうひと眠りしようかと思っただが、隣で千雨がまだ寝てるのを見てやめた。

部屋の中は暖かい。それこそ布団を着無くてもあまり寒くは無いほど。

つまり何が言いたいかと言うと、

千雨の浴衣がはだけてた。

胸元とか。足とか。布団からはみ出てるし。眼福です。

折角なので時折頬をぶにぶにしながら寝顔を観察。隣で寝てるから距離が近い。

「……ん……？」

どうやら起こしてしまったらしい、目をゆっくり開けてぼーっとしている。

「おはよう、千雨」

「ん……おはよう、潤也」

眠気が取りきれない目を擦りながら起床。常備されてる冷蔵庫に入れておいた水を一口飲み、喉を潤す。

時間があつたので朝風呂に入り、朝食を食べ、観光。

旅館には二泊するつもりだったので、いろんな所を回って楽しんだ。

次の日。チェックアウトして午前中はまた観光をする事に。

既にお土産もいくつか購入し、『王の財宝』使いてーという気持ちが増長されたよ。

駅に行き、次の目的地は和歌山の龍神温泉。

距離があるので新幹線で向かう為、駅弁などを購入して乗る。

「じついうのも偶にはいいよな」

基本的に何処か行く事があつたら他人任せだし、俺が行く必要があるなら音速旅客機だ。海外ばかりだからな。

新幹線に乗るのも悪くない。

「窓の外の風景見ながらそういう事言うか」

「こついつのは何か事件が起こるのが定石だが、そんな事は無いだろう。流石に。」

基本的に事件は起こす方だし、巻き込まれない。

何故つて、『アンダーライン滞空回線』があるから麻帆良ではまずそういう事は無いし、外でも大して気を配った事は無い。

そもそも『SMG』って社長の名前垣根帝督だし。俺の名前とかどこにも無いよ。

だから狙われる事も無い。とか思ってる間に和歌山に到着。

タクシーを使って移動し、旅館へ。

「ここでもまた中学生二人と言う事に怪訝な顔をされたが、スルーで。」

「確か、ここ部屋に露天風呂ある筈だぞ。」

「本当か？ 後で入ろうかな……覗くなよ」

「信用ねーな、俺。覗かないって」

何かしたかなあ？ 特に何かやった覚えは無いんだが。

既に移動が終わった時点で日は傾きかけ、今から何をしてても中途半端になるだろう時間帯。

だからといって、何かやる事がある訳でも無いのだが。

本当に何もやる事が無いので、テレビでもつける事にした。ニュースでも見ようかと。和歌山<sup>ワカヤ</sup>じゃ天気<sup>てんき</sup>の予言は出来ない訳だし。

観光じゃ無くて温泉が目的だからあんまり関係ないんだけどね。

名古屋で通り魔事件があったとか、兵庫で謎の爆発事件があったとか、崎駿監督の映画が第75回アカデミー賞長編アニメ映画賞を受賞したとか、そんなのばかりだった。

個人的に宮 駿の映画ではラ ユタが名作だと思う。いいよね、空から落ちてくるヒロイン。

どうでもいい事に思考を裂きつつ、日程を確認。其処までハードでも無いし、多少ずらしたりも出来るから気にいっただら数日泊まるのもいいかもしれない。

喉が渴いたので自販機で飲み物を買い、売店を見ると柚子シャーベットとかあったので買ってみる。

部屋に戻ってみると、千雨がいなかった。服はあるから部屋の露天風呂にでも入ってるんだろう。

「潤也、タオル取ってくれ」

部屋にある露天風呂から声がした。てかタオル位用意しておけよ。

千雨のバツクを勝手にあさくる訳にもいかないだろうし、部屋に予め用意してあるバスタオルを扉の前に置いておく。

「扉の前に置いておくぞ」

「分かった」

俺は普通に風呂に入っここよう。後で千雨も普通の中に入るだろう。風呂から上がった後で柚子シャーベットとやらも食べてみたい。

そして、風呂に入って部屋に戻って来た。

「無いっ!?!」

冷蔵庫に入れておいた柚子シャーベットが無い。どういう事だ。

「ああ、私が食べた」

千雨が食べてたのかよ。人騒がせな。

まあ売店に行けばあるだろうから慌てる必要は無かったりする訳だが。

「ちなみに味は？」

「気に入った。美味しかったよ」

「そーか、そりゃよかった」

外れで無かったただけ良しとしよう。まだ食って無いが。

ちなみに和歌山って果樹王国といわれる位で、果物の栽培が非常に盛らしいね。みかんでも買っておこうか。

観光はホエールウォッチングというのをやってみた。初めての体験だよ。

「アレはザトウクジラかな……お、アレはひよっとするとセミクジラじゃないか？」

「なんでそんなに詳しいんだよ」

「事前に調べておいたが楽しめるかと思って。ちなみにセミクジラって絶滅危惧種でめったに見れないぞ」

「そうなのか？ 写真に撮っておこう」

「フラッシュとかは使つなよ、鯨が驚くから」

「分かった」

携帯では無く、用意しておいたデジカメで撮影。珍しいモノが見れたな。

「最後に行くのは島根の湯の川温泉だ」

特急の中で千雨に説明する。

ちょっと肌が滑々になってる気がする。やっぱり行って正解だった。

和歌山でもやはり二泊し、食べ物は俺達の旅行中ずっと持つてると悪くなりそうだったので、宅配で送って貰う事にした。持つのも面倒だしな。

「こつ何度も移動してると疲れないか？」

「温泉に入れば疲れは無くなるだろ」

「まあそうだけどさ。気分的に？」

気分的にって、どういふ事だよ。



「ま、千雨が美人になってくれれば俺的に文句は無……痛いつてだから」

ペットボトルだから痛くもなんとも無いけど。叩くなよ、顔赤くして。

「そう言うのは出来るだけ人が少ない所で言えよ」

あ、言うのは構わないんだ。人がいると嫌なだけで。

そんな事を思いつつ、島根。駅から出て、バスターミナルへと向かう。

特産品は何だっけ、とっていると、千雨に服を引っ張られる。

「どうした？」

「人がいないんだが」

そう言われてみれば、確かに人がいない。どっかの魔法使いが人払いでもかけてるのかね。

千雨は周りをきよろきよろ見渡して、気味が悪いとも思ったのか、俺に近寄ってくる。

「大丈夫だって、別に何か起こる訳じゃ……」

「いや、でも……アレは？」

千雨が上を向いて指差すので、それに合わせて俺も上を見る。

何かが落ちてきている様な感じで、少しずつ影が大きくなって

「……って、おわぁ!？」

誰かが落ちて来た。どういう事だよ！ 咄嗟にベクトル操作しな  
かったら俺の腕とかこの落ちて来た子の背骨とかいろいろ不味い事  
になってただろうが！

おかげで地面が少し陥没したのは置いとくとして、どういう事だ  
よホントに。

千雨もかなり不審な目を向けてるし、俺もどうしたもんか迷って  
る。

見てみれば、木乃香に近い顔立ち、黒い髪で背は低く、いいとこ  
小学生の高学年だろう。

隣は駅だから、多分駅の上から落ちて来たんだろうな。自殺か？  
年齢的には俺達より低いかな

「……で、あんた等誰よ」

「答える必要は無い。その子を渡して貰いたい」

随分と高圧的な事だ。この子に用でもあんのか？

俺達（+この子）を取り囲んでいるのはおよそ十人程度の黒服。  
どこのヤクザだ。

全く、「不幸だー!!」とでも叫びたい気分だよ。

## 第二十一話「準備は出来たか？」by潤也（後書き）

結局旅行入れちゃったぜ。な話。

行った事無いんで全部想像です。その辺りはご了承ください。

魔法・魔術は専門外なだけどなあ（え

全部wikiから引っ張って来た知識になります。レンタルマギカ（漫画）とかなら持ってますけどね。小説（というか原作）は買う金が無いです。残念ながら。

禁書には陰陽師が土御門しかいなくて大して出て無いと言う罫。もう勝手にやっついていいかな？（マテ

能力に関してこういう使い方が出来てもいいと思うんですが。あと最大威力の原子崩しってどんな威力なんだろうか。美琴秒殺出来るって言いますけども。

機械人形のエネルギーはAIMだけでは無いです。一応他の方法も用意してます。

意見貰ったんでそっちも参考にさせてもらったりとしています。

前書きにも書きましたがお盆と言う事で用事もあって、英語の模試（前年度+前々年度）と言う究極的ラスボスの討伐をしなくてはならないので二、三日遅れる可能性があります。ご了承ください。

次回、外伝でチラッと出た原石とか出るでしょう。

第二十二話「巻き込んでしまった僕の責任ですから」b V 隼（前書き）

案外早く書き終わったので投稿。

魔法・魔術関係は勝手な注釈含んでおりますのでご注意ください。

## 第二十二話「巻き込んでしまった僕の責任ですから」by隼

「さあ、早く渡して貰いたい」

そう言いながら黒服の一人が近づいてくる。

潰すのは造作も無いけど、千雨が傍にいるしな。むやみやたらと能力使う訳にも行かないだろう。バレル。……何か今更な気もするけど。

「さあ、早く ガツ!？」

そう言って一歩踏み出した男が、いきなり倒れた。後頭部を見ればタンコブがある。

誰がやった? と思えば、また次々と殴られて気絶して行く。……こいつ等本当にプロか? やけにあっさりやられてるけど。

黒い影みたいなのが高速で動いて、刀の柄を使って殴ってるようだ。どうなってんだよ。

取りあえずその間に女の子を背負い、千雨を連れ、荷物を持って逃げる。

ある程度走り、距離を取った所で建物の間の路地に入り、倒れた連中を見る。

「一体何なんだよ、アレ」

千雨が混乱気味に聞く。まあ、いきなりあんなれば混乱するよな。

「知らん。大方この子を狙ったどこぞのヤクザとかそういう類じゃ無いのか？」

それだとこの子がヤクザ関係だと言う事が前提だけど。まあ普通に考えれば黒服の連中に囲まれるとか無いよな。

ヒュン、と何かが目の前をよぎる。

それは影の様に現実味が無くて、触ろうとしても触れそうにない、可笑しなモノだと感じた。

それは次第に形を持ち、最終的に人の形になった。

コイツ、秘匿とか全く頭に無いな。いや、人払いしてあるから必要無いと感じたのか、千雨を一般人だと思って無いみたいだし。

短い黒髪、黒眼。典型的な日本人と言う顔立ち。イケメンの部類だろう。

「……巻き込んでしまって、すみません。その子をこちらへ引き渡しても貰えませんか？」

身長は俺と同じか小さい。俺の身長自体百七十超えてるから結構大きい方だろう。話し方から気弱な印象を受ける。

「お前はこの子の何だ？」

「兄です。早くしていただけませんか？ 少しばかり追われている

ものでして……」

兄か、信用できるかどうかは置いておくとしてだ。

コイツ、まず間違いなく能力者。それも原石だな。俺はAIMを  
観測できるから分かる。

顔にも覚えがある。原石のリストに乗ってた中で、関西の関係者  
と言う事で引きこめなかつた人物。

名前は確か 九条隼（くじょうはやぶら）、だったか。となると、手の中のこの子は  
妹の香奈（かな）。

面倒な事になりそうな匂いがプンプンする。早めに逃げる事が得  
策か。

「ホレ、兄貴なら妹の面倒ちゃんと見てろ」

半ば押し付ける様に手の中の女の子を渡し、荷物を持って千雨の  
手を引き、早めにこの場から離れようと動く。

だが、それを見越していたかのように黒塗りの車が何台も現れ、  
また黒服が出てくる。

それから逃げるようにして道を変え、さっさと出て行くこととする。  
だが、回り込まれた。

「……何か用でも？」

「悪いが、この事を目撃した以上、記憶を消させて貰う」



律儀だね、態々記憶を消すなんて事を言うとか。馬鹿正直ともいう。

千雨は俺の後ろに隠れてる。記憶を消す、の辺りがマジトーンだったからだろう。顔を見れば、少し怯えている。

「丁寧に遠慮させて頂こう」

腹にグーで一撃かまし、気絶させて逃げる。

それを見ていた黒服の何人かが啞然としていたようだが、瞬動だか何だか使ったらしく、回り込んでくる。

「貴様、関係者か。邪魔はしないでもらいたいが」

「してねエだろオがよ。俺達は関係ねエぞ。さっさと其処退けよ」

軽く殺気を放ちながら威圧する。一般人のフリとかもう無理。もう超能力で制圧してしまおうか。イラついて来たし。

ガン、ゴン、と何か鈍器で殴る様な音が何度か鳴り、俺達の前にまた九条（仮）が現れた。何の用だよ。

「速く逃げてください。巻き込んでしまった僕の責任ですから」

なるほど。男気がある。いや、むしろ漢だ。俺が認める。

黒服はそれを見て、符を取りだす。……って、オイふざけんな。

千雨は一般人だぞ！？　　こんなの見せたら関わっちまうだろうが！

咄嗟に手を掴んで逃げようとしたが、遅かった。

「疾！」

放たれた符は爆炎を伴って俺達の方へ飛んで来た。

「……ハアツ！？」

何でこっちに放つんだよ、そして九条（仮）なんで止めないんだよ。と思ったら既に戦闘中か。仕方無いとかいわねーぞ。逃げろって言ったのそっちだろうが。

とか思ってる間に符が迫る。俺に当たりそうだなあ……反射。

俺達へと向かって来た符は向きを変えて放った本人へと向かう。

爆炎はそのまま。

逃げてる俺達の隣にまたしても九条（仮）が来た。今度は何の用だよ。

「……あの、もしかして超能力者ですか？」

言うなっつーんだよ。このバカめ。千雨の反応見て一般人かどうかの判断つけるよ。無茶かも知れんけどさあ。

「出来れば手伝ってくれませんか。数が多くて、どうにも……」

へたれめ、自分で逃げてくださいますかと言いながら結局人に頼るか。

護衛の一人や二人いないのか？

いや、今まで逃げるだけだったんだろ。この状況であいつ等から逃げながら俺と話せるくらいだし。逃げ足は速いらしい。

「……チツ。しょうが無い、か」

千雨も走っていて息が切れかけている。荷物を持ちながらだからしょうがないだろう。

足を止め、振り返る。男達は俺達を追って符やら刀を構えている。人払いの结界張ってるからってそんなモン持ち歩いてんじゃねーぞ。

演算を構築し、暴風を巻き起こす。

「千雨、後でちゃんと話してやる。今はまだ聞くな」

それだけ言って、首を動かす。乾いた音を鳴らしながら敵を見据える。

男達は吹き飛ばされた衝撃でダメージを負いながらもまだ睨みつける。手には未だ武器を持ち、戦闘の意志が見える。

「三十秒だ」

頭の中のスイッチを切り替え、殲滅を開始した。

「で、結局何なんだよ。お前等」

暴風と雷撃で殲滅（死んで無い）し、泊まるつもりだった旅館へ来ている。九条兄妹（仮）も。

部屋は急遽四人で泊まれるようにして貰った為、金はかかったものの広い。防音用に音波制御の能力を使ってる。

「潤也。それより私に話す事があるだろ？」

頭を掴まれ、強制的に顔を動かされる。首が痛い。

「何でしょうか。妹様」

「アレは一体何だ。あんな紙切れ放り投げて炎が起るとか冗談じゃ無いぞ」

まあそうだよな。普通あんな事起こらないし。起こそうとも思わ

ないだろう。

「話す。話しますから手を離して」

未だに掴まれていた頭を解放して貰い。正座して千雨の前に座らされる。

「この世界には神秘が溢れてる」

「前置きは言いから速く話せ」

「世界には超能力者が存在する」

「……………それが、お前か？」

「そうだ、俺は超能力者。ついでに言うと、其処のそいつもな」

そう言って御子上兄（仮）を指差す。あつちはあつちで驚いてるようだ。気付かれてないと思ってたみたいだな。

「そして、世界には魔法使いもいる」

「……………やっぱりか」

「あ、気付いてた？」

「あんな滅茶苦茶な現象が科学で起こせるのか？」

起こせるよ。紙に液化爆薬でも染み込ませておけば。まあそれは置いておくとして。

「……そうか。潤也、お前超能力者だったのか」

そう言っつて、なにか考え込むような顔をする。

「だからとっつて、俺が何か変わる訳でもないし、千雨をどうこつする気なんて無いよ」

「いや、そう言っつ事を心配してる訳じゃないんだが……そうか、超能力者か……」

頭ではわかつてても心が追いついて無いっつて感じだな。ちよつと放心気味だ。

「……あの……一般人だつたんですか？」

「こいつはな。俺は関係者だ」

九条（仮）が何やら怯えながら聞いて来た。やっぱり分かつて無かつたのか。

「うん、分かつてた。大丈夫だ」

唐突に千雨がそう言っつた。

「何がだ？」

「潤也が超能力者でも、関係無い。隠してるっつて事は、それなりの理由があつたんだろ？」

信頼してくれてるのか、ありがたいね。受け入れるのが随分早いが、護みたいな超能力者が存在すると言う事を知ってたからか？  
だとしたら生まれて初めて護に感謝する。

理由と言っても、関われば面倒な事になるからってだけだがな。  
知られても別に問題は無かった。

唯、普通を好む千雨が異常である俺を受け入れられるかが問題だったんだよな。俺自身が非日常の権化みたいなもんだし。最悪嫌われると思ってたし。

嫌われたって麻帆良に居続ける限り守るけどな。麻帆良以外だと  
『アンダーライン滞空回線』がないから難しいが。

「じゃ、お前等の話を聞こうか」

「……分かりました。僕たちの所為ですから、事情もちゃんと話します。僕の名前は九条隼。こっちは妹の香奈です」

予想通り。だが、狙われる理由が分からないな。

「近衛家の分家である九条家の兄妹だろう。何故狙われてるんだ？」

そう言ったら驚かれた。いや、まあ普通はそうか。教えて無いのに知ってるって気味悪いもんな。

その辺を軽く説明すると納得してくれた。SMGの所属って教える羽目になって千雨がまた俺の方睨んだけど。

まあ、『俺はSMGに所属してて、原石の能力者のリストにお前

の情報があつた』で納得するのもどうかとは思つが。

「祖父に追われているんです。僕、もしくは香奈を人柱にしようどどちらかと言えば、香奈の方が狙われている訳ですが」

「人柱？　今の時代にそんな事するバカがいるんだな」

「厳密に言えば、死ぬまで魔力を使い果たさせるんです。だから僕より魔力量の多い香奈を人柱にしようとしてるんですよ」

なるほどね。そうまでしてしたいなにかがある訳か。妹の方の魔力量は一般レベルよりずっと高いが、木乃香の足元にも及ばない位。

「親は？」

「いません。殺されました」

随分とハードな話が来たな。オイ。

「オイ、親が殺される様な事がある世界か？」

千雨が耳打ちして来た。まあ確かに最初に関わる事にはかなりハードな話だよな。

「まあ、多々あるとは言わないけど。可能性は十分にある世界だよ」

だから態々名前を変えてSMG発足した訳だが。俺の事知ってる奴は大抵脳に『心理掌握』メンタルアウツでブロック掛けているし。

権力があると狙われるもんだよ。それこそよっぽど化け物でもな



い限り。弱点になり得るしな、大切な人ってのは。

「……話を続けても？」

「ああ、悪い。続けてくれ」

「では……父さんは数年前に僕達に戦闘を仕掛けて来た魔術結社との争いが原因で命を落としました。その魔術結社の目的は分かりませんが、ナニカを蘇らせようとしたらしいです。そして、母さんはそれを封印する為に魔力を使い果たして死にました」

魔術結社か。何かを蘇らせようと、ねえ。

魔術・魔法は専門外だ。何をしようとしてるのかなんて分からんし、知ろうとも思わない。

「その封印された場所が、相当な瘴気を放っているみたいなんです。龍脈が酷く淀んでいるようで、僕たちの力じゃどうしようもなく……」

「人の魔力でどうにかなるとは思えないがな」

「僕達の魔術結社の術は神道ですから」

なるほど、楔か。だからといって一人の魔力じゃ足りないだろうに。それに、大本を何とかしないとどうにもならんだろう。

そもそも、龍脈に干渉できるレベルの魔法使い・魔術師がいるのか？ いるなら出来るだろうけど。

「以前から本家近衛家にお問い合わせをしているらしいのですが、返事は芳しいものでは無いらしく。どうにならない、との事です。本家のお嬢様は相当な魔力を持つてると聞きますから、力を借りられればいいのですが……人柱は、少なくとも時間稼ぎの様ですし」

「なるほどね……だが、まあ無理だろう。木乃香自身魔法の事を知らんのだし」

「……何で其処で木乃香が出てくるんだよ」

千雨が疑問をぶつける。まあ確かに疑問だよな。

「近衛木乃香。関西呪術協会の長の一人娘にして、極東最強の魔力の持ち主だ」

マジか……と呟いている。小さい頃からの幼馴染がそう言う事だと知ると驚くよね。

「あの、お嬢様と知り合いなんですか？」

「ああ、知り合い。けどな、さっきも言ったが無理だよ。あいつ自身魔法の事を知らない。親がそういう教育方針を出してるらしい」

「そう……ですか」

落胆が目に見えるぞ。コイツ、落ち込みやすいのか。唯一の方法だと思ってるみたいだし。

一応方法は別にあるんだがな。

「どの道追われてるんだ。犠牲になるのは嫌か？」

「当然です。僕はどうなっても、香奈だけは……」

なるほど、妹第一主義か。同士だな。どうだっていい事だが。

さて、どうしたもんか。

このままこの二人に犠牲になって貰えば片がつくんだろうが、それだと原石を失う事になるだろうしな。個人的にそれは無しにしたい。

それに、懸念もある。

俺達のような科学者の中には、科学で何事も解決できると分かり切った口を聞くバカも当然存在する。

それは間違いでは無いとも取れるし、間違いとも取れる。

仮に戦闘を例に挙げたとして、科学の兵器で何とかなる事なら僥倖だ。

だが、世の中それだけで解決できないことだって当然ながら存在する。

神鳴流然り、陰陽術然り。退魔や調伏という手段を取らなければ解決できない事もあるのだ。

知らなければ対応できないし、知った所で対応できなければ同じだ。

龍脈が淀み、科学者はそれを知らずに土地を開発し続け、いずれその土地を滅ぼす可能性があったとして。

『彼ら』はそれが分かる。より良い世界を求めるならば、片方だけでは駄目だ。

餅は餅屋と昔から言うだろう。

科学は科学、オカルトはオカルトの専門家に任せるべきだ。

ならば、今のうちに貸しを作っておいて損は無い。

西洋魔法はそんな物関係無いから特に関係を持つとも思わないがな。

個人的に風水や祓<sup>エクソシズム</sup>魔式、神道等の魔法・魔術を使う組織と関係を良好に保てれば良し、と言った所か。

「……ところで、お前超能力者だろ。良く家から追い出されなかったな」

「僕は神道ではなく、陰陽道をサポートにした神鳴流を使いますから」

気を使っただから魔力を使えばどうなるのか知らないのか？ 陰陽術も多少なら気で何とかなるしな。刹那と知り合いの可能性もあるのか。

気付かれなかったって言うのはある意味すげえ。固有能力みたい

な感じで納得されたんだろうか。本人はちゃんと分かってるみたいだが。

「ふうん。……ちなみに、九条は何歳だ？」

「十四です。新学期から中学三年ですね。香奈は十、新学期から小学五年です」

同年かよ。それにしてもえらい丁寧な話し方だな。

「う……う、ん……」

うん？ 寝てたらしいが、漸く起きたか。というか、よく今まで寝ていられたな。この女の子。

「……お兄ちゃん？ こごとこ？」

眠そうに目を擦りながら起きあがる。

「さて、その子も起きた事だし、動くとしますか」

「動くって、どうするつもりですか？」

「大本を叩きに行くのさ。……その前に、千雨の安全は確保しないとな」

どうしたもんか。俺一人行って片付けるってのも出来るだろうけど。今回の事龍脈に関しては右手を使えば恐らく簡単に解決できるだろうし。

チラッと一度だけ千雨を見る。

「ついて行くぞ。何をやってるか、ちゃんと教えて貰う」

大変だね、全く。見透かされてるし。

「しょうがない。出来れば使いたく無かったけど」

『王の財宝』から一体の人形を取りだす。

黒く長い髪。すらりとした体型で傍から見れば容姿端麗な女。まあ俺の作った機械人形なんですけどね。

「……何だ、コレ」

「人形だよ。結構な戦闘力を持つてる。守りに使うには十分過ぎる位にな」

硬度は魔法の射手や白き雷、下手すりゃ雷の暴風レベルまで防いだろうし。攻撃力は半端じゃないし。

エネルギー問題は大丈夫だろ。使い過ぎ無ければ、だが。

念の為に起動させておかなきゃならん、何かあってからじゃ遅い。何が仕掛けられてるか分からないからな。

出来れば起動とかさせたくなかった。まだ性格直って無いし。早めにプログラム書き換えなきゃなあ。と思いつつ起動。

数十秒して、目を開けた。

「目が覚めたか」

ゆっくりとした動作で起き上がり、立ち上がる。身長は百六十位。千雨とほぼ同じだ。

キョロキョロと周りを見て、一言放つ。

「吾輩の手を借りなければならぬほどに切羽詰まった状況か。ハッ」

……だからこいつは起動したく無かったんだ。マミってやろうと思ったのは俺だけじゃ無いと信じたい。突っ込みどころが多過ぎる。

第二十二話「巻き込んでしまった僕の責任ですから」b y 隼（後書き）

千雨にバレちゃったぜ、な話。

この話を挟まなかったら桜通りの吸血鬼でバラすつもりでした。

機械人形は、まあ口調はこんなで性格もアレって事で。次回ちゃんと出します。

次回、接触。そして、戦闘（？）



第二十三話「全く、行儀がなくて無いな」b y 零（前書き）

何故機械人形があんな性格になったのか、勝手な理論を構築してたら遅くなりました。

いえ、それだけじゃ無いんですけどね。

今回、長いです。最長だと思えます。

## 第二十三話「全く、行儀がなくて無いな」by零

千雨の目の前で潤也と、黒を基調としたワンピースを着ている機械人形がギヤーギヤーと言いつつ合意を続けている。

「えっと……長谷川千雨さん、でしたか」

「千雨でいいよ。長谷川じゃ潤也とかぶるし」

隼に返答しながらも、千雨の頭の中は一つの事で一杯になっていた。

(潤也が超能力者……護もそうだって言ってたけど、アイツの比べて考えても毛色が違い過ぎるだろ)

風と雷、ソレを目の前で使って不審者を撃退した潤也。全ての能力が『微妙』と評される護とは違い過ぎる。

「千雨さんは、潤也さんの事をどう思ってるんですか？」

「潤也の事？」

「ええ、とても仲が良さそうなので」

そう言われ、改めて考えてみる。

双子として生まれ、潤也とはずっと一緒に過ごして来た。

小さな頃から難しい本を読んでいたが、特に変わった所は無い。何処にでもいる普通の男の子だった筈だ。

昔から何も変わらず隣にいて、いつから超能力が使えるようになったのかも分からない。

(護は小学校の時から使えてたんだよな……)

『同類の匂いがする』とか言ってたなあ。と思いつくと、それならその頃はもう使えるようになってたのか？ と思考を巡らせる。

「彼は分かりませんが、少なくとも僕は望んでこの力を手に入れた訳では無いんですよ」

「え？ じゃあどうやって手に入れたんだ？」

「彼が言うには、環境そのものが能力を開発する事と同じ効果をもたらした場合に発生するそうです」

ソレを聞いて、千雨は考える。

望んで手に入れた能力では無い。なら、どうして今まで自分に言わなかったのか。

嫌われると思ったのか、自身の望まない非日常に巻き込むと思ったのか。それは分からない。

(どっちにしても、聞く事が第一歩か……)

そう思考した所で、一応気になったので聞いておく。

「お前の能力ってどんなの何だ？」

「僕のですか？ 僕自身は『鏡花水月』と呼んでいます。認識をずらす、という能力だと思っっていますが、僕自身も良く分かって無いんですよ」

認識をずらす。所謂幻術の様なものか。と千雨は思う。

「いろんな能力があるんだな」

「そうですね。多種多様です。彼の場合は風や雷、自然に関する力ですが」

駅で見ただけでは、確かにそう思っても仕方が無いだろう。千雨自身、小さい頃に見た七色の爆発まで超能力じゃ無いのか？ と思いは始める。

「悩んでいるようだな、少女よ」

いつの間にか隣にいて、話しかけて来た人形に驚く千雨。潤也との口喧嘩は終わったらしい。

「周りはじっくり見ておく事を勧める。いつ何時何が起なんどぎこるか分からないのだからな。判断材料は多い方がいい」

見た目は女の癖に、その口調は男そのもの。

「……本当に人形か？」

そう呟く千雨の心境も分からないでは無い。それに対して、人形はそう返す。

「名は『零』<sup>レイ</sup>という。零号から取って零だ。吾輩も何故こうなったのかは分からんよ。起動したのが大凡一週間前。最も、直ぐに停止させられたがな」

「何でだよ」

「まあ少しばかり口喧嘩をな」

「口喧嘩してる時点で人形って枠飛び越えてるだろ」

「その辺は吾輩にも分からんと言っただろう。だが、この性格・口調の理由は恐らくプログラムの所為では無い」

「ハア？ どういう事だ？」

疑問符を浮かべ、質問をする。

だが、ソレには首を振って答えない。自身も良く分かっていないのだろう。

隼と話している潤也が千雨達の方を向き、そろそろ出発すると告げる。

「悩み、<sup>マスター</sup>答えを出す必要があるからとて、焦る必要は無い。少なくとも、御主人はお前を見捨てたりはせんだろうからな」

薄く笑いながらそれだけ言い。零は歩き始めた。

## 九条家。

鎌倉時代に成立した藤原氏嫡流で公家の家格の頂点に立った五家の内の一族。

現在は関西呪術協会の長である近衛家の分家であり、古来より日本の土地を守って来た神道のスペシャリスト専門家。

現当主である九条厳冬げんとつの実力は協会の中でもトップクラスであり、島根どころか中国地方一帯を統率する立場にある。

今は長に不満を持ち、穏健ではあるものの関東との関係は決別するべきだと主張しているとは隼の談。

一度は兵庫辺りまで逃げられたものの、一つの結社を使われてこちらの方面へ逃げざるを得なかったと言うほどに人海戦術をしているとの事。

「兵庫での爆弾騒ぎはお前等が原因か」

「ええ……まさか本気で爆発物を使うなんて思ってませんでしたよ」  
予想外の事を当たり前の様にやるらしく、若い頃はかなりやんちゃだったと言われていたらしい。

龍脈に干渉できるのはこの辺りではこの人だけ。それだけの力を持った達人。

「でも……本当に大丈夫なんですか？ 龍脈に干渉できるかどうかは置いておくとしても、あなたから感じる魔力量ではとても足りるとは……」

「俺は魔法使いじゃ無い。超能力者だ。俺は俺の方法でやらせて貰うさ」

最も、潤也にしか出来ない方法なのだが。

交渉は後で当主の方とやる事にし、一先ず九条の魔術結社の本拠地へ向かう。

そして、四人と一機は今、九条家の門の前に立っていた。

移動するだけなら『座標転移』等の空間移動を使えば速いのだが、一般人に見つかりと不味いので却下し、タクシーで移動をする事にした。

屋敷の真正面にいる状態で、一言だけ潤也は言う。

「千雨、言っておくがな、知ったからといって絶対に関わらなきゃならない訳じゃない。其処の所を理解しておくように……後、零。千雨をしっかりと守れよ」

「言われるまでも無い」

千雨は頷き、胸を張ってそう言う零に苛立ちながらも、真正面から堂々と入る。

周囲からの視線を感じ取るが、全員無視する。

潤也は周囲の連中を見て目を細め、何かを思ったが、口には出さない。今言うべき事ではないと判断したのだ。

中に入って数歩した所で一人の女性が近づいて来て、話し始めた。

「お待ちしておりました。お帰りなさいませ、隼様、香奈様」

丁寧な口調でそう告げる。

「その方達は？」

「僕のお客様です。文句は無いでしょう」

そう言い、隼は他の者を連れて屋敷の中へ入った。



屋敷の一角、とある広い部屋。

其処で四人と一機は待たされていた。

潤也は携帯で誰かと話した後、この部屋に戻って来た。

「……その厳冬って人が、ここの当主なのか？」

「そうですね。父が死んで、一度は退いた祖父がもう一度当主に着いたんです」

運ばれて来たお茶を飲みながら、隼が問いに答える。

「……一つ質問だが、本家に連絡したのは誰だ？」

「確か、本家との連絡は今井という人がやっている筈です。連絡の役割はこの人が行っています」

「……なるほどね」

一人で納得しながら頷く潤也。その意味が分からず、全員首を傾げる。

その時、襖が開いて誰かが現れた。

ソレは先ほどの女性。当主が呼んでいる、と伝えて下がった。

「それでは、行きましようか」

「そうだな。場所は分かるんだろう？」

「ええ、いつもの場所ですから」

「零、二人を護れ。何があるか分からんからな」

それだけ言い残し、潤也と隼は部屋を出た。

隼に案内され、とある部屋に入る。

白髪混じりの男性。威厳がある雰囲気を感じ、ゆったりと座っている。

潤也と隼はその対面に座り、話を始めた。

「隼。帰って来たのか……」

「ええ。最も、方法を提示しにです。死ぬつもりで来た訳ではありません」

「……方法、だと？ どういう事だ」

「それについては俺から話させて貰いたい」

口を挟んだのは潤也。

「誰だ、お前は。私は今隼と話している。口は挟まないで貰いたい」

長年生きて来た故か、その威圧感は一瞬でも半端なものではない。

「いえ、そう言う訳にもいかないですよ」

対して、潤也も威圧する。

この位なら各国の首脳と話す時に慣れていて、そのボディガードに何度も殺気をぶつけられた事もある位だ。

「龍脈の淀み。俺なら簡単に解決できるのでね」

「……何？ ソレは本当か？」

ソレは疑惑。当然だろう、まだ自身の孫と同じ位の年の者が龍脈に干渉できるなど、普通なら思う筈が無い。

「それは、僕が保証しましょう」

ハッキリとした、自信に溢れる言葉。

普段から気弱な孫が、ここまで言い切るほどだ。一度だけならば、と考え。

「……良いだろう。ただし、一度だけだ。それで失敗するようなら、香奈を捧げる。もう残っている時間は少ない、失敗は出来ないぞ」

捧げる。つまりは生贄。

ソレは厳冬とて望む事では無い。自分の子供夫婦を亡くし、あまつさえ孫まで犠牲にしようとしているのだ。出来る事なら、本家が力を貸してくれればと思う。

「では、早速向かうとしましょうか……ああ、忘れてた」

「何だ？」

「この件が終わり次第、隼の身柄は『SMG』が管理する事になります。其処の所はご了承ください」

「何！？ どういう事だ！」

咄嗟に、声を荒げる。

あまりにも突然の宣告だ。無理も無いだろう。

「俺は『SMG』に所属しています、あなたは知っているでしょう。その意味が」

「……超能力者……っ！？ まさか！」

「まあ概ねあなたの考えであってますよ。九条隼は超能力者です」

隼は気まずそうに顔を逸らし、厳冬は驚きに目を見開く。

「……なるほど、気も魔力も使わない『アレ』は、超能力だったか。まともに解析できない訳だ」

「完全に会えなくなる訳ではありませんよ。力の使い方をしっかり学び、能力をより強く発現させる事が目的ですから。偶の休み位は帰れます」

「……だが、お前の一存でどうにかなる事なのか？」

「社長の許可は既に取ってますよ」

既に準備は整えている。原石である隼は出来るだけ逃したくは無  
い。

交渉は旨く行くだろう、このまま行けば。

その時、轟音と共に壁が崩れ、人が飛び込んできた。

「全く、行儀がなって無いな」

零がゆったりと歩く。その背中にはワンピースを突き破って生物  
的な外見の翼が伸びており、翼には微かに血がついている。

「……どういう事だ？」

困惑した様子の厳冬が問いをする。

「いきなり襲って来たのだ。文句ならコイツに言うのだな」

背中にある翼の血を拭いて、元に戻しながら赤い上着を羽織る。破れた部分を隠すためだ。

零の後ろには、翼を凝視してあきれ果てた千雨の姿があった。その横には香奈もいる。

潤也はというと、飛び込んできた男を掴んで厳冬の前に引き摺りだした。

腕や足に所々傷が見受けられるが、気にする様なものではない。

「今井……さん……？」

隼が、その人物を見て驚いた。

「さて、どういう事が説明して貰おうか？」

近衛家と九条家の連絡役を担っていた人物、そして襲って来た人物。

「これらが同一人物という事は、単純に考えてみれば直ぐに分かる事だ」

「つまり、本家には」

「そうだな、恐らく、近衛本家には伝わってすらいないだろう」

これが潤也が屋敷に入った時に感じた違和感。普段使われる事の無い電波の周波数を感じた事もあるが、こういう連中は潜り込む事に慣れているとはいえ、多少の違和感が出る。

『一方通行』の能力はベクトル操作。端的に言えば、操作できると言つ事は感じ取る事が出来ると言つ事。

普段から必要なモノ以外は反射（物体は反射して無い）している為、こういった事には気付きやすい。

襲つて来てくれたのならば好都合。探す手間が省けたのだ。何より、コレを期に『長谷川潤也』という名が裏に知れ渡つては困る。

服の中から取り出したのは小さな機材。

「……ソレは、何だ？」

「盗聴器さ」

敬語を使う事が面倒になったのか、普通の口調で話す。

取りだされたソレは、芸人が使う様な小型マイクと録音・送信媒体がケーブルで繋がっていた。

恐らく、外にはコレを受信している者がいるだろう。それについては既に『獵犬部隊』を放つてある。問題は無いだろう。

「部下を信用するのはいいが、信頼できる部下を使うんだな」

機材を持たずにスパイをしている者も数名いるようだが、それら

に関しては『心理掌握』<sup>メンタルアウツ</sup>で既に把握している。

これだけやるのだ、敵は確実に組織。しかも、何かを狙っている。  
「急いだ方が良いかも知れねえな」

十中八九封印されたと言う『何か』が狙いだらう。グズグズしていると不味い事になるかもしれない。元より時間はあまり無いのだから。

下手をすれば、どこぞの魔術結社とその辺の科学結社が手を組んだ可能性まで存在する。先手を打たれる事は避けたく。

「それじゃ、早速行こうか」

気軽に言っつて、歩き始めた。

ヤマタノオロチ  
八岐大蛇。

古事記においては8つの頭と8本の尾を持ち、目はホオズキのよ  
うに真っ赤で、背中には苔や木が生え、腹は血でただれ、8つの谷、



8つの峰にまたがるほど巨大な怪物と記されている。

『7回絞った強い酒を用意し、垣を作って8つの門を作り、それぞれに醸した酒を満たした酒桶を置くようにいった』

『準備をして待っていると八俣遠呂智ヤマトノオロチがやって来て、8つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒を飲み出した』

『八俣遠呂智が酔ってその場で寝てしまうと、須佐之男命は十拳剣を抜いてそれを切り刻んだ』

コレが八岐大蛇を討伐したと言うスサノオの伝説だ。

そして、八岐大蛇の骨は島根の須佐神社すさじんじやに収められていると言う。

「つまり何だ？ その骨を媒体に八岐大蛇を復活させようとしてんのか？」

「端的に言えばそうなる。この数年 大凡五年ほど前か。封印したが、瘴気を吸い、元になる肉体を手に入れてしまったならば手の着けようがないぞ」

潤也と厳冬。二人は日の暮れかかった町並みを見ながら走る。

移動するなら夜の方が容易いし、見つからない。だが、そんな悠長な事を言っている場合では無くなっている。

時間が残り少ない。

ほんの数時間前、また封印が弱まったらしい。これ以上遅れれば手遅れになる可能性が出て来た。

あまり遅れると、『イマジンプレイカー幻想殺し』を使うのが難しくなる。アレは諸刃の剣だ、使いながらの戦闘は困難を極める。

他の全員は遅れてついて来ている。今屋敷にいるよりは恐らく安全だ。

党首もその孫もない隙をついて攻め込んでくる可能性もあるのだから。屋敷で捕まえた奴以外にも隠れている可能性だってある。屋敷は広い、探しきれない可能性は十分にある。

零は千雨は護るが、それだけ。それ以外はどうなるかと反応すらないだろう。それは構わない。唯、問題なのは数。

『獵犬部隊』を用意してはいるが、相手がキツチリと戦力を備えた組織なら相手にするのは難しい。

ダン、と地面に着地する。

神道の結界によって封じられているが、これほどまで近くに来ると肌で瘴気を感じる。相当に濃い。

「では、行くぞ」

厳冬が注連縄しめなわを使って造られている結界を解く

ゴガン!!! と爆音がし、砲弾のような速度で飛んで来た何か

逆方向へ吹き飛ばす。

ベクトルが逆方向へと変換されたそれは、頭が車よりも大きい大きさの蛇だった。

相手は蛇。頭は当然のように八つある。胴周りは二メートルはあるだろうか。全長は分からない。それほどの大きさ。

「何だよアレ。……ま、ぶち殺してから考えればいいか」

「そうだな。手がつけれないレベルだが、手加減などしない。コレが元凶なら叩き潰すまで」

嚴冬の右腕には梓弓あすなゆみが付けてある。ソレは小手様の形状で、片手でも弓を引き射出できるよう複雑なカラクリが仕込まれた梓製の弓。

梓弓 矢を射る事ではなく、弓の引き弦の音で魔を打ち抜くと  
言われる日本神道の呪具。

本来は神楽の舞に使われる楽器で、弦の音を使い舞を踊る御子をトランス状態に導いて神を降ろす手助けをする為の物。

ジャキン、とからくりを用いて弓を引く。

そして、放つ。

「『断魔の弦』」

圧縮空気の刃が、蛇を切り裂こうと迫る。

だが、それが直撃したにも関わらず、蛇は鱗が多少斬れただけ。

「……随分と頑丈な鱗の様だな」

元々神道は土地の力に依存する所がある。故に、土地そのものが敵となっているこの状況では十全に力を発揮できなくて当然だろう。

まあ、そんな物は超能力者には関係の無い事なのだが。

ゴオツ！ と音がする。

潤也の掌を起点として、巨大な炎が渦巻いていた。『バイロキネシス発火能力』による炎だ。

「焼け死ね、クソ蛇」

ソレは巨大な蛇を容易く飲み込み、周りの木々を熱で焦がす。

炎が消え、焼け跡となった場所から、火による焦げ目こそあるが対してダメージを受けていない蛇が現れ、突撃する。

「チツ、面倒だな。直接こいつをブチ込んだが速いか」

ベクトルを変換で真正面から殴り飛ばし、最初に蛇を吹き飛ばしたときに折れた木を拾う。

ソレを、蛇の頭の一つに重なるように転移させる。

「—————！！！！」

絶叫。

人には理解できないが、大音量による絶叫の様なものが上げられた。

対象を押しよけるようにして転移する『空間移動』系統の能力は、唯の紙切れでダイヤモンドすら切断可能だ。

「まずは一つ　って、オイオイオイふざけんよ！」

突き刺さった木を別の頭が引き抜いた。すると、引き抜かれた蛇の頭は瞬く間に再生していく。

「……アレは、瘴気を吸っているのか」

巖冬はその現象を冷静に分析する。

龍脈が淀んだ事で発生した瘴気を吸い、蛇の頭が再生した。

元々蛇は『死と再生の象徴』とも取られる存在、しかも元になる肉体こそ本物だろうが、この大きさは瘴気によって保たれているといっても過言ではない。

つまり。

イマジンプレイカー  
幻想殺しを使わない限り、勝つ事はまず不可能。

「厄介だな」

だが、使えば的になる。他の超能力が使えなくなるのでは、この

場では役立たずだ。

八つもの頭がある以上、厳冬一人では抑えきれない。

「全く持って厄介だ。本当、どうしようか」

キュイン！ とレーザーの様なものが蛇にぶつかり、その勢いで頭の一つが後ろへ強制的に反らされる。

「吾輩の手助けが必要かな？」

右手を構え、掌からレーザーを放ち、零が淡々と言い放つ。

『千テルキャノン第五元素砲』アルファダガー。

右腕に仕込んだ武器。光剣ダガーによる攻撃は細胞の核組織から破壊が可能だ。

ソレを惜しげも無く放ち続ける。潤也は既に『右手』の能力を発動させて、龍脈を『作り変えて』いる。

レーザーこそ放っているが、零は千雨の傍から一步も離れない。それどころか、周りにセンサーを働かせて奇襲されない様になっている。

(とはいえ、長い時間はいない方がいいか)

千雨は一般人だ。出来る事ならこの中に入る事さえしてほしくは無い。耐性が無ければ、この濃い瘴気に中てられてしまう。

それも右手で作り変えてはいるものの、この異常な濃度の瘴気は作り変えるのに時間がかかる。

「『斬空閃』！」

隼の放つ気を纏った斬撃は蛇に直撃するも、目に見えるダメージは無い。

「『はらいたまい、きよめたまう』」

しゃんしゃん、と神楽鈴を鳴らす香奈。未熟で土地が敵の為に強力とは言い難いが、それでも瘴気を防ぐ程度の結界を張る。

ソレをみて、取りあえずは安心か。と思考する。

だが、それが直ぐに吹き飛んだ。

蛇の頭の一つが、高速で結界の方へ伸びた。それは強力な、砲弾のような威力を持って結界を破壊しに掛かる。

「蛇風情が、頭に乗るな」

赤い上着を脱ぎ捨て、背中から伸びた翼は左手に収束させられ、ドリルの様な形になって蛇の頭に突き刺さる。

そして、そのまま開く事で蛇の頭を内側から易々と切り裂いた。

血に濡れる事を気にせず、淡々と蛇の力を削ぐ。

「『雷光剣』！」

強力な気を込められた一撃で、鱗の取れた蛇の頭は簡単に消し飛ぶ。

「『断魔の弦』！」

追撃するように圧縮空気の刃が飛び、傷口を更に抉る。

潤也の右手の影響で瘴気はかなり薄まり、龍脈の淀みも無くなっている。ここまで速いのはやはり『イマジンプレイカー幻想殺し』の能力故か。

おかげで蛇の再生能力はガタが来始め、現に吹き飛んだ頭の一つは既に再生しなくなっている。

後数分もすれば、瘴気も完全に無くなるだろう。

だが、それが油断となれば足元をすくわれる。故に、気は抜かない。気を抜けない。

そして、七つとなった蛇の頭に、『座標転移』で木を転移させ、倒した所でもう一度『幻想殺し』を発動し、瘴気を完全に消しさる。

「これにて一件落着。つてか」

そう言いながらも、八岐大蛇から目は離さない。

もしかしたら。そう思い、『ボンバーランス空素爆槍』で尾を引き裂く。

「……予想通り、か」



尾にあったのは一振りの剣。

伝説では、八岐大蛇の尾を切り裂くと、あめのむすぶのつるぎ天叢雲剣、くちなしのつるぎのちの草薙剣が出て来たという。

伝説を再現する事で、結果である伝説の剣を再現しようとしたのか。

誰が何を狙ったのかは分からない。だが。

「随分とふざけた事をする奴だ」

下手をすれば被害は島根に留まらなかった可能性もある。それこそ、日本全土まで広がる可能性だってあった。

もちろん関西も関東も隠蔽しようとするだろうし、潤也達も潰そうと動く。

何が狙いかといわれると判断に困るが、恐らくはこの『剣』だろう。

『剣』を『王の財宝』に入れて回収し、考える。

捉えた連中から相手側の組織について調べる必要性が出て来た。

何を狙っているのか。何が目的なのか。それは分からない。

だが、誰が相手でも、潤也はこうだろう。

『俺の大切なモノに被害が出るようなら、どんな手を使ってでも叩き潰す』と。

第二十三話「全く、行儀がなって無いな」b y 零（後書き）

長かったぜ。という話（オイ

この謎の組織相手は多分外伝行きですけどね。本編で出すと整合性  
取れなくなったりしそうで怖い。

学校始まったんで更新は少し遅くなるかと。

ドリルは男のロマンですよ（え

もうすぐ春休み編終わるなあ。いや、麻帆良居残り組の話もだから  
後二話かな。

その次はエヴァとの話。やっぱりネギ涙目な状況になりそうです。

感想とか待ってます。

息抜きに別作品でも書いてみるか、と思い始めた今日この頃。短編  
から選ぶかなあ……。予定は未定なんで分かりませんが。

第二十四話「む？ 長谷川潤也の力の解析？」by超（前書き）

最近この作品は都合主義が多くなってきたかな、と思う様になった。

## 第二十四話「む？ 長谷川潤也の力の解析？」by超

瘴気が完全に消えた事を確認し、全員一旦九条の屋敷へと戻る。

『獵犬部隊』から報告を受けて無い為、恐らく襲撃などは無かったのだろう。

隠蔽作業は九条に任せる事にした。

零の血塗れになった服などを着替えさせて、潤也と千雨、零は旅館へと戻る事にした。

日は暮れかかり、空は茜色に染まっている。

その中で三人。タクシーを使って旅館へ向かう。

一日でいろいろあった為か、千雨は疲れた様な顔をしている。潤也は慣れた様な顔で特に疲労がある様には見えない。零は言わずもがな、疲労など無い。

夕食までまだ多少の時間がある為、千雨は温泉で疲れを取ろうと露天風呂へ向かった。

潤也は必要な場所へ連絡し、零は興味津津と言った様子でテレビを見ている。

「……お前、テレビがそんなに面白いのか？」

「吾輩にとってコレは初めての体験なのでな。興味はある」

大凡機械人形がする様な思考では無い。というか、そもそも『思考』という行為自体をしないだろう。

機械はプログラムに沿って決められたパターンしか返す事は出来ない。自由意思で問いに対して返答できるなら、それはもう人間の域だ。

「というか、吾輩は止める。せめてそれだけは直せ。頼むから」

「む？ 一人称を変えろと言うか。……僕？ 俺？」

イメージにあわねえ……と呟く潤也。見た目は完全に同年代の女の子。それがおかしな喋り方で一人称が吾輩。

作った本人である潤也からすれば、其処は直したい所であり。

少なくとも声だけなら『俺』でも通るんじゃないか、とは考える。見た目も考えなければならぬが。

「そうだな……『私』でいいんじゃないか？」

見た目的に。と付け足す。音声は多少機械的な為、あまり気にする様な事でも無いのだ。

「私、私か。慣れんと難しいのだがな」

その後も何度もブツブツ呟いて一人称を矯正しようと頑張る零。話し方は全く変わって無いが。

そうこうしている内に千雨が温泉から戻ってきて、丁度よく夕食の時間となった。

隼と香奈も合わせた四人で泊まるつもりだったのだが、解決できると踏んだ時点で二人分と変更していた為、夕食は二人分用意されていた。

キャンセル料はキッチリ払った。隼が。

零は当然ながら食事自体を必要としない為、テレビを間近ですつと見ていた。

(アレで目が悪くならないって地味に便利な気がする)

潤也是そんな事を思いながら食事を取り、温泉に入ってゆったりと過ごす。

部屋に戻ってくると、二人とも布団の上で寝そべっていた。

「何してんだ？」

「今日一日でいろいろあったから疲れたんだよ」

当然と言えば当然だろう。

衝撃の事実を次々と暴露され、あまつさえあんな気味の悪いモノまで見たのだから。

「夢に出そうで仕方が無い」

「一緒に寝てやるのか」

ケタケタと笑いながら腰を下ろす。一部屋で既に隣に寝る事になっているのだからあまり変わらないとは思っただが。

寝る時間には少し早い、疲れたならもう休んだ方がいいかもしれない。と考え、着ていた服などを片付ける。

「……なあ、潤也は本当に超能力者なのか？」

「見ただろ。雷に風。木をテレポートさせたり自動車ほどの蛇を殴り飛ばしたり」

既に音の操作で外には聞こえない様にしてある。問題は無い。

「それは、潤也が望んで手に入れたモノなのか？」

「……どういう意味だ？」

「隼が言ってたんだよ。潤也は分からないけど、この力は望んで手に入れたものではないって」

ハッキリと言い、目を見据えている。嘘をつけば直ぐに分かるんでもという様に。

「……端的に言ってしまえば、俺のコレは三歳頃に手に入れたものだ。偶然な」

嘘では無い。使うこと自体はもしかしたらそれ以前から出来たかもしれないが、そんな小さい頃の事など覚えていない。



何しろ、この体になって三歳で今の意識が現れたのだから。

どちらかと言えば、転生より憑依に近い形なのか？ と潤也は考える。

「そう、か……」

千雨は驚きを覚える。

三歳頃からそんなおかしな力を手に入れて、自分は今まで気付かなかったのだ。驚くのも無理は無いだろう。

「潤也。『SMG』に居ると、今回みたいな危ない事するのか？」

「実際にやってるのは別の奴ら。俺は唯一の学生だ。秘密ありのな」

「秘密？」

「『SMG』の社長。垣根帝督は俺」

驚きで千雨は動きが止まる。

キッチリ防音しているし、認識阻害と違って物理的に聞こえない為、偶然の盗聴という危険性も無い。

「マジか」

「マジだ」

千雨は敷いてある布団の中に顔を埋める。

「……………そんな事してたのか。てか、出来るのか？」

「顔と声。その他諸々は勿論変えてるさ。遺伝子レベルでは変えられないが、その辺は気をつければどうとでもなる」

気軽に言うが、実際にはそう簡単な事では無い。

触れたモノには指紋がつくし、髪があれば遺伝子が見れる。最先端科学を有する『SMG』。皮肉にもその科学の発展はより長谷川潤也＝垣根帝督を繋がりやすくする。

それでも、全く違う顔と声。それで繋がりを探そうとする方も大概おかしいとっていいだろうが。

「…………ハア、やっぱり危ない事してるんだな。もっと安全な生き方は出来ないのか？」

「ニートにでもなるか」

ケタケタと笑う。金なら幾らでもある。少なくとも、このまま働かなくても一生遊べるくらいには。

「せめて働けよ」

「探偵でもやるか。ニートで探偵」

「これがたったひとつの冴えたやり方。ってか」

「少なくとも後悔はして無いね。身の回りの安全を望むなら組織という後ろ盾は有ったほうがいいし。特に天然の超能力者に関しては、『SMG』にいた方が楽で楽しい人生を送れるだろ」

不可思議な力を持つてるからと実験台にされている者だっている。能力者だからと迫害された者だっている。

『SMG』はそういう連中が集まっている場所だ。否、集められた場所だ。

見捨てることなどしないし、敵対もしない。唯、安全と同族と衣食住を用意する事で安全に能力の研究・開発をする。いわゆる等価交換だ。

一部意味不明な能力をもつ原石もいるが、一応法則や理解が可能な能力をもつ原石も存在する。

「個人じゃ絶対に出来ない事が出てくる。そうになると組織の方が楽だしな。家族と仲のいい友人位は守るよ」

「極道みたいだな」

「違うよ。盃交わしたりはしない。唯、研究させるなら衣食住・安全・仲間を与えるだけだ」

超能力者は、簡単に言えば世の中の爪弾き者だ。何処にいても、能力者である事を知られれば、ほぼ確実に距離を置かれる。

同じ能力者だけで集められている『SMG』の島にいたると言う事は、同類である仲間と一緒にいると言う事。隠す必要も無く、怖が

る必要も無い。

研究にしても、痛みがある訳でも、特に体に異常がある様な事をしている訳では無い。

少し異常な人間にとっては、この世界は生き辛い。

「認めてくれる人がいるならともかく、いないなら『SMG』の有している島に行った方が良ささ」

「……潤也はそう言う事を考えて会社を創ったのか？」

「ん〜……最初の目的は政府や国に介入できるようにする事だったけどな」

当初はある程度国に対して影響力を持ち、多少の事は揉み消せる位の力があればいい。と思っていたのだが、いつの間にかこうなっていた。

護を発見した時点でこの世界に『原石』が居る事は既に分かっていた為、そう言う連中を集めてやるうとしていたのだ。

有る程度の資金と組織が出来上がってしまったえば、後は有能な部下でもいれば任せてさっさと引き上げてもいいのだが。

どの道『メンタルアウト心理掌握』で操作するなら自身が社長という役割である必要も無いのだし。

流石にソレを今やると面倒な事になるのでやらないが。

「……何で其処までやるかね」

「平穩に暮らす為だよ。変装は俺だとばれない様にする為だし」

垣根帝督という一人物を創るには戸籍なども必要だ。偽装してもバレはしないだろうが、国に無理矢理作らせた。

「大切なモノを護る為なら、俺は何だってやるさ」

「大切なモノ？」

「そう、大切なモノ。それは人だったりモノだったり環境だったり。人によって違うモノだ」

親友が一番大事だと言うなら人だろうし、何か好きな物があるなら物だと言う者もいる。今の環境が気に入ると言うなら環境が大切だろう。

最も、物なんて幾らでも替えがきくモノは潤也は大して気にしない。扱いは丁寧ではあるが。

潤也にとって一番大事なのは人とソレを取り巻く環境。それを壊そうとするなら容赦はしない。

「ま、筆頭は千雨だけだな」

「……なんだかんだ言ってさ、潤也って私の事一番に考えてくれるよな」

「そりゃ、可愛い妹だからな」

千雨は顔を赤くしながら、口をつぐんだ。

少々時は遡る。

潤也と千雨が旅行に出かけた二日後。麻帆良大学工学部の一室。

「む？ 長谷川潤也の力の解析？」

「そうだ、アレはどちらかといえば科学寄りの様だからな。お前らなら分かるかもしれんと思っただけだ」

茶々丸の定期メンテナンスを行うついでに質問をしに来た。

「……口頭で説明されても分からないヨ。映像でも無ければ、だガ」

「私の記憶を見せる。それでいいだろう」

「分かったネ。私も少しばかり彼の力を知りたかった所ヨ」

鍵を閉め、盗聴や盗撮の類が無いか確認し、エヴァンジェリンの記憶を見る。

鮮明にうつるその記憶は、エヴァンジェリンと潤也の戦闘をしつかりと残していた。

武装解除の魔法が向きを変え、地面へと当たる

茶々丸の拳が潤也へと当たり、茶々丸の腕が肘から折れる。左腕も同じように

中段の蹴りは茶々丸の腹部へと直撃し、真っ二つにした

風速百二十メートルにも達する空気の塊が、砲弾となってエヴァンジェリンを襲う

魔法の射手を放つが、またも潤也に当たる直前に向きが変わる

潤也が地面を踏みつけると、放射状に亀裂が入り、コンクリートが碎ける

歪み、破壊されて飛ぶ破片はエヴァンジェリンを正確に狙い撃つ

地面を蹴り、ロケットの様に夜空へと飛び上がった潤也の背中には、四本の竜巻の様なものがあつた

空中に飛んで散らばっているコンクリートの破片を壮絶な音を立てながら吹き飛ばす

魔法を発動しようと試験管を投げるが、魔法の発動に失敗し、潤也はエヴァンジェリンを殴り飛ばした

「ここで、記憶は途切れた。」

「チツ……あまり思い出したくも無いモノだが、何か分かるか？」

「……フム。風を操る、というのは短絡的か？」

「いえ、可能性はあります。それと、どうやれば一蹴りで地面をあらんな壊せるのか……」

「地面に異常な負荷をかけている、というのは有り得るかナ？」

「可能性は有りますよね。筋力強化？ それとも物理的に力が通り易くなっているんですかね」

「ソレに、魔法の向きを変えたりとしていたが、どういうことだろう力」

「……『向き』？」

「ム、どうした、葉加瀬？」

「……いえ、可能性の話ですが……もしかしたら、向きを操っているのでは？」

「どういう事だ？」

「魔法の……確か、武装解除でしたか。ソレが地面へと向きが変わった時、感覚的に何か変化はありましたか？」

そう言われ、少しばかり考え込む。



数分し、あまり覚えていないが。と前置きして話出す。

「何というんだろうな、あれは。無理矢理方向を捻じ曲げられた様な、そんな感じだ」

誘導弾、つまりは撃ってからも多少の操作が効く魔法の射手系統の魔法だからこそ気付ける事。

ベクトルを無理矢理変換させたのだ、多少の違和感はあるだろう。

「やはり……超さん。もしかしたらの可能性ですが、一つあります」

「向きを操る……つまりは、ベクトルの変換、力？」

「ええ、だとしたら、火や氷結といったスカラー値の攻撃なら通用するかも知れませんよ！」

超は、ゆっくり首を振る。

「落ち着くヨ、葉加瀬。確かに火や氷結といった『熱量』はスカラー値だが、『熱量の移動』はやはりベクトル値で表わされる。仮にベクトルの操作が可能というならそれも出来るだろうし、出来ないとしても、ソレに対して対策を立てていないと言うのも考えにくいヨ」

可能性の話ではあるが、高いと超は踏んでいる。

だからこそ、念入りに調べる必要性がある。

(とはいえ、相手に知られてしまえば同じヨ。盗聴や盗撮には最大限気をつけてはいるが、いつどこで会話が聞かれているか分からない。神経を使うネ、全く)

軽くため息をつきながら、次の可能性の話をする。

「でも、ベクトルの操作が可能なら、何でそのまま相手に返さなかつたんですかね？」

一つの疑問。

それが、一つの勘違いを生む。

「……完璧に操作はできない？」

「……可能性は、あるヨ」

デフォルトで反射に設定しているが、この場合は潤也はまず魔法を消す事を考えていた。

放った後で操作が出来る類の物は、下手をすれば自身と撃った相手の間で何往復もする可能性がある。それは途中で方向が変わって周りに人的被害を及ぼさないと限らない。

地面に当ててしまえば消えるし、破片は反射すればいい。

操作の出来ない『闇の吹雪』や『雷の暴風』、『千の雷』や『おわるせかい』は完全に反射しても周りには被害がいかない。その為、反射を使う。

だからこそ、勘違いをしてしまった。

「魔法の射手でアレなら、中級クラスの魔法をぶつければすり抜けられるか？」

「少々短絡的な気もするが……もう少し威力の高い、それこそ『燃える天空』レベルをぶつけければ、破れる可能性は高くなると思うネ」  
ベクトルの操作を、単純な値の大きさを操作できないモノとしてしまった。

確かに限界はあるが、地球の自転十分以上だ。どうやったって人間に出せる値では無い。魔法を使っても同じだろう、そんな馬鹿げた数値を出せる魔法使いなどいない。

「だが、あくまで可能性、か」

「下手をすれば全て自分に返ってくる。気をつけた方がいいと思う」  
「ヨ」

「分かっている。……纏めると、ベクトルの操作、風の操作か」

「もしかすると他にある可能性もあるヨ。茶々丸の人工脳まで弄っているのだから、機械に干渉できる能力。電気を操るとかの能力があると考えていた方がいいと思うネ」

「……そうだな。すまないな、手伝わせて。礼を言う」

「私達も彼のデータを取れた分、良しとするネ」

「フ、そうか。私はさっさと家に戻るとするよ。やる事があるしな」  
そのままメンテナンスの終わった茶々丸を連れ、エヴァンジェリンはログハウスへと帰る。

そして、潤也と千雨が麻帆良へと戻って来た日。

お土産を持ってアスナと木乃香の部屋を訪れ、早速アスナに捕まった潤也。

「久しぶりの感触」

背中に抱きつきながらアスナはそう言う。

「俺の背中がお気に入りポジションか」

軽く笑いながら、お土産のお菓子を木乃香に渡す。

「わゝ、ありがとうな、潤也君」

「アスナと食べてくれ。そんな大したもんじゃないけどな」

「良いわよ、其処まで気を使わなくて」

潤也の背中から幸せそうにアスナが返す。

「いや、潤也君がちゃんと時間どおりに帰ってきてくれて良かったなあ、アスナ」

「え？ 何かあった？」

「いや……速く帰ってこないかなーって、アスナの目が怖かったんだよ」

「ああ、なるほど」

ベッドの上でダラーっとして、そんな事をよく呟いていたらしい。

「充電がもう、直ぐに切れちゃって。充電しとかなきゃと思ったらいないし。やる気出無くなって」

ぎゅっ。と抱きつき、顔を綻ばせるアスナ。

「ネギ君の案内やる筈やったんやけど、アスナがこの調子やし、高畑先生に呼び出されたんもあって鳴滝姉妹に頼んだりしたんよ」

「後は、いいんちよの家に行ったりしたわね」

「喧嘩しなかつたんは珍しかったなあ」

「私だっていつでもいいんちよと喧嘩してる訳じゃないわよ」

潤也の肩に顔を乗せながら言う。

「雪広か。確か、弟がこの時期亡くなっただっけ？」

「まあね。小学校の時の落ち込みようは凄かったわよ」

その辺の事もあつて年下の男の子に興味もったんかなあ。と潤也はぼんやり考える。

あんまり関係ないし、特に気にする様な事でも無いので直ぐに頭の中から消えたが。

「あと数日で春休みも終わるか。ネギ少年は担任なんだろ？ 大丈夫そうか？」

「取りあえず、寝るときはソファに縛り付けておかないと勝手にベッドに潜り込むのよね。どうにかならない？」

「学園長に直談判してみるか。証拠写真……というか、映像でも用意しておけば勝てるだろ」

「分かった、用意しておく」

大分目がマジだな。と木乃香とアイコンタクトする。

幼馴染は伊達じゃ無い。軽い意志疎通なら出来るのだ。と誰に説明してるんだ俺と考えた所で携帯のコール音。

『コロラド・ブルドッグ』という曲が鳴る。

「……何その曲」

「気分を変えた」

前の方がよかったかな。と特に後悔も反省もしていない声色で電話に出る。

何度か短い会話をした後、立ち上がる。

「今日は帰る。ちよいと用事が出来た」

「そうなの？ ……むう、明日遊びに行っていていい？」

「いいよ。だからちよつと離れて。首が締まってる」

対して慌てた様子も無く、首に回されてる手を退かす。

「じゃ、また今度な」

手を振って部屋から出て、窓の無いビルへと向かう。八重からの報告を受けなければならぬ。さっさと終わらせるに限るね。と思考して、足を動かす。

第二十四話「む？ 長谷川潤也の力の解析？」by超（後書き）

春休み編取りあえず終了？ な話。

アスナの部分は入れるか迷ったけど、何だかアスナとの絡みを見た  
い人がいるようなので書いてみた。人気があるのか？ このアスナ。

エヴァンジェリン、努力するの巻。

科学なら超達の方を頼ってもおかしくないかな、と思いついて。茶  
々丸で繋がりはある訳ですし。

次回、ネギ涙目な展開になります。特に困る人はいないでしょうけ  
ど。



第二十五話「悪いが、その血を少しばかり分けて貰うよ」b y e u a (前書き)

ちよつと急ぎ足で書いたのでおかしな所があるかもしれないです。

## 第二十五話「悪いが、その血を少しばかり分けて貰うよ」byエヴァ

春休みも終わり、新学期。

八重からの報告では学園長がまた何やら仕掛けていたらしいが、特に警戒するほどの事でも無い。エヴァンジェリンの力を封印している結界の事だった。

アレは魔法と科学の二つを使った、いわばハイブリットだ。

もう直ぐ学園都市全体のメンテナンスが行われる。麻帆良大停電、という奴だ。

その際には結界は予備電源を用いて維持される事になっている。

だがまあ、気付いていると言っなら、恐らく茶々丸っつーロボがハッキングなりなんなりして止めるだろう。

呪いの方は知らん。俺は別にアイツが放たれても吸血鬼である以上は脅威じゃ無い。

桜通りの吸血鬼。地味に活動を続けてるようだが、何するつもりかは明白だな。学園長達は何考えてんだか。自分の首を絞めるだけだつてのに。

麻帆良女子中等部。

2・Aも最高学年の3・Aになり、緊張感が増す……筈も無く、いつも通りのテンションだった。

『3年！ A組！！ ネギ先生ーっ！！』

合図も前振りも無く一斉に叫ぶ。中にはソレに参加していない者も当然いるが。

ネギは前で挨拶し、話をする。その後、しずな先生が入ってきて身体測定の準備をするよう告げに来た。

それを聞いてネギは慌てて、今すぐ服を脱いで準備しろと指示を出す。

潤也がこの場にいれば十七分割されてもおかしくない事である。一応ネノギでも可だ。

失言に気付いたネギは慌てて教室から出て行く。

千雨とアスナは同じように頭を抱えた。双子か？ と思わせる様なシンクロぶりである。見た目だけなら双子といわれてもおかしくは無いのだが。

そして、身体測定を進めていると、クラス内に一つの噂が流れる。

桜通りの吸血鬼。

満月の夜に桜通りを歩いていると、吸血鬼に襲われると言う物だ。

「ああ、知ってる。去年の夏あたりから流行り始めた奴でしょ」

アスナは時期を思い出しながらそう言う。

「うん？ 知ってたの、アスナ？」

「まあね。結構有名だし」

誰も特に信じたりは……鳴滝姉妹は信じていたようだが……していない。

そして、バタバタと足音が聞こえる。

『先生ーっ！ まき絵がーっ！』

壁越しの為、少し聞こえづらいが、それでもこのクラスのほぼ全員には聞こえていたらしい。

「何！？ まき絵がどーしたの！？」

和泉の声を聞いて、ほぼ全員が教室のドアや窓を一斉に開く。

「……下着なんだからもう少し恥じらいを持とうぜ。女子校だからって男がない訳じゃないんだから」

千雨の眩きは誰にも聞こえる事は無かった。

夜。

図書館島探検部とアスナは、コンビニによって帰ろうと言った話になり、宮崎は一人桜通りを帰る事になった。

風が吹き、桜が揺れる。

それだけで驚く。怖さを紛らわす為に小さく歌の様なものを呟くが、一際強い風が吹いてソレが止まる。

桜の方を見ると、街灯の上に誰かが立っていた。

黒いマントに帽子。宮崎はその姿に恐怖した。

「出席番号二十七番。宮崎のどかか……悪いが、その血を少しばかり分けて貰うよ」

そして、飛び降りる。

「待てーっ!!!」

その時、杖に乗ってネギが現れる。宮崎は恐怖で気を失ったらしく、倒れる。

「ぼ、僕の生徒に何するんですかーっ!？」

そのままの勢いで詠唱を紡ぎ、魔法を発動させる。

「『魔法の射手・戒めの風矢』!！」

「もう気付いたか。『氷楯』……」

試験管を投げ、魔法を発動させる。込められた魔力の違いか、完全には防げずにマントの少女 エヴァンジェリンは指から血を流す。

風が巻き起こった事で帽子が飛び、顔が露わになった。

「驚いたぞ。凄まじい魔力だな」

指から出ている血を舐めながら、そう言う。

「き、君は、ウチのクラスの……エヴァンジェリンさん!？」

「フフ、新学期に入った事だし、改めて歓迎の挨拶と行こうか、先生……いや、ネギ・スプリングフィールド」

余裕を見せ、そう続ける。

「十才にしてこの魔力。やはり奴の息子だけはある」

奴の息子、という言葉に反応するが、それ以外にも聞く事がある。

「何者なんですかあなたは! 魔法使いなのに、魔法をこんな事に

使うなんて！」

それは憤り。自身の父がそうであったように、人を救う事が魔法使いの役目だと信じて疑わない目をしている。だからこそ、自分の為に魔法を使う事が許せない。

「自分の事を棚に上げて。」

「この世には、良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ぼーや」

そのまま手に持った試験管を投げつけ、『氷結武装解除』の魔法を発動させる。

ネギは片手で抵抗するも、威力の大きさからか、防いだ方の腕の服が破ける。宮崎は胸から下が既に破けている。

そして、その音を聞きつけて乱入者が現れた。

「何や、今の音」

「ネギ先生、どうしたの？」

木乃香とアスナ。

二人は宮崎が心配だからと送っていく事にし、追いついたらこの状況。という訳だ。

一般人が介入した事により、場所を変えようと動くエヴァンジェリン。

「宮崎さんを頼みます。僕は犯人を追いますので。心配無いですから先に帰っててください」

逃がすまいとネギは構え、魔力を練って走り出す。その速度は普通の子供が出せる様なものではない。

「うわ、速っ!？」

木乃香は驚いている間に、アスナは宮崎を抱えていた。

「心配無いつて言ってたし、先に帰りましょ。高畑先生にでも伝えれば……あゝ、出張だったっけ」

こんな日に限って、と思うが、別に学園長が加担してるなら命の心配は無いか。と思い直し、寮へと歩を進める。

追いかけるネギ、追われるエヴァンジェリン。

封印されてこそいるが、その実力は本物。普通の魔法使い、それも見習いが、間違っても敵うような相手では無い。



『闇の福音』は魔法関係者にはなまはげ的な扱いをされているが、近くにいれば意外にも気付かれないモノだ。

だからこそ、エヴァンジェリンの事を追いかける。弱い魔法使いだと勘違いしたまま。

追いつかれた事に驚き、空へと飛翔するエヴァンジェリン。

ネギも、それを追いかけるように杖にまたがり、空へと飛翔する。

「待ちなさい！ エヴァンジェリンさん。どうしてこんな事をするんですか！ 先生としても許しませんよー！！」

説得出来る、そう思って何度も声をかける。

「ハハ、奴の事が知りたいんだろ？ 私の話を聞きたくないのか？ 私を捕まえたら教えてやるよ」

挑発するようにそう告げる。

父親の事を妄信しているネギにとって、その話は逃したくない事であり。

悪い事をしているから止めさせる。という建前で、父親の事を聞き出す。という本音を持ち、速度を上げる。

精霊召喚による魔法で分身を作り出し、エヴァンジェリンへと迫らせる。

対するエヴァンジェリンは先ほどと同じように試験管を使って魔

法を発動させ、分身を消滅させた。

魔力が弱い為に魔法薬を使って魔法を行使している。ネギはそう考えて、分身の一体を体当たりさせて体制を崩させる。

そのまま横に回り込み、武装解除の魔法を放った。

抵抗するも、その威力に押されてマントは蝙蝠レジストとなって消える。

何処かの建物の屋上に降り立ち、ネギはネグリジエ姿のエヴァンジェリンをあまり見ない様にしながら近づく。

「こ、これで僕の勝ちですね。……さあ、約束通り教えて貰いますよ、何でこんな事をしたのか……それと、父さんの事を」

明らかに後者の方がネギとしては聞きたい事だろう。自身を救った父を知っている人物。父の手がかりを持っているかもしれない人物。

だが、現実はその甘くない。

「お前の親父……即ち『サウザンドマスター』のことか？」

笑いながらそう言うエヴァンジェリンに対し、ネギは驚愕する。

「と、とにかく。魔力も無く、マントも触媒も無いあなたに勝ち目はないですよ……！ 素直に……」

「……呆れてものも言えんな」

溜息を軽くつき、やれやれといった様子で頭を抱える。

「油断のし過ぎだ。悪い魔法使いが、正々堂々と戦うとも思っていたのか？」

「え……！？」

体を動かそうとしても、全く動かない。

魔力を使っている様子は無い。なら、どうして？ そんな考えが頭の中を反復する。

「悪いが、手段を選ぶ気は無い。私は悪い魔法使いだし、アイツを殺すにはこれは邪魔過ぎる」

忌々しい呪い。これがある限り、全力は出せない。

ならば、解いてしまえばいい。元々術式の構築はやっていた。半年ほど前に一度変質した所為で使えなくなったが、改良し、確実に解けるように作り直した。何故か必要な血液の量は減っていたが。

後は、呪いをかけた血縁者の血。本来ならば呪いをかけた張本人が一番なのだが、死んだと言う噂が流れ、不可能だと思っていた所にネギは来た。

これを逃す手は無い。本来ならば奴に無理矢理解かせたい所だが、実力的に勝てるかどうか分から無い相手にソレはできない。

ならば、やはりネギを使うのが一番だ。例え、惚れた相手の息子であるとしても。

学園から睨まれるだろうが、どうせ文句は学園長へ行く。ここは気に入っているが、どの道奴を殺せば確実に学園に睨まれるだろう。

それなら、時期が少し早まったただけだ。

持っている杖を奪い取り、ネギの首筋に歯をつきたて、血を吸う。

この際味などどうでもいい。茶々丸はこの辺り一帯を見張らせている。糸で拘束した現状を破る手段は、ネギに存在しない。

そのまま血を吸い続け、失血死寸前まで行った所で必要な血液が集まった。

「茶々丸。輸血してやれ」

「イエス、マスター」

茶々丸は手に持った輸血パックから失血死寸前のネギに輸血し、エヴァンジェリンは解呪の魔法を発動させる。

詠唱を紡ぎ、魔力を使い、完全に解き放たれた。

「フ、フフフ。フハハハハハハハ！　やったぞ、漸くこの忌々しい呪いを解く事が出来た！」

だが、一つの違和感。

「……む？ 何故魔力が戻らない？」

そして、思考する。魔法に関して自身が分からないことなどそう多くは無い。まして、学園長がやりそうなことなど想像がつく。

「科学を使った結界、か？」

まだ確信はできないが、可能性はある。後で茶々丸に調べさせるべきだろう。

この学園に通う必要性はもう無い。だが、ネギの記憶を適当に改竄しておけまだ暫くはいられる可能性がある。

理由が無い。ここから出れば、また平穏など無い日々が続く。ソレに、茶々丸は科学で作られたガイノイドだ、メンテナンスもしくなくてはならない。

どの道魔力を抑えている大本を探す必要がある。

奴との戦闘に向け、力を完全に取り戻す必要がある。

「ふ、まだ暫くは学生生活を謳歌させて貰おうか、ネギ先生？」

一方、学園の魔法先生、魔法生徒は上へ下への大騒ぎだった。

当然だろう。十五年前にかの『サウザンドマスター』が封印した闇の魔法使いの権化といってもいい『闇の福音』ダークエヴァンジェルが、自力で封印を解いたのだから。

しかも、ネギは失血死寸前まで血を吸われている。輸血されている為、顔色は現状其処まで悪くなっているではない。

ガンドルフィーニは怒りにまかせて学園長を怒鳴っている。

「だから言っただけですよ！！ 桜通りの吸血鬼は本当に噂なんですかと！ その時は学園長は大丈夫だとおっしゃったから私達は退いたんですよ！？」 なのに、結果はネギ君の血を吸われ、サウザンドマスターのかけた呪いは解かれ、下手をすればあの闇の魔法使いを世に解き放ってしまうんですよ！？」

机に拳を叩きつけながら、その場にいる全員の気持ちを代弁する。

高畑は出張でいない。学園長自身も新学期という事で仕事に釘付けにされていた。つまり、監視の目が甘かったのだ。

そして重要なのは、エヴァンジェリン程の魔法使いが監視という事に気付かないなどあり得ない。という事。

それを分かった上で行動を見ていた筈なのだから、学園長は返す言葉が無い。

「このままでは学園の生徒に被害が出る可能性 いや、もう既に出てるんですよ！？」 一体どうするつもりなんですか！？」

「落ち着きたまえ、ガンドルフィーニ君」

「これが落ち着いていられますか！ 学園長のお孫さんだつて同じクラスでしょう。心配じゃないんですか！？」

「エヴァは女子供は殺す事は無い。それにもう襲われる事も無いじやろつて」

「既に出てるから問題なんです！ そもそも、そう言うという事は、襲われる事を容認していたようにしか聞こえませんか！？」

実際に容認していたのだから、学園長は何か抜け道は無いかと探る。

「大丈夫じゃ。エヴァは強いが、結界で抑えられている間は無害じや。それに、これから先被害が出るようならワシがエヴァンジェリンと戦う。それで良いか？」

「結界を抜けられるというのが問題です。あんな危険人物を外に出したらどうなると思ってるんですか！？」

「エヴァは自衛しかせんよ。自分から襲いかかると言う事はしない筈じゃ」

「何かそれを証明できる方法でもあるんですか？ 既に学園の生徒が襲われてたと言う状態で！」

詰まる所、ガンドルフィーニは生徒を守りたいだけなのだ。

学園長の理不尽に巻き込まれるなど、堪ったものではない。学園

の生徒が襲われている時も、「ワシが何とかする」と言っていただけで実際には何もしていない。

これを信用しろと言う方が難しいだろう。

「……分かった。二十四時間の監視を取ろう。何か動きを取れば直ぐ様ワシが出向いてどうにかする」

「……分かりました。その際には我々にも連絡を。もうこれ以上はどうにかなる事なんて有りません。討伐には、我々も参加します」

その言葉に、後ろにいた魔法先生・魔法生徒のほぼ全員が頷く。

実力の差が分かっている訳では無い。自分たちが犠牲になっても、絶対に止めるべき相手だと思っている。だからこそだ。

生徒には戦わせたくない。だが、相手が六百万ドルの賞金首となれば話は別。

学園長、高畑。二人で戦っても勝てないかもしれない相手。ならば、全員で戦うしかないだろう？

命を賭けてでも、絶対に倒すべき相手なのだ。それでも、出来るならば生徒には出ないで欲しい。そう言う思いを、魔法先生達は抱く。

何せ、相手は史上最強とも言える魔法使いなのだから



第二十五話「悪いが、その血を少しばかり分けて貰うよ」「b y エヴァ（後書き）」

ガンドルさん学園長を問い詰める。な話。

ぶっちゃけた話、ガンドルさんは正しいよね？って話で。このSS  
ではこうなります。生徒の為に命賭けます。

……でもぶっちゃけ美化しすぎな気がしないでもない。

エヴァンジェリン、呪いを解くの巻。

実際アスナに邪魔されなかつたらこうなってた、という。

もう原作なんてしーらない（オイ

ちなみにネギ君既に回収されてます。輸血中です。

今回は漸く潤也VSエヴァのカード。……多分。

偽典・二十六話「ココカラ先八通行止メダゼ！」byチャチャゼロ（前書き）

この話は作者の悪ふざけで出来ています。

お気に召さない方が出るかもしれませんが、自己責任にてお願いします。

なお、本編とは全く関係ありません。

偽典・二十六話「ココカラ先八通行止メダゼ！」byチャチャゼロ

ネギがエヴァンジェリンに襲われた翌日。

教室内では、新田先生が連絡を行っていた。

「　　と言う訳で、ネギ先生は体調不良で休んでいる。今日の連絡に関しては私が伝えておくので、しっかりメモを取って置く様に」

ネギは当然ながら一晩で回復する筈も無く。

多量の血を奪われ、魔力も枯渇状態。特殊な魔法薬と輸血で今日中には起き上がれるだろう、と学園長達は判断していた。

雪広は当然見舞いに行くと言ったが、新田先生の一言で抑える。

「ネギ先生はまだ子供なんだ。偶には体を壊す事もあるだろう。だからと言ってあまり大勢で行くと返って疲れさせる。今日一日は我慢しなさい」

そう言われては、と渋々引き下がり、授業を受ける事になった。

千雨とアスナはもう互いに魔法関係の事を知っている。と言う事を知っているのです、昼休みに屋上でネギの事について話していた。

「昨日の夜に誰かを追いかけて行ったのよね」

「じゃ、そいつが吸血鬼か？」

桜通りで倒れていた宮崎を預け、誰かを追いかけて行ったと言っ  
ネギ。なら、吸血鬼を追って行って返り打ちにされたと言っ事は容  
易に予想がつく。

「潤也なら何か知ってるかもな」

「電話してみる？」

「そうだな」

そう言っって携帯を取り出し、手早く電話をかける。

ワンコールで電話に出る潤也。いつもながら速いなオイ。と心の  
中で突っ込みながら語りかける。

『昨日の吸血鬼事件？』

「そう、何か知ってるか？」

『要約すると、吸血鬼は千雨のクラスのエヴァンジェリンで、ネギ  
はそいつを追いかけて行ったら大量に血を吸われて失血死寸前。今  
は輸血と治療を受けてる。ちなみにもう桜通りの吸血鬼事件は起き  
ない。断言できるぞ』

本当に要約しまくっった内容である。

「なるほど、だから先生は休んでたのか。というか、吸血鬼が本当  
にいたのかよ」

『正確には入院かな。明日か明後日までは来れないと思うぞ。吸血

鬼を殺す方法を教えておこつか?』

「分かった。私が襲われても潤也が助けしてくれるんだろ?」

『そりゃまあそうだけど』

「なら大丈夫だろ。ありがとな」

通話を切り、携帯をなおす。

「潤也、何だつて?」

「エヴァンジェリンが吸血鬼で、先生が追いかけて行ったら血を大量に吸われて入院中だと。後は桜通りの事件はもう起きないってさ」

「ああ、そう言う事。なら心配する事は無いでしょ」

残りの時間を談笑して過ごし、教室へ戻る。

夕刻。

エヴァンジェリンはPC室にて、茶々丸と結界について調べていた。

「どうだ?」

「予想どおりです。マスターが解いた呪い以外にも魔力を抑えてい

る結果があるようです。科学技術も使われている為、マスターも今まで気付かなかつたのだと思います」

「なるほど、凄いな。これが『ハイテク』って奴か」

「私も一応その『ハイテク』ですが」

そんな話をしながら学校から出る。

「準備は居るか？」

「いえ、私の能力を持ってすれば今夜にでも落とせますが……」

「そうか、ならさつさとやる事にしよう。監視の目が気持ち悪くて仕方が無い」

そう呟き、その方向を見る。

あちらも気付かれていると分かっているながら監視をしているのだろう。隠れる様子が無い。

「ふん。私が呪いを解いたからか」

どの道、今となってはもうエヴァンジェリンをまともな方法で押さえつける事など出来はしないのだ。

高畑と学園長がいるが、昼間は秘匿の問題で魔法を使えず、夜は結界を抜ければ二人がかりでも勝てるか分からない。

口元を隠す様にして、茶々丸に告げる。

「実行は今夜だ。抜かりなく進めろ」

「イエス、マスター」

ちなみに同時刻。女子寮に侵入しようとして潤也の仕掛けた『オジギソウ』のトラップに引っかかり、アルベール・カモミールが瀕死で高畑に拾われたのは完全な余談である。

そして、夜。

千雨は嫌な予感がしていた。

コンビニへジュースを買いに出て、桜通りを通る。もう事件は起こらないと聞いているが、やはり何か嫌な予感がしてしまうが、ない。

さっさと買って帰る。そう決めて歩を早める。

「長谷川千雨」

誰かに呼ばれ、振り向く。

其処には、マントの様なものを着たエヴァンジェリンの姿があった。

「奴を誘き寄せるには貴様が一番都合がいい。悪いが、一緒に来て貰うぞ?」

聞く様な態度ではあるが、有無を言わせぬ迫力があつた。

じりじりと後ろに下がり、逃げだそうとするも、足が動かない。

「逃がす筈が無いだろう」

ゆっくり歩を進め、千雨の首にその手が触れる

その瞬間、エヴァンジェリンは轟音と共に吹き飛ばされた。

吹き荒れる膨大な烈風。強烈な衝撃波となつてエヴァンジェリンを襲つたその一撃は辺りの木々を揺らす。

千雨に襲いかかってもおかしくないその風は不自然に動き、エヴァンジェリンへと追撃を加える。



「……つたく、随分とまア張り切ってるよオじゃねエか」

横から聞こえる声。そちらを見れば、潤也が歩を進めていた。

両手をポケットに入れ、不機嫌そうな顔をして、首を鳴らす。

「千雨。早めにここから離れる。そして、今日は寮から出るな。絶対だ」

「……分かった」

千雨を拘束していた糸は既に切断済み。そのまま寮へと駆けて行った千雨を見て、エヴァンジェリンが吹き飛んだ方へ眼を向ける。

「学園結界は茶々丸にハッキングさせ、自身を縛る呪いは既に解呪済み、つてかア？」

ダル気にそう呟く。

エヴァンジェリンはそれに答える様に、吹き飛ばされた茂みから無傷で出てくる。

「そつだ。態々お前を殺す為に用意した舞台。この日を待ち望んだぞ」

ゆっくりと笑みを浮かべるその顔は、殺意に染まっていた。

「ハッ、俺と戦う為に態々人質まで用意しようとしてたチキン野郎が。何を凄んでんだ」

「あんなものは呼び寄せろ餌に過ぎん。探して貰えろとも思っただか？ 超能力者」

世界最強の超能力者と、世界最強の魔法使い。

コソコソした隠蔽など考えない。そんな物は学園が勝手にやるだろ。自分たちは唯、殺し合うだけ。

「それにしても、予想以上に早い登場だったな」

「テメエの動きは全部筒抜けなんだよ。分かりやすい事しやがって」

「笑えるな。そうやって人の為に戦えば、善人にでもなれると思っただか？」

「ハッ、前に俺が言った事を覚えてねエよオだな」

頭のスイッチを完全に切り替える。手加減などせず、圧倒的な力で、絶対的な戦力差で、全力で、叩き潰す。

「その程度の頭に、もう一回教えておいてやる。悪党にも種類があるって事をな」

演算をフルに働かせ、全てを支配下に置く。

魔力を高め、詠唱を高速で唱える。

「グチャグチャにして血だらけの死体に染め上げてやる！！」

「さアて、スクラップの時間だぜエ！ クッソ野郎がッ！！」

そして、激突。

真正面から烈風と魔法がぶつかり、辺り一帯へ均等に衝撃波が発生し、桜通りのコンクリートを打つ。その衝撃はコンクリートを打つだけに留まらず、木々を揺らし、周りの建物のガラスが砕け散る。

激突の結果など明らか。

ベクトルを変換され、木々を薙ぎ倒しながらエヴァンジェリンは後方へと吹き飛ばされる。

だが、手には不快な感触が残る。意図的に手応えを外された様な、気色悪い感覚。茂みへと吹き飛ばされたエヴァンジェリンへ視線を向ける。

「ふん、ベクトルの変換というのは正しかったようだな」

現れるエヴァンジェリンの体には、傷一つない。

無傷。

魔法使いにとって、攻撃を防ぐ手段など掃いて捨てるほどある。

その中の一つを使ったまで。

「だが、当てが外れたか」

『闇の吹雪』レベルの攻撃を使えば、ベクトルは変換できないと踏んでいた。だが、それは間違いだと言付かされる。

それでも、手札はまだ腐るほどある。

「ぶつくさ言ってるじゃねエよ！」

脚力のベクトルを操作し、直線でエヴァンジェリンへと向かう。その速度は明らかに音の数倍。人間に反応できる速度では無い。

だが、エヴァンジェリンは簡単に反応し、空へと飛び上がる。

「『魔法の射手 連弾・闇の百一矢』」

膨大な魔力を込められた魔法の射手の雨。その中を防ごうともせずに潤也が突っ切る。

ベクトルが変換され、エヴァンジェリンへと向かう魔法の射手。だが、それらは操作されて潤也の目の前で視界を遮るように爆発する。

エヴァンジェリンはそれに隠れるように飛び、街灯の一つに着地する。

だが、それを撃ち落とそうと風速百二十メートルにも達する空気の塊が、砲弾となって襲いかかる。

それを身体強化でいとも簡単に避けた所で、カツツと言う音が聞こえた。

近くの建物の壁に足をつけ、更に高速で飛びかかる。

「バカの二つ覚えと言う訳でも無いだろうな」

「テメエに言われるとは思って無かったぜ」

ゴアツ！ と巻き起こる炎。エヴァンジェリンの逃げ道を無くす様に広がり、飲み込むように包む。

「『氷神の戦鎚』」

巨大な氷の塊を炎にぶつけて相殺し、続けて『闇の吹雪』を放つ。

「無駄だったのが分からねエのか？」

ベクトルを変換され、エヴァンジェリンへと帰っていく。だが、高速で移動する二人は常に移動し続けている為、元居た場所へ撃つても当たらない。

「フン、分かっているさ」

タン、とビルの側面に足をつけ、暴風と炎がエヴァンジェリンを襲う。

「『氷楯』『氷爆』」

『氷楯』で暴風と炎を防ぎ、『氷爆』によって凍らされた空気と氷の破片で凍気と爆風を生み出し、攻撃。

防ぐ必要すらない。

突っこんで行っても勝手に反射され、傷を負うことなど無いのだ。そのまま両腕に青白い光がループし始める。

「『闇の吹雪』」

同時に放たれた魔力の奔流と青白い光の奔流、メルトダウン『原子崩し』による攻撃は相殺された。

余波で近くの建物がギシギシと揺れる頃、二人はもう其処にはいない。

音速を超え、高速で町を駆け、攻防を繰り広げる。

雷撃の槍を飛ばすも、また『氷楯』で防がれた。雷速にさえ対応する辺り、やはり真祖の吸血鬼と言っべきか。

見える範囲で言えば、この夜の街に人影は無い。

「良かったなあ偽善者！ 一般人がいなくて、戦いやすいだらう！」

「何だア小悪党！ 一般人を盾に出来なくて不満かア！」

ゴバア！！ とぶつかる攻撃。爆炎と氷鎚が音を立てて消えて行く。

並行して何処かへ進んでいた所を、同時に直角に曲がってぶつかる。

エヴァンジェリンの手にあるのは『断罪の剣』。魔力による相転移で生み出された刃。

対して潤也の手にあるのは『原子崩し』を变形させ、光線では無

く刀の様な形に保ったモノ。

ギリギリと鏝迫り合いをしながら、会話は続く。

「だが、夜とはいえ人はいる。私達の戦いでどれだけの被害が出た  
だろうな？ 一般人に手を出さないとやっておきながら、勝手に巻  
き込まれるのは構わないのか？ とんだ悪党だな」

潤也が口をはさむ間もなく、エヴァンジェリンは続ける。

「自分の事を柵に上げるなよ、人殺し。血で真っ赤に染まった手で  
誰かを守る？ 笑わせるな。お前にそんな事は出来ない。私を殺す  
為に、一体どれだけの人間を犠牲にしたと思っている」

「……三下だな」

「……何？」

「安い悪党が言う、三下のセリフだよ。それア」

糾弾された潤也は笑う。

「美学が足りねエ。チープな悪を抱えるオマエじゃ、それは仕方無  
いのもしれねエが」

ガギン！！ と言う音がして、距離を取る。

「俺が、そんな事を見逃すとも思ってたか？」

「な、に……？」

町並みを見る。

音速で駆け、魔法と超能力がぶつかって破壊されている町。だが、悪党と悪党のぶつかり合いで足りないモノがある。

悲劇だ。

確かに夜と言う事もあって人は少ない。だが、時間帯はまだ早い方だ。外にいる人など数えきれるものではない。駅やコンビニ。人がいる場所は沢山ある。

にもかかわらず、雨の様に降り注ぐ硝子の破片は暴風が吹き飛ばし、衝撃波は空気を操作する事で一定以上の距離で消える。それはまるで、奇跡の様に人々を守っていた。

「守ったって、言うのか　!？」

本気で終わらせるつもりなら、被害を厭わないなら、最初に攻撃した時点で終わっていた。

だが、それをやれば確実に千雨は巻き込まれたらうし、近くに来ていた者も被害を受けていただろう。

それが、潤也のやり方。

例え一瞬の隙が死につながる様な戦闘でも、何の縁も無い一般人でも、気を張り巡らせて守っていたのだ。



「これが悪党だ」

「　　ッふざけるな！！　　そんな事が出来る訳が無いだろうが！！」

二人はいつの間にか、学園の端、麻帆良と外を分ける橋にまで来ていた。

「契約に従い　我に応えよ　永遠と闇と氷の女王」

膨大な魔力を用い、詠唱を開始する。

「させると思ってたのか？」

そう言う潤也の足元に、爆撃。手榴弾だ。

破片も爆風も反射し、エヴァンジェリンへと歩を進めようとする潤也の前に、茶々丸とチャチャゼロが現れる。

「ココカラ先八通行止めダゼ！」

チャチャゼロが何かを振りまく。そして、茶々丸がそのまま電流を流す。

突如粉の様なものが光り出し、潤也の視界を埋めた。

（アルミニウムと銀の粉。電気を流す事で乱反射させてこの眩しい光を生み出す、か）

「咲きわたる氷の白薔薇　眠れる永劫庭園！　来れ　永久の闇　永

遠の氷河！」

詠唱は進み、潤也は視界が光で埋まったまま見えない。

「氷れる雷をもて かの者を囚えよ 妙なる静謐 白薔薇咲き乱れる 永遠の牢獄 『終わりなく白き九天』！！」

巻き起こる竜巻。冷凍雷激が迸る。

その攻撃は潤也を包み込み、凍らせていく。視界が晴れた潤也はそれを見て驚いた。

(コイツ、俺自身じゃ無くその周りの空間を凍結してるのか！)

既に足元から凍らされ、胸まで来ている。ここから脱出は不可能だろう。

そのまま完全に凍らせ、潤也は巨大な氷の中に閉じ込められる。

「安心しろ、精神だけは生きている。生き殺しをする為に態々作ったオリジナル呪文スベルだ」

膨大な魔力を要し、なおかつこれまでの戦闘で多少なりダメージを負っているエヴァンジェリンの切り札。幾らベクトルが操作できても、存在しなければ操れない。いや、厳密には破壊しても高速で修復される為、壊せない。

これは潤也の油断が招いた事。

だが、ベクトルが変換されている為、どの道潤也自身は凍る事は

無い。

「ふ、ふふ、フハハハハハハハ！」

エヴァンジェリンは勝利を確信して笑う。

防いでもそれごと凍らされたらう。それでも、遠距離から防ぐ事は出来た筈なのだ。それすらせず、超能力を過信していた。

このままなら、一生潤也は閉じ込められたままだろう。まともな方法で出る事などできない。

まともな方法では、だが。

魔力を用いて凍らせ続ける為、火を起こしても無駄。壊しても張り直される為に壊す事は出来ない。『未元物質』や『原子崩し』で壊しても同様に、直ぐ氷は張りなおされる。

ならば、その状態を保っている魔力を霧散させてしまえばいい。

潤也の右手には『イメージブレイカー幻想殺し』がある。

詰まる所、凍らせると言う事は分子の運動を低下させると言う事。それを魔力で保っているのだから、『幻想殺し』を使えばその結合は解かれる。

精神を生かした事が、逆に仇となったのだ。

ビキビキ！ と罅が入り、氷が砕けて行く。

「これで終わりだと思ったか？ 吸血鬼」

「ハッ、良いだろう。もう一度殺しつくしてやる！」

驚きつつも魔力を高める。茶々丸、チャチャゼロがエヴァンジェリンの両隣りに構え、詠唱を始めると共に潤也へと突っ込む。

「マスターの邪魔はさせません」

「俺が殺シテヤルヨ！！」

ナイフを振り回すチャチャゼロは『未元物質』によって出現した白い翼に吹き飛ばされ、ナイフは地面へと突き刺さる。

茶々丸は内部に仕込んだ武器兵器を使い、潤也へと攻撃する。だが、ベクトル操作によってそれらは完全に防がれ、またも白い翼によって片腕を切り落とされ、吹き飛ばされた。

「『こおるせかい』スタグネットコンプレクシオ 固定 掌握 魔力充填・アルマテイオーネム 術式兵装 『零  
天氷姫』」

エヴァンジェリンは空中に手、百五十フィートを絶対零度へと導く魔法を詠唱する。それを『マキア・エレベア闇の魔法』で自身の体へと取り込み、力と成す。

周辺一帯が凍りつき始め、冷気が潤也へと牙をむく。

だが、冷気だけなら防ぐ方法は幾らでもある。熱の移動を阻害す

れば熱は保てるし、火を発すれば熱を得られる。

この魔法の恐ろしいのは、そんな事では無い。

絶対零度の冷気を放ちながらの『近接戦闘』。魔力ドーピングによる身体能力の圧倒的強化。

「 最大の一撃だ。これが『終わりなく白き九天』を越す切り札ともいえるぞ」

「 なるほど、確かに強力だ。こっちも全力で立ち向かわなきゃなア」

構え、数秒の沈黙。

互いに近づき、音速を超えたその恐るべき速度で拳をぶつけ合い、勝敗は決した

ザッ、と地面に降り立つ。

その体に怪我等一つも無い。両手を握って開いてを何度か繰り返し、体に異常が無いか確かめる。

エヴァンジェリンは地面に墜落し、その体は血に塗れている。

『闇の魔法』のドーピングによって力を増し、まともな相手ならば絶対零度で凍りつかせる事が出来た攻撃。正に強力無比で、相手が潤也でなければ勝っていただろう。

こうしている今も、エヴァンジェリンの血は地面へと流れ続けている。

だが、まだ死んではない。再生能力にガタが来るほどの一撃だった、と言うだけだ。気絶こそしているが、今も傷は治りつつある。

どこぞの聖人君子殿ならばこのまま生かしただろう。更生する為の道を提示したかもしれない。

だが、潤也は悪党で勝者、エヴァンジェリンは悪党で敗者だった。

右手を掲げ、その腕の周りには青白い光がループしていた。『<sup>ディ</sup>吸血殺し<sup>ブラッド</sup>』を使うにしても起こさなければならぬ。それなら細胞ごと消してしまっただ方が速い。

「あばよ、吸血鬼」

そして、『原子崩し』を放とうとした。

「待つて!!--」

声のした方を見る。そこには、息を切らせたアスナの姿があった。

「……何でオマエがここにいる？」

「千雨ちゃんが、急いで寮に戻ってきて、教えてくれたの」

咸卦法を使ったのだろうか、相当急いで来たのだろうか。肩は上下し、息を整えている。

「俺は悪党だぞ」

「……分かってる。エヴァンジェリンを助けてなんて言わない。……でも、潤也がやる必要は無いよ」

その言葉に、眼を見開く。

「エヴァンジェリンも悪人だし、戦った。なら、殺さなきゃ駄目だつて言うのも分かる。でも、潤也には部下がいるんでしょ？ 潤也が手を汚す必要は無いよ ううん、これは私のエゴだけど、潤也には手を汚して欲しくないの」

「……俺は、もう手を汚してるぞ」

「だったら、これ以上手を汚さないで」

潤也の目をハッキリと見据え、自分の思いを吐露する。

「潤也がどんな暗い、闇の世界にいても、私が必ず連れ戻してあげ

る。だから、これ以上自分で落ちようとししないで」

それでも、ここで倒さなければ、エヴァンジェリンは再度戦いを挑むだろう。次は手段を選ばないかもしれない。今こうしている間も再生を続け、直ぐにでも反撃してくるかもしれない。

だからこそ、守るべき者を敵に回してでも、絶対に今止めを刺す必要がある。潤也がやらなければ、恐らくエヴァンジェリンに勝てる者は存在しない。

彼がやらなければ、恐らく誰にも出来ない。

(だから、ここで、殺る)

右手の青白い光が一際輝き、その膨大な威力を持つ光線を放とうとする。

「無理だよ。潤也はその程度の悪党なんかじゃ無い」

だが、その右手はゆっくりとずらされ、照準がずれる。エヴァンジェリンの片腕を吹き飛ばしたものの、未だ命を奪うまでは行っていない。

そのまま右手は降ろされ、ループしていた青白い光は消えて行く。照準を付ける上で必要な腕をずらされた事で演算に支障が出たのだ。

潤也は、この結末について呆然と見ていた。

ドスッ！！ と、音がした。



アスナのわき腹に、一つの大振りのナイフが深々と刺さり、貫通していた。

「え？」

チャチャゼロが使っていたナイフ。先ほどまで地面に突き刺さっていた筈のナイフだ。

「ふぎ、けるな……」

ゆっくりと、語気を強めて、エヴァンジェリンは潤也を見る。

アスナの事など、見ていない。

狙われたのは潤也では無い。自身の前で、自身を殺そうとした事を止めた事。それが攻撃の理由。

「……どんな暗い世界、闇にいても、連れ戻す、だと」

ふらふらとしながら、立ち上がる。

「無理に決まっているだろうが！ 出来る筈無いだろうが！ ふぎけるなよ！ さっきまで私に散々上からモノを言っていたくせに、貴様は最後の最後に縋り付くのか！！ それが貴様の美学か！！」

アスナのわき腹からは血が出て、今も足元に赤い液体が広がっている。

悪の行為を行おうとし、それを止めた事。それが邪魔だった。

これでは、戦った意味が無い。何のために戦ったのか分からない。

「私たちがみたいなのは悪党は、闇と絶望の果てに沈んで、悪意の最下層に堕ちて、侮蔑と嘲笑を受けながら死ぬのがお似合いなんだよ！」

エヴァンジェリンは血を流しながら、真祖の再生力でも数分かかる様な傷を再生しながら、叫ぶ。

「結局貴様は私と同じだ！ どれだけ力があっても、自分の身一つしか護れない！！ 誰も護れやしない！！ これまでだって大勢の人間を死なせて来たんだろが！！ 今更何を縋り付いている！！」

エヴァンジェリンの怒りが、憎悪が、唯衝撃波となって潤也に当たる。

魔力が渦巻き、それが呪文を詠唱する事で冷気を持ち、エヴァンジェリンの手に圧縮され、手の中に沈む。

「シニストラースタグネット左腕 固定『こおるせかい』 デクストラースタグネット右腕 固定『こおるせかい』 ドゥワ双腕掌握 術式兵装 『蒼天氷姫』！」

先ほどより膨大で強力な冷気が放たれる。

熱を反射できる潤也と違い、アスナはその冷気に当てられた。だが、それは『未元物質』で防げる。

「悪党なら、私を殺して止めてみる！！ お前が大事に思っている神楽坂が死ぬぞ。悪党なら、悪党らしくやれ！！ 動きを止めただけ

れば殺せばいい、気に喰わないモノがあるなら壊せばいい！！それが悪党だろうが！！」

バカだ、と吐き捨てる。

徹底した悪となり、自分の大切なモノの為に戦っていると言つのに、温かい言葉に惑わされた。

何より自身を好いてくれて、大切に思ってくれている少女が、自分の所為で怪我をした。

そして、その姿が、昔からどんな手を使っても守りたいと思っている少女と、重なった。

これが必殺の一撃だったなら？ その事を考える。

（俺は、守れなかったのか　？）

自身への嫌悪。守る為に自ら捨てた光の道を、一瞬でも夢見てしまった。自身がいる闇の世界から眼を逸らしてしまった。

その行動の結果が、一刻も早くエヴァンジェリンを殺害すると言う優先事項を見失わせ、生まれなくてもいい悲劇を生みだした。

だからこそ、

今度こそ、徹底的な『悪』となる。誰も届かない絶対的な強者。

何を失ってでも、敵対する者を全力で排除するここに誓う。

いつも肌で感じ、頭の奥で何か引っかかりを覚えていた数値。それを、自身の手で入力する。

右脳と左脳が割れて、切り開かれたその隙間から、何か鋭く尖ったものが頭蓋骨の内側へ突き出してくる錯覚が確かにあった。

脳に割り込んだ何かはあっという間に潤也の全てを飲み込んでいく。ぶじゅっ、という果物を潰す様な音が聞こえてきた。

両目から涙の様なモノが溢れた。それは涙では無かった。もっと赤黒くて薄汚くて不快感をもよおす、鉄臭い液体でしか無かった。涙腺からこぼれるモノですら、既に嫌悪感しか無かった。

そして訪れるのは、一つの暴走。

「オ  
」

『パーソナルリアリティ  
自分だけの現実』へのAIMの数値を入力する。それは新たなる  
クリアランス  
制御領域の拡大の取得』。

演算能力を必要としない、AIMの制御。

自身を構成する柱が弾け飛んだ気がした。中心から末端までがドロドロとした感情に染められた。

歯を食いしばり、眼球が赤く染まった。そして、潤也は世界へ咆



潤也の頭には唯、エヴァンジェリンを殺すと言う事だけが、脳内で渦巻いている。

エヴァンジェリンは、この光景を見て、更に魔力を強力に、膨大につき込んだ。

これを破れば、まず間違いなく世界で自身に勝てるモノなどないとい証明できる。強さの証明が出来る。

この世界においての魔法使い最強と超能力者最強。神にも等しい力の片鱗を振るう者と神の生み出した力の片鱗を振るう者。

自己か他か、力の出所こそ違うが、それはまさに最強に相応しい力のぶつかり合い。

黒い翼による圧力と『闇の魔法』による冷気がぶつかり合い、超能力と魔力とのぶつかり合いの余波だけで空間が歪み始めている。

だが、エヴァンジェリンは自身が負けるなどと全く思っていないかった。

『造物主<sup>神</sup>』の生み出した『魔法』という力を今は完璧に操り、自身の一部として操っている。この状態なら、世界を相手にしても勝てると本気で思えた。

黒い翼を見て、『覚醒』した訳ではない。だが、吸血鬼として、『造物主』に連なる力を使っている今のエヴァンジェリンだからこそ、これが『理解』できる。

「ハ、ハハハハハハハハハハ！！！」

そして、エヴァンジェリンは潤也と違って自己を保っている。

負ける気などない。勝てる。そう確信した。

だが、

グシャリ、と。エヴァンジェリンの体が莫大な力を受けて地面へとめり込んだ。

「う、あ……！？」

何が起きたか理解できなかった。

潤也は唯、ゆっくりと手を動かしただけ。黒い翼を動かさず、それだけで世界を相手に勝てるかと確信したエヴァンジェリンは敗北した。

「マスター！！！」

茶々丸が戻ってきた。白い翼の攻撃で吹き飛ばされ、足が負傷して旨く動かなかった為、戻ってくるのが遅れた。

そして、自身の主が危険な状態だと判断し、潤也へと攻撃蹴りを放つ。

潤也はそれを避けようとせず、首に直撃した。だが、ダメージなど無い。

ギョロリ、と眼が動き、茶々丸を捉える。そして、その顔面を片手で捕まえた。

「ミシミシッ！」と嫌な音がする。それさえ気にならないほど、潤也の圧力は凄まじかった。ガイノイドたる茶々丸が、『恐怖』するほどに。

「死iggdupawia」

黒い翼が爆発的に噴射する。

掌から噴き出した、説明不可能のその力は茶々丸を覆い、音速の数十倍の速度で夜空を掻っ切る。あまりの速度に、オレンジ色のプラズマが尾を引いていく。

絡繰茶々丸は、この時点をもって『消滅』した。

「茶々丸」

唯、呆然とその有様をみる。従者が音速の数十倍の速度で吹き飛ばされ、プラズマの尾を引いて消滅する様を。

「ゴガンー！」と、よりエヴァンジェリンへ掛かる力が強くなる。

ゆっくり歩き、エヴァンジェリンへと向かう。

エヴァンジェリンは、確信する。圧倒的に君臨する潤也は、一步進み続ける。これが、自身の寿命なのだ。

距離が零になれば、自身は死ぬ。これはもはや『確定事項』だ。



そして既に、潤也は最後の一步を踏み出していた。

「 f j p n v a t w o 殺 u x a k t o 」

ノイズ混じりのその声を聞き、エヴァンジェリンは笑う。

「それが、貴様の『悪』か」

返答は無く、圧倒的な殺意と共に拳が振り下ろされる。

そして、絶対的な虐殺が始まった

第二十六話「遅かったな。吸血鬼」by垣根（前書き）

前回の作者の悪ふざけで気分を害した人もいる様なので、ここで謝罪をば。

すみませんでした。

今後は前書きもしくは後書きにてその旨を書いておきますので、何卒ご容赦を。

ちなみに変わったのはVSEヴァのみです。

## 第二十六話「遅かったな。吸血鬼」by垣根

ネギがエヴァンジェリンに襲われた翌日。

教室内では、新田先生が連絡を行っていた。

「　　と言う訳で、ネギ先生は体調不良で休んでいる。今日の連絡に関しては私が伝えておくので、しっかりメモを取って置く様に」

ネギは当然ながら一晩で回復する筈も無く。

多量の血を奪われ、魔力も枯渇状態。特殊な魔法薬と輸血で今日中には起き上がれるだろう、と学園長達は判断していた。

雪広は当然見舞いに行くと言ったが、新田先生の一言で抑える。

「ネギ先生はまだ子供なんだ。偶には体を壊す事もあるだろう。だからと言ってあまり大勢で行くと返って疲れさせる。今日一日は我慢しなさい」

そう言われては、と渋々引き下がり、授業を受ける事になった。

千雨とアスナはもう互いに魔法関係の事を知っている。と言う事を知っているの、昼休みに屋上でネギの事について話していた。

「昨日の夜に誰かを追いかけて行ったのよね」

「じゃ、そいつが吸血鬼か？」

桜通りで倒れていた宮崎を預け、誰かを追いかけて行ったと言っ  
ネギ。なら、吸血鬼を追って行って返り打ちにされたと言っ事は容  
易に予想がつく。

「潤也なら何か知ってるかもな」

「電話してみる？」

「そうだな」

そう言っって携帯を取り出し、手早く電話をかける。

ワンコールで電話に出る潤也。いつもながら速いなオイ。と心の  
中で突っ込みながら語りかける。

『昨日の吸血鬼事件？』

「そう、何か知ってるか？」

『要約すると、吸血鬼は千雨のクラスのエヴァンジェリンで、ネギ  
はそいつを追いかけて行ったら大量に血を吸われて失血死寸前。今  
は輸血と治療を受けてる。ちなみにもう桜通りの吸血鬼事件は起き  
ない。断言できるぞ』

本当に要約しまくった内容である。

「なるほど、だから先生は休んでたのか。というか、吸血鬼が本当  
にいたのかよ」

『正確には入院かな。明日か明後日までは来れないと思うぞ。吸血鬼を殺す方法を教えておこうか?』

「分かった。私が襲われても潤也が助けしてくれるんだろ?」

『そりゃまあそうだけど』

「なら大丈夫だろ。ありがとな」

通話を切り、携帯をなおす。

「潤也、何だつて?」

「エヴァンジェリンが吸血鬼で、先生が追いかけて行ったら血を大量に吸われて入院中だと。後は桜通りの事件はもう起きないってさ」

「ああ、そう言う事。なら心配する事は無いでしょ」

残りの時間を談笑して過ごし、教室へ戻る。

夕刻。

エヴァンジェリンはPC室にて、茶々丸と結界について調べていた。

「どうだ?」

「予想どおりです。マスターが解いた呪い以外にも魔力を抑えている結果があるようです。科学技術も使われている為、マスターも今まで気付けなかったのだと思います」

「なるほど、凄いな。これが『ハイテク』って奴か」

「私も一応その『ハイテク』ですが」

そんな話をしながら学校から出る。

「準備は居るか？」

「いえ、私の能力を持ってすれば今夜にでも落とせますが……」

「そうか、ならさっさとやる事にしよう。監視の目が気持ち悪くて仕方が無い」

そう呟き、その方向を見る。

あちらも気付かれていると分かっているながら監視をしているのだろう。隠れる様子が無い。

「ふん。私が呪いを解いたからか」

どの道、今となってはもうエヴァンジェリンをまともな方法で押さえつける事など出来はしないのだ。

高畑と学園長がいるが、昼間は秘匿の問題で魔法を使えず、夜は結界を抜ければ二人がかりでも勝てるか分からない。

口元を隠す様にして、茶々丸に告げる。

「実行は今夜だ。抜かりなく進めろ」

「イエス、マスター」

ちなみに同時刻。女子寮に侵入しようとして潤也の仕掛けた『オジギソウ』のトラップに引っかかり、アルベール・カモミールが瀕死で高畑に拾われたのは完全な余談である。

夜。

エヴァンジェリンのログハウス。ここで、茶々丸は学園結界へとハッキングをかけていた。超から追加の報告があり、『レポート』

の様な能力を使えると言う事を頭に叩き込む。

「盗りました。結界を解除。これでマスターの魔力は戻る筈です」

エヴァンジェリンはその言葉を聞き、両手を握っては開き、久しい強大な魔力に感覚を確かめる。

「上々だ。さあ、殺し合いに行こうじゃないか」

勢いよく立ち上がり、魔力で身体を強化しながら外へ出ようとする。その時。

とある匂いを感じた。

それは抗いたくても抗えない、吸血鬼であるが故の弱点。

葛藤を繰り返しながらも、欲望に勝てず、その匂いのする方向へ向かう。

「マスター？」

その様子に少しばかりの不信感を募りながらも、茶々丸は付き従う。

数分。チャチャゼロを肩に乗せて空中を駆け、行きついた場所は麻帆良と外とを分ける橋だった。

「遅かったな。吸血鬼」



其処にいたのは、茶髪でホスト風の顔立ち、身長は高く、威圧感が唯者では無いと悟らせる。

かつて、『SMG』について調べた時、知った顔。『SMG』の社長として世界に知られ、その技術・科学力は代えられない価値があると各国の代表に悟らせた男。

垣根帝督。

「何故、貴様がここにいる？」

感じていた筈の匂いは無い。だが、それよりも目の前の男の事が気になる。

「ん？ そうか、そうだった。これなら分かるか？」

声が変わる。今まで話していた声とは全く違う、別人ともいえる声。

「この声は……声紋一致、彼は長谷川潤也さんです、マスター」

その言葉に眼を見開く。目の前の男が長谷川潤也とは思えない。容姿も、声も、全く違うのだから。

「殺し合いをするつもりなんだろ？ 結界の力が及ばないここに来てやったんだ、さっさと始めるぞ」

その言葉に呼応するように、三対六枚の白い翼が展開される。風を引き裂き、殺気を濃密に放ちながら、戦闘態勢を整える。

目的はある。だが、売られたケンカは買つまでだ。

「良いだろう、姿がどうであれ、貴様が長谷川潤也だと言うのなら、全力で殺してやる！」

そして、膨大な魔力が練り込まれる。

潤也は脚力のベクトルを操作、他複数の能力を用いて、音速の数倍でエヴァンジェリンへと近づく。

「『闇の吹雪』！」

真正面から、膨大な魔力を練った攻撃が迸る。潤也はそれを反射し、エヴァンジェリンへと返しながら近接戦闘へと持ち込む。

エヴァンジェリンはベクトルの操作を知っている。それは近接戦闘では勝ち目が無いと言う事。

魔法の射手を地面に当て、粉塵に身を隠して距離を取る。

(当てが外れたな。だが予想の範囲内だ)

攻撃が通らないなら、空間ごと凍らせてしまえばいい。そう考え、詠唱を開始する。

当然、潤也がそれを許す筈も無く。風速百二十メートルにも達する砲弾をぶつける。

それを避け、茶々丸が対人用の結界弾を放つ。それにより、数秒動きを阻害された潤也。無理矢理それ引き裂き、近くの木を切り倒

し、その枝を『座標移動』でエヴァンジェリンの腕や足へ転移させる。

木を切った時点で何をするか予想がついたエヴァンジェリンは移動しながら詠唱を紡ぐ。

『空間転移』系統の能力は、物体を飛ばしてから移動した地点に出現するまでに若干のタイムラグが発生する為、目視で見えていればエヴァンジェリンの身体能力、反応速度なら避ける事は可能だ。

高速戦闘においては終点となるべき敵が常に移動し続ける為、完全に敵の動きを予測できなければ当てる事は難しい。

故に、基本的に奇襲にしか使わない。否、使えない。

「『おわるせかい』！」

当然、砂煙で見えていなくても、一瞬前まで其処にいた為、疑うことなく魔法を発動させる。

「こつちだよ」

潤也はエヴァンジェリンの後方へと転移し、その拳を握りしめる。

膨大なベクトルを操作し、集約されたその拳は障壁を貫き、エヴァンジェリンへと向かう。それを防ごうと腕で庇うが、庇った腕ごと殴り飛ばし、木々を薙ぎ倒して数百メートル吹き飛ばされた。

防いだ腕は折れている。だが、真祖の再生力を持つてすれば気にする様な事では無い。

(コイツは避けるか……なら、アレは試す価値がありそうだな)

そして、再生を続けながら詠唱を始める。

「リック・ラクラ・ラック・ライラック 契約に従い 我に応えよ  
闇と氷雪と永遠の女王」

魔力が渦巻き、詠唱に続いて冷気が発生する。

(面倒な事はされる前に潰すか )

雷撃の槍を飛ばすも、同時に『氷楯』で防がれる。雷速にさえ対応する、それが真祖の吸血鬼の身体能力だ。

そして、幾重にも張り巡らされる対人結界。茶々丸が辺り一帯にしかけ、起動させたもの。

「咲きわたる氷の白薔薇 眠れる永劫庭園 来れ 永久の闇 永遠の氷河！」

だが、そんな物で縛られる潤也では無い。白い翼で結界に耐えきれない負荷をかけ、無理矢理破壊させる。

体が自由になり、まずは邪魔な茶々丸を破壊しようとする。

「氷れる雷をもて かの者を囚えよ」

こちらは唯のガイノイド。特殊な電磁波で脳の役割を果たす中枢に妨害をかけ、動きを阻害し、『原子崩し』で消し飛ばす。

「ケケケケケ!!!」

同時に後ろからチャチャゼロが大振りのナイフを振り下ろす。当然反射し、そのまま白い翼で破壊する。

「妙なる静謐　白薔薇咲き乱れる　永遠の牢獄　『終わりなく白き九天』!!!」

氷の竜巻が巻き起こる。雷氷の蔓が潤也へと襲いかかり、凍らせようと力を振るう。

「そんな物でどうにかできるとでも思っているのか？」

放たれる冷凍雷撃。それに対して『未元物質』で法則を塗り替えた爆炎をぶつける。

冷凍雷撃が凍らせようと、爆炎がとかそうと、互いに攻撃をぶつけ合う。

エヴァンジェリンは膨大な魔力をつぎ込み、冷凍雷撃の数を増やす。それに対し、潤也も爆炎の規模を上げる。

だが、エヴァンジェリンは同時に詠唱を開始していた。

「シニストラースタゲネット左腕 固定『こおるせかい』　デクストラースタゲネット右腕 固定『こおるせかい』　ドゥワ腕掌握 術式兵装 『蒼天氷姫』!」

冷凍雷撃と爆炎の間をすり抜け、絶対零度の冷氣を持って潤也へと近接戦闘を持ちこむ。

温度は物質の熱振動をもとにして規定されているので、下限が存在する。

それは熱振動（原子の振動）が小さくなり、エネルギーが最低になった状態である。この時に決まる下限温度が『絶対零度』。

つまり、この状態に持ち込めばベクトルは存在しない。

その絶対の一撃を拳として放つ。

「惜しいな。俺じゃなかったら勝てたかもしれん」

拳は受け止められる。だが、問題は拳では無く、周りの冷氣。周りの百五十フィートにも及ぶ範囲は既に凍り始めている。爆炎の威力は弱まってはいるが、冷凍雷撃とぶつかり合う事で相殺されているのだ。

それでも、潤也には届かない。

『<sup>ダークマター</sup>未元物質』。

『この世に存在しない素粒子を生み出し（または引出し）、操作する』能力。及びそれによって作られた『この世に存在しない素粒子（物質）』。

それは、絶対零度下において動く事の出来る物質を作り出せると言う事。

体温は熱量の移動をベクトル操作で阻害して保っている為、凍死

する事は無い。

三対六枚の翼は弓矢の様に引き絞られ、六か所の人体の急所へと狙いを定める。

「お前の負けだ、吸血鬼」

そして、凶悪な力を持つ翼が放たれる

学園長達がその場に着了いた時、辺りは悲惨だった。

木々は薙ぎ倒され、凍っているものもあり、地面は抉れていた。

「遅かったですね、学園長殿」

その場に立っているのは一人。垣根帝督。白い翼は既に消えている。

そして、その足元に倒れている一人の少女。エヴァンジェリン。未だに血は流れ続け、地面を赤く染めている。

「……お主がこれをやったのか？」

「そうですよ。『SMG<sup>ウチ</sup>』に所属してる一人から、『犯罪者から喧

嘩を売られた』と言われたもので」

学園長の方を向き、説明を始める。

「相手が賞金首、それも『闇の福音』ダークエヴァンジェルとなれば、私が出無い訳にも  
いかない」

それは戦闘を前提として言っている。

暗に学園が抑えきれないと告げている様なものだ。

その言葉に学園長が唸る。

「……何故、責任者であるワシに言わなかったのじゃ？」

「先日、『英雄の息子』が襲われ、『千の呪文の男』サウザンドマスターがかけた呪いを自力で解いたと聞いている。それに対処も出来ない様な連中を信用しろと？」

信用度の問題だ。

呪いをかけていて、それを自力で解ける状況下においていると言う事。解いた後の対処が遅れていると言う事。生徒が襲われているという状態で対処しないと言う事。

そんな連中を、信用などできないだろう。

「どの道こちらで片をつけるつもりでしたしね」

両手はポケットに入ったまま、戦闘の雰囲気など感じられない。



そして、それを感じている未だ生きていたエヴァンジェリンが、潤也の首へと噛みつきこうとした。

「危な  
」

高畑の警告は遅い。既に噛みついてしまっている。

噛みついたエヴァンジェリンは、灰となった。

『ディーブブラッド  
吸血殺し』。

『甘い香りで誘い、その血を吸った吸血鬼を問答無用で灰に返す』  
能力。

真に恐るべきは、死ぬとわかっていても吸わずにはられない誘惑性を持つこと。

AIM拡散力場である『吸血鬼を招き寄せる死の匂い』のためか、無差別広範囲に作用するので、何もしなくても吸血鬼をおびき寄せ殺してしまう。

吸われる事が前提である以上、潤也自身の吸血鬼化や失血死を防ぐ作用もあると思われる。

対吸血鬼において、最凶の能力。

「さあ、これで証明できたでしょう。貴方方の目の前で。『真祖の

吸血鬼、『闇の福音』ダークエヴァンジェル エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは死んだ』  
」

存在しない恐怖にうなされる事は無いだろう。明確に死亡が確認されたのだから。自分たちの目の前で。

殺すならもつと早く殺せた。それをしなかったのは、簡単に言えば『死んだ』と言う事を学園側に認知させる為。

エヴァンジェリン程の力を持った魔法使いを何処かの勢力におけば、勢力図など簡単にひっくり返る。それをしないと信じさせる為。映像でもいいが、それだと作ったもの・加工したモノだと思われると面倒極まりない。

そして、長谷川潤也では無く、垣根帝督として現れたのは、不必要に名を売らない為。

証明するには、目の前で殺すのが手っ取り早かったのだ。だからこそ、彼らが来るまで殺さなかった。

これより、垣根と学園の話し合いが始まる

第二十六話「遅かったな。吸血鬼」by垣根（後書き）

エヴァVS潤也。見た目ではエヴァVS垣根ですが。

次回は学園との話し合いを予定。最近ハイペースで更新してたんでちょっと遅れると思います。

第二十七話「何故殺す必要があった？」  
by 近右衛門（前書き）

今回の話し合い。期待はしない様にしてください。いや、割とガチで。

いつもよりちょっと長いです。

## 第二十七話「何故殺す必要があった？」by近右衛門

学園長室。

潤也と学園長はソファに座り、周りを魔法先生が囲んでいる。警備に支障が出ない程度に、だが。

この状態でも、潤也は余裕。数など揃えた所で無駄なのだから。

中には、雇われたのであろう龍宮の姿もある。

ネギは未だ眠っている。輸血と魔法薬を受けているが、精神的ショックと失血による魔力の一時的な低下が原因だろう。それでも恐らく明日の朝には目覚めるだろうが。

「さて、取りあえずは自己紹介をしましょうか。『セブンスミストグループ』社長。垣根帝督です」

「麻帆良学園学園長、近衛近右衛門じゃ」

互いに自分の事を紹介し、本題に入る。余計な問答は必要ない。

「さて。今回の件、どう始末をつけるつもりですか？」

潤也は問う。

現在は凍結されているとはいえ、六百万ドルの賞金首。それが復活し、なおかつ誰かを殺す計画を立てていたとなれば、学園の責任問題を問われかねない。

「どう、とは？」

「あなた方の責任問題ですよ。学園の生徒は既に襲われ、かの英雄がかけたという呪いは自力で解かれている。それを許すほど、学園は人手不足ですか」

問い詰める様な口調では無い。唯、事実を淡々と述べる。

「狙われていると分かっている筈なのに、何の対処もしていない。しかも、狙われていた英雄の息子は魔法を知らない一般人と暮しているそうですね。それも女子寮。職員寮は空いていないのですか？ 準備をしていない場所に教育実習生を送ると言うのもおかしい話ですが」

「話の核はそこでは無いだろう。エヴァンジェリンの事の筈じゃ」

「ああ、そうでしたね。　　単刀直入に言えば、彼女は犯罪者でしょう。何か躊躇する理由でもあったのですか？」

「彼女は力を封印されておった。ワシと高畑君がいれば押さえつける事も出来た筈じゃ」

「『筈』では駄目でしょう。勘違いをしている様ですが、この規模はあなたが思っているよりずっと大きいですよ。少なくとも、まともな戦闘をしようものなら麻帆良を焦土に変えようとさえしたでしょうね」

その話に学園長が眉をひそめる。

「エヴァンジェリンが、そんな事をするとは思えんが」

「他人の事など誰にも分からないものでしょう。分かったつもりで何かしようとしたなら、それは愚行と言うほかありませんよ」

他人の心境など分からないモノだ。それこそ、思考を覗く事の出来る魔法や超能力、魔法具を使わない限りは。

学園を利用しようとしていたエヴァンジェリン。エヴァンジェリンを利用しようとしていた学園長。

思惑など互いに知らないだろう。それが歪な形で歪んだ結果、エヴァンジェリンは死ぬ事になった。

「彼女は強い。新旧両方の世界を合わせて魔法使いの中で一、二を争うほどに。まともな戦闘をして、麻帆良が焦土になるのはこちらとしても望む所では無いのでね。対吸血鬼用の武器を用意していたんですよ」

「それが、あの時お主に噛みついた時に発動した訳か」

「ええ、そう言う事です。灰になり、もう蘇る事も無い」

「何故殺す必要があった？」

その言葉に、今度は潤也が眉を顰める。

「相手が殺すつもりで来た。なら、こちらが殺しても問題は無いでしょう？」

「『S M G』の関係者が狙われたと言っていたじゃろう。なら、当人たちで話し合いをさせれば良かったのではないかの？」

綺麗事だ。事はそんな単純な話じゃ無い。

話し合いで終わる様な事なら、そもそも殺しあいに発展することなど無い。

「……そもそも事を言ってしまったえば、学園が彼女を押さえつける事が出来ていれば、こんなことにはならなかったでしょうね」

学園の管理能力の問題。押さえつける事が出来ないなら、総戦力を持って早めに消して置くべきだったのだ。

真祖の吸血鬼とはいえ、魔力は有限。しかも、学園結界で力は落ちてきている。

利用しようとしていたのか、友人だからと私情を挟んだのか。

そんな事をするなら、それ相応の準備をするべきだ。逃がさず、力を封じ、反逆の機会を与えず、縛り付ける。

非道と呼ばれようと、悪逆と呼ばれようと、それほどに危険な存在なのだ。『闇の福音』という『ハイ・テイライトウォーカー真祖の吸血鬼』は。

超能力者として、潤也が特別に強いだけ。それ以外は軍と戦える力があるうと、ソレを軽々と越える力を使う。

「今回は私が居たから良かったものの、いなければ一人の生徒と殺し合いをしていたでしょうね」



「……それは、誰じゃ？」

「長谷川潤也。あなたが『良く知っている』長谷川千雨の兄ですよ」  
良く知っている、の所で少し反応した。どういふ事だと言いたげに。

「彼の妹は3-Aのクラスに属していますからね。学園長なら、その意味は分かっているでしょう」

言い方は悪いが、いうなれば『生贄』。

ネギ・スプリングフィールドという、『英雄の息子』の為の。

「『闇の福音』がああクラスに属していたのも、何かしらの理由があるのでしょうか」

それは生徒と教師としてエヴァンジェリンを使いやすくしようとしたのか、または師としてエヴァンジェリンを仰がせるつもりだったのか。

まあ、それはもう今更だろう。

彼女は死に、尚且つその所為で学園にダメージが入る。手綱を取り切れなかった学園長は内側から非難される。態々外から叩く必要も無い。

「まあ、こんな所ですか。……ああ、エヴァンジェリンが生き返ると言った事はありませんよ。吸血鬼の再生力は恐ろしい所がありま

すが、もうそんな物は意味を成しませんから」

「そう、か。……それ以外に、何かあるのかの？」

「通達が四つほど、それと最終的な責任の追及ですね。ああ、通達に関しては要求ではありませんし、どう取るかは勝手にしてください構いません」

「……聞いじつ」

だが、これを呑まないと言う選択肢は無い。

理由としては、エヴァンジェリンレベルの魔法使いを下せる者を『敵』に回さない為。

そして呑まざるを得ないほどに、敵対した時のリスクが大き過ぎる。

実体がどうあれ、エヴァンジェリンは封印された状態でも強い。彼女は警備の仕事も請け負っていた為、必然的に麻帆良の戦力は低下する事になる。

余程の酷いもので無ければ、学園長は要求を呑むつもりだ。

「一つ目。麻帆良学園内にいる『SMG』関係者には接触しない。下手に学園側から干渉するなら敵対したとみなしますので」

「……関係者が誰かは、教えるのかの？」

「『原石』と呼ばれる者を知っているでしょう。ここに残ると言っ

た二人がいましたね。誰かは追って伝えます」

元々仲良くするつもりも無く、エヴァンジェリンの件で明確になった。

あのレベルの敵を抑えるのに抑えれない。否、抑えるつもりが無い連中と手を組んだ所で何の利も無く、実力も足りない。

「二つ目。『SMG』関係者の親類、及び指定した者には同様に干渉不可とさせていただきます」

「それは、誰じゃ？」

「親類は把握出来るでしょうから言いませんが、『神楽坂明日菜』です」

明らかに高畑と学園長の顔色が変わる。

魔法の世界のお姫様。御伽噺の住人の様なものだが、事実。魔法世界で起こった二十年前の大分裂戦争で世界を破滅させる為の礎として『造物主』に使われた存在。

だが、逆に言えば彼女は『SMG』の庇護を与えられたと言う事。生半可な敵では相手にならず、『造物主』の使徒であるアーウェルンクス達でさえ相手になるかは怪しい。

守るつもりがあるのならむしろこれは学園。いや、高畑や学園長などの『事情を知っている者』にとっては好都合。

しかし、それは彼女の『正体』を知っていると云う事に他ならな

い。もし利用しようとしているのなら、高畑達からすればそれだけは避けたく。

「……干渉は不可、か。それでも部屋を変えろとは言わぬのじゃろう？」

「彼女は学園長のお孫さんと同室で満足しているようですしね。この要望をした『彼』も私も、その辺は特に口を挟むつもりはありませんよ」

気になる事があるのなら、木乃香から聞けば良く。小学校からの長い付き合いだ。違和感があれば直ぐに分かるだろうと判断し。

「三つ目。3 - Aに一人、転校生を入れて貰いたい」

「転校生、とな？」

「資料はこちらを見てください」

手元に用意しておいた資料を渡し、学園長に見せる。

中身は『零』の資料だ。もちろん全て偽装。何があるかと潤也はいつでも駆けつけるが、ずっと一緒にいる方が安全ではある。少なくとも麻帆良ではそうだ。

名を『御上 零』として、転入させる。もちろん一般生徒。

彼女達の護衛、そしてネギ及び学園の監視と言う体だ。

「もちろん学園からの干渉は不可。有事の際の保険です」

「……うむ、分かった。ここは学校じゃし、学ぼうと言つのなら拒否はしない。こちらの関係者に危害を与えるつもりは無いのじゃろっ。」

「当然です。こちらとしても好き好んで敵対したい訳では無いので」

「ちなみに、守るのはそちらの関係者のみかの？」

「一般生徒なら守る様になっておきましょう。関係者は自分で自分の身を守るでしょうから」

龍宮がジト目で見てきているが、それを無視して話を進める。

「四つ目。これは通達と言つより要求になります。英雄の息子が女子寮に住んでいる様ですね。教師と生徒と言つ立場からしてそれはありえないでしょう。直ぐにでも職員寮に移る様に要求しておきます」

当然と言えば当然。

庇護対象となるべきアスナが同室にいる。それはつまり『魔法に関係性を持たせたい』と言っている様なものだ。

それは、許さない。

自身を好いてくれている彼女を、危険に巻き込む事はしない。否、させない。

今後争い火種となる可能性が非常に高いネギ・スプリングフィー

ルドと一緒にいれば、いずれ必ず面倒事が来る。それだけは避けた  
く。

「しかし、職員寮は空きがのう……」

「なら、これで文句は無いでしょう」

取り出すのは一つの資料。学園長はそれを受け取り、目を通す。

「……これは、一体……？」

資料に書いてあったのは、一人の教員のデータ。麻帆良内で好き  
勝手にやっている『犯罪者』。

麻帆良（こ）において、潤也に勝る情報力を持つ者はいない。何故なら、  
文字通り監視のケタが違うからだ。

誰も知らない。潤也の事を知っている全ての関係者でさえ、『滞ア  
空回線（ンダーライン）』の存在は知らない。

「とある教師の犯罪記録ですよ。これで一人空きが出ましたね」

「……分かった。ネギ君は職員寮に移って貰おう。同室が誰にする  
かじゃが……まあそれは後でいいじゃろう」

「其処まではこちらでは指定しませんよ。お好きなように」

候補としては高畑や源教員が向いているだろうが、その辺は学園  
長が決める事だ。

十才で一人暮らし、と言うのも中々無い経験だろう。少なくとも当分は他の教員が世話を焼く事になるのだろうが。

「最後に、責任ですが。どうしますか？ 麻帆良に展開されている結界にしても、今回破られた様ですしね」

「ワシが責任を取ろう。襲われかけた生徒に関しては、ワシが直に謝罪をする所存じゃ。そして、学園結界に関しては次のメンテナンス時にプロテクトのレベルを上げる事とする」

「そうですか。もう『闇の福音』はいませんか、今後懸念とされる大停電は心配無いでしょうね」

「……其処まで把握しておるのか」

「二人は一応『SMG<sup>ウチ</sup>』に所属してるのでね。世界に五十人といない『原石』の内二人がここにいるんです。多少深い所まで調べさせてもらっていますよ。もちろん、あなたと高畑教員の会話もね」

その言葉に学園長は疑心を抱く。一体、どの会話の事なのか、と。

「『桜通りの吸血鬼』の件ですよ。もう出す必要も無いでしょうがね」

これ以上は興味も無く、話は終わりとばかりに立ち上がり、帰ろうとする。

そして、扉の前で立ち止まる。

「ああ、忘れていました。夕刻、女子寮に侵入しようとしていた才

コジヨ妖精の事です」

其処まで知っているのか、と高畑は目を見張る。

ポケットから取り出したのは一通の手紙。宛先はネギ・スプリングフィールド。送ったのはネカネ・スプリングフィールドだ。

「この手紙。英雄の息子の同居人が開けたらしいのですが、中身を読んでみれば犯罪者がこちらに来ているとの事では無いですか」

夕刻、普段から侵入者対策として『オジギソウ』を散布しているのだが、それに引っかけた者がいた。それがオコジヨ妖精、アルベール・カモミール。

手紙の中身は下着二千枚の泥棒。下らないと思うかもしれないが、実際に犯罪である為、投獄は免れられない。

ちなみにこの手紙。アスナから預かったものである。

「『警告』はしましたが、どうするつもりで？」

「……連絡を取る。事と次第によっては送り返す所存じゃ」

「そうですか。分かりました」

そして、潤也は学園長室を後にする。



翌日。

子供先生は体調は良く、問題無しとして職務に勤しむ事になる。もちろん、桜通りで襲われたことなど覚えていない。

と言うよりも、事件があまりにも早く解決し過ぎたのだ。今回の件に関してはネギは何もやっていないし、何も関係していない。

あえて言うならば対処が遅れた学園が悪い、と言うだけだ。

そして、職員室で体調を心配する言葉聞きつつ授業やその日の連絡事項を確認。其処で気になる事を見つける。

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。絡線茶々丸の転校。及び御上零の転入』

当然ながら寝ていた為、何も聞いておらず、近くにいた高畑へと質問をする。

「ああ、エヴァンジェリンは急に決まった事だね。御上君に関しては本来三年生に上がると同時に転入予定だったんだけど、家の事情

で遅れたらしい」

少しばかり悲哀を込めた口調でそう話す。友人であったエヴァンジェリンが死んだ事は、高畑にとってもショックだったのだ。

「そうなんだ。分かった、ありがとうタカミチ」

「どういたしまして。ネギ君も貧血で倒れたんだから張り切り過ぎてまた倒れないようにね」

「うん！」

そう言って教室へ向かうネギ。

カモは未だ療養中だ。全身に切り傷の様なものが隈なく出来ており、全て治るまで数日はいるだろうとの事。

そして、学園長が手を回し、『釈放』されている。

その所為で、また面倒事が巻き起こる事になるなど、誰も思っていない。唯、ネギに従者を集め、力を蓄えさせ、英雄として育てる為に

扉の外にはネギ、零が既に来ていた。

「では、僕の後に続いて入ってください」

「うむ……いや、はい。分かりました」

若干口調を修正しながら答える。

扉を開け、生徒達はネギの元気な姿を見て安堵し、見知らぬ零の事を見て騒いで喋り始める。

千雨は零の姿を見て顔は驚きに染まり、後で潤也を問い詰めようと決めた。ちなみにアスナは未だ見た事は無いので知らない。

「え、えっと、静かにしてください！ 連絡がありますので！」

その言葉に若干落ち着く3-Aの面々。雪広が睨みつけた事が大きいだろうか。

「エヴァンジェリンさんと絡繰さんが転校する事になりました」

一拍置いて、驚き。

超と葉加瀬は知っていたが、それに対して何か言う事は無く。アスナと千雨はまた何かあったと勘ぐる。

「そして、新しくこのクラスで勉強する仲間が増えます。御上さん、自己紹介を」

「御上零です。どうぞよろしく」

簡潔に、それでいてハッキリとした口調で言い切る。

「それじゃネギ先生、質問コーナーと行っていいかな？」

その言葉に、ネギは零の方を向いて目で問いかける。

「私は構いませんよ」

「えっと、それじゃあどうぞ」

朝倉は笑い、メモ帳を持って質問を開始する。

「それじゃあまず、どこから来たの？」

「神奈川県。ここからそう遠くは無いんだけど、親の事情って奴で全寮制のここに来たの」

「趣味と特技は？」

「本を読む。そして知識の収集をすることね。特技は……機械関係に強いわ」

「彼氏はいる？」

「いないわよ。男友達もないし」

その後数分程続き、漸く質問の嵐が収まる。

「それでは、御上さんは一番後ろの席になります」

その指示に従い、教室の一番後ろにある机へと移動する。一番後ろは全て空いているのでどこでもいいと言われ、千雨の後ろに座る。

「オイ、何で零がいるんだよ」

「潤也の指示。何が起こつても対処できるようにとの事だ。詳しい事は潤也から聞いてくれ」

口調を戻し、面倒臭そうに千雨に言う。

何が起きようと、『千の雷』レベルの魔法を奇襲で使われない限りは壊れる事も無い。護衛には十分すぎる力だろう。

授業を受けるのも面倒そうにしていたが、元々寝るということ自体しない為、退屈な時間だ。

寮では千雨の同室。アスナに何かあった場合は『アラート警報』が鳴る仕組みだ。『アンダーライン滞空回線』を利用したもので、零自身機構については理解していない。

取りあえず、授業と言う暇な時間を潰す事から始めようと決めた零だった。

夕刻。学園長室。

其処には制服を着た一人の少年、そして学園長がいた。

「さて、長谷川潤也君。君に言わなければならない事がある」

おもむろに立ち上がり、潤也に対して頭を下げた。

「エヴァンジェリンの件。迷惑をかけた様じゃな、済まなかった」

「いえ、別に気にしてませんから」

特に気にする必要も無く、そう答える。要は『謝った』という事実があればそれで十分なのだ。

「……しかし気になるのじゃが、何故エヴァと対立したのかの？」

不干涉、となっている筈だが、原因を知りたい学園長にとっては聞くべき事でもある。

故に、答える。

「去年の夏。最初の桜通りの吸血鬼事件ですか。あの時に思いつき顔面殴りつけただけですよ」

去年の夏。その時、潤也はエヴァンジェリンの顔面を殴りつけて顔面の骨を陥没、背骨の骨折と言つ怪我を負った。

「襲われた生徒がいた様なのでね。隠れていたら見つかり、記憶を

消される所だったので抵抗しただけです」

事も無げにそう告げる。罪悪感など無い。当然だろう、罰されるべきは襲いかかったエヴァンジェリンなのだから。

「……そうか、分かった。重ね重ね済まなかった」

ソレを聞きながら、潤也は学園長室を後にする。

なお、未だ学校に残っていたアスナと千雨に今回の事について問い詰められたのは余談である。

## 第二十七話「何故殺す必要があった？」 by 近右衛門（後書き）

学園にいろいろ押し付けたぜ、と言う話。

やっぱりこういうのは向いて無い、と思う次第。責任とれとか俺どう書けばいいか全く分からなかった。

減給とか、降格とかすべきかな？とも考えたんですが、其処までやるかなあと思ひまして。

ちなみに零の名字の別候補は木原（何）。

そして一つの疑問、原作アスナってエメール読めたの？

原作でカモを問い詰めてる所を見ると読んだ訳でしょうけど、英語だよな？なら何で成績悪いの？って話に。

いや、簡単な単語使ってたとかならアレですが、少なくとも送ってくるのは生粋の英国人だし、という訳で。

まさか辞書片手に解説とかやってる訳も無いでしょうしね。

まあ其処を問い詰めてもしょうがない、という話ですが。

時系列で行くと、カモ瀕死 アスナ手紙を読む 茶々丸ハッキング開始 潤也に手紙渡る ハッキング終了 麻帆良の橋から外で戦闘 話し合い、もとい交渉。

こんな感じの流れですかね。

今回は日常編を予定。……書き忘れとか、無いよね？書くべき事書いて無いとか無いですよ？



こついのを書いてるから展開が遅いのだろうか。でも必要っちゃ必要だしなあ。

後ついでですが、設定いります？既に半分位書いてはいますが、必要なら次回更新と共に原作開始の前に入れるつもりです。

第二十八話「出来れば生かして捕えて貰いたい」by 刹那

四月十二日土曜日。

夜。龍宮と桜咲の部屋。

「……何？ 潤也に連絡を取りたい？」

「ああ、だが、私は携帯の番号を知らないから教えてくれないか？」

桜咲は龍宮にそう頼む。

もう直ぐ修学旅行。学生の身としては楽しむべきなのだろうが、京都に行くという事は桜咲からすれば守るべき木乃香が狙われる可能性が高いと踏んでいる。

なら、対策を練らない訳にはいかない。

魔法先生としてネギは同行するだろうし、頼めば助力してくれるだろうが、念の為に潤也に助力を願っておいても損は無いだろう。と考える。

「ふむ、そうだな。近衛を守るのにあそこまで実力の高い護衛はいないだろう」

「実力を知ってるのか？」

「全力のエヴァンジェリンを殺したのも彼だからな。言っているの  
かは知らないが」

それは普通秘密にすべき事だろう……と呟くが、知ってしまったものはもう遅い。

とにかく、潤也と連絡を取る事が必要だと判断する。

「それならこの携帯を使うといい」

龍宮から渡されたのは一つの携帯。黒を基調、と言うより全部黒で覆われた薄い折りたたみ型の携帯だ。

「『SMG』の最新モデルらしい。こいつは特別製で、私と他数名にしか渡されていないそうぞ。特殊な電波だから盗聴の心配が無いそうぞ。電話口で話すのは防げないがな」

説明を受けながら受け取る。桜咲は機械にはそう詳しく無いのだが、少なくともここまで薄い携帯は見た事が無い。

驚きつつ、登録してある潤也の名前を探して電話をかける。

数コールして、またも驚くほどにクリアな音声が返ってきた。

『もしもし、龍宮か？』

「あ、私です。桜咲です」

クリアな音声に驚きを隠せずに答える。まるで隣にいる様な錯覚さえ覚える程だ。

『桜咲？ どうした、何か用事でもあるのか？ とういか敬語は良

いって言ったろ』

「あ、そうだったな。……以前、話していた『約束』と言うのを覚えてるか？」

『約束？ …………… ああ、前に島に遊びに行った時の事か。良く覚えてたな。俺忘れかけてたんだが』

実際数秒の沈黙があった。忘れていたのだろう。思いだせたなら問題は無いが。

事実、桜咲にとってこれは切り札の様なものだ。忘れる訳も無い。

「アレを今回使わせて欲しい。修学旅行の際、お嬢様の護衛を手伝って欲しいのだが……」

『いいよ』

えらくあっさりと返ってきたため、数秒固まる事になった。

「え、そんな簡単でいいのか？」

『まあな。元々木乃香とは仲の良い方だし、俺は約束は守る』

「分かった。期間は修学旅行中ずっと頼みたいのだが」

『分かった。期間中は安全を保証する』

用意もあるだろうからこそ、このタイミングで連絡した。大切な人を守って貰うのだ、十全に準備を整えて貰いたく。

『一週間もあれば大体準備は可能だろう。敵は生死問わずか？』  
デッドオアアライブ

「出来れば生かして捕えて貰いたい。情報を引き出す事も出来るだろうからな」

芋蔓式に全て引つ張り上げるつもりだろう。もちろん何も知らない下っ端に偽の情報を持たせて捕まらせる可能性も高い訳だが。

その辺は潤也の知った所では無い。頼まれたからやる。それだけだ。

『ん。了解した。じゃあな』

それだけ聞き、電話が切れる。

「ありがとう龍宮。助かった」

「今度餡蜜でも奢ってくれよ」

龍宮は笑いながらそう言う。桜咲は冗談だと分かっている為、何も言わない。

ともかく、修学旅行はこれで大丈夫だろうと一息つく。自身だけで守り切りたい所だが、何があるか分からない。使える手は使っておくべきだ。

例えどんな手を使っても、大切な人を守る為に

四月十三日 日曜日。

むくり、とベッドから起き上がり、潤也は朝食の準備をする。

普段と同じように生活しないと変な感じがするからだ。適応しようと思えば直ぐできるが、逆に学校に合わせておかないといういろいろ面倒になる。

簡単に朝食を準備し、護の分は自分でやるからいいだろうと放置し、顔を洗って目を覚まさせる。

朝食を食べて時刻を確認し、やる事を確認する。日曜なので特に何も無い。こつという日は図書館島にでも行って本を探すべきかな、と思考した所で携帯が鳴った。

プライベート用だ。

そう言えば修学旅行までに数人実力者を集めとかなきゃなあ、と昨日の会話を思い出しつつ電話に出る。

「もしもし?」

『あ、潤也君? 起きてた?』

電話の相手は千鶴。まだ七時過ぎだ。日曜と言つ事を考えればま

だ寝てる可能性もあるのだが、何か用があつて連絡してきたのだから。

「起きてる。何か用でもあるのか？」

『迷惑じゃなかったらでいいけど、今日とある孤児院の施設の引越し作業を手伝う事にしてるの。助っ人として手伝ってもらえないかしら』

「引越しの助っ人？」

『ええ。手伝う人がいたんだけど、急に来れ無くなつたらしくて。人手が足りないから誰か良い人いなくて頼まれたのよ』

其処で急遽白羽の矢がたったのが潤也だった、と言う訳らしい。

特に断る理由も無く。力仕事なら別に問題も無い為、了承する。

「どうせ暇だからな。いいよ」

『ありがとう。場所は』

場所をメモって集合時間を聞き、通話を切る。

軽くストレッチしながら皿などを片付け、今日の天気を確認。当然だが、テレビでは無くパソコンからアクセスする『予言』の方である。

動きやすい服に着替えてから、折り畳み傘を持って部屋を出る。

場所はバスを使って三十分程度、と言ったところだろうか。良くもまあこんな所に行くものだと思う。

千鶴も保母を目指して頑張ってるなあ、と感じつつバスに乗り遅れ、電車で向かう。

二十分後。

一番近い駅で降りて、目的の場所の住所を確認し直す。

多少の運動になる。と思いながら歩き始め、十分ほどで着いた。

バス停は施設から三分ぐらい歩いた場所にあるのを発見し、バスが速かったか……等と呟く。

どの道乗り遅れていたのと一緒にのだが。待つのも面倒だったのでもどちらでもいいというのが本音だろう。実際着いたのだから文句などある訳も無い。

その点、電車は丁度来ていたので都合がよかったな。と思い直して施設の前まで来る。言っちゃ悪いが少しぼろくないか？と感想を抱いた。

施設の前には千鶴が来ていた。こちらもち動きやすい服装だ。

「あ、潤也君……バス使わなかったの？」

「乗り遅れた。電車が丁度来てたからそっちを使ったんだよ」



「ふうん」

そんな会話をしながら施設へ入り、管理人のおばあさんと挨拶する。

「どうも。おはようございます」

「あら、礼儀の正しい子だね。千鶴ちゃんの彼氏かい？」

「そついうのじゃありませんよ」

千鶴は微笑みつつやんわり否定する。本当の事なので潤也は特に反論しない。

「それじゃ始めましょう。潤也君はそつちの荷物を運んで貰える？ 私達が段ボールに入れるから」

「了解」

テキパキと荷物を集め、衝撃吸収材（所謂プチプチ）で包装した割れモノを段ボールに入れたり。

女の子達の私物であろうぬいぐるみや人形を詰めて入れたり。

男の子達の私物であろうおもちゃやバット、サッカーボールなどを纏めて車に運んでいる。

大きめの段ボールで重くても、実際には能力を使えば全然苦では無いのでどんどん運ぶ。実際、『オフエンスターマー室素装甲』でも使えば片手で自動車持ち上げられる訳で。

「力持ちだなあ、お前」

等と手伝いに来た大人に驚かれたりとしているが、順調に進んでいた。

施設を新しくしたので業者に頼むお金も節約したらしく、大きなトラックを借りてきて自分たちで運んでいるらしい。

中も少し脆くなったりして危ない為、新しい場所に移る事になったとの事。

こういうのなら設備とかに資金投資してもいいな、と考えていると、千鶴が取ろうとした箱の置いてある棚が倒れてきた。

「お、っと。あぶねえな」

「あ、ありがとう」

慌てて押さえつけて倒れない様に支える。

壁に固定してある筈の棚が倒れる。それだけ脆くなっているという事だろう。

(……確かに引っ越しは当たり前の判断だな、こりゃ)

棚の向こう側を見ると、壁がボロボロに崩れている。いつ壊れてもおかしくは無い。

むしろ、今まで良く壊れなかったものだと褒めてやりたい。

上からパラパラと小さい破片が落ちてきている。上を見ると、罫が入っていた。

（こつという施設もあるもんだな。見知らぬ人に手助けを、なんて柄じゃ無いが、資金援助とかしてみるか）

それ狙いで近寄ってくるバカも当然いるだろう。その辺は部下の目を信用するしかない。

取りあえず荷物の運び出しは終わり、昼食兼休憩を取る事に。

予想以上に早く終わったらしく、施設のおばあさんも驚いていた。

潤也と千鶴は近くのコンビニで適当に弁当を買い、子供達が公園で遊ぶと言つので見ておく事になった。

「元気だなあ……」

弁当を食べ終え、お茶を飲みながらそんな事を呟く。

「まるでお爺さんね」

「まだまだ若いっての。大人っぽいと言ってくれ」

実際、精神年齢で言えば三十は超えているのであながち間違いでも無い。

(と)いうか、前にも同じような事言われた気がする)

お茶を飲みながらそんな事を考える。

実際、子供が遊んで怪我をしない様に見ているだけなので暇なのだ。特にやる事も無い為、ぼーっとしている。

「お兄ちゃんも一緒に遊ぼう！」

そう言って、遊んでいた子の一人が手を掴んで引つ張る。

潤也は渋々と言った感じでその手に引かれ、足元に子供たちが群がる。

「何かやってー」などと無茶ぶりをされ、どうしようかと頭を悩ませる。

まさか赤青黄色のカラフルな爆発など起こす訳にもいかない。やったらやったでビックリするだろうが。

肩車やおんぶやらして走り回ったりと忙しい休憩だった。

新しい施設に戻り、今度は荷物を運び込む。

取りあえずさっさと終わらせる為に次々と運んで行く潤也。終わった後でまた「遊んでー」等と言われると敵わない。

体力ならあるが、それに対して人数があまりに多い。一人一人相手にしてたら日が暮れてしまう。

時間があれば遊ぶのもやぶさかではないが、それ以前に体力が尽きる。

明日も学校だ。出来ればそんな体力を荒削りする真似は避けたい。どうせ寝るので関係無いと言えば関係無いが。

そんな事を考えながら荷物を運ぶ。

「おい、それ重いぞ。一人で持てるか？」

「大丈夫ですよ。この位」

気遣ってかけてくれる言葉に振り向きもせず答え、運ぶ。冷蔵庫を。

重いのは重いが、別に能力使ってるのでそうでも無い。自動車より重い冷蔵庫ってどんなんだよ。と思考が変な方向に向く。

そんなのがあつたら確実に業務用だろう。

閑話休題

荷物運びも終わり、施設の庭で休む。

子供達も流石に引っ越し作業で疲れ切ったのか、各々だらけてい  
る。

「お疲れ様」

「お、ありがとう」

千鶴からお茶を受け取り、一口仰ぐ。

四月と言う事もあり、まだ涼しい。それでも、ここの動いては汗を  
かいても不思議では無い。

というか、引っ越し作業で大量に物を運んで置いて汗をかかない  
というのもおかしいだろう。

「……雲行き怪しくなってきたな」

空を見上げながらそんな事を呟く。事前に見てきたので雨が降る  
のは分かっているのだが。

暗雲立ち込める空。と言つと、何やら不幸な事が起きそうな気が  
するのは俺だけだろうか。と潤也はぼけーっと考える。

「あら、雨降って来たわ。私、傘持ってきてないのよ。どうしよう  
かしら」

ポツポツと小さく雨が降り始める。

濡れない様に施設の中に入りながら、千鶴がそんな事を呟いた。

「俺の貸そうか？ 折り畳み用の持ってきてるし」

「そう？ でも、潤也君が濡れるわよ？」

「気にする事じゃねーよ。今なら大して強くも無いし……」

「ザアアア！ と本降りになっていた。

「……これでも？」

「……ああ、うん。大丈夫、大丈夫」

風邪を引く様な時期でも無い。人がいない所ならそもそも反射すればいいので問題は無い。

傍から見ると凄く不自然なのでやらないが。人目のある場所では出来ないのが難点だ。

（……アレえ？ こんなどしや降りになるって言うてたかなあ？）

一か月分程度纏めてやってきた上、今日は最後の方だ。多少の計算のズレがあつたのだらう。そもそも麻帆良全域と言うと結構な広さになるので、日にちが最後の方になるとどうしても少しずれる場所が出てくる。

まあ、もう少し計算の間隔を短くすれば済む話ではあるのだが。

不幸と言えば不幸だが、特に何が被害を受ける訳でも無いので問

題は無い。

「……そうね、二人で一つの傘に入れば問題無いんじゃない？」

おばあさんが潤也の後ろにいつの間にか立っていて、いきなりそんな言葉を発する。

気付いてはいたので驚きは無いが、その言葉に驚く。

「……二人で、一つの傘に？」

「それって、つまり……」

相合傘？ と二人の思考が一致した。

「あなた達、仲がいいみたいだし、問題無いでしょう」

ニコニコしながらそんな事を言っただけのおばあさん。狙っている様にも見える。

おばあさんが感じたのは、この二人お似合いじゃ無い？ と言う事だろう。

名前で呼び合って、朝早くに電話して呼び出しても文句一つない。実際、最初はカップルかと思ったほどだ。あっさり否定されてしまったが。

「……まあ、俺はいいよ？」

「私も別に構わないわ」



別に断る要素も無いので、二人とも同意して傘に入り、バス停へ向かう。

当然ながら折り畳み式で小さい為、必然的にどつちかが濡れる事になる。そこは男として自分が、という感じで幅のほとんどを千鶴側にやり、潤也の肩は雨に濡れる。

だが、反射しているので全く問題は無い。しかも傘を差している為、不自然に見えないので好都合だ。

雨が千鶴にかからないよう気をつけながら傘を差し、バスは後に乗って、先に降りた。

濡れない様に、という配慮だ。

特に会話も無く、恥ずかしがったりと言う様なイベントも無く、女子寮に着いた。

「それじゃあね、潤也君」

「おう、じゃあな」

それだけ言って、潤也は男子寮へと帰って行った。

第二十八話「出来れば生かして捕えて貰いたい」by刹那（後書き）

千鶴のターン、という話。いちゃいちゃなんてしてませんけどね。  
一応ヒロイン（予定）なので、忘れられるかもしれんと思って入れました。

ぶっちやけ口調があってるか不安です。単行本見てみるとお嬢様口調だったり普通に話してたりとしますし。  
というか、そもそも登場が少ない。

もしかすると日常よりシリアスのほうが得意かもしれない（何

次回はまた日常。今度はアスナのターンだぜっ！（え

第二十九話「モゲロ。リア充爆発しろ」byモブA（前書き）

何となくキャラが迷走し始めてきた気がしないでも無い。

……アスナってこんなキャラだったかな？  
今回は短いアスナのターンです。

## 第二十九話「モゲロ。リア充爆発しろ」byモブA

四月二十日、午前一時。ヨルダン。

爆音が辺りに響く。辺境である為、人は少ない。

「『来たれフォルネウス 二十九の軍団を支配する侯爵』！」

喚起されるは鯨のような姿の魔神。

男はその鯨の上に乗る、更に連続して喚起の呪文を唱える。

「『来たれマルバス 三十六の軍団を統べる王』 『来たれエリゴール 六十の軍団を治める、堅固なる騎士』！」

現れたのは二体。ライオンの様なモノと槍を携えて鎧を身に着けた騎士。

これだけのモノを用意していたのだ。戦闘を初めから念頭に置いていたという事だろう。

「私達と敵対しなければ、そんな切り札使わずに済んだのにね」

敵対しているのは一人の女性、柊。周りには数人の『獵犬部隊』。

その中の一人が持っているのは、携行型対戦車ミサイル。それをフォルネウスに乗っている男に向かって複数発放つ。

連続した爆音の中、爆炎に巻き込まれながらも死なずに抜け出した。

「面倒な……」

今のを使えば、戦車に乗っていても殺せるのだ。連続で撃ったおかげでマルバスの方は吹き飛ばせたようだが、エリゴールは未だ健在。

槍を携え、『獵犬部隊』を含め殺しに掛かる。

男は連続して、またも喚起を行おうとしており、これ以上は時間の無駄だと判断した。

エリゴールは『獵犬部隊』の一人の目の前で不可視の糸で動きを止められ、銃弾が放たれる。『駆動鎧』の一つ、『エネミーブラスタ』と呼ばれるモノを着こんだ男が撃っている。

八本足の巨大な虫の上部に人間の上半身を取り付けたような、異形の大型駆動鎧。

上半身部に頭部は存在せず、胴体に直接レンズが取り付けられている。また、腰の部分は360度回転するように出来ており、胴体部分に操縦者が入るスペースがある。

腕部の肘から下は武装になっており、左腕には機関銃、右腕には滑空砲を搭載。機能の違いから左右の長さは歪で、左腕は人間の2倍程度、右腕は4倍以上ある。

左腕の機関銃は口径18mm超であり、十秒で五十発（分間三百

発）の発射速度を持つ。軽車両程度なら簡単に八子の巣に出来る程だ。

それを使い、エリゴールを蜂の巣にしようと放つ。連続した発砲音が続き、銃弾にやられたエリゴールが消え去る。

残ったのはフォルネウスに乗った男のみ。この結社の他のメンバーは既に殺害済みだ。

分が悪いと考えたか、この場から逃げようとフォルネウスの向きを変える。

「逃がさないわよ」

空気を切り裂く糸が絡みつき、高速で飛ぶフォルネウスを絡め取る。

だが、流石ソロモン七十二柱の一柱と言つべきか。その力は簡単に止めきれぬものではない。

それでも、一瞬止め切れれば十分だ。

どこかからフォルネウスを喚起した男が狙撃され、フォルネウスから落ちる。

呼び出した者がいなくなり、フォルネウスは霧散して還る。

「……ふう、取りあえずこの任務は完了ね」

「お疲れ様です。アジト内部にはトラップもあるようですので、お

気を付けを」

「分かったわ、後始末よろしく」

「ハイ」

銃を持った筋骨隆々の男が、細身の女性に頭を下げる。この場面だけを見ればシユールなモノだ。

近くのビルの様な建物。其処が今回戦った結社のアジト。

今回の敵は、『SMG』に対して攻撃を仕掛ける為に戦力を集めていた為に狙われた。また、他の結社と手を組んでいた事もあり、発覚。殲滅の為に『グループ』の柁と『獵犬部隊』を動かした。

扉を開け、中のトラップを破壊しながら歩を進める。そして、見つけたのは開けられていない一つの手紙。

宛先は先ほど潰した結社の首領。誰から送られたかは分からない。

(……魔法的な仕掛けがしてあるのね)

これでは、自分は開けられない。恐らくこういう類のモノは暗号や特殊なキーワードがあるのだろう。

下手に開けて内部の手紙を破損させては駄目だ。何か情報が手に入るかもしれないのだから。

結社の首領に聞いた方が速かったかも知れないが、恐らくあの男は何も知らない。八重が問答無用で殺していいと言ったのだ、そう

としか思えない。

持ち帰って社長に見せれば問題無いだろうと思ひ、手紙を服の中にしまつて辺りを搜索する。

見つけたのはPC。何処にでもある、普通のPCだ。

起動させ、中のデータを全て閲覧する。機械に関してはそこらの連中より余程上だ、全てのデータを見るのにも時間はそうかからず。

いくつか暗号化されているものもあるが、其処までレベルの高い物では無い。

そして、一つのデータを見た。

恐らくは、これが『奴ら』の目的だろう。信じるに足るかは分からないが、これから調べればいい事だ。

そして、PCのデータをコピーし、本体を破壊してデータの原典を消す。

携帯を取り出し、八重へと連絡をする。

「任務完了。気になる事もあつたけど、取りあえず帰ってからの報告でいい?」

『構わないよ。それと、君は直ぐに日本へ帰って来て貰つ』

「……また仕事? グループの他メンバーは?」



『別の仕事が入ってる。それも終わるし、直ぐに戻って来れるよ。行先は京都、とある人の護衛だ』

「京都？ 関西の関係？」

『そう。社長が直に受けた依頼だから、手は抜けないって言うてる。同行する僕としても、多少はやる気出さないとね』

「そう、分かったわ。直ぐに戻る」

通話を切り、携帯を仕舞って歩き出す。

奴らのPCの中にあり、脳裏に焼き付いて離れぬその言葉は

『神を我らが手に』

同時刻、日本。七時間の時差がある為、時刻は八時。

アスナは部屋でどの服を着て行くのが悩んでいた。

「アスナ、まだ迷ってたん？」

「それは、ねえ……やっぱり可愛いとか言っただけじゃ無い」

木乃香は恋などした事無いが、まあ分からないでも無いなあ。と思っただ。

女なら誰だって綺麗に見せたいものだ。増してや、デートの時など特に。

電話があつた三日前からずっとそわそわしっぱなしで、授業は耳に入らず、昨日の夜は早く寝ようとして寝れずにいた事も分かっている。

恋は盲目とは良く言ったものだ。本当に周りの事が見えていない。

一時間近く服を選んでいるが、早くしなければ待ち合わせの時間に遅れてしまう。

「む。どうしようかしら……」

頭を悩ませながら服を見るアスナ。どの服がいいか未だに決まらならしい。

「……ウチが選んだら？」

「え、ホント？ 選んで選んで。木乃香なら服のセンス頼りになるし」

待つ事十分。

「……よし、これでOKや。頑張ってきてや」

「……勝負パンツとか、履いてった方がいいのかしら」

「中学生でそんな履かんでええねん!!」

木乃香の怒声を浴びてドアを開け、急いで待ち合わせの場所へ向かう。

駅近くの公園。ここが潤也とアスナの待ち合わせ場所である。

アスナが来た時、潤也は既に来ていた。時間的にはまだ余裕があり、十分以上は残ってるだろう。

携帯を操作している潤也はアスナの事には気付いていない。

「待った？」

「いや、全然……」

潤也が振り向き、アスナの服を見て言葉に詰まる。

膝辺りまでのピンクのスカートに白のパーカーで髪を下ろしている。四月に入って暖かい為、もうこういった服装でも寒くは無い。

潤也はジーパンに黒を基調にしたTシャツ。元々気温などは関係無しに服を着るので、いつもと同じような格好だ。

「えっと……変？」

服を確認しながらそう呟くアスナ。

「いや、全然変じゃ無い。凄く可愛いと思うよ」

「そう？　ありがとう」

アスナが顔を若干赤くしながら答える。携帯を仕舞い、チラッとアスナの後ろの方を見てから歩きだす。

「じゃ、行くか」

「うん」

駅を通って麻帆良の外に出る。ちょっと都心の辺りまで出れば店は沢山ある為、そちらの方が楽しめるだろうと思ったからである。

電車を使って原宿まで出て、いろいろな店を回る。

修学旅行用の服なども見て、似合いそうなのをいくつか購入した。当然、潤也持ちだ。

元々金を使う方では無いので、「どういふときに使うべきだろう」と思っている。

服や小物。アクセサリなどを見て回り、気に入ったものがあつたら手に取り、欲しいと思つたら買う。それを何度か繰り返し返した。

途中でクレープなどを買って雑談しつつ、町を歩く。いくつかの袋を抱えながら町を見て回っていると、昼食の時間になつたので近くの店に入る。

店の外見と中の装飾が全く合つて無い和食の店を選び、昼食を取る事にする。

定食を頼み、食べる。意外と味は良かった。

「……こんなに買って、お金大丈夫？」

「気にするなつての。幾らでもあるんだし、多少使つて社会に貢献すべきだろ」

最も、一人でそんなに変わるとも思えないが。

それにしたつて袋がいくつもあつた。アスナが選んだもの以外にも、潤也が「アレ良さそうだ」とか「こつちもいいな」などと言つて買うのだから、どんどん荷物が増えて行く。

人が多いので迂闊に『ゲイトオブパピロン王の財宝』を使う訳にもいかないので持つて歩いてゐる。それほどの重さでも無いので持つて歩いてても大丈夫だが、多いので邪魔ではある。

食後の散歩がてらウィンドウショッピングをして、公園で一休みする事にした。アスナはベンチに座り、隣に荷物が置かれる。

「コーヒー買ってくるけど、何かいるか？」

「ううん。要らない」

近くの自販機を見るとコーヒーだけが切れていた為、近くのコンビニに買いに行く事にした。

ほんの数分の距離なので直ぐに戻ってくるだろう、とアスナは思っていたが、不良の様な輩が現れる。

金髪のダボダボした服を着たリーダー格の男がアスナを見ながらニヤニヤしている為、早く潤也戻ってこないかな。と思っていると話しかけられた。

「君、可愛いね。一人？一緒に遊ばない？」

典型的なナンパだが、アスナがその誘いを受ける事は無い。

ハッキリした口調で拒絶の意を示す。

「連れがいるので」

「連れてって、女の子？ だったら一緒に遊んでもいいからさ……」

懸命にナンパを成功させようと頑張るチンピラ。あまりに一生懸命なので、その後ろに立つ人物に気付かなかった。

「はーまーづらあ」

ビクウツッ!! と傍から見ても分かる位驚いて、ゆっくり振り返る。

「こ、この間伸びした呼び方と声……まさか」

「ひっさしぶりだなあ、濱面クンよあ」  
はまじ

「じゅ、潤也……ひ、久しぶりだな」

濱面と呼ばれた金髪の男は引きつった顔でそう返す。

「学校こねーから心配してたんだぜ？　しかし、原宿でナンパか。楽しいか？」

「あ、ああ。まあ……というか、もしかして雰囲気全然違うけど千雨ちゃんか？　こっちの娘」

「違う。千雨じゃねーよ」

「潤也、この人たち知り合い？」

「この金髪だけな。一応寮の同室だよ。入学して次の日に不良グループと付き合い始めてまともに学校来てねーけどな」

呆れた顔をしてそう告げる。コーヒーの缶を開け、一口飲んで気分を落ち着ける。

その次の日に潤也にグループ単位で喧嘩を売りに来た事はまだよく覚えている。通報したら高畑に鎮圧されていたが。

「オイ、濱面。コイツ誰よ」

「美男美女カップル……モゲロ。リア充爆発しろ」

「バカ野郎！ 口に気をつける！ こいつはあの『男女平等』と呼ばれる長谷川潤也だぞ！！」

「オイ、それ初耳なんだが」

麻帆良の中で囁かれている噂なら幾らでも入ってくるが、麻帆良の外となるとこういった噂はあまり入ってこない。

ちなみに何故『男女平等』かと言うと、本気で怒らせたら男だろうと女だろうと躊躇も容赦も戸惑いもなく顔面を殴り飛ばすからだそうだ。

こんな痛い中二みたいな名前つける奴いるんだな……と潤也が驚く。

アスナは美男美女カップルと言われて顔を赤くしている。

「ま、マジか……妹を人質にとったら人質を取った奴が廃墟ごと吹き飛ばされたって噂の……」

「それどころか、鉄パイプで殴ったのに何故か殴った奴の手が折れたとか……」



「それだけじゃねえぞ。時速百キロのダンプ相手にカウンターを決めて」

「おかしな噂広めんな」

ゴツン。と鈍い音を立てて拳骨が落ちる。出来ない訳でも無いのであながち間違いでも無いのだが。

それにしたって時速百キロのダンプ相手にカウンターは無い。信じる奴等誰もいないだろう。

「つーかお前、修学旅行くらい来い。中学校生活の思い出無しって辛いぞ？」

「……分かってるけどさ、何か行き辛いつーか」

気持ちは分からないでも無い。今更行ってどうなる、という気持ちがあるのだろう。

「俺が何とかしてやる。だから取りあえず来い。それだけ。俺はこれからアスナとまた遊ぶから」

「……お前ホント自分本位だな」

「時は金なりって誰かが言ったよな」

誰でもいいけど。と続け、アスナの隣に置いてある荷物を手に取り、飲み終えた缶コーヒをゴミ箱に捨てる。

「行こうぜ、アスナ」

「うん」

ベンチから立ち上がり、潤也の後ろを追って行く。

「……あの子、やっぱり可愛いよな。潤也もげちまえ。千雨ちゃんに血祭りに上げられちまえ」

ぼそつと呟いたその言葉で、濱面は後に逆さづりの刑に処される事を、今はまだ知らない

いろんな店を見て回り、夕刻となった。

今まで一生懸命追いかけていたパパラッチ共は既に撒いている為、二人きりで歩いている。

電車に乗って麻帆良へ戻り、駅を通って近くの公園で一休みする。

「……そうだ、忘れないうちに渡して置く」

「何？」

取りだしたのは包装された箱。それをアスナへと手渡す。

「これは？」

「ハッピーバースデー、アスナ。一日早いけど、明日学校だし、会う時間あるか分かんないしな」

明日四月二十一日。アスナの誕生日だ。

明日学校で遊べないからこそ、今日原宿と一緒に遊びに行った。

「開けていい？」

「もちろん」

包装を解き、中身を見る。

ネックレス。千雨にはブレスレットを渡してあるから、と言う理由でこれになった。

「……綺麗」

夕焼けを反射して輝くネックレス。それを取ってアスナに付ける。

「持っておくと良い事がある。俺からの御守りみたいなもんだ」

千雨のブレスレットと言い、このネックレスと言い、『仕掛け』は施してある。魔法を防ぐとか、そう言った即物的なモノは望めないが。

修学旅行では何かが起こる。桜咲が『護衛』を頼んできたことからそれが分かる。

準備は入念に。丹念に。何が起こつても対処できるようにしなければならぬ。

「ありがとう、潤也」

笑顔を向けられ、少しばかり顔を赤くしながら、潤也は頬をかく。

「気に入って貰えたなら何よりだ」

「うん、気に入った。だから」

一瞬。潤也の頬に、柔らかい何かが触れた。

「お礼だよ。修学旅行も一緒に回ろうね」

ぼかんとしながら、先ほど一瞬なにかが触れた頬をさする。

アスナは少し顔を赤くしているが、夕日に隠れてそれが見えない。女子寮へと続く道の途中で立ち止まり、潤也を待つ。

驚きを隠せないまま、とりあえず女子寮へと荷物を運ぶ事にした潤也であった。

## 第二十九話「モゲロ。リア充爆発しろ」b yモブA（後書き）

アスナのターン。という話。

やり過ぎた感はある。でも後悔はしていない（オイ

猫犬部隊の活躍シーンが少ないと言われたので活躍（？）を入れてみた。

……というか、エリゴールって銃にやられるの？書いてしまった後で言うのもなんですけど。

いろいろ書いた気がするけど、アスナとのデートってどう書けばいいのか分からなかった……。

デートの経験なんて無いやい！

次回から修学旅行に突入。丁度三十話ですね。

……ちなみに、次回の投稿が九月一日までに出来なかった場合、今後の投稿は劇的に遅くなります。その辺りはご了承ください。

第三十話「僕で良ければ力になるから」by瀬流彦（前書き）

修学旅行編と言いながらまだ入らなかった。

書き忘れ、もとい書き損ねてたんで投稿。

### 第三十話「僕で良ければ力になるから」by瀬流彦

少々時は遡る。

少年と吸血鬼が戦闘し、それによって学園に通達がなされ、三日後。

四月十一日金曜日。

エヴァンジェリン関係の情報の処理が、滞りなく終了した。

家に関しては、重要な魔法書なども持っていると分かっている上で、『ダイオラマ魔法球』等の珍しい魔法具も含め、処分した。

かの悪の大魔法使い、ダークエヴァンジェル『闇の福音』アタナシア・キテイ『不死の子猫』マガ・ノスフエ『不死の魔法使い』ラトゥ『人形遣い』ドルムスター『悪しき音信』『童姿の闇の魔王』『禍音の使徒』等と呼ばれているエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

魔法を少しでも齧るものからすれば、その名は最早恐怖の対象でしか無い。

六百万ドルの賞金首。それは、それだけの事をしていているという意味を持つ。

本人がどう思っているかなど関係無い。世間からの評価など、種族、力の大きさ、その他諸々の事で決まる。

現にエヴァンジェリンと同じように強大な力を持つておきながらも、ナギ・スプリングフィールドの様に英雄と呼ばれる者は存在した。

『人間』と『吸血鬼』と言う事もあるだろうが。

内面の性格など考慮されない。経緯がどうあれ、『殺した』という事実さえあれば明確に敵として世界へ浸透する。

増してや、人間よりも強い種族たる『ハイ・テイライトウォーカー真祖の吸血鬼』ならば、賞金首になるのは当然ともいえる事だ。

相手が『正義』を名乗る『馬鹿』であったとしても、一般的な吸血鬼のイメージが『人間に害を成すモノ』である以上、そういった類が現れるのも当然と言えるだろう。

それほどに恐れられている魔法使いを、ナギは呪いをかけて麻帆良学園に入れた。

学園長は当初は驚いたものだ。だが、接している内に茶飲み仲間になり、囲碁や将棋などもやる様になった。

内面を見る事が大切、という言葉を変えて実感させられたものだ。

それでも最初は反発もあった。ナギの『英雄』としてのネームバリューと、学園に展開されている結界のおかげで縛りつけられ、悪さは出来ないという当時の魔法先生達に説明して漸く引き下がった。

だが、それは破られた。



事の始まりは、エヴァンジェリン自身が多大な怪我を負って誰かにやられた事。

そして、『桜通りの吸血鬼』事件。

エヴァンジェリンがやった事だと、魔法先生達は直ぐに悟り、学園長へと直談判しに行くも、自身が見張っているから問題ない。と言われ、引き下がらざるを得なくなった。

ネギと戦闘させ、精神的に成長させようとしたのだろう。

あわよくば、ネギの魔法の師匠とさせるつもりだったのかもしれない。

だが、その目論見は外れる事となる。

ネギは失血死寸前まで血を吸われ、魔力が減衰。数日休む事で戻ったが、エヴァンジェリンの封印がとかれ、次の日に『垣根帝督』との戦闘。

そして、死亡。

学園長は経緯を纏めた報告書を読み終わり、机に入れる。遺品は残っておらず、死体は灰となって消えた。もう、この世にエヴァンジェリンが残っているという証拠は無い。

友人である彼女の死亡は、少なからず精神に影響を与えた。無論、高畑にも。

ガンドルフイーニなどは、生徒を襲って力を蓄え、一人の生徒が殺されそうになっていいる所を逆に殺した。という垣根の話聞き、彼の方が信用になるのではないかと考えている。

この考えはガンドルフイーニだけでは無く、一部の魔法先生・魔法生徒にも浸透している事だ。

英雄の息子が襲われ、監視していた筈の学園長は役に立たず。解決したのは外部の組織の長。しかも、その組織に属しているものが狙われていたという。

本来なら、首にされてもおかしくないほどの事だ。

だが、情報操作と迅速な『処分』を持って事実を隠蔽。彼女がここにいたという証拠は、もう無い。

長く息を吐き、背筋をゆっくりと伸ばしてお茶を飲む。

修学旅行。エヴァンジェリンの件で失敗した為、次は失敗する訳にもいかない。今まで書いていた書状を破り捨て、真面目に書いたものを用意する。

あの親書を送り、西とも敵対してしまえば、学園長の権威は地に落ちる。権力よりも優先すべき事があるが、『アレ』がここに封印されている以上、できうる限り麻帆良から離れる事は避けたく。

月曜日、ネギ君と話そうかの。と呟いて仕事を終えた。

四月十四日月曜日。

この日も、ネギは元気に出勤している。見た目的に登校が良い気もするが、一応教師である為、出勤だ。

カモを肩の上に乗せ、授業の準備をする。

カモはネギとこの学園の生徒を仮契約させようとしているようだが、未だその目的は達せられていない。

女子寮に近づこうとすると、得体の知れぬ恐怖感が身を蝕むのだ。それ以上一歩でも踏み出せば死ぬと、本能が告げていた。

おかげでカモは女子寮に侵入する事無く、まだ生きていた。

授業を終え、放課後。教師として大体の仕事を終え、一休みしている時に学園長に呼び出される。

一体何の話だろうか、と考えながら学園長室へ入る。

学園長は椅子に座っており、ネギに向かってゆっくり話し出した。

「実はのう、修学旅行の件なんじゃが」

「修学旅行ですか？」

「うむ。京都行きは中止になるやもしれん」

「え……中止ですか？ なら、ハワイに？」

別の候補地であったハワイを思い浮かべるネギ。特に行った事も無いので、ネギ個人としてはどちらでもいいのだが。

「そうじゃの。まあ、まだ中止と決まった訳では無い」

「はあ……」

「先方……関西呪術協会と言っんじゃがの。魔法先生がいると言ったら京都入りに難色を示して来たんじゃ」

「え、と。それって、僕の所為ですか？」

自分の所為で候補地を変えなければならぬ。そう思っ慌てるネギ。

修学旅行で京都に行く事を楽しみにしている生徒もいるのだ。それが自分の所為でどうにかなるなど、出来る事なら避けたいと考えるが。

「いや、ネギ君だけでは無い。瀬流彦君は知っておるじゃろう？」

「はい、いつもお仕事を教えて貰ってます」

「実は彼も魔法先生なんじゃ。じゃが、もう決まっておるから別の

候補地の先生と入れ替える訳にもいかん。ネギ君は担任じゃから余計にな」

「な、なるほど……それで、どうするんですか？」

結局のところ、其処に落ち着く。

ネギ自身、自分が原因だとは微塵も考えていない。

唯の魔法先生ならまだ許容出来ただろう。だが、スプリングフィールドの名前を持つネギがいるとなれば話は別。

現在、西洋魔法使いの代名詞とも言える『千の呪文の男』サウザンドマスターの息子。

西洋魔法使いを毛嫌いしているモノからすれば、ネギの存在は西洋魔法使いとしてのイメージそのもの。

魔法世界での戦争で親を奪われた者もいるし、日本の伝統を忘れてたと憤っている者もいるし、個人的な理由で嫌っている者もいるが、結局纏めると『敵は西洋魔法使い』になる。

其処に放り込もうというのだから、下手すれば西と東の抗争が起きてもおかしくは無い。

「ワシとしても、これ以上イザコザを増やさずに仲良くしたいんじゃない。じゃから、これを渡してきてくれんかのう」

そして、学園長はそれをしない為、東西の関係の改善をする為に机から一つの手紙を取り出す。

「それは？」

「西の長宛の親書じゃな。これをあちらの長に渡してくれれば良い。道中これを渡すまいと妨害をしてくる可能性があるが、生徒達に被害を出す様な事はせんハズじゃ。やっってくれるかの？」

「……ハイ！ 分かりました。やります！」

大役を任された、という高揚感が身を包む。一教師としての仕事の領分では無く、魔法先生としての領分に入っている仕事だが、関係無いとばかりに。

形骸化した西と東の対立は、もはや『親書が届けられた』という事実のみ存在すればどうにでもなる事だ。

その為の根回しは既に済んでいる。

「京都にはナギが一時期使っていたと言われる別荘がある筈じゃ。西の長が知っておる筈じゃし、親書を届けた後で個人的に聞いてみる」といい

「本当ですか！？」

驚きを隠せない。

六年前の事件で出会い、その背中を追いかけているネギ。父親の背中を追いかけるというのは極普通の事だ。だが、ネギはあまりに執着が強過ぎる。

別荘があると話を聞き、修学旅行の行き先が京都で良かったと息

を吐く。

「む、そうじゃ、言い忘れていた事がある」

「な、何でしょう?」

笑って見ていた学園長が、声色を変え、雰囲気を変え、真剣な表情そのものになる。

「孫の木乃香には魔法バレはせんかったじゃろうな?」

「それは……大丈夫だと思いますが」

実際、魔法が暴走しそうになっても、何かに邪魔される様に魔力が散っている為、魔法が発動する事は無かった。アスナ、よく頑張った。と褒めたい所だ。

カモが何やら悪戯をやる時間も無かった為、未だその才能は開花していない。

「そうか、なら良いんじゃない。ワシは構わないんじゃないが、親の方が魔法を教える事に抵抗を持っておつての。なるべくばれん様に頼む」

「分かりました」

「それと、もう一つ。これだけは絶対に護って貰わねばならん」

「な、何でしょう?」

気迫が増す。飄々とした雰囲気でも無く、正に老年の魔法使い。

茶化す様な事は言わないと本能的に悟る。

「ネギ君のクラスの長谷川君とアスナちゃん、御上君を知っとるの？」

「はい。アスナさんにはお世話になりましたし」

部屋の事で、と続ける。

「その三人じゃが、何があっても魔法関係で接触する事を禁ずる」

「え、それは、魔法使いとして巻き込まない為には当然なんじゃ…」

「無論そうじゃ。じゃが、何があっても、絶対に彼女達に魔法に関する事を話してはならんし、干渉してはいかん」

念を押し、問い詰める様にネギへと警告を渡す。

特に、御上零は学園の監視をしている節がある。おかしな真似をすれば、敵対する事は確定であろう。

「わ、分かりました。そうします」

「ネギ君の肩に乗っ取るオコジヨ妖精もじゃ。彼女等に下手に手を出すと不味い事になる」

少しばかり疲れた様子で、そう告げる。

「わ、分かりやした。気を付けやす」



カモはそう返事して、心に刻み込む。不味い事がどんな事かは明言しなかったが、ネギは想像できず、カモは『最悪の事態』を予感した。

つまり、『死』。

可能性が捨てきれない。学園長がどうなるか明言しなかった事が逆にそういったイメージをカモに持たせた。

学園長からしても、それ位に思っていれば下手な事はせんじやろ。という考えだ。

男子校の二人とは、まず接触する可能性が低いだろう。という考えの為、言わなかった。瀬流彦には通達してある為、その辺のフオリはしてくれるだろうと思いい。

「……おお、そうじゃ。忘れぬうちに言っておかねばな」

「こ、今度は何でしょうか」

もう満腹です。とばかりに学園長に目を向ける。

「呼んでおいたんじゃが、まだかのう？ と、噂をすれば何とやら、とな」

扉が開けられ、二人の人物が入ってくる。

一人は瀬流彦。いつもニコニコしている為、ネギとしても話しやすい先生の一人だ。

もう一人はネギのクラスに属する生徒。桜咲刹那。

「お呼びでしょうか、学園長」

「うむ、ネギ君と情報を共有してほしいと思つての。齟齬があつて敵対する、等となつては敵わんからの」

「え、と。何の話ですか？」

「ああ、そうじゃつた。ネギ君。桜咲君は木乃香の護衛なんじゃよ。ぺこり、と頭を下げてネギに挨拶する。

「私はお嬢様を護る為にこの学園に来たんです」

「そ、そんなんですか。凄いですね」

「木乃香はワシの孫であり、関西の長の娘なんじゃ。魔力量が多い為に狙われておつての。念には念を、と言ふ事で桜咲君が抜擢された訳じゃよ」

木乃香の友人で、ある程度の実力者。侵入者に関しては魔法先生で対処するにしても、身近にいるボディガードとして選ばれた。

普段の行動を見ると、あまり意味があるとは思えないが。

「瀬流彦君は知っておるじゃろう。何かあつたら頼るといい。先輩じゃしの」

「あはは、よろしくね。ネギ君。僕で良ければ力になるから」

「ありがとうございます」

軽く握手して、学園長に向き直る。

「うむ、これで今回の修学旅行での関東の正式な魔法関係者は揃ったの」

他にもいない事は無いが、傭兵だ。有事の際は金さえ払えば手助けしてくれるだろう。

桜咲は切り札があるのだから、心配などしていない。

用意できる中で最高のカードを選んだ。それが麻帆良と敵対する事になると、大切な人である木乃香を護るためなのだから、後悔はしない。

「ネギ君は関西への親書を持っておる。桜咲君は木乃香の護衛で忙しいじゃろうし、瀬流彦君も教員としてネギ君の仕事をサポートする必要があるじゃろうが、出来れば手伝ってくれると嬉しい。ネギ君。プレッシャーをかけるつもりはないが、頑張ってくれ」

本来なら、瀬流彦と会わせるつもりは無かった。

だが、従者がいないネギでは近接戦闘の出来る敵がいた場合、勝てない可能性が高い。ならば、多少戦闘経験のある瀬流彦をサポートに回すと言う事を選んだ。

ネギには自分の力で今回の事を収めて一回り成長してほしかった

が、思惑通りには行かなかった場合、下手をすれば『SMG』と関西を同時に敵に回す事になる。

親書さえ渡せれば問題は無いだろうと考え、サポート役に抜擢した訳だ。そして、警告もしておいた。これなら下手をする事もあるまいと思ひ。

実際、其処まで戦闘が出来る訳ではないが、頭の回転が速い為に役に立つ事はあるだろうという考えを持っている。

念を押す様に、もう一度告げた。

「関西は木乃香を狙ってくるじやろう。桜咲君と瀬流彦君、ネギ君頼んだぞ、木乃香を守ってくれ。そしてネギ君。親書の件、頼んだぞ」

『はい！』

返事をして、これなら大丈夫じやろうと高をくくる。

準備は念入りに、丹念に。『SMG』は敵に回せば一般人など関係無く戦場へと変える可能性もある。

数年前の、ロシアで起こった『世界的テロ事件』の際の動きで、そう判断した。

穴が無いか探し、隙間を埋める様に策を張り、持ち得る手札を切る。学園長が今できる事はやってしまった。後は彼らの力次第だ。

何かが起こった時の為の人員も、用意しておかねばならない。

そして、波乱の修学旅行が幕を開ける。

### 第三十話「僕で良ければ力になるから」by瀬流彦（後書き）

学園長暗躍する。という話。

エヴァンジェリンに関しては、まあこんなもんだろうと思って書き  
ました。

残して置く筈も無いですしね。匿ってたとなると麻帆良の風評も下  
がりますし。

そして、一番変わったのはネギ関連。

一、瀬流彦が魔法先生だと知っている。

というか、これが無いとネギヤバイwwwいろんな意味でw

二、刹那が味方だと知っている。

これは学園長の説明不足ってか、説明して無いからの勘違いですし、  
万全を期すなら知っておくべきだろうと。

三、千雨とアスナと零に近づいたらスクラップ宣言。

明言はしてませんけどね。カモがそう思ってるってだけで。

こんなもんですかねえ。ついですが、原作前の部分に設定を書い  
て投稿して置きましたので、読みたいという方はどうぞ。

現状、一番悩んでいるのは班分けwww

では、次回から更新は激遅ですが、よろしく願います。

第三十一話「俺の時代がやってくる！」b y 濱面（前書き）

ちょっと長め。切るか迷いましたが、結局入れました。

### 第三十一話「俺の時代がやってくる！」by濱面

修学旅行当日。

ゆっくり目を開け、起き上がって背伸びをする。

軽くストレッチして、キツチリ目を覚ます為に洗面台へ向かい、顔を洗う。

柘の手に入れた手紙の仕掛けを解除していたら夜遅くになっていた。全く持つておかしなモンを持って帰って来たものだ。

魔法的な仕掛けがあるとはいえ、其処に『<sup>ルール</sup>法則』がある以上、俺に解けない事は無い。時間さえあれば。

解いて、見てみれば中身は何処かの誰かとの友好的な手紙。ただし、中身にも魔法的な仕掛けがあつて、書いた本人が暗号のキーが無ければ読め無い様になっている。

ここまで高度な暗号文を良く作れたものだ。感心するよ。本当に。軍用のアルゴリズムの方がまだ楽だ。あんなおかしな暗号使うとか、性格ひねくれてやる。

.....。

いや、つまり読めたって事なんだけどね。



一回法則さえ見つけ出してしまえば読むのは楽だ。最も、法則を見つけるのに大凡四時間ほどかけてしまい、あまり寝て無いという事が問題か。

正解かどうかは今ももう分からないけどな。大体当たってれば十分だし、問題は無い。

手紙の中身は『とある魔術結社が共同してSMGに対抗しようとしている為、お前達も協力しないか?』というもの。

修学旅行が終わった後で始末しようかね。『スクール』は別の仕事があつた筈だし。『獵犬部隊』にやらせるには荷が重い。

強力な『パワードスーツ駆動鎧』を使えると言っても、大半はランクを落とした物だ。技術の漏えいを防ぐためにな。

頭を働かせる為、コーヒーを飲む。

まだ眠いが、新幹線で寝てればいいや。多少はマシだろう。睡眠時間およそ三時間程度、演算も特に支障は無い。何かあっても大丈夫だろう。

そんな事を考えながら時計を確認し、時間を見て動き出した。

「起きろ！」

フライパンとお玉を持って、寝ている護の耳元で鳴らす。実際やられると迷惑極まりないが、時間的に起きないとヤバイ。予想以上に考え事に没頭してたらしい。

昨日から戻ってきている濱面を同じように叩き起こし、朝食の準備をしてさっさと食べる。

準備は予め昨日の内に終わらせており、荷物を背負って駅へと向かう。

メンバーは特に変わらず、俺、護、梶咲、仲芽黒。そして濱面。濱面に関しては俺らの所以外入れなかったと言った方がいいかもしれない。

不良だしな。

特に気にする様な奴は少ないが、人数が偏るからこうなった訳だ。

眠そうに目を擦る護と濱面を連れ、集合場所の駅へ到着する。

時間までは後二十分位か。意外と速く着いたかな。五分前行動は基本だし、まあ良いだろう。

この位の時間帯だとみんな大体揃っている。各班点呼をして人数を確認、その後乗車という流れだ。

ちょっと離れた所を見れば、女子中等部の面々がいる事が分かる。

ウチのクラスの連中は女子がいる事が相当嬉しいらしい。特に梶咲辺りはもうヤバそうな目をしているんだが。

目標のハーレム目指して頑張れ。

そこそこイケメンの筈なのに言動がセクハラじみてるからかなり引かれるんだよな。仲良くなるのは速いけど。

ちなみにウチのクラス。最初はハワイだとか沖縄だとか北海道いるんな事を言ってた。

一つの場所に五クラス、候補地は五つ。つーか二十四クラスとか多すぎと思うんだが。他所でも普通なのか？

最終的に相咲が舞子がなんたらと語りだして、「もういいよ、京都でいいから」という雰囲気になった。凄く、ウザかったです。

そんな事を考えていると乗車の時間になった様で、点呼をして人数確認。全員そろった事を確認して新幹線に乗車。今更だが班長は護。

押しつけました。

ま、そんな事はどうでもいいから放っておくとして、俺達のクラスと千雨達のクラスは車両が同じらしい。ちなみに俺達は3-W。

3-A全員と面識があるので、手を振って挨拶。零からは無視された。アイツ俺が作ったのに俺に冷たいんだが。何故？

ウチのクラスの殆どの男子から睨まれた。視線に質量があったら駅が吹き飛んでるだろうな。

新幹線に乗り込む時、桜咲と一瞬目が合う。何かを気にしている様な感じ。

(何か聞きたい事でもあるのか?)

取りあえず念話してみる。わかってはいるけどな。

(念話出来たのか? ……準備は出来ているのか?)

(超能力でもこういう事は可能だ。準備は既に終わってるよ)

『メンタルアウト心理掌握』で念話も出来るんだよ。使う機会なんてゼロに近かったけどな。

既に『グループ』と『猟犬部隊』が入っている。関西とはこう着状態だ。下手に戦闘させたりはして無い。こっちだって好き好んで敵増やしてる訳じゃないんだよ。

というか、別に敵対する理由は無い。関西からすれば俺達に借りがある訳だしな。島根の一件で。

特に拒否する事も無くすんなり入れてくれた。むしろ喜んで入れてくれた。

(そうか……所で、よくもやってくれたな)

(何を?)

(とぼけるな! 御上が言っていたぞ、私とお嬢様を一緒の班になる様にしておけと命令されたとな!)

(えっ。何それ知らないんだけど)

何勝手な事してくれてんのアイツ？ 女子中等部に関しては見てたらもはや犯罪に近いし、学園長室と職員室以外は基本零に一任してるから知らないんだけど。

おかしいな魔力反応とかがあったら見る事もあるだろうけど。例：カモの仮契約魔法陣。

(……本当に知らないのか?)

(今初めて聞いた)

でもまあ判断としては間違ってる無だろう。護衛なんだから近くにいた方がいいだろうし。

というか、今思ったけど千雨達の班編成しらねえわ、俺。……まあ、何とかなるだろう。多分。

(所で、班ってどうなってるの?)

(……聞いていないのか？ 私と長谷川さん。神楽坂さんにお嬢様それと御上だ)

上々。零がいるなら問題無いだろう。俺は千雨達と同じように回るつもりだが、俺がいない時に何か起こっても何とかなる。

絶対起こさせないけどな。

そんな事を思いつつ新幹線に乗り込み、席について睡眠を取ろうとアイマスク。次の瞬間剥ぎ取られた。

「何だ……ですか」

「私の話を聞く前に寝ようとするとは、いい度胸じゃないか」

魔義流先生が無駄に威圧感を出して俺を睨んでいる。

「いやあ、どうせ一度聞いた話だと思ったんで大丈夫かなと」

「残念だが今初めてする話だ。心して聞け」

かなり面倒な先生。授業中も何故か武勇伝になるし。というか、この人の話って誰がどう聞いても創作としか思えない活躍の仕方なんだが。

神様と友達とか、巫女の友達がいるとか。まあそれは今はいいや。

「女子中等部の3 - Aが同じ車両にいる訳だが……ちよっかい出すなよ」

「何故ですか!？」

相咲が直ぐ様反論。其処まで女子と仲良くなりたいか。

「中武研の部長もいるぞ?」

「その子は遠慮しておきます」

ああ、古菲か。確かに下手に手を出そうものなら投げ飛ばされるが、新幹線の中でそんなことしないだろ普通。

「まあ、あつちのクラスにちょっとかい出すようならホテルで夜通し正座な。後、説教と課題も用意してやるからありがたく思え」

その言葉で一斉にブーイングが飛ぶも、涸之先生の名を出したら一発で収まる。ある意味女子中等部の新田先生みたいな扱いだ。

「ちなみに大半の奴は知っているだろうが、あつちには長谷川の妹もいる。……死ぬなよ」

『サー・イエツサー！』

其処まで言う事か？ 俺そんな危険人物扱いされてんの？ ちよつとシヨック。

「話は終わりましたかー？ 俺さっさと寝たいんですけど？」

「昨日の夜は修学旅行が楽しみで寝れ無かったのか？」

「いえ、単純に夜更かししただけです」

ニヤニヤしながら聞かれたが、顔色一つ変えずに応えるところまらなそうな顔をされた。何でだよ。

もう一度寝ようとアイマスクをしたら、また次の瞬間取られた。

「寝てんじゃねえよ。遊ぶに決まってるんだろ。ホレ、トランプ」

樞咲にトランプを渡される。既に始まっているが、いつ出したよこれ。

「そして大富豪かよ。いい加減学べ。お前らじゃ俺には勝てない」

「ふ、今こそ革命の時！ 俺の時代がやってくる！」

「ウルセエ濱面。革命返し」

「何イ！？」

十分程度やるが、大富豪は俺が勝ち、ポーカーで手札の悪さに俺が泣いた。毎回ポーカーでは勝てない。大富豪ならまだ何とかなるんだが。

運の悪さは最早マイナスの域。前にも思ったが何でだ。トランプの時だけ俺は『幸運 - A』とかついてんのか？

『幸運 A - ♠』とかでは無く、『幸運 - A ♠』だ。トランプに限り。

ポーカーに弱いつて地味に嫌だよ。頭使つて何とかなる類のゲームならいけるんだが。

……今一瞬、魔力を感じた気がする。周りを見てみれば同じ様に気付いた桜咲が動いて後ろの車両へ向かっていた。

千雨達の方に関しては零がいるから心配はして無い。が、出来る限り面倒は避けたい訳で。

流血沙汰は不味いが、いなくなるのなら問題無いだろう。そう思つて魔力を未だ出している術者を転移させて車外へ出す。……偽物みたいだけどな。



式神か。関西の仕掛けかね。魔力は式神の方から出てたし、遠隔操作で何か仕掛けたんだろう。

そんな折、聞こえてくる3-Aの悲鳴。

「まて潤也。そのエアガンはどこから出した」

無意識の内に『王の財宝』から銃を出して構えていたらしい。ハッとして隠し、収納。気付いたのが護で良かった。

さて、どうしたのかと見てみれば、大量のカエルが其処彼処に現れていた。

「……カエル？」

「カエルだな。何でカエルがここに？」

「しらねーよ！」

コントの様に話す仲芽黒、相咲、護。余裕ですね、お前等。こっちにいないからって。

悲鳴を聞いて魔義流先生が驚き、カエルを見た後俺達の方を見る。

「どっなっているんだ、これは？ 取りあえず一番近い場所にいる長谷川……は、もう行ったか。それと相咲、雨中、濱面。カエルの捕獲手伝えて来い」

「潤也早っ。てか、え、仲芽黒は？」

「カエル捕まえられるか？」

「無理です。触れる事が出来ません」

「乙女か！」

後ろから何か聞こえているが、無視。

取りあえずさっさとカエルを捕まえる。随分デフォルメされてるけどな。本物のカエルと比べると可愛いモンだ。女子はこれでも嫌だろうけど。

実際、結構なパニックになってる訳で。

手当たり次第に捕まえては袋に押し込める。……というか、これどうやって出したんだ？ 式神？ でも水筒とかからも出てたみたいだしな。

千雨は頭を抱えている。どうにもSAN値がガリガリ削られてるらしい。

「大丈夫か？」

「ああ……っーか、何だよコレ？」

「悪戯……なのかねえ？ 詳しい事は後で説明するよ」

「分かった……」

すっかり疲れた様子。まだ始まってもないのにな。アスナの近くにいた奴は勝手に消えて行ったらしい。『魔法無効化能力』マジックキャンセル便利だな。

零は千雨達に近づくカエルだけを対処していたらしい。全然動いて無いし。

そんな時、ヒュンと燕が俺の横を飛んで行く。

何かを啜えていたが、アレは……親書か？ ネギが学園長から貰ってた奴。俺関係無いから放っておいてもいいだろう。

あつちには桜咲が動いてたしな。

さてはて、前途多難な修学旅行になりそうだ。

そして、清水寺に到着。

四月の生ぬるい風が肌を打つ。中々気持ちがいい。

距離としてはそれほどでも無いが、移動時間は長い。この見学を終えたら今日はもう旅館に行く予定になっている。

3 - Aが集合写真を取っているが、女子中等部が全部終わった後男子中等部の番だ。ぶっちゃけ面倒。

行き先も予定も泊まる場所……は、一応分かれているが、ほぼ同じだ。キリキリと写真撮影を終え、清水寺の見学に入る。

「ここが、清水寺か……」

一応来るのは初めてだ。前世の記憶なんてもう残って無いし、仕事でも来る事は無い。国外が基本だし。

国宝なんだよな、ここ。修学旅行で来る以上、やはりここは外せないらしい。

見張りでも兼ねてるのか、一般人の中に混じって明らかに逸般人がいる。よく見れば意外と簡単に浮き上がる物だが、そいつらは洗脳してここでは騒ぎを起こさせない様にする。

後は情報を絞り取ればOKだろう。

しかし……テンション高過ぎないか、こいつ等。フリーダム過ぎて呆れたよ。

清水寺から飛び降りると言った奴がいたり、正に飛び降りようとしていたり。

相咲は意味の分からない事言ってやがるし。

「えー、ここ清水寺は『清水の舞台から飛び降りる』という言葉から連想される通り、世界有数のバンジージャンプスポットとして注目されている、今世界で最もホットでクレイジーな観光スポットです。」

その高さは最早軌道エレベーターと見間違う程で、毎年ここを訪れる修学旅行の生徒には必ず一人や二人酸欠に陥る生徒がいると言う笑い話もよくありますね」

「ねえよ」

「建立は……確か、平成四年。当時の有力武将、ド・小西氏によって建造されたと聞き及んでおります」

「誰からだ」

「そうそう、平成十年に起きた、人類の半分を消し去ったあの忌々しき災害、『清水寺クライシス』によって半壊しましたが、平成十二年、当時の有力武将K B Aちゃんさんによって修繕されたのは、記憶に新しいところですね。」

『清水寺クライシス』の一件によって、耐震偽装という言葉も注目されましたね」

「されてねえよ」

「マジでどこのパラレルワールドから来たんだよお前」

何だよ清水寺クライシスって。初めて聞いたわ。

「いや、適当に説明してしまえばみんな満足するかなって」

『適當過ぎるわー!!』

男子中等部、3-W全員による総突っ込み。つーか全員聞いてたのかよ。

「もういいじゃん。清水寺クライシスの爪痕見たじゃん。舞妓さんいないんじゃないかここに意味無いじゃん。別のところ行こうぜ」

「清水寺はそう言う観光スポットじゃねーよ！ つーか学校でいく場所決まってるんだから無理だって分かれ！」

言っちゃうとアレだが、舞妓に対する執着がキモイ。

隣では綾瀬が同じ様に（多分こっちが正解）解説している。

もうこいつ等と一緒にいると無駄だと判断し、千雨達のいる場所へ行く。

「潤也、新幹線のアレは一体何だったんだ？」

「ああ。千雨は知ってるだろ？ 関西呪術協会」

キツチリ音を遮断しながら会話を始める。ちなみにアスナもいる。

「それってアレか、春休みに会ったあの二人が所属してたっていう」

「そ。その組織が木乃香を狙ってたよ。なんであんな地味な手に走ったのかは知らないけどな」

カエルを出すって、ホントに何の意味があるんだろうね。

「木乃香が狙われてるの？」

アスナが心配そうに聞く。小学校からの親友だしなあ。気にはなるだろう。

「桜咲と零で護衛してる。後は俺もいるし、保険も準備してる。問題は無いよ」

「そう……潤也がそう言うんなら、大丈夫よね」

まだ気になってはいるようだが、取りあえず一安心しているらしい。其処まで信頼されると失敗する訳にはいなくなるじゃないか。

失敗する気なんか毛頭ないが。

千雨達と話している間に3・Aの他の子達は地主神社に行っただしい。千雨達もそれを追って行き、俺達も流れに沿ってそちらへ向かう。

ふと後ろを振り返り、会話に耳を傾ける。

「先生ーっ！ 梶咲が清水の舞台から落ちましたー！」

「何！？ 直ぐに探して来い！」

「あわあわ、何で自分から跳んだのかなー！」

「仲芽黒、お前が分からないというのが、俺は分からない」

「……凄かったな。写真を取ろうとした時のアレはもはや親友と言  
う距離じゃ無かった」

「アレはもう恋人だよ。相咲の奴、脊髄反射でダイブしたし」

護と濱面の会話を聞いて現状を理解し、放っておいて先に進む。

同じ様に大半の生徒が気にすることなく地主神社へ向かって行く。  
俺が言うのもアレだが、薄情ですね、お前等。

地主神社。いわゆる縁結びだとか、恋愛成就だとかの話が多い神  
社。

其処に来た訳だが、雪広と佐々木が落とし穴に落ちてた。どうい  
う状況だよ。

「誰かが落とし穴を掘ったんじゃないのか？」

疑問に答える様に零がそう言う。いつから居た、お前。

こんな人の往来が多い場所で人二人が落ちる様な落とし穴掘れる  
とは思えないが……口　ツト団かよ。

つか、落とし穴って結構危ないんだぞ。落ちて周りの土や砂が  
崩れればそのまま生き埋めだからな？



「というか、零。お前俺の名前勝手に使っただろ？」

「何の事やら？ ……冗談は置いておくとして、別にこっちの方がいろいろと都合がいいからいいだろう」

それはそうだが、言われの無い事で責められるってのは気分が悪いんだよ。

「千雨とアスナ、木乃香はあっちの音羽の滝と言つものに向かったぞ」  
千雨達のいるであろう方向を指差しながらそんな事を言う。分かってるならお前が行けよ。何の為に女子中等部に転入させたと思つてんだ。

結局俺も向かう訳だが。

「……………どうする。私も飲んでみるか……………？」

「これを飲めば、結ばれる……………？」

「ウフフ、ちょっと一口飲んでみようかしら」

「え、ちづ姉好きな人がいるの？」

「好きな人ってわけじゃないけど、気になる人ならね」

音羽の滝を前に数名がブツブツ言っている。こっちに来た男共は耳を澄ませて聞いている。ストーカーかよ。

雪広、佐々木、鳴滝姉妹等は迷うことなく縁結びの滝の水を飲み始めているんだが……。

……アルコールの匂いがしないか？ あの滝。

「ちょ、ちよつとだけ飲んでみるか……」

「私は飲む。飲んで結ばれる……」

「あー、二人共。覚悟してるとこ悪いが、それ飲むな」

千雨とアスナがこつちに非難めいた視線を送る。まるで「覚悟したのに邪魔するのか」みたいな。というか、目が訴えてる。

「その滝、アルコールが含まれてる」

「……え？」

匂いだけだが、屋根の上を透視すれば酒樽が置いてあるのが見える。誰だよ、酒樽なんておいたバカは。関西の悪戯ってこんなレベルなのか？

さつさと通報だ。

「先生、どうやら酒樽を仕込まれていたらしく、3 - Aの数名が間違つて飲んでしまったようですが」

「む、そうか。新田先生。どうしますか？ 私は男子中等部に伝えて来ますが」

「そうですね。私は飲んで無い他の子と飲んでしまった子たちをバスに運びます」

俺、意外と先生からの信頼はあるんだ。成績的な感じで。素行は普通だからな。偶に千雨関係で暴走するだけで。

「……そっか、酔ってから潤也に運んで貰えば自然な流れで抱きつけるじゃない」

「それを口に出してる時点でどうかと思う」

後もう少し自重しようか、アスナ。最近暴走気味だぞ。小声だったとはいえ、近くにいた俺には聞こえてたし。

千雨ならともかく、アスナを背負って運ぶって無理じゃないか？ 対外的に。気にする様な俺でも無いが。

でも「彼女です」とか言う訳にもいかないしな。言ったら言っただで大騒ぎだろう。いろいろと。

朝倉とか早乙女とかが大騒ぎしそうだ。そんな事になった場合どの道やるけども。

こっした事もあり、予定を多少切り上げて旅館へと向かう事となった。

### 第三十一話「俺の時代がやってくる！」b y 濱面（後書き）

修学旅行始まったぜ、と言っ話。

> 落とし穴

最近ニユースでみた記憶がぼんやりと。実際結構危ないので気をつけてください。……いや、真面目に人が丸々落ちる様な穴掘る人とかいるのは知りませんが。

> アスナ

最近自重しなくなって来た。書いてるうちに暴走してしまうww

次回は夜。どうなるかは未だ迷ってます。どうしよう、次の展開。

第三十二話 『旅行、満喫してんなあ』 by 3・W (前書き)

無駄に長くなった気がする今回。悪乗りした様な気がしますが、気にしないでください(マテ)

第三十二話 『旅行、満喫してんなあ』 by 3 - W

清水寺からホテルへと向かうバスの中。

相咲の体には木の枝や葉が大量についていた。

「いやな……事件だったな」

俺は妙に神妙な面持ちで、相咲の顔を覗き込む。

「まさか本当に清水の舞台から落ちるとは思いませんでしたからねえ！」

それに対し、相咲が憤慨しながら答えた。

「いや、助けにいなかったのは……ククク、本当に済まないと思つて、クク……」

「笑いを堪えてんじゃねーよ！ 笑い事じゃすまないからね!？」

体に着いた枝や葉をポロポロと落としながら怒気を含めた声で返す。其処まで言う事……だな。結構大事件だわ、コレ。

だが、超能力の使えない一般人で通している俺にどうやって助けると言うつもりだろうか。

「護の超能力で助けてもらえばよかったのに」

「アイツの微妙な超能力でどうにかなると思つてたのか!？」

「おい、今聞き捨てならない事聞いたぞ」

本当の事だろうが。総じて『微妙』な超能力者め。

「ごめんね。でも僕、何も悪い事して無いと思うんだけど……」

「いやしたよ！ お前俺と清水寺から見る京都の写真撮ろうとした時、よりにもよって俺にすり寄ってきただろうが！！」

「うん、友達だもんね！」

「あの距離で友達かぁ……」

濱面が遠い目をしている。何を幻視してんだよ、お前。

胸板に頭を預ける様な形で写真を取ろうとしたらしい。よかったな、早乙女に見られなくて。見られてたら外を歩けなくなる。

「あのレベルはもう友達同士の写真じゃ絶対ねえよ！！」

「そ、そうかなあ。でも、だからって思いっきり飛び退いて清水寺からダイブしなくても良いと思うんだけど……」

「いや、もう俺のお前に対する反応は最早アレルギーレベルに達してるからな。俺は何も悪くない！」

仲芽黒は涙目になっていた。相咲は少し言い過ぎたか……みたい  
な感じで見てる。

それに対し、このクラスの反応はと言うと。

『榎咲、サイテー』

全く持って榎咲に敵しく、仲芽黒に甘いクラスメイトである。

「うっ……いや、清水寺から直行ダイブしたのを見て大爆笑していたお前等に言われたくねえよ！！ 誰一人として俺を心配しないお前等に言われたくねえよ！！」

「……それにしても、何でお前無傷なんだ？ 清水寺から落ちても生存率八十五パーセントとはいえ、怪我一つ無いってどういう事だよ？」

「奇跡だよ！ 唯の奇跡だよ！ 純粋な、まごうかたなき奇跡だよ！ 今回は奇跡によって偶々無傷だっただけで、仲芽黒が近づくとまたこうなる可能性があるからね！？」

それは清水寺から落ちた場合だろうが。別の事故にあう可能性もある訳だが。

「大丈夫だろ、清水寺から落ちても傷一つない。お前はそんな奴だもんな」

「いや、確かにお前の逆鱗に触れて何度か吹き飛ばされてるが、それとこれとは話が違うというか……」

「ホテルに向かっているんだ。今日はもう何もねーだろ」

「今日は、ってところが気になるんだが……というか、誰か一人ぐ



らい心配しろよ！ 清水寺直行ダイブ直後だぞ、俺！ 病院に連れて行け！ 怖いだろが！ 後、そんなクラスメイトに対して、かける言葉の一つくらいあるだろう！！」

その言葉に、俺達は顔を見合わせて、告げる

『旅行、満喫してんなあ』

「してねえよ！！」

そんな訳で、ホテルに俺達3 - Wはホテルへと向かっていた。

嵐山のホテル……もとい、旅館。

桜咲から請け負った時点でこの場所の買収は終わっていて、仕掛けは十全に施してある。まともに侵入しようものならあつという間に肉塊になる位のレベルだ。

当然男子のいる場所と女子のいる場所は違う訳で。近くではあつても、行き来できる場所であっても通り道には新田と酒之が待機している為、移動は不可能。

当然超えようとした者は課題 + 説教のコンビである。

「（そんな訳で、修学旅行での恒例行事。覗きを始めたいと思いま

す！）」

「（イエエエエエ！）」

小声で叫ぶ3・Wの生徒。誰しも潤也は怖いのだ。やらなければいいと思うかもしれないが、やらなければ男がすたる。とまあ、意味の分からない事になっていた。

簡単に言えば、修学旅行と言う事で気分が高揚し、やれると思っているのである。

当然、鬼神潤也にばればれば地獄行き。鬼先生に見つかれば説教＋課題と言う地獄行き。失敗する訳にはいかない。

スークの様に段ボールに入って移動。と言う訳でもなく、普通に会話しながら気付かれない様外に出て、会話さえせず静かに女子たちのいる別棟に向かっている。

息を殺し、壁と同化し、地面に隠れて時折外を見る生徒や先生達の視線を掻い潜り、女子たちのいる別棟の近くに辿りついた

瞬間に、全員気絶させられた。

「……アホか、こいつ等」

呟いたのは潤也。参加して無いのはまともだと言える一部の生徒のみ。それ以外は全員参加している。

先頭は相咲。先導したのもこいつだろう、と当たりを付ける。当然だが、正解だ。

止めたのは何も覗かせない為だけでは無い。女子のいる別棟は多数の仕掛けが施してあり、迂闊に侵入しようとするればあっという間にミンチになってしまう。

ここで気絶させなかった場合、肉塊に変わっていた可能性もある訳で。流石にクラスメイト十余名のスプラッタな死体など見たくは無。

知らないとはいえ、感謝してほしいと思う潤也であった。

露天風呂は混浴の為、潤也が急いで工事を始めて男女別にしようとしたが、間にあわないと判断した為中止。泣き寝入りせざるを得なかった温泉。

おかげで、ネギと桜咲達と同じ時間帯に入る事になってしまった。

だが、ネギは当初誰がいるか分からなかったので隠れてしまい、出るにすら出来なくなっていた。

「（あわわわ、ど、どうしようカモ君！？）」

「（慌てないでくださいませ、理由を話せばきっと分かってくれますって！）」

実際、刹那からしてみれば十才の少年等興味は無い。理由を話して直ぐに出れば文句も無いだろう。

だが、次の言葉でそれが薄れる。

「……潤也はこの旅館に仕掛けをしていると言っていたが、本当にあるのだろうか」

ポツリと呟かれた一言。

刹那からすれば、あまり関わりのない科学の方法で守る手段があると言われても、大丈夫かは心配な所である。

だからこそ呟かれ、ネギが気にした。

「（え……ど、どういう事だろう、カモ君）」

「（というか、潤也って誰ですかい？ 兄貴）」

「（あ、そっか、知らないよね。潤也さんって長谷川さんのお兄さんなんだよ）」

カモは絶句した。学園長から関わるなど言われている相手に接触している事にはならないのか、と。

接触するなど言われたのは千雨、アスナ、零の三人のみの為、どの道学園長が言った事には入っていないのだが。

(そう言う意味では、確かに接触して無い……よな?)

カモはそう考え、頭を捻る。

どうにかしてネギに従者を作りたい所だが、あの三人の存在がそれを阻む。少しでも抵触すれば死ぬ可能性があるのだ。流石に命は惜しい。

あの三人と関わらない範囲で従者を増やしたい所だが、まだ一日目の上、全員行動が同じな為に難しいのだ。

学園長があそこまで言う以上、あの三人に何か秘密があるのは間違いない事であり、危険でもあるという事。

刹那の呟いた人物名は、接触するなど言われた人物の兄。普通なら妹と同じように何かあると考えるのが普通であり。

その人物と接触をしている以上、危険を承知の上なのか、それも学園とは別のラインで繋がっているのかは確かめておきたい所ではある。

場合によっては命に関わるのだから、それ位は確かめたい。そう考え。

(だが、真正面から聞くとあっち側の耳に入る可能性もあるよな……)

どうにかして情報が手に入らないかと思いを巡らせる。刹那がこちら側と関わっているなら、真正面から聞けば絶対にあちらの耳に

入り、こちらの身の危険がある。

仮契約を成功させればオコジヨ協会からお金が出る。だが、命に代えても手に入れたいかと言えばそうではない為。

(……今聞くのは、危険だな。さっきの呟きを聞く限り、この旅館に何か仕掛けがある可能性がある。もしかしたら、会話も聞かれているかも知れねえ)

そう考え、この建物での会話は出来るだけ控えようと思った力モだった。

流石に露天風呂にまで盗聴器など仕掛けはしないのだが、其処まで頭が回らなかつたので気が付かなかつた。と言うか、分からなかつた。

「(兄貴、兄貴。取りあえず謝ってここから出ましょう。のぼせますぜ)」

「(う、うん)」

あまり長く入っていると湯にあたって肝心な時に動けなくなる。取りあえず考えるのは後にしてネギを湯から出そうと考え。

刹那に対して姿を現し、速攻で土下座をして許して貰った二人であつた。

とある場所、森の中。一つの小屋があった。

其処へ入るのは一人の女性。黒髪が腰まであり、眼鏡をかけた和服の女性だ。

左腕の部分が破けており、其処から見える左腕は全体的に痛々しく包帯が巻いてある。

「帰ったえ」

「千草姉ちゃん？ お嬢様誘拐するんじゃない無かったんか？」

「そうしたいのは山々やったんやけどな。あの旅館、意味の分からん仕掛けがしてあるんや」

真正面から従業員の振りをして侵入しようとしたが、いざ入ろうとした段階で左腕が不可視の何かで攻撃された。

危うく左腕全部を持っていかれる所だったが、式神を駆使して何とか逃げ、治療して動くまでに回復できた。

だが、一度やられている以上馬鹿の一つ覚えの様に同じ方法で侵入する気は無い。別の方法を探そうと仕掛けを探す為に探知の魔法を使ったが、何も成果は上がらず。

式神を侵入させようとしたが、建物に入る前に『消滅』している。

魔法的な攻撃ならば直ぐに分かるのだが、全く分からず、感知も出来ない。

即ち、『魔力』も『気』も用いずに不可思議な現象を犯しているという事。そんな事が出来る集団は一つしか心当たりが無く。

『超能力者』。

「……可能性は、あつたんやけどな」

「……『彼ら』かい？」

呟きに返したのは白髪の少年。フェイト・アーウエルンクス。

超能力者の力も規模も注意すべき敵ではあるが、魔法世界に対して何も干渉していない為、要注意人物に社長である『垣根帝督』以上の人物の名があげられているのみ。

特に注意すべきは『S M G』の『CEO』《最高経営責任者》である『湊<sup>みなと</sup> 啓太<sup>けいた</sup>』となっている。

何故ならば『S M G』創立以来変わっておらず、その科学力で『S M G』の社会的価値を押し上げた人物だからだ。

それを言えば社長の垣根帝督の方が有名ではある。だが、裏で操っているのはこの男だという噂もあるのだ。

実際には垣根は潤也の変装。湊は『<sup>メンタルアウト</sup>心理掌握』で洗脳した下っ端どちらも、いつでも社会的に首を切る為のスケープゴート程度の価値しかない。



「まあな。島根の一件で名の知れた『長谷川潤也』とその妹。少なくとも兄の方は『超能力者』やろ」

資料を捲りながらそう呟く。九条家と協力して『八岐大蛇』を討伐したとある。なら、少なくとも超能力が使えるという事は確実に考え。

「……しかし、『SMG』がお嬢様を匿う理由があるんか？」

「取引とか契約とかしたんちゃうか？」

犬耳の少年、犬上小太郎が床に寝そべりながらそう答える。

「そない簡単にいくかいな。それ以前に、『SMG』と取引した奴がだれか、やな。あの長が科学を信用するとは思えん」

魔術結社でも無い上、護衛を頼んでそのまま誘拐。等と言う事もあり得る。相当の信頼が無ければこの類の仕事は受けれない。

そもそも、長である近衛詠春とは繋がりが無い。以前協力して顔見知りになった、と言うだけでは理由としては弱いだろう。

それならば、可能性は複数ある。

「あの護衛が繋がつとるか、例の超能力者もしくはその妹繋がりがもう一人おった女は最近転校して来たらしいからそっちは無いやろな」

「可能性としては、超能力者が一番濃厚だろうね」

超能力者は全て『SMG』に所属している。否、『SMG』に所属している全ての者が超能力者。そう認識されているのだ。

こついつた類の能力は全てが後天的。原石であろうと人工的な能力者であろうと、見分けることなどできはしないのだから。

そう考えると、能力者では無い木乃香の護衛である桜咲と一般人と認識されている千雨は可能性として薄い。

「どの道アレじゃ建物に入られへん。どうやってか侵入する、もしくは外出の時に攫うしかないな」

「……千草さん」

「何や、月詠」

そう呼ばれたゴスロリ服の金髪少女は、外を見ながら指差す。

「あの紙飛行機。さっきから落ちずにこの周りをずっと回ってるんですが」

「……なんやて？」

瞬間、膨大な殺気と共に小屋が吹き飛んだ。

壁を破壊して外に転がり出た三人と、障壁で攻撃そのものを防いで、瞬動で距離を取ったフェイト。

全員直ぐ様敵を探し、見つける。

銀色のトレンチコートを身に纏い、フードを目深にかぶって顔は見えず、両手も指先まで覆われていて見えない。

風が吹き、トレンチコートが揺れる。チラツと見えるその手には、厚紙で折られた紙飛行機があつた。

『MAV』と呼ばれるモノだ。

モーターを数力所に設置し、フラップやラダーを組み込んだ上で、カメラと送受信機を機体の下面に両面テープで貼り付けて完成。ディスプレイカウンントシヨップで扱っている品だけで作られているお手軽品だ。

オモチャのラジコン電波のため、長距離間の操縦は出来ないことが欠点。だが、飛行速度は時速150km。追跡するのにこれほど適したおもちゃも中々無い。

「お前等が木乃香を狙う賊って事でいいのか？」

「……何もんや、お前」

気を抜かず、集中して敵を視る。一挙一動に精神を注ぎ、わずかな動きも見逃さない様に。

「まア、こんなモンかなア。昼間っからおかしな連中が纏わりついてウザかったんだよ」

口調が変わっている。それほどにイラついている、と言う事だ。

「七人。それだけ監視がいた訳だが、全員が別の派閥だ。面倒クセエつたらありやしねエ」

清水寺の観光時、監視をしていた逸般人。過激派と言う繋がりがあったものの、全部が個人で勝手に行動した者達だ。

それらすべて木乃香を狙っていた者達。そいつらに関してはご丁寧に退場願った。『六枚羽』を飛ばして『獵犬部隊』を動かして。

「何が言いてエかつつウとだな。手足の一本や二本、無くした位じゃ死にやしねエだろ？」

殺気が膨張すると同時、二人が動いた。

月詠は両手に持った二刀を振り、神鳴流奥義を放つ。小太郎は複数の犬神を両手に集め、放つ。

「にとゝ連撃、ざゝんがゝんけゝん！」

「疾空黒狼牙！」

「……実力の差アぐらい分かれ」

溜息でもつきそうな雰囲気のまま、動く事無く二人の動きを見る。

グシャッ！！と地面が陥没し、二人とも地面に叩きつけられた。

「な、なんやコレ……！？」

「う、動けません？」

『念動力』<sup>テレキネシス</sup>による上からの極大な圧力。まともな人間なら骨が砕けていても何ら不思議ではない。だが、気で身体を強化した人間は、これ位しなければ押さえつけられないのだ。

「月詠、小太郎!？」

二人とも性格が難ではあるが、ある程度の実力者ではある。それを、動きもせずに制圧した。

戦力を失った上、圧倒的に上回る実力だと判断した。こうなれば、勝てる可能性は少ない。

更に、魔力も気も感じない。こんな現象を起こしておきながら魔力も気も用いていないという事は、答えは一つしかない。

「『超能力者』……クツ!……」

善鬼と護鬼である、猿鬼<sup>エンキ</sup>と熊鬼<sup>ユウキ</sup>を召喚する。見た目に反して中々強力な方に入るが、この敵が相手ではどれくらい持つか分からない。

そう考え、フェイトも動き出す。

瞬動で懐に入り込み、防ぐ気のない腹部へと魔力を集中した右手で掌底を喰らわせる。当たれば確実に敵を悶絶させられる一撃だ。

それと同時に、折れる右腕。当たったにも関わらず、手応えの無い攻撃。

「?」

理解が出来ない。

攻撃をしたのも、喰らわせたのもこちら側。なのに、ダメージを受けたのもこちら。混乱こそしないが、戸惑いはある。

潤也は左の掌をフェイトへと向け、そのまま窒素の槍を高速で射出する。

強烈な衝撃を障壁で防ぎ、距離を取って右腕を見る。折れてはいませんが、直ぐに治るだろう。問題は無いと判断し。

「……退くよ、千草さん」

相手にするには、分が悪いとも判断した。

敵の情報が少なすぎる。少なくとも、初見でどうにかなる相手ではないと考え。

水を媒介とした『扉<sup>ゲイト</sup>』の魔法で千草を送り、潤也と相対する。

見捨てるという選択肢もあるにはある。だが、戦力が絶対的に足りないのだ。木乃香には護衛もいる。

フェイト一人でも出来ない事は無いだろうが、負担が半端では無い上に、そもそも一人ではハードスケジュールなどと言うレベルでは無い。

出来る限りは回収したく。

「ヴィシュ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ その光 我が手に宿し 災いなる 眼差しで射よ 『石化の邪眼』」

指先より放たれるは石化の光線。当たれば敵を石化し、行動不能にさせる事の出来る魔法だ。

だが、それさえ通じない。

放たれた光線は当たる瞬間に軌道を変え、フェイト自身へと襲い掛かる。

それに一瞬で気付けたのは僥倖だろう。下手をすれば、自分で自分を石化させる所だったのだから。

間一髪で避け、もう一度距離を取って思考をする。

(……魔法の軌道が、捻じ曲げられた?)

魔力に干渉している訳ではない。魔法の軌道そのものを変えられた。超能力にそんな物があるのかと考え、別の方法を探す。

「ヴィシュ・タル リ・シユタル ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う 毒の吐息を 『石の息吹』」

現れるのは巨大な石化の雲。これも、当たれば石化する魔法だ。

だが、当然の様に潤也には効いていない。当たっているにも関わらず、だ。

しかし、目的はそちらでは無い。

煙が晴れた時、その場には潤也以外誰もいなかった。

つまり、目くらまし。まともに対しても石化できないなら、隠れる為の蓑にすれば良い。

「……ハア、追うのも面倒だしなあ。関西の長に情報流すか」

眠い……と呟き、右手に持った注射器を『王の財宝』に投げ捨てる。

石化の煙を出した瞬間、小太郎と月詠に刺して置いた。中身はキツチリ注入し、効果は既に出ている。

位置はいつでも補足できる。これ以上は自分が動く必要は無いし、動く気も無い。関西に情報を流して勝手に争って貰おうと考え。

取りあえずは旅館に戻ろう。そう考えた潤也だった。



第三十二話 『旅行、満喫してんなあ』 by 3・W (後書き)

修学旅行一日目夜の話。

なんかちよつと失敗した気もしますが、取りあえずこれで(何

>カモ

ここまで深い考え出来るかなあ?と疑問はありますが、取りあえず  
(ry  
命がかかってるから考えが回ると考えてください。

>刹那

感想であつたんで入れてみた。例によって後悔も反省はしていない  
(何  
結局咳きは聞かれていたとは気付いていないせつちゃんでした。原  
作でもこういう感じだったなあ、と思ったので。

>CEO

最近ニュースでどっかのCEOが辞職?したなあ、とまた思い出  
て書いてみた。  
名前は三秒で思いつきましたが、どっかで見た事あるな、これ……  
?思い出せません。多分字は違うと思いますが。

というか、最高責任者は社長だよね!という無知をさらけ出して  
た今までが恥ずかしい。

>注射器

この意味は次回……(多分)出ると思います。自信はありません  
が。

次回は二回目。後関西のちよつとした動きを予定。

**第三十三話「其処までやる必要があるのですか？」 b y 八重（前書き）**

サブタイ変えてみました。分かり辛いとの意見もありましたし、俺もどれがどれか分からなかったので（え

後章分けもやってみました。

### 第三十三話「其処までやる必要があるのですか？」by八重

時は少々遡る。

千草が侵入を諦め、その姿を『MAV』で追い初めて数十分後。

突如としてなるコール音。男はこれを『仕事用』だと判断し、電話に出る。

クリアな音声が聞こえ、頭の中でスイッチを入れ替える。

『八重、仕事だ。清水寺で監視してた連中から手に入れた情報を使って、大本の連中を襲撃しろ。生きていた方が都合は良いが強制はしない』

淡々と、内容を告げる。初めから拒否権など存在していない。

「了解しました。『獵犬部隊』を使い、襲撃を」

『《六枚羽》を用意した。お前が操作して潰せ』

その言葉に、驚きを隠せない。

六枚羽。正式名称『HSAFH-11』。『SMG』の有する最新鋭の無人攻撃ヘリだ。

AH-64アパッチにも似た、機体の左右に機銃やミサイルなどを搭載するための『羽』を持ち、回転翼の補助動力として二基のロケットエンジンを搭載、最大速度はマッハ2.5にも達する。

六枚の『羽』は関節を持ち、まるで人間のような動きで六方向へと攻撃を仕掛けることが可能となっている。

フレイムクラッシュ  
摩擦弾頭や砂鉄と高圧電流によって20メートル四方の面を電磁エリアにする対ミサイル兵器なども搭載している戦闘ヘリ。

ちなみに一機で250億円ほどする超高級品だ。

その性能は、そこらの紛争地域に放てば簡単に制圧できるほど。

それを、たかが関西の一部の連中を潰す為だけに攻撃させるとい  
う。驚きが隠せなくて当然だろう。

「其処までやる必要があるのですか？」

『何、唯の見せしめだ。全く持ってウザッテエ連中だよ。コソコソと人の周りを嗅ぎ回りやがって。あまりに目に着くモンだから潰して置く』

イラつきを隠そうともせず、電話の主は話す。クリアな音声故に小さなつぶやきまで聞こえるのだ。

『今こっちは旅館に侵入しようとした馬鹿を追ってる。潰してから、もしくは適当に発信機ナビデバイスでも付けてから帰る』

「分かりました。この辺りの航空管制などは？」

『対処済みだ。一時間以内で始末しろ』

相変わらず仕事が速い。そう感じて思わず感嘆する。

通話が切られ、携帯を閉じて立ち上がる。手にノートパソコンを持って座っていた場所に戻り、起動させてヘリへとアクセスする。

コンタクトレンズを付け、パソコンと連動させる。視界に移るのはヘリから見える状況だ。それと同時にいくつかのモニタも表示され、コマンドを打ち込んでいく。

あくまでも表示させる事だけに拘り、余計なシステムは付けていない。耳の上に付けた円形の特殊な機械で脳波を観測してコマンドを打ち込み、状態に応じて画面を変化させる。

パソコンはカモフラージュだ。が、完全に不要と言う訳では無い。コマンドを打ち込むにはやはりパソコンを通す必要がある。

パスワードは既に知っている。というか、面倒だからと変えていないのだ。元々アクセスするのが自分か彼かしかない為、必要性もあまり無い。

そもそもこの回線をハックできるレベルのハッカーやクラッカーがいたとしても、電気信号そのものを操作できる彼を超えるハッカーは存在しえない。

故に、ある程度のレベルの難易度であれば問題無いのだ。

『六枚羽』に付けられているカメラから状況を判断し、遠隔操作を開始する。

「瀬流彦先生。そろそろ消灯時間ですから、見周りをして来ます」

「あ、新田先生。分かりました。僕もこの作業が終わり次第見周りに行きます」

コンタクトに移っている景色を消し、少し離れた場所に立つ新田先生を見る。へりに関してはある程度自律行動が出来る。コマンドは既に与えてある為、勝手に動くだろうと判断し。

「大変ですね。資料作成ですか？」

「ええ、まあ。学校の仕事を修学旅行中にやるというのも少々アレですが、時間がなかなか取れないものでして」

「明日もありますから、あまりやり過ぎるとキツイですよ。では、私は行って来ますから」

「すみません」

苦笑しながら、男 瀬流彦はパソコンを操作する。認識障害の魔法を使っている為、バレル事は無い。

頭のスイッチの切り替えは既に慣れている。こういった二面性のある生活も、大変だが悪くは無い。

関西地方某所。

へりが空気を引き裂き、上空からマシンガンを放ち続ける。

飛び交う怒号、悲鳴、絶叫。弾丸はSRゴム弾という特殊なものを使っている為、気絶はしても死ぬ事は無い。が、当たり所が悪ければ骨折ぐらいはするだろう。

しかし彼らも攻撃されっぱなしではない。符を使い、上空にいるへりに攻撃をする。

だが、最高速度はマツハ2を超える上、人間の関節の様に動く『羽』を使い、符による攻撃は銃撃で尽く撃ち落とす事が出来るのだ。そもそも、機動力がちがう。当たらない上に虚空瞬動を使って上空へ跳べば銃撃の良的になってしまう。

まあ、虚空瞬動を使えるほどの使い手など、数えるほどしかないのだが。

制圧には十分も必要ない。後は回収をさせるのみ。それは流石にへりでやる事は出来ない為、『獵犬部隊』を派遣した。



旅館。完全制圧後。

またもコール音が鳴り、電話に出る。

「今度はどうしましたか？」

『敵の内二人に発信機ナソデバイスを注入しておいた。関西に潰した奴らの場所と一緒に情報を流せ』

「了解しました。こちらにも既に制圧済みです」

『当然だろう。態々六枚羽まで引っ張り出したんだからな』

『獵犬部隊』を使っても、ここまで速く制圧は出来なかっただろう。それほどの戦力持つ兵器だ。

『発信機ナソデバイス。無痛注射針モスキートニードルと呼ばれる注射によって、皮膚の浅い部分に埋め込んだ極小の機械の事だ。

本来、『能力者』の拉致などを防ぐ為に島にいる能力者以外は殆どこれを入れている。が、重要度によって使う発信機の信号がちがう。

暗部と唯の能力者では価値どころか情報の深さが全く違うので分けられている様に、全てが同じでは無い。平等な扱いなどされていない。

今回月詠と小太郎に埋め込んだのは、敵を示す為のモノ。姿は既

に衛星で補足済み。後は適当に発信機を追う為の機械を関西に渡してやればいい。

これで迅速な行動を起こさないようなら、それが関西と認識するしかないだろう。

京都某所。千草グループ。

四人は追われている。関西のいくつかの過激派を抱き込み、協力を得て今回の事件を決行した。

だが、初日に誘拐する筈も失敗し、あまつさえ隠れ家知られてしまった。これは千草自身も負い目を感じるが、頭では既に切り替えている。

次に上げるのは、追って来た人物。

銀のトレンチコートを着た、機嫌の悪そうな少年。

彼はあつという間に二人を戦闘が出来ぬようにして、自身が新入りと呼ぶ白髪の少年の腕をどうやってか、へし折った。

白髪の少年は千草を転移させ、その後地面に押さえつけられてい

た二人を連れて別に用意していた隠れ家へと移動。

追跡用の魔法も使われていない為、追手は無いだろうと確信していた。

だが、その期待は見事に裏切られる。

翌朝、千草が目覚めた時、白髪の少年　フェイトは外にいた。

その近くには、いくつもの石像。精巧に作られていて、まるで人間をそのまま石に変えたかのような出来のよさだ。

いや、事実として人間をそのまま石化したのだろう。

先日折られた筈の右腕を違和感なく動かしながら、少年は振り返った。

「起きましたか？　関西の追手がかかっている。場所が割れてるみたいですが」

「……昨日の夜は、追跡されてへんゆうとったやないか」

「『魔法的な方法』では、ですがね。科学製品ならお手上げです」  
相変わらず無表情でそう告げる。あくまで『新入り』と言う立場の為、敬語は外さない。

どちらにせよ、このままここにはまた追手が来るだろうと判断し、別の隠れ家に行くこうとして、止める。

もしかすると、隠れ家の場所がばれてしまつてしまつたに探しているのかもしれない。なら、態々火の中に飛び込むような真似は出来ない。

適当な場所に隠れ家を新しく用意するか、何処かのホテル。または協力者の家に転がり込むか。

どの道、今日一日はこの事で潰されそうだと歯ぎしりをする。

「せやけど、こんな事じゃとまらへん。絶対に攫つたる。攫つて、魔力つこうて、『アレ』を操つたる」

覚悟を決め直し、次にどう動くかを考える。

ここまで来た以上、引き返す事は出来ないのだから。徹底的にやっつてしまおうと考える。どの道失敗すれば明日は無い。

(……協力してくれる手筈の過激派の連中を訪ねてみようかいな)

追跡されているのなら、其処を頼れば否が応でも助力をしなければならなくなる。長に敵と繋がっているとされれば、謀反を企てているとして捕まる恐れもあるのだから。

「新入り……いや、フェイトはん。二人を起こして来ておくんなまし」

「分かりました」

さて、と一息つき、最初に当たる人物を考える

修学旅行二日目、朝。

大広間に集まり、男子と女子で分かれて朝食を取る為に集まっていた。

各々欠伸や背伸びをして眼を覚まそうとしており、朝食の時間が来るのを待っている。

「それでは麻帆良中のみなさん。いただきます」

『いただきますーす』

ネギの合掌に合わせて合掌し、朝食を食べ始める。

男ばかりのむさ苦しいスペースと女ばかりの華やかなスペースが出来ており、男子の連中はチラチラと女子を見ていた。

昨日の覗き未遂で潤也に制裁され、先生達に引き渡されたメンバーは正座と課題・説教のコンボを喰らい、眠そうに船を漕いでいる。

「……だー、クソ。ねみいなチクショー……」

そんな中、眼を半分開き、寝てるのか起きてるのか分からない様な状態で潤也は朝食を食べている。

自分一人がいなくても誤魔化すのは難しく無い。幻覚を見せていてもいいが、後で記憶を弄っておいた方が楽だ。

フェイト達を逃がした後、関西に情報を流して、潰した過激派の連中を引き渡し、旅館の外に出来た血痕を消すなどの後始末をして寝た訳だが。

一日目から既に寝不足な状態だった為、眠くてしょうがない。と言った所である。

別に数日寝なくても平気ではあるが、頭を働かせるにはやはり寝た方がいい訳で。部屋に戻ったらまた寝るかなあ。等と考えていたりする。

ゆっくり朝食を食べ、ロビーに出る。眠気を覚まそうと珈琲を買い、一口仰ぐ。

軽く眠気が取れ、今日こそ速く寝ようと誓う。修学旅行で速く寝るといっても随分変わっているのだが。

「潤也」

声が出た方を向くと、千雨が来ていた。既にいつも通り髪を纏めて眼鏡をかけている。

ロビーの奥の方ではネギと数名が騒いでいるようだが、気にしない。

「ん？ どうした、千雨」

「昨日どこにいた？」

「何処って、自分の部屋にだけど？」

「嘘だろ？ 護が昨日は部屋にいなかったって言ってたからな」

あの野郎。と額に青筋を浮かべながら考える。どうにも同じ精神系の能力（と言ってても天と地ほどの差があるが）を使う為、どうしても効き辛くなるらしい。

護はレベルで言うところと同然だが、それでも精神系の能力を使う事には変わらないのだから。軽くとはいえ抵抗出来るらしい。

「……また、面倒事か？ 木乃香が狙われてるって言ってたし、その関係か？」

「んー……まあ、面倒ではあるが、木乃香は関係無いよ」

「嘘はつかなくていい」

潤也の嘘が一瞬で看破された。

「お前、昔から嘘を吐くと癖が出るからな。直ぐに分かる」

「あらら……癖があったのか、俺」

心配させないようにとの配慮だったが、どうやら千雨には通じないらしい。

「ま、ちよつと警告与えてきたし、今日は動かないだろう。動くな  
ら班別行動でバラバラになる明日だろうな」

「そうか。……ちなみに、警告つてなにやったんだ？」

「軽く戦闘して、後は発信機付けてきた。動きは筒抜けだから直ぐに分かるよ」

それ以外にも監視していた連中を一網打尽にしたり、過激派を潰すよう関西をけしかけたり、木乃香の事に目がいかない様にくつか仕掛けている。

どの道修学旅行が終わればこの件に関してはノータッチ。潰すかどうかで言えば潰した方が速いのだろうが、如何せん、数が多い。

余計な騒ぎで修学旅行に支障が出るのも嫌なので、関西に任せる事にする。特に信用も信頼もしていないが。

「危険になつたりしないだろうな」

「俺がいるんだし、大丈夫だよ。念の為に零もいる訳だし、何かあっても対処できる」

仮に核が降つてきても何とかして見せるだろう。方法は未定だが。



「今日の奈良観光。宮崎達と行くんだろ？」

「ああ、木乃香と一緒に行くって言うてたし、私達も特に反対しなかったからな」

ちなみに宮崎、早乙女、綾瀬、古菲の四人。3・Aの総数が二十九人の為、どうしても何処か四人になるのだ。

古菲に関しては元々組んでたメンバーが六人多いと言う事になり、宮崎達の班に入った。仲が悪いという訳ではなく、バカレンジャーつながりもあるので問題は無いだろう。

その他のクラスおよび班についてはそれとなく護衛が付いている。過激派があれだけ動いている状態で長の方を信用できる筈も無い。

まあ、実際今日は奈良一か所なので護衛もしやすい。怪しい奴は片っ端から打ち抜くとか言う訳にもいかないが。

雑談をしつつ、ロビーに全員集まり、それぞれが奈良へと向かう。

第三十三話「其処までやる必要があるのですか？」by八重（後書き）

前回の夜の裏の話。というか、予想以上に長くなって奈良に入れなかった。

>六枚羽

描写を出してほしいとの要望もありましたし、分かんない人もいるだろうと説明つきで出してみました。

完全にオーバーキルなスペックですがww

>八重

実は瀬流彦と言う話。いや、多分大多数の人は分かってたと思いますが。

>コンタクトレンズ

アレイスターは虚空にモニター出してたし、大丈夫だよね！（え多少勝手な想像含んでいます。

>注射

前回のアレ。発信機を皮膚の薄い部分に刺し込んだ訳です。逃げられません。

でも月詠と小太郎を見捨てればまだ逃げられたりしますが（オイ

>フェイト

実際、機械に強いかと言われると首を傾げざるを得ない。その辺は分かりませんから。

……いや、でもマガジンの最新話で科学用語使ってたしな。インストールすれば大丈夫とか言ってたし。

次回、次回こそ奈良の話。何割かは出来てるんで今度は速い筈。



ルくらいの鹿の円が出来ていた。

「……え、どうなってるの?」

早乙女や綾瀬が物珍しそうにこっちを見ている。俺はそれに反応しない。

「潤也の恐ろしさに鹿は本能で気付いているんぼへあ!」

相咲に軽いジャブをかましつつ、鹿煎餅を千雨達に渡す。どうにも動物には嫌われているらしい……というか、『エレクトロマスター電撃使い』のAI Mで電磁波が出るから動物には避けられるんだよな。

猫なんかにはよく避けられたりしてるが、普段から動物と触れ合ったりしないから忘れ気味なんだ。

「動物除けとして最適だよな」

「人を蚊取り線香みたいに言わないでもらえますかねえ!」

いや、ちよつと違う気がするけども。

つーかどこの異常な<sup>アブノーマル</sup>万能生徒会長だ。動物に避けられるとか。

触れ合いたいなら、『エレクトロマスター電撃使い』の能力を使わないようにすればいいんだが、死角からの奇襲も察知できるから便利なんだよな。

俺自身は別に反射があるから良いが、どこに敵がいるか分かったもんじゃないし。『イマジンプレイカー幻想殺し』は論外。

そんな訳で、俺は団子屋でお茶と団子を楽しむことにした。

千雨達に眼に見える範囲にいるよー、と言いつつ団子を食べ、お茶を飲む。

ふう、美味しい。

「あら、潤也さん。一人で何をしているんですの？」

「さん付けはヤメロ。背中がむず痒くなる」

現れた雪広。普段と違ってポニーテールにしてるが、何か理由でもあるのか？

特に気にする様な事でも無いが、普段と違うので少し興味が出た。でも聞く気は無い。

「というか、潤也君は何してんの？ 千雨ちゃん達と一緒にいるもんだとばかり思ってたけど」

「鹿に嫌われてるんだ、俺は。近づけないんだよ」

経緯を話したら朝倉に盛大に笑われた。其処まで面白いか？

千雨達が鹿と触れ合っていると俺は其処行けないんだよな。避けられるから触れあえないし。

「その団子美味しそうだね。食べてもいい？」

「金払えよ」

「千雨ちゃんと……アスナの写真も付けるよ?」

「おっちゃん、団子追加!」

「えらく簡単に掌返しましたわね……」

俺と朝倉の取引に溜息をつきつつそんな事を呟く。いや、別に悪い事じゃないだろう?」

実際幾らでも写真を撮ろうと思えば撮れるんだが、確実に問い詰められるしな。『アンダーライン滞空回線』の事は誰にも話す訳にはいかない。

その点、朝倉から買ったと言えれば問題は無い。……別の問題が浮上した気もするが。

「お前等も好きなの頼んでいいよ。金なら払ってやるから」

「あら、いいの?」

「金はあるからな。千鶴は何が良い? 村上もザジもコツチ来て頼んでいいぞ」

「スンマセーン! 団子ください!」

横から現れた仲芽黒除くウチの班員達が、俺の言葉を聞いていたのか、直ぐ様団子を注文した。

というか、いつの間にかこっち来た。千雨達と一緒に鹿に煎餅やってたんじゃねーのかよ。あんなにはしゃいでたくせに。

「あ、お前等は自腹だぞ？」

「ハア？ 女尊男卑の激しい奴だな。良いだろ、団子位」

「俺はいつでも男女平等だ」

「なら俺達を差別するのも止めろよ」

「差別じゃねーよ。分別だ」

『俺達ゴミ扱い！？』

俺達のやり取りに笑いながら、千鶴や雪広達が各々好きな物を頼んでいる。

「ズズツ……お茶がうめえ」

基本的に珈琲派だが、偶には緑茶も悪くない。これぞ日本人の嗜み。紅茶はあまり好きな方ではないが。

「……所で、潤也君」

ズズズ。とお茶を飲みながら朝倉が俺の方を向く。俺は団子を口に入れながらそれを横目で見る。

「アスナとはどこまで進んだの？」

「どこまで、とは？」



「とぼけなくて良いつて。この間二人でデートした事くらい知ってるんだからさ」

朝倉がニヤニヤしながらそう言っつて近づいてくる。パパラッチ精神は良いが、相手を選べ。

最悪、記憶を弄られるからな。俺はしないけど。やってもいいがここでやると後が面倒だ。近くに知り合いがいると挙動がおかしくなるから不審に思われる。

「……お前としては、どこまで進んでると思っつてるんだ？」

「そうだね……一番進んでてホテル行き、進んで無かったら手を繋ぐまで。かな？」

俺達の会話に全員が耳を傾けているのか、この場にいる全員が無言だった。其処まで気になるのか、俺とアスナの関係。

というか、中学生でホテル行きて馬鹿じゃねーの？ いや、其処まで行く奴らは行くんだろが、俺は行かねーよ？

「ふむ……一緒に遊びに行くまでだな」

「だからさ、そつ言っつんじゃなくて。キスとかしたの？ っつて聞いてる訳」

豪くストレートに聞くな。本人に其処まで聞ける辺り、存外豪胆らしい。いや、元からこうか。パパラッチだし、東堂さんの弟子みたいいな奴だし。

みたいってか、弟子だし。

「お前が期待してるようなエピソードは無いよ」

「本当？ 隠してるんじゃないの？」

ズズイッ、っと寄ってきて更に聞き質そうとする。手にはボイスレコーダー。ここで聞いた事を後で記事にでもする気か？

お茶を一口飲み、気持ちを押さえつける。あまりにウザいと口より先に手が出そうになるからな。

「だからそんなのは無いんだって」

「本当に？ デートするぐらい仲いいんだしさ、寮にも遊びに行ってるって聞くよ？」

「朝倉」

「やっぱりさ、デート行ったとかとはちょっと違う……」  
「うっ、甘酸っぱいエピソードとか無いの？」

「朝倉」

唯の一言。名前を呼んだだけ。

そして横を見ると、俺の方を向いた朝倉と眼が合う。それだけで、朝倉の額に冷や汗が浮かんだ。

「わ、分かった。分かったから……」

さつきまでの態度が一変し、あっさりと身を引く朝倉。素直な奴は好きだよ、俺は。

寝不足な事もあって、今の俺は少しばかり気が立ってる……らしい。奈良に出発する前に千雨に言われたんだよな。自分じゃよく分からん。

団子を一口食べ、甘い味が口内を満たし、気分がよくなる。やはり甘味は良いな。

「潤也君」

「ん？ どうした、千鶴」

団子を食べながら、隣にいる千鶴の方を向く。

「女の子にあんな顔を向けちゃ駄目よ。怖いんだから」

隣からそう言われ、苦笑する。

「そうだな、今度から気を付ける」

「朝倉さんももう少し礼儀をわきまえてください。プライベートに入り込みすぎですよ」

「は、はい。……何で私こんな目に……」

自業自得という言葉を知ってるか？ 言わないが、それを分かって無いとまたやりそうだな、コイツ。

「……何か、今日の潤也は機嫌が悪いな」

「昨日はさっさと一人で寝てたし、なんか嫌な事でもあったのか？」

後ろで護達がそんな事を話していると、千雨達がこっちに寄って来た。

「楽しめたか？ 鹿に餌やり」

「まあ、そこそこな。所で何だこの状況」

「団子食ってるんだよ。食べる？」

余ってた団子を千雨達に分け、新しく注文する。

早乙女達はネギと宮崎をどうこうと話してたし、なんかやってるんだろう。早乙女がいないだけで随分と楽。

桜咲を無理矢理残らせている零は木乃香に感謝されたりしているが、其処まで言う事でも無いだろ。

それより俺は昨日の白髪が頭に引つかかる。

あの見た目といい、実力といい、関西の一派では無い事は明白だった。それ以前に西洋魔法使ってたし。

後々重要なキーの人物だったと思うんだが……原作なんて元からあんま覚えて無かったし、覚えてた部分も役に立ちそうに無かったから放っておいたんだよなあ。

案の定忘れたよ。魔法世界がなんたらって言ってた気もする。いつかまた会うときがあるならその時間聞くか。

まあ話し合いをするような状況なら、の話だけど。

「食べ終わったみたいだし、修学旅行の目的の大仏を見て写真撮った後、適当に回ろうぜ」

「そうね。後でどんなだったとか感想書かされるに決まってるし」

アスナが同調してカメラを取り出した。修学旅行は学を修める旅行だからな、新田辺りはちゃんとそう言うのを用意してるんだらう。

零は座りもせずには辺りを見ていて、桜咲は木乃香の近くで釘づけにされている。一体何やったよ、零。

桜咲は一秒でも早くここから離れたいと思っているのか、俺の方に視線を向ける。木乃香は対照的にニコニコして桜咲に近づいている。

……………。

「よし、出発するか」

桜咲を放って、大仏を写真に収めているいろいろメモする為に歩きだした。

「大仏だったって、何をメモすればいいんだ？」

「いつ作られたとか、歴史とかじゃねーの？」

「誰が作ったとか、何を目的で作ったとか、そう言うのも入れてみれば良いんじゃないか？」

ウチのクラスの連中は嫌いな事は速く終わらせようとする。

それは別に構わないんだが、こういうときだけ無駄に脳がハイスベックになるんだよな。何故？

普段からやれよと思うが、言っても無駄なのでスルー。

デカイ大仏を見るのに首を曲げながら進み、一人の女性とすれ違  
う。

ポケットに入った一枚の紙を取り出し、流し読みして握り潰して  
燃やす。当然、外に出てからやった。

内容は『関西の一派が動いた』との事。

始末は既に終わり、奈良に入る前に関西で始末を付けられたら  
しい。ま、少しは仕事が出来る様だな。これでまた敵が襲ってきたら  
関西は無能だと言ってやりたい。

……いや、あの白髪は関西じゃ無理だろうな。確実に実力の差が  
あり過ぎる。

魔力量、魔法の質、詠唱速度。どれをとっても超一流だ。ウチの  
連中にしても関西にしても、アレを相手に勝つのは難しい。

『サムライマスター』近衛詠春。本人の実力は知らないが、長く政治の世界に浸かっていた事、歳の事もあって実力は全盛期とは言い難い筈だ。

本山は結強力な界が張られていると言いが、奴なら破れるかもしれんな。

こうなると、『スクール』を連れて来なかったのが悔やまれる。単純な戦闘能力なら『グループ』のメンバーを凌ぐ奴が殆ど、何より『超能力者』がいる。

「……ま、今更考えても仕方ないか」

「……また危ない事してるの？」

アスナが隣でそんな事を聞いて来た。やはり迂闊に喋らない方が良かったか。心配させるだけだろうし。

他の奴らは少し先の方を歩いている。雑談しながら、俺達も離され無い様近づき過ぎない様歩き続ける。

「いや、関西が内部でぶつかり合ってるらしい。被害は奈良<sup>こと</sup>まで及ぶ事は無いだろう」

「そう……でも、関西っていうと、木乃香の実家なんですよ？ こっちに部隊向けられたら不味く無い？」

「それこそ俺の出番だろう。何の為に一緒にいると思ってるんだ」

「一緒に回る為でしょ。護衛とか、そんなのは考えなくて良いのよ」  
一瞬、キョトンとした。

「……ハハハ。そうだな、そりゃそうだ。折角の修学旅行だし、楽しまなきゃ損だ」

第一目的は楽しむ事。

それ以外は全部二の次だ。護衛は他の奴にやらせりゃいいし、俺が動く必要性は全く持って無い。

「昨日もあんまり寝て無いんですよ。護から聞いた」

アイツは本当に口が軽い。昨日の夜はしっかりと対処した筈だが、やはり少し甘かったらしい。

千雨に話した事といい、少し説教が必要か？

「俺は数日なら寝なくても大丈夫なの。というか、昨日はちゃんと睡眠とってたって。隈だって出来て無いだろ？」

「潤也はそんなの自分の力でどうにかしそうだから、そう言うのは当てにならないの」

あらら……殆ど寝て無いのはばれてるらしい。

どうして俺の周りの女はこう勘が良いのかね。誤魔化すのも一苦労だ。



それでも誤魔化しきるけどな。

「大丈夫だって。自分の体の事は自分が一番分かってるし、問題無い」

まあ、今も十分眠いんだがな。出来る事なら今すぐ寝たい位に。

「……無理しちゃ駄目だよ？」

「分かってるよ」

そう言ったのを聞いて、アスナは前の奴らと合流した。

出来る限り楽はしたい、が。懸念事項がある。

ヨルダンで手に入れた手紙。『SMG』に対抗する為に組織単位で有志を募っている連中。なら、この関西の騒ぎにまで便乗してくる可能性もある。

過激派に手を貸して俺達を敵に回し、鬼神を蘇らせて対抗するつもりかも知れない。

あくまで可能性。だが、ゼロと言い切れないのがまた痛い。

「……前途多難だな」

眩きは風に消えて、俺は千雨達を追いながらゆっくりと歩き続ける。

昼食を食べ、午後。

近くの土産物屋でアクセサリーやらなんやらを見て回り、適当に時間を潰す。

見当たらなかった早乙女達はというと、宮崎がネギに告白する為  
に手伝ってたと言っていた。

告白されたネギはそのまま倒れ、熱を出して旅館へ運ばれたらしい。

「何やら考え過ぎで知恵熱が出たようです」

綾瀬はそう言ったが、知恵熱って生後半年から一年ぐらいの頃の乳児に見られる発熱の事だぞ？

それを使っつて事は、普段頭を使わないとか、赤ん坊並みって意味だからな？ 天才少年知恵熱を出すってか。皮肉ってるな、オイ。

「……告白、かぁ」

「勇気あるんだな、宮崎」

相手は十才の子供だけだな。

アスナがチラツチラツとこっちを見ている。何を期待してるんだ、お前は。

それを見ながら零は笑ってるし。木乃香は相変わらずニコニコし

ているし。千雨はジツと俺を見てるし。刹那は状況が把握できなくてハテナマークが頭の上に見えるし。

相咲達は呪いの様に何やら呟きながら地面を叩いてるし。仲芽黒はそんな相咲に何やら言っつて相咲は地面を転がり出すし。

正にカオス。

「……………」

この状況で、俺にどうしろと？

俺が何の反応もしなかったら、ほぼ全員が一斉に溜息を吐いた。

「まあ、潤也だしな」

「そうね、潤也だしね」

なんか俺だからっていうのが通じてるのが怖い。何だよ、どういう意味だよ、俺だからって。

「…………取りあえず、もうバスの時間だから帰るぞ」

ここにこれ以上いたらまたおかしな事になりそうな気がしてしょうがない。

帰りのバスで相咲達がウザかったのは言っつまでも無い。

第三十四話「……告白、かぁ」byアスナ（後書き）

修学旅行二日目、昼の話。

なんかいろいろ伏線出した気がします。スクールとかいろいろ。麻帆良祭で出ます。禁書の十五巻が好き過ぎて困る……。

> 知恵熱

Wikiより抜粋。実際あるわけねーだろ、と。

> 朝倉

この後結局千雨とアスナの写真を渡す事になります。というか、こいつとカモ。次回で死なないと良いけど。

次回は夜。ラブキス……多分ある。朝倉とカモが死なない様に頑張ります（何

第三十五話「そんな小難しい話は分かんねーよ」by千雨（前書き）

予想以上に話が進まなかった。ぶっちゃけ飛ばしても何の問題も無いんじゃないの？ という回（オイ

小難しい話が多いです。サブタイ通り。後は思考するシーンが多い。

第三十五話「そんな小難しい話は分かんねーよ」by千雨

夕刻。

千雨は特に何をするでもなく、部屋にて携帯ゲームをしていた。

参加者は零。協力プレイという奴だ。

外は豪く騒がしい。先ほど外を見たらネギが車を吹き飛ばしていた。

そのまま慌てて窓を閉めて、またおかしな事でも起こってるのか？ と考える。

アスナと木乃香は自販機ブースへ飲み物を買いに。桜咲は木乃香に連れて行かれた。

「所で、桜咲ってあんなに木乃香にべったり……というか、木乃香がべったりみたいだが、仲良かったのか？」

「同じ京都出身で小さい頃からの幼馴染。何やら理由があって傍にいなかったらしい。別に私はどうでもいいんだがな」

流石に護衛が傍にいないのでは話にならん。と続けながらゲームを操作する。

「護衛、ね。その所為で潤也もいろいろ忙しいみたいだし、大丈夫かね」

「大丈夫だろう。あらゆる可能性を考慮して配慮している仕掛けた旅館だからな」

一週間程度しか無かったのは痛い、少なくとも最低限の事は出来た。

というか、そもそも関西と深い関係のある木乃香がいる時点で、『SMG』と関係があるとばれている潤也と千雨がいる時点でこちらに何か仕掛けてくる可能性を考えてはいたので、仕掛けは予め準備はしていた。

そこから更に木乃香が誘拐されない様罫を仕掛けた訳だ。

「木乃香の所為で忙しくなったなどとは思わなよ。元は関西の長がしっかりして無い所為だからな」

「関西……ってーと、木乃香の親が長だったか？」

「そうなる。必然的に後継者は木乃香になる訳だ。長がもっとしっかりしてれば、狙われる事も無いだろうにな」

武の英雄に政治的な事が出来るとは限らない。

幾ら大戦で多大な戦果を上げたからといって、実力があるからといって。安易に長を決めてしまった事が、関西の幹部に不満を持たせた。

更に、親関東派というのも長が敵視される要因の一つ。近右衛門は近衛家から出て西洋魔法を学んだ事もあり、関西は西洋魔法使い

を好いていない。

最近は『SMG』が少なからず関東・関西の両方に影響を及ぼし、三竦みの状態になりつつある。

エヴァの件で関東に。島根の件で関西に。それぞれ干渉しているためだ。

どちらかと言えば、三竦みというより冷戦状態の関東・関西と関係の無い第三勢力といった方が良くかもしれない。

戦力的に言えば第三勢力が圧倒的に強いのだが、干渉はしないので変わりはないだろう。

「……修学旅行くらい、楽しみたいんだけどな」

「その為に潤也は頑張ってるんだろう。千雨が笑顔でいてやることが、潤也にとっては最高の幸せなのさ」

「お前、本当に機械か？ 人間みたいな思考してるが……」

起動したときからコレ。千雨にとっては、人間の様な思考を持っているのが不思議でならない。

「さあな。AIM……といっても分からんだろうから、多数の人間の放つ無意識の集合体とするが。私はそいつをエネルギーに変えている。潤也曰く、『無意識の集合体がプログラムによって方向性を持った結果、人間の様な思考を持つ事になったのではないか』と考えているらしい」



「……………そんな小難しい話は分かんねーよ」

「だろうな。専門家が頭を捻る事だ。唯の中学生がどうこう言える問題では無い」

一応潤也も中学生だが、精神年齢は三十を超えているのでカウントはしない。

零としてはアレを中学生の頭脳に当てはめるのが馬鹿らしいと考えている。

「理論的にもおかしい所は多数ある。唯の予想に過ぎんよ」

AIM拡散力場に意志を持たせる。

AIM自身が『無意識』の集合体の為、その方法は全く持って分からない。

だが、機械人形という容れ物を用意し、プログラムによって内部に入ったAIMに方向性を与えれば、それは意志となる。

あくまで仮説。可能性は薄く、経った一、二カ月程度の研究では謎は解き明かせないままだ。

なお、この仮説が正しい場合、プログラミングによって方向性が変わる為に性格が変わるのではないかと意を決してチャレンジした潤也だが、何度やってもプログラムが書き直されるらしい。

パソコンが初期化される様な物。最初に与えたプログラムを書き直すという事は出来ない様だ。

「……そんなもんか」

「そんな物だ。特に気にする様な事じゃ無い。不具合がある訳でもないしな」

黒い髪を掻き上げながら、律儀に呟きに返す。

そんなとき、ガラツ。と部屋のドアが開けられる。

「何だ、まだゲームやってたの？ 二人とも」

「まーな。やる事無いし、良いだろ」

「暇つぶしには最適なのよ」

「ほえー、零ちゃんってゲームもやるんやねー」

即座に口調を変えた零。機械的な作業の為、間違えるという事も特に無く。

その後夕食の時間となって大広間に集まり、夕食を取った。

ちなみに零は食べるという行為は出来る。食物を有機的に分解する事でエネルギーを予備的に得ているのだ。

女子達のいる場所は騒がしく、正に女三人寄れば姦しいといった所だ。実際には三人では済まないが。

そんな声を聞きながら、潤也達はだらけていた。

特にやる事も無く、女子棟に侵入しようとするれば新田と潤之のコンボ。先日は不覚を取ってしまったのもう一度、と思ったが、潤也が不機嫌になっていくのを感じて急きよ解散。

自分たちの手で死亡フラグを見事に折った3-Wの面々であった。

潤也達の部屋では全員がテレビを見たり、本を読んだり、ウォークマンで音楽聞いていたりとしている。

「……暇だな」

「そうだな」

「修学旅行の夜がここまで暇になるとは思わなかった」

「百物語でもやるか？」

「お前、この人数でそれやったら一人二十五は物語を知ってなきやならんだろうが」

無茶だろ、と続ける。

「……暇だ」

結局思考がループする羽目になるのであった。

そんな折、潤也の携帯が鳴る。

ゴソゴソとポケットを探り、携帯を取り出しながら部屋の外へ出て行き、周りを見渡した。

誰もいない事を確認した時点で『座標転移』を使って屋根の上にする。

「何の用だ。侵入者はいない様だが？」

『とぼけないでください。この旅館全体にかけてある仮契約の魔法陣、わざと見逃しましたよね？』

「そうだな。あんな陳腐な魔法陣、簡単に防げただろうさ」

『ならば何故？』

「八重よ。俺のやり方では、知り過ぎた一般人を消すにはまず警告が必要なんだ」

いきなりの話に、眉を顰める。

『それが、何か？』

「わからんか？ 次は無い。そう言う事だよ」

単純な話。

朝倉への警告はこれが一度目ならば、二度目は存在しない。仕掛

けたのはカモだが、魔法の存在を知った朝倉が勘違いした行動を起す可能性もある。

何せ、『魔法』というファンタジーな力なのだ。その上、カモと手を組んで何やら画策しているようでもあるし。

カモは既に一度警告をしてはいるが、恐らく気付いてはいないだろう。その為、カモへの警告も今回で済ませる。

そうすれば、次に何かあっても、見捨てる事が出来る。

朝倉は魔法関係でも境界線をうろついている。一般人の部類で、今まで何度か関わりかけてもいた。

ジャーナリストとしていろんな所をうろつく性格ゆえか、麻帆良内にて魔法の存在を知りかけた事は一度や二度では無い。

その度誤魔化していた訳だが、いい加減面倒になってきている。

その上、この騒ぎ。

どうにも魔法の存在を知った様だし、止めるついでに警告までしてしまおうと考えた訳だ。

寝て無い所為か、はたまた別の要因の所為か、相当イラついているので多少荒事になるかもしれないが。

千雨達に被害が行く事は無いだろう。零はその為にあの班にいるのだから。

「それと、桜咲とネギに伝える。『うるちよろするな』とな。何度トラップにかかりかけたと思ってる」

『合計七回ですね。良く死ななかったものです。パトロールと称して旅館の周りを見張るだけ。これなら監視カメラで出来ますからね、無駄働きも良い所です』

「分かっているなら対処しろ。次はもうトラップを解除せんと、面倒臭い」

流石に夜中は寝ているようだが、夜は外出して見回る。旅館の中と外の行き来と周りを見回るといふ行為が辺りにしかけたトラップを誤作動させ、ネギが何度かかかりかけた。

潤也是それに気づいていたようで、トラップにかからない様気を付けていたようだが。

通話を切り、夜空を見上げる。

満天に広がる星の海。屋根に寝転がりながらその光景を見続け、女子達の方から聞こえる新田の怒声をBGMに少し休むことにした。

新田に怒られ、渋々といった様子で自分たちの部屋に戻っていく

3・Aの面々。

その顔は遊び足りないと言語っており、部屋に戻ってからはとんと喋ろうと各々班員と話している。

「くっくっく……怒られてやんの」

「あ、朝倉さん！　今までどこに行っていたんですの！？」

「まあまあ、それはどうでもいいじゃない。それより、私から提案があるのよ。派手にゲームして遊ばない？」

朝倉の提案。という事で、賛否両論が出る。

否の筆頭は委員長。クラスの委員長としてそれは認められないという。

鳴滝史香は賛成の様だが、風香は否定らしい。

「ゲームって何？」

取りあえず面白そうだから、というような理由でだろう。椎名が朝倉に質問する。

よくぞ聞いてくれました。とばかりに勿体ぶり、ゲームの内容を発表する。

「名付けて、『唇争奪！！　修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』！」

ネギとキス。これだけでざわめきが起こり、騒がしくなった。

「こらこら、あんま騒がしくすると新田がまた来るぞ」

朝倉はそんなクラスメイトを見ながら宥める。火を付けたのもコイツなのだが。

上位入賞者には豪華景品もある。という事でノリノリになる辺り、やはり数名除いて常識外れな3・Aである。先ほど怒られたばかりだというのに、もう頭から消えている。

そして、ネギとキスという事で簡単に掌返して委員長後任とした雪広。興奮していて朝倉でさえ一歩引いた。

「それじゃ、十時半までに各班選手二名を私に報告。十一時からゲーム開始だ！」

オー！ と拳を握ってやる気になった面々。各自相談しながら部屋へと戻っていく。

ロビーにて、朝倉はカモと話していた。この時間になれば人はいない為、特に隠すような真似はせず。

新田からも死角になっている為、朝倉には気付いていない。



「朝倉さん」

そんな折、現れたのは桜咲。零から連絡を受けてパトロールを中止し、戻ってきたのである。

「ん？ 桜咲さんじゃん。どうしたの？」

「いえ、カモさんがこの旅館に変な魔法陣を敷いていたようなので……」

「変なつてのは心外だぜ。仮契約を結ぶ為の立派な魔法陣じゃねーか」

仮契約。それは粘膜の接触によって特定個人を主と従者として登録するシステム。主の魔力量や魔法使いとしての資質でアーティファクト等の強力な武器が出る事もある為、戦力を集めるという手段として間違っではない。

但し、それは相手に関係者に限った場合の話。

相手が魔法に無関係の場合、従者として記憶を消されずに済む場合もあるかといえ、それはノーだ。

魔法のまの字も知らない一般人が踏み入れていい世界では無い。それがバレた場合、少なくとも一般人の方は記憶を消されて普通の生活に戻る事になるだろう。

魔法使いの方はオコジョ刑だ。

だが、今回は違う。カモはその事は知らない為、そうはならない

だろうと思っている。しかも、ネギは英雄の息子。多少は優遇されるだろうと期待し。

学園長は零、千雨、アスナには干渉するなどは言ったが、別にそれ以外の生徒に干渉するなどは言っていない。

特例措置、という事で参加させなければ命は大丈夫だろうとカモは高をくくり。

朝倉はあの三人に魔法的に接触しただけで其処までやるか？と疑問を持つ。

「……学園長に言われた事、分かってますよね」

「大丈夫だって、特例とかそんなんで参加させなきゃ、干渉したとは見られない筈だぜ」

とことん自分に甘い。自信過剰とも取れるその発言に溜息を軽く付き、『彼』が行動を起こしていない辺り、それで大丈夫なのだろうと判断する。

それでも、危ない橋を渡っている事には違いない。

「所で、何で御上さんと千雨ちゃん、明日菜がそんな事になってんの？」

「さあ、関係者だからじゃねーのか？ 姉さんは何かしらねーのか？」

「……私も、特には聞いていませんが」

話す義理は無い。

今潤也の情報を流した所で、桜咲にはデメリットしかないのだ。なら、こちらを選ぶのは当然の事。

「千雨ちゃんと明日菜はともかく、最近転校してきた御上さんまで干渉不可か。なーんかにおうね」

ジャーナリストとしての勘か、何か繋がりがあるのでは？ と考える。

「……そう考えると、あの班って結構おかしいんだよね」

「何がだ。ブンヤの姉さん？」

浮かび上がったのは一つの疑問。それが浮かぶと、次々に疑問が出てきてしまい。

「まず、千雨ちゃんと明日菜は御上さんと知り合いなんじゃないかな。千雨ちゃんって其処まで転校生とかに対して自分から仲良くしようとするタイプじゃないし」

「なら、アスナって子はどうなんですかい？」

「明日菜は最近アレだけど。始めて会う人でも仲良くなれる方だと思っよ。唯、一緒の班になるまで行くかなあ、とは思っね」

新聞部として性格を熟知しているからこそ出てくる疑問。

あまりクラスの人と話さない桜咲では、この様に性格を把握したりはしておらず。

「木乃香は仲良くなれると思うよ。でも、図書館島のグループと一緒にいらずにそっち行っちゃっていうと、微妙かな」

「姉さんはどう思いますか？」

「……私は、そう言うのはあまり分かる方では無いので」

仲良くしている人物も其処までいない。敢えて挙げるならば、同室の龍宮位だろうか。

「御上さんが千雨ちゃん達と一緒にになったのは、理由があるんだと思うよ。態々木乃香がゆえ吉達と離れる位だし」

「でも、木乃香姉さんはこっちの事情は把握してませんか？」

「そうなのよねー。桜咲さんが護衛やってるんでしょ？ ネギ先生と一緒に」

桜咲はその問いにコクン、と頷き、朝倉はまた考え込むような動作をする。

木乃香は桜咲がいるから、という事で零が半ば強引に班に入れている。

最も、桜咲と仲良くなるチャンスだと、本人的にはそれほど不満は無い様だが。

「なら、それに便乗して、干渉不可の三人と木乃香姉さんの護衛。って感じですかい？」

「うーん……可能性はあると思うな。桜咲さんとネギ先生の二人がいる訳だし、守るためには一か所にいた方が良いと思うし」

学年で五指に入る位の頭を持つだけは有るらしい。だが、ハズレだ。

うーん。と悩みながら朝倉は頭を働かせる。

「でも、そうなるにあの三人を守ろうとしている第三者がいる事になるよね。千雨ちゃんと明日菜に関しては潤也君が守りそうだけど」

「確か、長谷川って子の兄貴ですかい？」

「そ。かなりのシスコンで、一人で暴走族潰したとかいろいろ噂が絶えないのよね。後最近は明日菜と付き合ってるとか噂されてる。この間もデートしてたし」

「それは……喧嘩が強いつて事ですかい？ 後、個人的にイケメンは敵でさあ」

「ま、必然的にそうなるよね。今日もかなり威圧されちゃったし」

千雨ちゃんと明日菜の写真で何とかなったけど。と続け、あの冷たい眼を思い出して身震いする。

まさかあそこまで怒るとは思っていなかったのだ。いつものノリで聞いてみたら、今日はすこぶる機嫌が悪かった。唯それだけ。

「というか、今回のラブキスには潤也君が暴走しない様に参加不可ってしてもオツケーだと思っけど」

千雨自身にネギとキスなどする気は無いが、参加させられたこと自体にキレル可能性もある。

実害出て無いならいいじゃん。というのが朝倉の考えだ。

時計を確認して、朝倉は部屋へと戻ろうと歩き始める。

「そろそろ時間だよ。桜咲さんも出る？ ラブラブキス大作戦」

「何ですか、それ」

半ば呆れ気味に質問をする。内容がアレなので肩の力が抜けてしまった。

「ネギ君とキスした奴が優勝っていうゲームだよ。桜咲さんもやる？」

「いや、ブンヤの姉さん。こっちの姉さんは出来るだけ木乃香姉さんの傍にいて貰った方が良く。旅館の中とはいえ、何が起こるか分からないしな」

ならこんな騒動起こすなよ。とでも言いたげな目をカモに向けるが、気付かない。

軽いため息をつき、桜咲は部屋へと戻る。

「さて、ラブラブキッズ大作戦まで後三十分。選手は揃ったね。もうすぐ始まるよ！」

旅館のテレビをジャックし、設置したビデオカメラを用いて映像を流す。

選手情報などを流し、開始までの時間を表示されている。

同時に、別の場所から見ている者がいるとは知らずに。

第三十五話「そんな小難しい話は分かんねーよ」by千雨（後書き）

ラブキスマでいかなかったぜ、という話（え

いろいろ書いてたら無駄に長くなった。こんな話書く位ならラブキスマ書いて三日目行った方が良かったという気がしないでも無い。

というか、ホントに俺の書く話でこういう無駄な思考シーンが多い気もするんですよ。何とか削りたい所。

余計に時間かけそうなので、間隔空かない様に取りあえず投稿しましたが。

三日目は更に長くなるでしょうし。

最近クオリティが下がり気味ではないかと戦々恐々です。

次回こそラブキスマの予定。朝倉、カモ。冥福を祈る（マテ

活動報告にてアンケートを行ってます。投票しても良い、という方はどうぞ入れてください。息抜きの作品アンケートです。



第三十六話「ネギ先生の唇は私が死守するんです」by雪広（前書き）

なんかいろいろブレた気がする。

第三十六話「ネギ先生の唇は私が死守するんです」by雪広

PM11:00。

女子達がいる部屋は静まり返っていた。不自然なほどに、異様なまでに。

新田は良い事だと思っていたが、同時に一つの懸念を持っていた。

「こういふときを、嵐の前の静けさというのか。」と。

「修学旅行特別企画『唇争奪!!』ネギ先生とラブラブキッズ大作戦!!』!!」

朝倉は手に持ったマイクを使い、テレビを通して見ている3-Aの生徒に放送する。

『まずは選手紹介。一班からは鳴滝姉妹!』

「あわわ、お姉ちゃん。正座嫌ですー」

「大丈夫だって、楓姉から教わった忍術があるじゃんか」

「その楓姉と当たったらどうするですかー!」

両手に枕を持ち、半泣き状態の風香。対照的に自信満々で歩き続ける史香。本当に対照的な双子である。

『二班からは長瀬さんと龍宮さん！ 身体能力では随一か！？ 麻帆良四天王の異名は伊達じゃ無い！』

「何故私が……、」

「まあまあ、イベントでござるし、楽しむでござるよ」

とある理由から超と一緒に班になる必要があり、二班に入る予定だった春日と代わって貰い、二班に入った龍宮。

これなら別に私じゃ無くても、と思っただが、言っても無駄なので早々に抜けようと考える。

『三班からは委員長と村上！ チームワークが問題だが、はまればいけるか！？』

「ネギ先生の唇は死守しますわ！！」

「うー。ちづ姉もザジさんも逃げちゃったし……何でこうなったんだろ」

やる気満々な雪広と違い、何故こうなったと頭を抱える村上。

チームワークに問題があるが、雪広のネギへの愛でカバーされる事を願おう。

『四班からはゆーなとまき絵！ チームワークもバツチりな二人。運動部で安定感があります！』

「よし、頑張っちゃうよー！ 絶対勝つよー！」

「エへへー。ネギ君とキスカー」

運動部として能力は高い二人。チームワークもあり、安定感がある為、優勝候補としても取れるだろう。

『五班からはゆえと本屋！ 大穴の図書館組だー』

「ゆ、ゆえー」

「全く、ウチのクラスはアホばかりです。のどかが告白した時にこんなイベントを……」

溜息をつきつつ、旅館の見取り図を用意する。ロビーにある見取り図を簡易的に写して来たのだ。

「ゆえゆえー、いいよ。これはゲームなんだし……」

「いいえ、ネギ先生は私の知る中でも最もまともな部類に入る男性です。のどか、あなたの選択は間違っつて無いと断言しますよ」

これが普通の子供で、普通に過ごせるのなら確かに大人になった時はまともな部類だろう。

だが、ネギは普通の子供では無いし、これからも普通に過ごせるという事は無い。

周りのねじ曲がった教育と英雄崇拜ナキが直れば、あるいは普通になれるかもしれないが。

「絶対勝つてのどかにキスさせてあげます。行くですよ！」

「う、うん！」

頷き、拳を握って気合いを入れる二人。

『なお、六班は参加してません』

「何やってんだか、こいつ等……」

「ネギ君とキスするんやろ？ 優勝賞品でなんやろな」

テレビを見つつ、千雨と木乃香が雑談をする。その横では零が外を見ている。

刹那は袋に入れたままの刀を持って壁に寄り掛かっており、アスナは携帯を弄っている。

「明日はどこ回るの？」

「明日の事は明日決めろ」

零はそんざいにそう呟き、窓を閉めて外から見えなくする。

『では、ゲーム開始！！』

そして、夜は更けて行く。

壁を背に進むのは三班。雪広と村上。

眼が燃えてやる気が溢れている雪広とは対照的に、今すぐにも部屋に戻りたいという気持ちがある村上のペア。

「（もうちょっとやる気出してください！ ネギ先生の唇は私が死守するんです！）」

多分それやったら委員長が奪うんだろっなあ……等と半分呆れながら雪広の後ろをついて行く。

ネギのいる部屋に向かう途中、通路が交差している場所がある。注意しつつも先へ進み。

「「ん？」「」

バツタリと。ネギのいる部屋へと向かうルートの間で、四班明石と佐々木が現れる。

「（委員長！？）」

「（まき絵さん、ここで会ったが百年目！ 決着付けますわよ！）」

小声で戦闘を促す雪広。クロスカウンターのように枕をぶつけ合い、互いに一瞬目の前が暗くなる。

「（良くやったまき絵！ いいんちょ止めだ！）」

明石が佐々木の代わりに出て、雪広の代わりに出た村上と対峙し、枕同士でぶつけ合う。

「（お、獲物発見でござる！ 真名、援護を……って、いない！？）

」

既に逃走した龍宮。明日は用事がある為、疲れを残すなど以ての外であり。

「コラ！！ 何をしている！！」

其処へ新田が現れ、場は更に混沌カオスと化していく。

一方その頃、綾瀬と宮崎。

中から行っても敵と会うか新田と会うか。それなら外から行けばいいじゃない。とばかりに匍匐前進で進む二人。

「ゆ、ゆえー。何でこんな所を通るのー？」

ライトを口にはさみ、星明かりとライトの光を頼りに進み続け、非常口の前に降りた。

「このルートが安全かつ最も速いのです。非常口にしても先ほど開

けておきましたし、絶対のどかが勝てます」

自信を持ってそう告げる。友人の恋を応援している為、これが何かのきっかけとなれば。そう思い。

宮崎はその言葉に安心し、綾瀬は笑みを浮かべながら非常口を開けようとする。

「……あ、あれ？」

ガチャガチャと何度回しても開く様子が無い。さっき開けておいた筈……と思考を巡らすも、今閉まっているのでは意味が無く。

ちなみにこの旅館。一般の人が使えるようになっていて扉以外、オートロック全て自動施錠である。

当然、非常口は中からしか開く様には出来ていない訳で。外から開けるには関係者の持つカギが必要だ。

その関係者にしても、夜という事で中に数人しかおらず、外の状況に気付く筈も無い。

「あ、開けてくださいー！」

「どっなってるですかー！」

ドンドンと叩くも気付く人はおらず。綾瀬と宮崎は外に取り残される羽目になった……かと思われたが。



ガチャリ。中から非常口を開ける音が聞こえる。

「た、助かったです」

綾瀬はほっとして開けた人物を見た。宮崎にしても、その顔には安堵の表情がうかがえる。

「全く、何をやってるの君達」

瀬流彦である。監視カメラを見ていた時、あまりに不憫なので助けてあげようと動いた。辺りに仕掛けてあるトラップは魔力や気に反応して発動する物もあれば、範囲内に入った瞬間発動する物もある訳だが。

今回はこの二人が外でうろついてる時点でいくつかのトラップを解除して、中に入れようとして出てきた訳だ。

「今回は見逃してあげるけど、次は駄目だよ？」

「あ、ありがとうございます！」

それでも、瀬流彦の部屋はネギの隣なので、当然ながら今入ろうとすれば気付かれる。

そう思い、一端戻る振りをして戻ってこようとした二人だが、ふと目に入ったのは天井から降りてきた梯子。

それを辿って上を見る三人。其処には、鳴滝姉妹が忍者の格好をして降りて来ていた。

「……何やってるの、君達も？」

その表情には呆れしか無い。まさか屋根裏を通ってくるとは思っていなかったのだ。

そう言えば屋根裏の赤外線センサーと熱源探知機サーモグラフィに反応あったなあ。等と思いだしている瀬流彦。

明らかに動きが素人の上にガタゴト音を立てていたので生徒の人だろっなーとは思っていたのだが。

取りあえずその二人も捕まえ、部屋に戻らせる事にした。

小さく、ガラスが砕ける様な音を聞いてから。

「ん？」

朝倉はテレビに近寄る。

ビデオカメラの映像に所々砂嵐が映り、映像が見えなくなっていた。故障かな？ と思うも、数秒後には戻っている為に問題は無いだろうと放置していた。

だが、今度は違う。テレビにしても、携帯にしても、正常に使え

なくなっている。

何やら、機械の不調だろうか。そんな事を思いながら通信機器を見直す。配線も間違っていないし、電気もちゃんと通ってる。

携帯に関しては電源を切り、後で電源付けておこうと思い、仕舞う。

でも、何で動かないんだろうか。そんな事を思っていた時。

コンコン。ノックが鳴り、機械の調子を見ていた朝倉は面倒そうにドアへと向かう。

「はい、誰？」

ドアを開けた先にいたのは、銀のトレンチコートを着た人物。

フードを目深に被っている為、顔は見えず。

「Good evening young lady and」  
こんばんわ お嬢さん そして

ドンッ！ と右手を出し、デコピンで朝倉が弾き飛ばされる。

当たったのは胸だが、ベクトルを操作された為に威力は弾丸にも匹敵する。気絶はしない様、最低限の配慮はした。

「Good-bye ってな」  
おなげ

「あ、姉さん!？」

カモが驚いて飛び出す、不可視の何かに容易く吹き飛ばされ、地面へと縫いつけられたように動かなくなる。

出していた右手を下げ、部屋の中へと入る。当然、ドアを閉めるのは忘れない。

朝倉は、畳とはいえ背中を打ちつけて肺の中の空気を出してしま、い、せき込んでいた。

「ゲホツ、ゲホツ！ い、一体何が？」

せき込みながらも、何が起こったのか、事態を把握する為にと顔を上げようとした。

だが、それは叶わなかった。

横から顔を踏みつけられ、動かす事が出来ないからだ。

そのまま銃が向けられ、余計な動きをすれば直ぐに撃たれる事は容易に想像できる。

「あーさーくらア。お前、この事態を正しく把握してんのか？」

朝倉は眼だけを動かして自身を踏みつけている人物を見る。

フードの合間から赤い髪が揺れ、黒の瞳がこちらを見据えている。顔の輪郭や形なども、ハッキリとはしないが分かる。

其処まで分かれば、知っている人物なら辿りつける。人の顔は覚えるのは得意な方だ。

だが、踏みつけている人物を知っている筈なのに分からない。いや、正確に言うならば、この人物がだれか。其処まで思考が辿りつかない。

知っている筈で、聞いた事のある声で、見た事のある顔で。でも、誰か認識できない。

そんな、不可解な状況に陥っていた。

「だ、誰よ。アンタ……？」

「誰でもいいだろ？ まあ、強いて言うならオマエらに警告しに来たモブAさ」

ふざけた様子で言葉を返す。

足で顔を抑えられているだけにも関わらず、指一本動かせない。不可解な状況が続いていて、頭はパンクしそうになっていた。

「警、告……？」

「そオだ、警告。其処に転がってるげつ齒類にもな」

畳に縫いつけられたように動かないカモは、上からの謎の圧力で動く事が出来ないだけだ。

状況を理解出来ずに混乱し、言葉は発していない様だが。

「一体、何をする、つもりなの？」

落ち着いて、呼吸を整えながら質問をする。自分でも不思議なほどに落ち着く事が出来た。そう感じる。

「人の話聞いてるか？ 警告だつつつてンだろ？」

呆れた様子で言葉を返し、そのまま続ける。

「オマエ等は一般人を裏の世界へ踏み込ませようとしたんだ」

だから、と一拍置き。

「裏の世界。魔法使い達が跋扈し、死と危険に満ち溢れたこの世界を紹介してやろうと思っただけさ」

口元が歪んだのが見えた。笑っている様にも見えるし、憐れんでの様にも見える。

「どついつ、事？」

「まさか、本当に魔法はファンタジーな力で、魔法使いは人助けをするイイ奴で、悪い奴はみんな魔法使いに退治される。なんて馬鹿げた考えは持ってねエよな？」

実際、魔法使いについて説明したのはネギとカモだ。

『マジステル・マギ立派な魔法使い』を目指し、人助けをする魔法使いを目標とする。

それ自体は別に構わない。自分で決めた意見に対してとやかくは言わない。が、その偏った考えを広めさせる事はさせない。

物事に対して必要なのは、常に客観的に考える事の出来る思考力とそれを見極める観察眼。

だが、測るべき物差しが間違っているのは、幾ら優れた思考力や観察眼を持っていても無駄にしかない。

危険を知らず、良い部分しか知らない一般人が、『魔法』というファンタジーな力を幻想的な何かと間違える事は多々ある。

科学にしても同じだ。

原子力などがそのいい例だろう。原子力発電は多量の電気を供給するが、同時に悪用すれば放射能をばら撒く兵器となる。

どんなものにも正と負の面というモノがあり、どちらか片方だけという事は無いのだ。

「……ま、子供先生はそう思ってるみてエだがな」

ハア、とため息をつき、話を続ける。

「往々にして、正義の味方とかヒーローとかを信じる奴はいるモンだな。悪い事とはいわねエが」

何かあったら誰かが助けてくれる。そんな考えじゃ生き残れない世界にいる者としては、甘いと言えようがない。

最も、魔法使い達のいる裏の世界だって『深さ』はある。潤也達がいる場所が、その最下層であるというだけだ。

「アンタは、何で警告しに来たの……？」

それは一つの疑問。

朝倉からすれば、知り合いかもしれないが分からない。デコピンで人間一人吹き飛ばせる知り合いなんていない筈だと。そう思っている。

もし、自分の知り合いが全て魔法使いでは無いとしたら。の話ではあるが。

桜咲が護衛をやっているなんて、今まで思いもしなかった。ネギが魔法使いなんて、今まで知りもしなかった。

なら、こういう事が出来る知り合いがいても不思議ではないというのに。

「……何で、か。そうだな。俺としては、出来るだけ巻き込みたくないだけだ。知る必要の無い、知る意味の無い世界。今までの平穩で楽しい表の世界にいられる事が幸せだと、オマエはしらねエだろうからな」

知らなければ対処できない。知っておかなければ分からない事もある

その考えの下、潤也は動いている。

だが、知らなければ巻き込まれる事は無かっただろう事もあるし、知る必要の無い事もあった。



唯一つの平穩を守るためには、自身がやるしかない。麻帆良の魔法先生を当てにしていけない訳じゃない。唯、より確実に、より堅実に。物事に対処する必要があった。

何かが起こる事は分かっていたのだ。麻帆良から離れる事も考えはいた。不必要な争いに巻き込まれる事は、避けたかった。

だが、友達と笑っている千雨を見て、その考えは薄れていった。

経緯はどうあれ、千雨は麻帆良にいても笑顔でいられるのだ。なら、無理に麻帆良から引き離す必要も無く。

何か起これば、自分が何とかすればいい。その為の科学だ。

「アンタ……唯悪い奴って訳じゃ、なさそうだね」

「いや、悪党さ。必要なら人を殺す事を躊躇わない、壊れた人形マリオネットだ」

ずっと殺し続ける訳でもないし、誰かの操り人形でもねエがな。と続ける。

「それでも、人の命がどうでもいいと思ってる奴が、一々警告なんてしに来ないでしょ？」

「……そオだな。だから、警告しに来たンだよ。一度だけだがな。二度目はねエ」

鋭い眼光で朝倉を睨みつけ、黙らせる。

「こつちの事に関わるってのは、命がけだ。特にネギ。アイツは英雄の息子で敵は多い。従者になれば、狙われるって事を考えなかったのか？」

「狙われる？ そんなの、ネギ先生が守ってくれる筈……」

「オマエ等が仕掛けたこの仮契約の陣。これでもし仮契約をしたとしよう」

朝倉の話を見無視し、続ける。これは例えばの話。だが、可能性としては高すぎる話。

「ネギの従者となった少女は何も知らない。これがある程度戦闘できる連中や頭の回る連中ならまだイイ。だが、運動能力も低い上にあまり頭が良くない生徒がいたとして」

一拍置き、核心を話す。

「ネギの従者。英雄の息子の従者だから、という理由で襲われたら。オマエ、責任とれんのか？」

一般人が一般人だと証明するのは簡単だ。魔法に関係する類の物を持たず、尚且つ知識を持たせなければいい。

だが、仮契約カードは存在するだけで関係者と認識され、問答無用で魔法を行使される事もある。

大戦の英雄。それは味方も多いが、敵も多いという事。

朝倉は金が目的の様だが、人の命と代えられるモノかといえばそうではないだろう。其処まで愚かなら、ある程度的人格洗脳さえ行う事も辞さない。

「だが、アーティファクトの力がありゃあ何とかなる筈だぜ！」

今まで黙っていたカモが声を上げる。

黙らせる為に圧力を無言で上げ、カモは気持ち悪い唸り声を出す。カモよりも畳の方が軋んでいる位だ。

「アーティファクト、ね。使えるかどうかもわからねエモンに頼るか。余程運が悪いんだな、ソイツ」

アーティファクト。それは仮契約時に従者のカードに出る固有の魔法具。

その質は主の魔力等に左右され、少ない者の場合はアーティファクトが出ない可能性さえある。

ネギの場合は魔力量から行って出るだろうが、それが戦闘に使えるものかさえ分らない。

「最初に言ったよな。これは警告だ。これ以上魔法に関わるようなら、次は無い。オマエが知った事に関してはネギの責任でオマエは被害者だが、今回の件はオマエは加害者だ。自分の所為でクラスメイトが襲われるかも知れねエな」

圧力、殺気を込めてそう告げる。

一言一言を聞く度に顔が青ざめて行く朝倉とカモ。

特に、朝倉はそんな背景など知らない。唯、カモが金を儲ける為に仮契約をしているだけだから仕方ないと言えば仕方ないのだが。

今回の事で仮契約者は出ていない。ここへ来る途中で陣を破壊してきたのだ。遅くなったが、星を見ていたらいつのまにか寝ていたらしい。

最も、直ぐに起きてここへ来たし、それ以前にヘマをして誰か仮契約させる事は無いだろう。八重が待機しているのだから。

「今なら記憶を消して、今まで通り楽しい楽しい学園生活を送れるぜ？」

「……そんなの、拒否するに、決まってるじゃん」

眼だけを動かし、潤也を睨みつける。

まるで、異論は聞かないとでもいう様に。

ジャーナリストとしての執念か。記憶を弄られるのが嫌なだけか。

「そおか。まあ別にかまわねエが、気をつける。特に修学旅行中は死体さえ上がらなきゃ、『行方不明』で通せるんだからな」

今回動いているのは、何も関西とSMGだけでは無いのだ。

第三者機関、漁夫の利を狙う組織も当然ながら存在する。内輪揉めしている間に関西そのものが落とされたら笑い話にさえならない。

関東は恐らく何もしてこない。というより、何も出来ないだろう。

修学旅行で各地に魔法先生も散っている上、学園の警備も考えなくてはならない。この状況なら、少なくとも今回は出張って来ないだろうと考え。

今はまだ動かないだろう。動く可能性が高いのは、関西の過激派が行動を起こした時。もしくはその過激派との戦闘で疲弊した時。そのどちらかが可能性としては一番高い。

「さて、改めて。ようこそ、この死と危険に満ち溢れた世界へ。精々死なない様に必死に生き残れ」

そう言った後、潤也はその場から消えた。

朝倉は手足が動く事を確認し、テレビに映っている映像に眼を移す。

途中で目に入ったカモは潰れていて、瀕死の状態だった。

其処には捕まったであろう他のメンバー達が正座させられていた。つまり、優勝者無しという事。

「……ヤバ……」

見つかる前にさっさとずらかろう。そう考えて部屋を出ようとした朝倉だが。

「……なるほど。朝倉、お前が主犯か」

部屋の前には、新田が立っていた。一瞬硬直し、そのままドアを閉めようとする。

だが、そんな事で止められる筈も無く。あえなく捕まり、正座させられる羽目になったのであった。

第三十六話「ネギ先生の唇は私が死守するんです」by雪広（後書き）

ラブキスの話。……ここまで長くなる予定じゃ無かったんだけどなあ。

いろいろ書いてたら長くなりました。

> 英語で挨拶

ブラッディマンデイのジャック＝デモンをリスペクト。

> 壊れた人形

サンホラ。個人的にクロニクル2ndとか好きです。

能力関係の事は大体分かると思いますが、電子機器は「電気使い」で、圧力は「念動力」です。

ちなみに朝倉に警告するのがアスナのヤンデレバージョンとか思いついて書いてた所為で一日遅れました（オイ  
その場合力も死亡ルートですけどねww

次回は漸く三日目。いろんな人が暗躍します。

第三十七話「舞妓はいねーのか！ 舞子はよー！」by 榴咲

修学旅行二日目。

この日、朝から数名の生徒は眠気と足の痛みに堪えていた。昨夜正座させられていたせいである。

流石に徹夜で正座。とまでは行かなかったが、それなりに遅い時間帯まで正座させられていたので当然ながら眠気がMAXだ。

そんなイベントに参加せず、さっさと寝て悠々と起床した千雨達。

今日は完全自由行動日で服装も私服の為、千雨達は潤也達の班と京都の町へ遊びに行く事になっている。宮崎達の班も同じ場所を回るつもりだ。

テレビを見つつ、準備をする。その画面には、世界中で行方不明者が続出しているなどのニュースが連続して流れている。

超は龍宮と「会う予定の人がいる」と早々に出て行く事になっている。

ネギは隠れながら旅館を出て、そのまま関西呪術協会本山へと向かうつもりらしい。

各々予定を確認しつつ、各自朝食を終えた。



ロービーにて。

「……昨日は酷い目にあつたね」

「そうっすね。姉さん足蹴にされてましたし。俺潰されましたし」

体を軽く動かしながらそんな事を言う二人。そして、桜咲は「やっぱりか」といった表情を浮かべていた。

呆れつつも、朝倉達に質問をする。

「あんな事するから、抵触したんじゃないですか？」

「うん。そうみたい。次は無いつて言われちゃったし」

体を動かす度に骨が鳴り、背伸びなどをして体が十全に動くかをキツチリ確認する。

昨夜、自分の理解出来ない現象が起こっていた。自分の体が指一本動かせないという、不思議な状況に。

体に異変が無いか寝る前にも調べたが、大丈夫だと判断し。

「……それで、朝倉さんはこれ以上かかわる気は有るんですか？」

「そうだねえ……どうしようか。これ以上関わると本気で身の危険を感じるんだよね」

殺気をぶつけられた時の事を思い出し、身震いする。カモも同様

だ。

「あの危ない奴が、三人の護衛なんすかねえ？」

「桜咲さんが木乃香を守るだろうし、御上さんが千雨ちゃんと明日菜を守るだろうし……可能性としては、予備戦力とかそんなんじゃないかな」

戦略系のゲームとかはあんまりやらないから分からないけど。と続ける。

一般人を巻き込まなかっただけ良しとするべきだろう。もし巻き込んでいたなら処罰が下されていた。

例えば、人格の洗脳。

魔法関係の事に関しての情報を知れば、絶対に関わらない様に動く様にされたり等。魔法関係の事になれば近づかせない為に人形の様にされていてもおおかしくは無い。

「ネギ君の手伝いするつもりだったんだけどなー。どうしよう」

「必要無いでしょう。お嬢様の護衛なら私が居ますし……」

保険もある。そう言おうとして、止めた。無駄に話す事も無いだろうと判断したのだ。

「そう？　じゃあ私は修学旅行を満喫させて貰うね。シネマ村とか行くつもりだし」

カモを置いてそそくさと自分の部屋に戻っていく朝倉。これで巻き込む事は無いだろうと思ひ。

「取りあえず、部屋に戻って準備をした方がいいと思つぜ。俺っちは兄貴と速めに出るからよ」

「そうですね。あまり待たせるのも悪いですし。親書を届ける仕事、頑張ってください」

「おう。兄貴ならやってくれるさ」

こうしてカモと分かれ、桜咲は部屋に戻って準備をする。

旅館近くの橋。

「ここが待ち合わせ場所となっている。既に男子組は到着しており、数名はそわそわして落ち着かない様だった。

「おい、潤也」

「ん、来たみたいだな」

座って携帯を弄っていた潤也は、ポケットに携帯を仕舞って立ち上がる。

「待たせたか？」

「いや、特には」

梶咲がかなりそわそわしてたけど。と付け加え、全員そろっている事を確認する。千雨達の班と宮崎達の班だ。

宮崎と綾瀬は疲れた顔をしており、寝る時間少なかったんだろうなーと同情する潤也。

「3-Aって、やっぱりレベルたけえな。潤也と一緒にの班で良かった！」

そんな事を言いつつテンションが跳ね上がっている梶咲を無視し、歩を進める事に。

特に目的地は決めておらず、京都の街を歩き、時折気に入った小物やアクセサリーなどを見て回る。

「京都って落ち着いたイメージがあるよな」

「分かる。アレだろ、わびさびって奴だろ」

「あ、あそこプリクラがあるよ。折角だし、プリクラとろうよ」

「話の流れを全部無視だど!?!」

相咲が早乙女の発言に突っ込みつつ、潤也達はゲーセンへと向かう。

京都に来てまで何故ゲーセン。という顔をするが、特に嫌いでも無く問題無いので咎めない。

プリクラを取る際に早乙女がニヤツと笑っていたのは潤也の見間違いではないだろう。

潤也と千雨の二人で撮ったプリクラ。潤也とアスナが二人で撮ったプリクラ。三人で撮ったプリクラ。

良く周りの人たちが爆弾魔にならなかったと称賛したい。男子勢は仲芽黒を除いていると耐えていたようだ。

具体的には壁を殴って店員に怒られていた。

「ん、んー。なんかラブ臭がするね」

ニヤニヤと笑いながら潤也達と木乃香達を見る。木乃香は桜咲とプリクラを撮っていた。

「ネギ君がいればよかったのにね。そしたら一緒に撮れたのに」

「い、いや、いいよー。ネギせんせいも迷惑だろうし……」

「そんなこと無いって、もっと自分に自信持ちなよのどか」

早乙女が発破をかけている隣では潤也と相咲が話していた。

壁際で話を聞かれない様に音を遮断し、どうでもいいと言いたげに話を振る。

「その話題のネギ先生はどうしてる？」

「式神を飛ばしてあるから、情報は逐一入る手筈だ」

「確か、関西呪術協会の本山に向かっているんだっけか」

「そうだ。親書を渡す依頼を受けているからな」

子供に、それも修学旅行のついでに渡すという時点で戦争が起きても何らおかしくは無いのだが、其処はスルーらしい。

「……住所は頭に入ってるし、間違っでは無いんだよな」

「……何か、気になる事でもあるのか？」

「いや、初日に戦闘した四人の過激派の内二人に発信機付けたんだけどさ。その内一つがこの近くで、もう一つが協会本山の近辺なんだよ」

四人の過激派の内二人。小太郎と月詠の二人の体内　　と言つても、皮膚の表面上だが　　にある発信機（ナノマシン）の反応を確かめた結果だ。

少なくとも、透視で見える範囲に月詠がいる事は既に把握しており。いつでも制圧できるよう準備をしている。

零にはその探知機も装備してあるので、既に気付いているだろう。

というか、後手に出る必要性が無い。ゲーセンから出たら潰そうと  
考え、今はまだ様子を見る事に。

( ……あのガキ、戦力をバラけさせるという意味では役に立ったの  
かね )

逆に言えば、それ以外では役に立たないということだろう。バラ  
けさせなくても三分あれば制圧は可能だが。

話題に上がったネギ。彼は今、関西呪術協会の本山へと向かって  
いる途中だ。

一、二時間ほど走って千本鳥居を抜けようとしているのだが、こ  
れが進んでいる気がしない。

幾らなんでもおかしいと気づき、取りあえず近くの茶屋で休憩し  
つつ現状の確認。

「どう思う、カモ君？」

「うーん。これは、陰陽術によるものじゃないっすかねえ。どう思  
いやすか、姉さん」

スタンドアローン  
独立状態の桜咲に話を振る。神鳴流と陰陽術を扱う桜咲ならば、  
この類の罠にも心当たりがあるだろうと判断し。

「そうですね……恐らく、無間方処の術です。一定の範囲を囲い、

入る事は出来ても出る事の出来ない場所を作っているのでしょう」「詰まる所、同じ場所をグルグルと回っている訳だ。それなら辿りつく筈がない。」

半径五百メートルほどの範囲。かなりの時間を無駄にしただろう。「何処かにこれを保つ為の符が張ってある筈です。時間はかかりませんが、探しましょう」

方針さえ立てれば精神も持つ。渡すのは時間がかかっても大丈夫だ。渡す事が第一なのだから。

手に杖を持ち直し、鳥居を見てみようと近づいて行く。

「おっと、そう言う訳にもいかんで」

その時、現れたのは一人の少年。制服の様な物を着てニット帽をかぶっている、ネギと同一年くらいの少年だ。

ポケットに入れてある手を出し、指先をネギに向けながら叫ぶ。

「おとなしく親書を渡すなら助けたるわ。渡さんなら実力で奪い取る！」

自信満々にそう告げる。勝つ事はあっても負ける事は無い。そう思っているのだろう。

対するネギはと言いつと、



「親書を……君が、過激派の一人なの？ 西と東を仲良くする為の物なんだよ！？ 何で邪魔するのさ！」

ネギの言っているそれは、独りよがり過ぎない。

世界中全ての人間が、誰とでも手を取り合って仲良くしたいと思っ  
ているなら、それは大間違いだ。

人間誰しも食べ物に好き嫌いが存在するように、人間同士でも好  
き嫌いというのは必ず発生する。

「ハッ、そんなのは関係あらへん。親書を渡すか渡さんか。シンプ  
ルでええやろ」

鼻で笑い、挑発するように告げ、威圧するように気を全身へと漲  
らせる。

「……決まってる。渡さないよ！」

「そうか。なら、実力で奪い取つたる！」

小太郎が構え、ネギが魔力を精製する。

こうして、ネギと小太郎の戦闘が始まった

「舞妓はいねーのか！ 舞子はよー！」

「何なら僕が舞妓さんの格好しようか？」

「何でだよ！？」

朝から……というか、修学旅行前から舞妓が見たいと言い続け、そろそろウザくなってきたなーと感じてきた相咲除く男子勢。

仲芽黒が舞妓の格好をしても根本的解決にならないらしい。早乙女が目敏く反応していたから、ネタにされるのは間違いないだろう。

「舞妓つてこの辺にいるのか？」

「いるんじゃないか？ どこにいるのかは知らないが」

「どうせなら私達がやってもいいけどね」

「え、マジですか！」

土下座で頼み込む相咲。一步といわずに十歩位引かれているのは言っまでも無いだろう。

「潤也は見てみたい？ 舞妓」

「まあ、興味が無いと言ったら嘘になるな。見てみたい」

その言葉でアスナは乗り、千雨も満更では無い様な顔をしたので

近くのシネマ村に向かう事に。

ゲーセンを出る際、月詠を始末しようと探したが見つからず。探知機で調べると少しばかり離れた場所にいる様だ。

透視をすれば何やら戦闘をしている。関西側の追手だろう。フェイトもいるが、中々に善戦している。

別に手を出してこないなら問題無い。そう思ってこのまま無視してシネマ村へ向かう事にした。

意外と金額は高いので、千雨とアスナの着替えとメイクに関しては全て潤也持ち。それ以外の子に関しては相咲が出すと言っている。

ちなみに全員がやる訳では無く、千雨、アスナ、早乙女のみだ。木乃香はむしろ他の豪華な着物を着てみたいらしい。料金は全部同じなので金欠を心配したりはしない。

綾瀬と宮崎は他人の金を使う事に抵抗感があったのか、拒否。桜咲と零は動き辛いからの一点張りで拒否。当然と言えば当然だが。

といっても、零の場合は右手をかざすだけで大抵の敵は潰せるので動き辛さはあまり問題では無かったりする。頑丈なのだし。

二人以外はシネマ村にある衣装貸しで着替え、千雨達のメイクが終わるまで時間を潰す。

「割と普通だよな、お前ら」

「普通がベストだ」

「派手なのよりマシじゃね?」

濱面と護は無難に侍の服。かつらまで使って割とリアルである。

「潤也も……侍? 俺達のはデザイン違うけど」

「じゃねーの? 詳しくはしらねーけどさ」

特に興味も無いので適当に選んだ結果がコレ。何に着替えようか悩んでいると店員さんが熱心に勧めてきたのだ。

カツラはかぶっていない。

「桜咲さんと同じような格好だよな。というか、何であの子男物の扮装? 女だよな?」

「しらねーよ。本人に聞け」

ちなみに、零は何故か巫女の扮装をしていた。

「……何故に巫女?」

「良いだろう、別に。店員に勧められたんだ」

みんな同じ店でやって貰っているが、あの店員、誰にでも勧めたがるらしい。

その割に似合ってるので、チョイスは悪くは無いのだろう。

宮崎はいかにも町娘。綾瀬も巫女のような恰好をしている。

梶咲の盗賊の格好には、男子勢はほぼ全員が笑い転げていた。女子勢も笑いを堪え切れていない様だ。口元を押さえて必死に笑いを堪えている。

むしろ仲芽黒が町娘と言う姿に違和感を感じなかった事が、一番の不思議だろう。流石童顔で女顔だ。

「千雨達が着替え終わるまで後三十分くらいか。つか、着替えだけで三十分も使ったのか、俺ら」

「格好見て遊んでたしな。良いんじゃないの、どうせ待つ必要がある訳だし」

その後、軽く散策して時間を潰し、そろそろだと思って戻ってくる面々。

店の前で待っている三人の舞妓。全員が振り向き、こちらを向く。

「あ、潤也。どう？ 舞妓さんだよ」

アスナがそう言いつつ近づき、ニコツと笑う。

「我が人生に、一遍の悔いなし……」

「俺、帰ったら告白するんだ……」

「眼福です本当にありがとうございます」

「舞妓って可愛いって言うよりは綺麗って部類だよな」

「そうだね。僕的には顔が白くてちょっと不気味だけど」

上から梶咲、護、濱面、潤也、仲芽黒の順だ。

若干二名おかしなフラグを立てている気もするが、気にしない方向で纏まったらしい。

「取りあえず写真撮ろうぜ、写真」

その道のプロが撮ってくれるらしく、ありがたく撮って貰った。現像してもらった写真と念の為の写真のコピーデータも。

潤也の事だ。今現在ある技術を総動員して、最高の画質で保存するだろう。それこそ、肌のきめ細かさまで再現するレベルで。

「千雨もアスナも綺麗だ。やっぱりやってよかったな、舞妓体験」

「私もちよつと良かったと思ってる。折角の京都だしな。こういうのもいい」

「私は？ 潤也君？」

「アホ毛が無くなれば見れるレベルじゃねーかな？」

「酷いつー!?!?」

早乙女 of 言葉をスルーしつつ、土産物を見る。着付けをしてくれた店の人を見れば、半カツラを使っている筈なのに何故アホ毛が出ているのかが不思議でしようがない、と言った顔をしている。

饅頭やアクセサリーなど、意外と沢山あるらしく、見ていて飽きない。木乃香は桜咲と一緒に写真を撮られたりしている。データのコピーを求めている辺り、満更嫌という訳でも無さそうだ。

「えへへー。せつちゃん男の子みたいやし、カップルに見えるかもなー」

「ちよつ、お嬢様!?!」

「ほほう、やっぱり二人はそんな関係?」

「ちち、違いますっ!?!」

顔を真っ赤にして必死に否定する桜咲。木乃香はカラカラと笑っている。

「楽しそうだなー。木乃香の奴」

「桜咲と幼馴染なんだろう? 桜咲が避けてたみたいだが、嫌われて無いと知ったから一緒にいたいんだろうさ」

潤也の呟きに零が律儀に返す。

「分からないでもないが、桜咲は護衛だ。浮かれ過ぎると足元すくわれるだろうに」

周りを見て、そう眩きを漏らした。月詠もそうだが、近い場所に敵がいる。一般人に紛れているが、首元を良く見れば骨伝導マイクなどの装備をしている。

こっちは関西では無いだろうと判断を付けるが、放っておくのも面倒。なら、洗脳でもすればいいと思いつく。

千雨達から離れ、すれ違い様に指を動かし、人格の洗脳を行う。

これに必要な情報は勝手にしゃべってくれる。後は獵犬部隊に渡しておけばいいだろうと判断し、その場を離れる。

探せば居るもので、全部で何人いるかも読み取り、全員の洗脳を完了させた。

戻って来た時、月詠と桜咲が何やら話していた。千雨達の方には何故か雪広達が合流しており、面白そうに桜咲達の方を見ていた。

「……ご迷惑かと思えますけど、ウチ、手合わせして欲しいんです。逃げたらあきまへんえー 刹那センパイ」

月詠の笑顔に圧されたのか、木乃香は怯えている。桜咲の背中に隠れる様に一步下がり、顔色が悪くなっている。

「ほな。助けを呼んでも構いまへんえー」

笑いながら、馬車を使ってその場から引いて行く月詠。潤也は眼で追いながらこのまま狙撃してしまおうかと考える。

神鳴流に飛び道具は通じないんだっけ。と思いだし、携行型対戦



車ミサイルを取り出そうとしてこっちは被害がでかいからなーと断念。

どうせなら超電磁砲レールガンでもブチ込んでやりたいと思う潤也。流石に超電磁砲は防げないだろう。刀が折れるだろうし。

そんな事を考えている間に、桜咲達は雪広達に囲まれていた。二人の仲を応援するとか何とか聞こえるが、潤也は全て無視を決め込んでいるらしい。

「……面倒臭い事になりそうだな」

ポツリと漏らす小さな呟きは、誰にも聞こえない。

第三十七話「舞妓はいねーのか！ 舞子はよー！」by 梶咲（後書き）

ほのぼのな話。ちょっと更新遅れ気味かな。宿題とか、勉強とか、学校とか。

学業関係ばかり（オイ

要望（？）があつたので書いてみました。千雨とアスナ舞妓さん。早乙女はついで。

実際に見た事は無いですけどね。良いではないか良いではないか！とかしか知らない（こら

今回はネギの戦闘と超側の動きを予定。潤也達はその後です。

しかし、マガジンで千雨の裸Yが出たのは驚いた。そこだけは赤松さんに感謝する（オイ

第三十八話「言つやんけ、西洋魔術師風情が！」by小太郎

超と龍宮は、バスに乗って移動していた。

私服で大学生にも見える龍宮がいる為、ナンパなどの声がかかるが全て断りつつ、とある喫茶店を目指す。

「私を護衛に使う程、交渉相手はヤバイのか？」

「戦力的に考えて、もしかしたら龍宮さんだけじゃ足りない可能性もあるヨ」

念には念を入れた。自身も戦闘用のスーツを私服の下に着込んでいるし、龍宮も雇った。

だが、相手はその程度の事では何ら動じさえしないだろう。そんなレベルの相手だ。気は抜けない。

「……着いたヨ。ここネ」

極めて普通な喫茶店。意外と早くから営業している為、店の中に人がいる。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「待ち合わせをしていネ」

「分かりました。では、ごゆっくり」

眼鏡をかけ、強面の顔をしているマスターがテーブル裏に戻るのを見てから、喫茶店を見渡す。

そして、見つけた。

緊張した様子で歩き、蒼い髪をオールバックで纏めた青年の対面に座る。

青年は読んでいた本を閉じてカバンに入れ、超と向き合う。

「こうして会うのは初めてだな。はじめまして、黒斑駁くろふいぢつーモンだ」

右耳にはピアス。両手には指輪がいくつもはめられている。

超はテーブルの上に球体の物体を置き、スイッチを入れる。これで、会話が漏れる事は無い。

「はじめまして、超鈴音というヨ」

「隣の子は護衛か？ 確かに念を入れるのはいいが、俺が今お前と敵対するとも思ってたのかっつー話だ」

テーブルに置いてあるメロンソーダを飲みながら、駁はリラックスした様子で話しかける。

対する超は、緊張した様子を微塵も見せる事無く交渉を始めた。

「それで……私の計画を、どこで知ったネ？」

「ん、んー？ ……そうか、気付いて無いのか、お前」

「その言葉に、眉を顰める。」

「……どういことネ」

「簡単だよ。あの町には、得体の知れない技術で常に情報が一か所に集まっている。その技術の出所位、予想がつくだろ？」

「……SMG、カ？」

「正解。あの会社は得体の知れない技術で溢れてる。俺も最初はビツクリしたぜ？ なんせ、サイボーグ技術なんてのもあれば、人道を全く無視した研究データなんてのもあったからな」

「けらけらと笑いながらそう話す。研究データなんてものは、関係者位しか見る事は出来ない筈だ。それも人道を無視したものとなれば、プロテクトは相当なレベル。」

「目の前の人物が一体どんな環境に身を置いているのか、どんな立場の人間なのか。輪郭がぼやけているが、見えてきた。」

「お前等が修学旅行の時に接触したのも、麻帆良で話し合いなんて出来無いからだ。知られる筈の無い事が知られたり、なんて事がザラだからな」

「お前も心当たりがあるだろう。そう言われ、超は思い出した。」

「SMGの情報を流した時、ネット上で噂を流した大本のPCを見つけるなんてのは不可能に近い事だと高をくくっていた。だが、そ

れをやつてのけた人物がいる。

そして、自身に警告を発した人物。

自身を見つけ出したのは恐らくSMG社長の垣根帝督。そして、警告に来た長谷川潤也。

仮に知られる筈の無い情報が知られているとすれば、学園と手を組まれては厄介だ。

だが、超はそれに関して心配はしていない。エヴァンジェリンの一件があり、学園とSMGが手を組む可能性は低い。そう思っている。

「一か所に情報が集まっていると言っていたな。それが何処か分かっているのか？」

龍宮の質問に対し、駁は簡単だ。と答える。

「お前らも知ってるだろ？ 麻帆良でも一際異色を放つ建物、『窓の無いビル』。あの中さ」

俺は中には入れないけどな。と続け、メロンソーダを飲む。

「あの中に入れるのは現時点で垣根帝督のみ。他の奴じゃ『強度』が足りない」

「強度……というと、超能力者のランクの様なもの力？」

「厳密に『超能力者』と呼べる奴は二人しかいないけどな。概ねそ

んな感じでいい。無能力者から超能力者までの六段階で分けられる」

低い者は本当に何の役にも立たない能力だが、高い者は世界に対して喧嘩を売れるほど強力。

「『パーソナルリアリティ自分だけの現実』の観測が可能」ということは「まともな現実から切り離されている状態」という一種の精神障害と同義であり、SMGで行われる開発術とは、投薬や電気ショックや催眠術などで人工的にそれらを誘発する技術だ。

開発の所為か、レベルの高い一部の能力者は性格が破綻しており、手を付けることもままならない。

その度に潤也が『メンタルアウト心理掌握』で書き直す訳だが、精神系統の能力を持った能力者などはこれに対してある程度の耐性がある為、能力のレベルを低くしてから操作と言う手順を踏む必要がある。

「一人は知つての通り、社長の垣根帝督。能力は確か『AIMコントロール能力操作』だ。他者の能力を改竄出来るっつー対能力者最強の能力。自分の能力も改竄出来るみてーだし、多重能力者でもある訳だ」

能力者は原則として一つしか能力を持つ事は出来ない。

だが、AIMを書き換える事によって例外的に複数の能力を持つことが出来る。データ上ではそう言う事になっているのだ。

一応他の能力者も多重能力を持たせる事が出来るが、演算能力がネックになっている為に未だ成功例は少ない。

「そしてもう一人。垣根帝督と同じ超能力者<sup>レベル5</sup>は」

不敵に笑いながらも、その眼は超達を見据える。

打撃音が響く。

殴り、蹴り、殴り、蹴り。その繰り返し。

「どうした西洋魔術師！ その程度か！？」

気で強化した拳で障壁を殴りながら、小太郎はそう叫ぶ。

対するネギは、前衛無しの後衛。詠唱を唱える暇が無く、障壁に魔力を注ぐばかりで攻撃に転じる事が出来ない。

無詠唱魔法でも使えれば別なのだろうが、ネギは未だ戦闘経験など無く、その技術が思いつかない。

更に、小太郎には容赦が無い。二日前に奇襲とはいえ、自身が理解出来ぬまま押さえつけられている。

手は抜かない。気は抜かない。

あの二の舞だけは御免だと、気合いを入れ直している。負ける気



など無く、過剰な驕りも無い。

(不味い、かなり不味い状況だ。一端退いて体制を立てなおした方がいいな……)

カモはちび刹那と隠れながら動き、自動販売機から飲み物を買う。

ガンッ！ と、小太郎の掌底がネギの障壁を抜き、ダメージを与える。

「どうや、障壁抜いたで。今のは効いたやろ」

まだまだ余裕。息の乱れさえ起こさず、不敵に立つ。だが、油断はせず、構えは解かない。

「ぐ……ケホッ」

口を切り、血を吐きながらもネギは立った。ボロボロの状態でも、親書を届けなければならぬと思っっているのだろう。

「兄貴、ここは一端退くべきだ！」

「させると思ってるんか！」

カモが叫ぶのを聞きつつ、小太郎がネギへと駆ける。

ちび刹那が陰陽術の詠唱を唱えると同時、カモが一本のペットボトルを投げた。

そして、爆発。水蒸気に視界を奪われ、小太郎はネギの姿を見失

う。

「くっ、目くらましかいな！」

両手を振って水蒸気をかき乱しながら叫ぶ。だが、水蒸気の霧が晴れた時、ネギはもう其処にいなかった。

「どうする、兄貴」

川沿いの水辺に座りこみ、考え込むネギ。

「今のままじゃ勝てない。前衛無しで魔法使いが戦士相手に勝つのは、実力差が無いと難しいぜ」

「こついつ時の為の携帯です。瀬流彦先生に連絡しましょう」

ちび刹那が冷静に意見を述べ、カモはそれに賛同する。

「いい考えだ。もしかしたら助けてくれるかも知れねえ。助けるのが無理でも、何か助言が聞ける筈だ」

「あの子は狗族です。身体能力は普通の人間より高いですから、前衛としては結構な力を持っています。瀬流彦先生も戦った事があるかは分かりませんが、とにかく連絡してみてください」

少なくとも、魔法先生としての戦闘経験はある筈だ。知識と経験は、今のネギにとって何よりも役に立つ。

桜咲は魔法使いではない為、戦闘では立ち回り方が違う。ゆえに、助言などは役に立つ事は出来ない。

「……あ、瀬流彦先生ですか？」

『どうしたの、ネギ君？ 何か問題でも起こった？』

落ち着いた声が携帯の向こう側から聞こえてくる。今の状況を簡単に説明し、数分。考え込んでいる様に時間が立つ。

「……それで、何か良い案はありますか？」

『……ネギ君はさ。その子に勝ちたいの？』

「え、どうしてですか？」

『勝つ事は最優先事項じゃ無い、って事。必要ならこのまま本山の方に連絡を入れればいい訳だしね。勝手に行動している過激派はいわば組織の汚名だから、連絡すれば増援を呼んでくれるかもしれないよ』

最も、本山の目の前でこんな事をやっているのだ。気付いていない筈がない。

気付いていてなお手を出していないのか、それとも本当に気付いていないのか。

別の可能性もある事はあるが、そちらはいつ来るかわからない。瀬流彦はそちらの期待はしていない。

「……出来れば、勝ちたいです！」

『うん、分かった。どの道邪魔されるだろうしね。倒せるなら倒した方がいい』

とはいえ、流石にネギ一人にやらせても勝率は限りなく低い。それに、組織としては『親書を渡す』事こそが最優先事項だ。

瀬流彦としても、教師としての生活はそこそこ気に入っている。その上、内部のスパイと言う役割もある。情報を手に入れる為ではないが。

こんな些細なことで評価を落とすと後々面倒になる。

学園長的には、親書を渡す中でネギにある程度の戦闘経験を積ませる事が目的なのだろう。と予想し、最低限のラインを予測しておく。

ネギに対して、SMG側からの干渉は無い。無論、彼女達に被害が行くようなら対処はする。一般人については関西のやることだと手は出さない。

そして、小太郎には未だ『ナノデバイス発信機』が付けられている。時間はあまりないだろう。

『それじゃあ、簡単に説明する。やり方は簡単だ』

今度は、ネギの反撃だ。

杖を持ち、魔力を高めつつ、小太郎と向き合う。カモは既にネギの方から降りており、携帯を持って未だ瀬流彦と話している。

「……へえ、真正面から俺とやる気なんか？」

小太郎も構えながら気を練り、ネギと向き合う。

「……この戦い、僕が勝つよ。一撃で決める」

「言つやんけ、西洋魔術師風情が！」

ネギの言葉を聞いて、更に力を込めて犬神を呼び出す。数は数体。それが、小太郎の拳へと集まる。

ネギはそれを見つつ、自身の魔力で無理矢理身体強化を行う。

「狗音爆碎拳！！」

「エミミットム解放 魔法の射手 雷の十七矢！！」

予め仕込んでおいた遅延呪文。小太郎を見つけた時点で詠唱を済ませておき、戦闘に入り、近づいた時を狙って放つ。未だ二十秒程度しか遅延出来ないが、十分だ。

魔法の射手を無理矢理魔力強化した拳と共に使って殴りかかり、小太郎の拳とぶつかり合う。

爆音が辺りに響き、衝撃で二人とも吹き飛んで林の中へと突っ込んだ。

「ぐ……お……」

ダメージは小太郎の方が大きい。無理矢理とはいえ身体を魔力強化したネギと気で強化しただけの小太郎。

だが、集めた犬神の数と魔法の射手の数が違う。威力の差がダメージの差につながっているのだ。

だが、まだ立ち上げれる。

気で補強しながら両足でしっかり立ち上がり、ネギを見据える。

「強いな、お前……名前、なんや。俺は小太郎。犬上小太郎や！」

「ネギ。ネギ・スプリングフィールドだよ」

ネギもまた立ち上がり、小太郎を見る。

「まあ、上々かな。最低限の戦闘法は教えた訳だし、経験と言っても殴り合うだけが経験じゃ無い。……それに、流石に時間をかけ過ぎてる」

瀬流彦はネギと小太郎の戦闘を、カモを通じて聞きながら、そんな考えを持つ。

そして二人が構え、もう一度攻撃をしようとしたところで ガ

ラスが砕ける様な音が、辺りに響き渡った。

「な……結界が破られた!?!」

現れたのは数人の人物、手には符を持ち、即座に召喚された数体の鬼が小太郎へと向かう。

「クソツ、こんなときに!?!」

迷わずに獣化する。今の自分では勝てないと悟ったか、または分が悪いと思ったか。

犬神を駆使して鬼を攻撃し、還す。そして、そのまま呼び出した陰陽師へと攻撃を仕掛けにかかる。

「疾!」

符は小太郎へと飛翔し、その半ばで符は雷の槍へと形を変えた。

小太郎はそれを紙一重で避け、術者へ殴りかかる。

術者はそれを予想していたかのように動き、殴りかかった腕を掴んで逆方向へと投げ飛ばす。

「しつこい奴やな!?!」

「お互い様だ」

低く唸るような声で返答し、またも符を放たれる。

符は爆炎を伴って進み、その身を焼こうと迫っていく。

「犬神！」

体制を立て直しつつ、地面より現れる犬神。符は何体もの黒い犬を喰い破る様に貫き、十数体を貫いた所で消えた。

「こつちも忘れて貰っちゃ困るね」

疾。と短く呟いて放たれる符。多方向から一気に攻撃され、犬神を使っても迎撃できず、爆炎を伴って放たれた符でその身を焼かれる。

激痛の叫び声が聞こえる。その身を焼かれながらも術者を睨みつけ、犬神を出そうと気を込め始めている。

「おいおい、まだそんなに力が余ってるのか。ビックリするぜ、オイ。どんだけ鬼ごっこしてると思ってるんだ」

軽口を叩きつつも前鬼たる鬼を召喚し、迎撃の構えをとった。

他の陰陽師も符を構え、仕留めようと気を練り始め　横槍が入る。

「『石の槍』」

突如として放たれる石の槍。陰陽師の一人を狙って放たれたそれは爆炎を伴った符と共に消え去る。

「チツ……またあのガキか」



「いい加減君等も諦めたらどうだい？ かなりの人数を減らされてるんだろう？」

「やった本人がいうんじゃないよ、ボケ。ぶち殺してやる」

疾。と短く呟き、符は放たれる。それは途中で雷の槍へと姿を変え、またも放たれる石の槍と相殺された。

フェイトは小太郎の腹に一撃食らわせて気絶させ、担いで陰陽師達の方を向く。

「ここは引かせて貰うよ。こつちも都合があるしね」

「にがさねーぞ。地獄の果てまで追ってやる。お嬢様を狙うならなおの事な」

膨大な殺気を孕ませながら、陰陽師は告げる。

フェイトは顔色一つ変えること無く、その言葉を聞いていた。

「まあ、やれるものならやってみることだね」

それだけ告げ、水を使った『<sup>ゲート</sup>門』の魔法で転移した。

「……野郎の居場所は？」

「まだ待て……ここは、地理的にシネマ村か。もう一人もいるようだが、どうする」

「一旦戻って符を補給する。このまま追っても時間の無駄だ」

発信機的位置情報を頼りに場所を割り出す。手持ちの符を確認し、今のままでは心許無いと一旦本山へ戻る事にする。

一方、完全に忘れ去られているネギ。あつという間の出来事についていけて無いのだ。

「ネギ先生。彼らは恐らく本山の術者達です。敵では無いでしょう」

「……ん？ 所で、君は誰だ？」

漸く気付いた陰陽師の一人がネギに話しかける。所々服が破けているが、先ほどの戦いでは傷など負っていない。

会話から、何度か対峙しているのだろうと想像した力モ。携帯の通話を切り、ネギの肩に乗って状況判断をしようとする。

「えっと、僕は関東から親書を届けに来たんですが……」

「親書？ …… ああ、なるほど。あのジーさんか」

関東からの親書、と言う事で思い当たる人物を一人上げ、アイツだろうと納得する。近衛家の名を持っていても、近右衛門は西の陰陽師から良く思われてはいないのだ。

理由なら腐るほどある。態々上げるまでも無い位に。

「まあいい。着いてきてくれ、案内しよう」

「わ、分かりました」

そして、ネギは陰陽師達に連れられ、本山へと足を踏み入れた。

「……そんなレベルの人間が、私の計画を手伝ってくれるの力？」

「一応お前の計画には賛同してるんだぜ？ 魔法を世界にばらす。確かに混乱は有るだろうが、俺達の力があれば押さえつけることも可能だ」

何も自分一人、と言う訳では無い。同じ暗部組織の後二人も同じように計画には加担している。

「つまり、君達は下剋上をしようとしていると」

「まあ、そんな所だな。とはいえ、俺とアイツじゃ天と地ほどの差がある。今のままじゃ勝てねえ」

髪をかき上げながら、駁は忌々しそうに呟く。

メロンソーダを飲みつつ、頼んだラスクに手を付ける。

「方法が無い訳でも無い。能力者なら絶対にある弱点も存在するしな」

超と龍宮は驚く。能力者になった時点で存在する弱点。そんな物があるのかと。

超からすれば出来れば教えて欲しい所だが、教える気は無いらしい。

「……しかし、彼に反逆した所で、勝てるのか？」

「だから分からないつつつてんだろ。アイツの弱点も知ってるし、アイツの弱い部分も知ってる。だが、俺とアイツじゃ絶対に破れない壁が存在してる。なら、その壁を壊してやればいい」

方法ならある。幾らでも、とは言えないが、確実に存在してはいるのだ。

「俺には、やらなきゃならない事がある。その為にはお前の計画は丁度よかったんだ」

「私の計画が、カ？」

「ああ、それによって発生するデメリットは出来るだけ抑える。垣根と同じ『超能力者』である俺が、奴を潰して俺が、SMGを掌握する」

無謀とも言える目標。だが、諦める気は無く、理由も無い。

自身の目標。目的。無意識に指輪を触りながら、それを考えていた。



第三十八話「言っやんけ、西洋魔術師風情が！」by小太郎（後書き）

ネギ戦闘（？）と超の話。

まあ、ようやく出ました。もう一人のレベル5。

スクールという暗部組織は反逆しなきゃ気が済まないのか（え

……主人公が出無かったけど、こんな話もありますよね。うん、問題無い。

次回は引き続き超の話と潤也達の話の予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1991u/>

---

魔法を超えた科学

2011年9月28日00時11分発行